

2022 年度

博士学位論文

C. Dickens の *The Mystery of Edwin Drood* と
T. P. James によるその続編の文体の異同性評価

— 語彙頻度、発話動詞の用法、
および語りの時制の観点から —

中部大学大学院
国際人間学研究科 言語文化専攻

後藤克己

目 次

1. はじめに	1
1.1 研究の背景	1
1.2 リサーチクエスチョン	3
1.3 分析手法	3
1.3.1 語彙頻度	3
1.3.2 発話動詞の用法	5
1.3.3 発話動詞の語意別の嗜好および人物造型	5
1.3.4 語りの時制	6
2. 語彙頻度の異同性	7
2.1 区分性能の評価方法	7
2.1.1 評価に用いるコーパス	8
2.1.2 評価要素	11
2.1.3 評価の指標	14
2.1.4 多変量分析による評価手順	21
2.2 区分性能の評価	27
2.2.1 語彙頻度の重みづけによる区分性	27
2.2.2 クラスターの連結法・距離定義法による区分性	56
2.3 ランクセグメントによる区分性能の評価	66
2.4 <i>ED</i> と続編における語彙使用の異同性評価	75
2.4.1 2作品の異同性	75
2.4.2 他作家作品を含むコーパスとの異同性	78
2.5 評価結果のまとめ	79
2.5.1 高い区分性能が得られる分析手法の確立	79
2.5.2 <i>ED</i> と続編における語彙使用の異同性評価	82
3. 発話動詞の用法の異同性	83
3.1 SpVに関わるデータベースの構築	83
3.1.1 分析対象コーパスと話法	83
3.1.2 分析対象とする SpV	83
3.1.3 発話部と SpV の位置区分とテキストの抽出	84

3.1.4	抽出したケースのエクセルワークシート化	87
3.2	SpV 生起数の分析	91
3.2.1	SpV の時制別生起数	91
3.2.2	発話部と SpV の位置別生起数	91
3.2.3	「中断」のケースの類型別生起数	92
3.2.4	catchword suspension の用例の分析	94
3.2.5	SpV の語彙嗜好の分析	103
3.3	評価結果のまとめ	110
4.	語意別の嗜好および人物造型の異同性	112
4.1	分析方法	112
4.1.1	分析対象とする人物	112
4.1.2	SpV の語意／働きによる区分	113
4.1.3	分析するケースと分析手順	117
4.2	N に区分した SpV の語彙嗜好の異同性	121
4.2.1	N に区分した全 SpV	121
4.2.2	「言う」に細区分した N 区分 SpV	125
4.2.3	「尋ねる」に細区分した N 区分 SpV	128
4.2.4	「続ける」に細区分した N 区分 SpV	131
4.2.5	「答える」に細区分した N 区分 SpV	134
4.2.6	「その他」に細区分した N 区分 SpV	137
4.3	C および P に区分した SpV の語彙嗜好と人物造型の異同性	140
4.3.1	C に区分した全 SpV	142
4.3.2	「さえぎる」に細区分した C 区分 SpV	145
4.3.3	「叫ぶ」に細区分した C 区分 SpV	148
4.3.4	「異議」に細区分した C 区分 SpV	152
4.3.5	「その他」に細区分した C 区分 SpV	154
4.3.6	P に区分した SpV	155
4.4	N、C、P 区分 SpV の分析結果	160
4.4.1	N 区分 SpV における語彙嗜好	160
4.4.2	C/P 区分 SpV における語彙嗜好・人物造型	162

4.5	評価結果のまとめ	164
5.	語りの時制の異同性	166
5.1	現在時制による語り	166
5.1.1	現在時制語りの基本的な用法	166
5.1.2	non-narrative な現在時制用法	167
5.1.3	その他の現在時制用法	168
5.1.4	Dickens における現在時制語り	169
5.2	ED と続編における語りの時制	172
5.2.1	ED と続編の各章における SpV の時制	172
5.2.2	ED における語りの時制	174
5.3	時制シフトの分析方法	175
5.3.1	分析対象とする章	175
5.3.2	分析手順	176
5.4	時制シフトの分析	176
5.4.1	ED の第 2 章における過去時制へのシフト	176
5.4.2	ED の第 8 章における過去時制へのシフト	180
5.4.3	ED の第 10 章における現在時制へのシフト	187
5.4.4	ED の第 12 章における過去時制へのシフト	192
5.4.5	ED の第 19 章における過去時制へのシフト	196
5.4.6	続編の第 21 章における過去時制へのシフト	200
5.4.7	続編の第 22 章における過去時制へのシフト	203
5.4.8	続編の第 24 章における現在時制へのシフト	215
5.5	評価結果のまとめ	222
6.	結論	224
6.1	語彙頻度	224
6.2	発話動詞の用法	225
6.3	発話動詞の語意別の嗜好および人物造型	226
6.4	語りの時制	226
6.5	結語	227
	謝辞	228

参照文献.....	229
Appendix.....	233

1. はじめに

1.1 研究の背景

Charles Dickens は *The Mystery of Edwin Drood* (以下、*Edwin Drood* または *ED*) を serial fiction として 1870 年 4 月から逐次発表していたが、作品を完成させることなく同年 6 月に世を去った。その 3 年後、米国 Vermont 州 Brattleboro の印刷工 Thomas Power James (以下、T. P. James または James) は、*ED* に第 2 部として 23 章の大部となる続編を加え完全版として発表した¹。James はこの続編を、“By the Spirit Pen of Charles Dickens, through a Medium” (Dickens [& James], 1873, 中表紙)、つまり「James が、亡き Dickens の霊に導かれてテキスト化したもの」とアピールしている。そのこともあってかこの続編は、物語性、人物造型の一貫性、言語的側面等の観点から批評がなされてきた。後藤 (2019) はそれらを次のように概括している。B.² (1874) は、「続編の言葉づかいはウィットに欠け、むだ口が目立つ」と評し、また人物造型の一貫性の欠如、文法面での誤用、Yankeeisms (アメリカ英語風の語彙使用) などを指摘している。Gadd (1905)、Walters (1913) は、「続編には原典の非凡さがうかがえない」などと評し、同様に文法乱れを指摘している。他方 Doyle (1927) は、「退屈な Dickens 作品になっているが、趣向や文章上の癖に Dickens らしさが残っている」と評し、また、語りが突然現在形になるという原典との類似点を指摘している。さらに、Dickens についての知識がなく、また新聞の小記事さえ書いたことがないと伝えられる米国人 [James] が著したということは、深いトランス状態にあったことの証左だとして、「Dickens の霊による作」とアピールされた続編に一部好意的な批評をしている。これらの批評には、続編に否定的なものと好意的なものが共に含まれているが、いずれもコーパス言語学の手法が普及していない時期の、通読による主観的な批評である。

計量文献学の分野では、文献に特徴的な語彙の頻度などの文体的特徴を推定の根拠として、作者が不明な文献の著者推定、執筆年代が不明な文献の年代推定などが行われてきた (伊藤、2009)。そして近年では高性能なコンピューターが身近な存在となり、それを用いて語彙頻度などを多変量分析する手法による研究が盛んになってきた。例えば Burrows (1987) は、Jane Austen が彼女の作品中の人物を、意識的な操作がないと考えられる頻出語で区別していることを示している。Craig (1999a, 1999b) は、Ben Jonson の演劇では人物の個人言語に頻出する語彙数にかなりの差異があるとして、その年代による変化から、*A Tale*

¹ Dickens [& James] (1873).

² 著者のフルネームは不詳。当批評は W. H. B. と署名されている。

of a Tub を初期の作品と推定している。また Hoover (2003b) は、George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* に含まれる Emmanuel Goldstein による政治的小論の箇所や、William Golding の *The Inheritors* において、視点のシフトが文体変異につながっているとされる箇所を区分している³。村上 (1994, 2004) は、他の研究者と共同で行った『源氏物語』の「宇治十帖」が紫式部の作かどうかの、またその全 54 巻の成立順序についての研究、および日蓮のものとされる著作の中で、真筆か偽書かの議論がある五編の文献の真贋を判定する研究を紹介している。田畑 (2016) は、Dickens と Collins の単著作品と共著作品の中で、共著テキストがそれぞれの単著テキストの間で、文体の差異としてどのように位置づけられるかを分析し、視覚的に提示している。さらに木村 (2016) は、デビューから 10 年ほど、正体を隠して著作活動を行っていた Alice Bradley Sheldon の作品群の中で、執筆年が不明な作品の執筆年代を推定している。そして前述の後藤 (2019) は、ED と続編に生起する語彙の頻度を比較し、両作品における語彙嗜好の差異を分析している。そこで用いられた階層的クラスタ分析では、分析条件として距離定義にユークリッド距離、クラスタの連結法にワード法を経験的に適用し、語彙の生起数に特段の重みづけは行なっていない。この条件による分析では、機能語を多く含む高頻度語が分析結果に大きく寄与することから、著者推定に有効と結論づける一方、同じ作者の作品間や、作品内における文体変異の分析のような、広範な頻度ランクの内容語に注目する分析には適さないとして、そのような分析に有効な手法の見極めを今後の課題としている。

そこで本論では先ず、クラスタ分析において広範な頻度ランクの語の生起特性を分析結果に反映させる方法を見極め、各種の距離定義・連結法と組み合わせてグルーピング性能を定量評価する。そして最も高い区分性が得られる分析条件を適用して、ED と続編における語彙嗜好の異同性を再評価する。つぎに、先行研究で Dickens 作品の文体の特徴とされる以下の 2 つの点について、両作品における異同性を分析する。i) Dickens 作品では発話動詞 (speech verb) が登場人物を特徴づけ、その造型に貢献しているとされている (Segundo, 2016)。そこで ED と続編の発話動詞の用法／嗜好の異同性を分析し、人物造型との関連について考察する。ii) Dickens 作品の語彙使用は「構造的 (structural)」とされ、ED の語りに「リズムカルと言えるほど交互に、現在時制と過去時制が用いられる」例が示されている (Quirk, 1961)。ED の各章に生起する発話動詞の時制を分析したところ、章内における斉一性は高いが、一部の章にごく少数ではあるが主体とされる時制と異なる時

³ *The Inheritors* については、Hoover (1999) で詳しく論じている。

制の発話動詞が含まれていた。そこで両作品におけるそのようなケースの様態を分析する。

1.2 リサーチクエスチョン

本論のリサーチクエスチョンは、「EDと続編の文体が、どのように類似しているか、あるいは相違しているかを明らかにすること」であり、次の4つの観点で分析する。

(1) 語彙頻度

語彙頻度によるクラスター分析で高い区分性が得られる手法を確立し、その手法を用いて両作品における語彙嗜好の異同性を分析する。

(2) 発話動詞の用法

発話動詞（人物の発話や行為を伝達する動詞）について、その生起数、時制、発話部との位置関係などの観点で、両作品における用法の異同性を分析する。

(3) 発話動詞の語意別の嗜好および人物造型

発話動詞を語意によって区分し、各語意別に両作品における嗜好の差異を分析するとともに、発話動詞による人物造型の相違について考察する。

(4) 語りの時制

両作品の各章における語りの時制と章内におけるその斉一性を分析し、各章で主体的な時制と異なる時制の発話動詞が用いられているケースについて、その様態を考察し両作品における異同性を分析する。

1.3 分析手法

1.2節で述べた各観点について、本論で用いる具体的な分析手法を以下に示す。

1.3.1 語彙頻度

(1) 高い区分性が得られる手法

本論では作品間の語彙使用の類似性を、クラスター分析⁴で得られるグルーピングの態様で判定する。一般に作品テキストに生起する語彙の頻度はジップの法則に従うとされており、少数の高頻度語が総トークン数の多くの部分を占め、他方、タイプ語の約半数⁵は1回しか生起しない語 (*hapax legomena*) である。著者推定／文体比較において生起頻度の高い語と低い語の重要性は、語の頻度差ほどには違わないと考えられている (Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017)。そこで、語彙の頻度ランクによる大きな頻度差を緩和するため頻度に重みづけが施されることがあり、本論ではその適切な方法を見定めるため、疎頻度に、圧縮なし、1.5乗根～5乗根・対数による圧縮、Zスコア化、TF-IDFの各方法で重みづけを施す。また、語彙頻度のクラスター分析における処理条件として、テキスト間の類似度の尺度となる距離の定義は、ユークリッド、マンハッタン、キャンベラ、情報半径 (IRad)⁶の各方法から、クラスターの連結法は、単連結、完全連結、群平均、ウォードの各方法から選択して適用する。そしてこれらを網羅的に組み合わせた処理条件の下で、19世紀英国の3作家6作品⁷で構成された評価用コーパスの語彙頻度データを分析する。そして得られたグルーピングを、同じ作家の作品間における語彙嗜好の差は、作家を異にする作品間におけるそれより小さい、との仮定のもとで定量評価し、高い区分性能 (同じ作家、同じ作品へのグルーピング確度) が得られる処理条件を確認する。

またジップの法則では、テキストに生起する語彙の約半数は1回しか生起しない語 (*hapax legomena*) とされるが、それより高い頻度で生起する中頻度語の中でも頻度ランクが下位の語は、*hapax legomena* に類似した生起特性を持つと想定され、それらの語を分析に含めた場合ノイズとして機能すると考えられる。そこで語彙を頻度ランクによっ

⁴ R (version 3.6.3) のもとで、関数 *hclust*, *dist* などを使用。

⁵ *Brown corpus* (トークン数：997千語、タイプ語数：53千語) の例である (以下、同じ)。また、上位10語 (*the, of, and, to, a, in, that, is, was, for*) が全トークン数の23%を占め、全タイプ数の70%を占めるトークン数3語以下の語によるトークン数は、全体の5%にすぎないとされている。

⁶ 例えば確率0.0と0.1の距離と0.9と1.0の距離はユークリッド距離では同じだが、前者が「生起しない」と「生起率が10%」という大きな違いであるのに対して、後者は10%の小さな違いに過ぎないとして、ユークリッド距離の代案として提示されている確率分布による類似性尺度のひとつである (Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017)。金 (2009) でも相対頻度データの分析に有効とされており、本論のような用途における有効性を確認するため加えた。

⁷ Thomas Hardy の *Far from the Madding Crowd* と *Tess of the d'Urbervilles*、George Eliot の *Middlemarch* と *Silas Marner*、および William Thackeray の *Vanity Fair* と *The Virginians*。

てセグメント化して、そのそれぞれによって得られる区分性能を評価し、分析データとして適切と考えられる頻度ランクの下限を見究める。

(2) EDと続編における語彙嗜好の異同性

EDと続編に生起する語彙頻度のクラスター分析に、(1)で高い性能が確認された処理条件を適用して、両作品における語彙頻度の異同性を評価する。なお、両作品にED以外のDickens作品および他作家の作品を含めたコーパスを用いて同様に評価し、両作品についての異同性評価を補完する。

1.3.2 発話動詞の用法

発話動詞（登場人物の発話や行為の様態を伝達する動詞；以下、SpV）を、EDと続編のテキストからAntConc⁸のコンコーダンス機能を用いて抽出する。そして各SpVが生起する章、発話部との位置関係（SpVが発話部の前、後、発話部を中断）、時制、伝達する発話人物などの属性とともに、エクセルのワークシートでデータベース化する。

そしてエクセルのオートフィルタ機能を用いて、両作品におけるSpVの生起数を、時制、発話部とSpVの位置関係などの観点で比較するとともに、クラスター分析などのツールを用いて嗜好を比較する。なお、SpVが発話部を中断するケース（suspended quotation）については、特有な文体的効果が指摘されており、両作品における用法を比較する。

1.3.3 発話動詞の語意別の嗜好および人物造型

抽出したSpVをその語意が人物の感情／個性に関わるものでなく、作者の語彙嗜好や言語習慣によって選択されると考えられるものと、人物による感情／個性の差異を表現するため作者によって選択されると考えられるものに区分し、さらにそれぞれを語意別に細区分する。エクセルのワークシートに、この語意別に区分／細区分した属性と、人物ごとにEDと続編についてそれぞれ2つに分割⁹したセクションの列を設け、行に展開した各SpVに

⁸ AntConc 3.4.4w (Windows)、URL:<http://www.laurenceanthony.net/software/antconcl/> からダウンロードしたものを使用した。（以下、同じ）

⁹ EDと続編間の差異と、同じ作品内の差異を比較して異同性を評価するため、2作品をそ

ついて各セクションにおける生起数を1.3.2節で構築したデータベースから抽出して、語意別の嗜好／人物造型分析用のクロス集計表とする。

そのクロス集計表からオートフィルタ機能を用いて、区分／細区分した語意別のサブクロス集計表を生成し、その頻度データをクラスター分析などのツールを用いて分析して、各々の区分／細区分語意についての SpV の嗜好を作品／人物で比較する。また、人物の感情／個性表現に用いられる SpV については、人物造型との関連について同様に考察する。

1.3.4 語りの時制

ED には現在時制語りの章と、過去時制語りの章がある。一般に小説は過去時制で語られることが多いが、それとの対比において現在時制語りには特有な意味が含まれている。そこで時制シフトの分析に先立ち、時制に関する先行研究を概観し、一般的な時制の用法と文体的意味を確認する。

1.3.2 節で構築した SpV のデータベースから、オートフィルタ機能を用いて、両作品の各章における SpV の時制別生起数を把握し、各章における主体的な語りの時制と、それと異なる時制の SpV を含む章を確認する。そしてその異なる時制の SpV を含む章について、時制シフトした SpV とそれが伝達する発話を含み、会話の場所、参加している人物、および交わされる話題が同じシーンの一連のテキストを抽出する。なおそこには、シーンの文脈を確認するため、SpV のデータベースに含まれない、SpV を欠いた発話（自由直接発話）や発話の間に挿入された語りのテキストも含める。本節の観点における分析については、統計的な分析を離れ、先行研究で示された時制についての知見をベースとした一連のテキストの精読によって、時制シフトの様態を探り両作品における異同性を分析する

れぞれ 2 分割した。

2. 語彙頻度の異同性

The Mystery of Edwin Drood (以下、ED) と T. P. James によるその続編 (以下、続編) に生起する語彙頻度の異同性を、クラスター分析などの多変量分析手法を用いて評価する。分析に適用する処理条件 (語彙頻度への重みづけ、距離定義、クラスターの連結法、分析する語彙数) にはそれぞれ複数の選択肢があり、どれを選択するかで結果は異なるが、従来経験的に選択されてきた。そこで英語小説テキストの作家/作品を区分する応用分野における分析で、最も高いグルーピング確度が得られる処理条件を見究めるべく、各処理条件について、それぞれ代表的な複数の方法を網羅的に組み合わせた条件の下で、複数作家・作品で構成した評価用コーパスに生起する語彙頻度を分析し、得られた作家/作品の区分性能を定量評価して、最も高い確度が得られる処理条件を確認する。そしてその条件を適用して ED と続編における語彙使用の異同性を評価する。

2.1 区分性能の評価方法

テキストに生起する語彙の頻度は、ジップの法則 (Zipf's law) として知られているように、少数の高頻度語が総トークン数の多くの部分を占め、一方でタイプ語の約半数は1回しか生起しない語 (hapax legomena) である (Baroni, 2008)。高頻度で生起する語の多くは、言葉の指紋といえるほど習慣的/型にはまったものと想定され、著者推定において注目されてきた (Hoover, 2003a, 2003b, 2007; Mahlberg, 2015)。また、ごく高頻度で生起する語には、作者による意識的な語彙選択性が低いとされる機能語が多く含まれている (Oakes, 2008)。一方、中程度の頻度で生起する語の多くは内容語であり、テキストの内容による分類や文体分析に有用と考えられる。このような生起特性を有する語彙の頻度データによる分析に際して、生起頻度の高い語と低い語の重要性の差は、語の頻度差が示すほどには違わないとの考えから、頻度差を圧縮する複数の手法が例示されている (Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017) が、その効果は定量的に評価されていない。

本節では小説テキストの作家/作品区分に際して、(i) 効果的な語彙生起頻度の圧縮法、および、(ii) 分析に有用な語彙データの頻度ランクを、数値的に評価する方法について述べる。なお、(i) の評価には、圧縮と同様な効果が期待できる、Z スコア化および TF-IDF による効果も含める。

なお本論ではこれらの評価を行うため、多変量分析手法として「Closed games」(候補と

なる著者／作品が 2、3 に絞られている中での区分) 向きの手法である階層的クラスター分析 (以下、クラスター分析) や、区分性の比較や概要把握が容易な多次元尺度法 (MDS)¹⁰ を使用する¹¹。前者は多変量データを、その距離の近い順 (類似度の高い順) にグルーピングする代表的な手法で、Hoover (2003a, 2003b) など著者推定や文体分析に用いられている。また後者は、その距離の違いをもとに、似たデータを近くに配置する代表的な手法である。これらの手法で用いられる、テキスト間の類似度の尺度となる距離の定義や、クラスターの連結法には、それぞれ複数の方法があり、距離定義にはユークリッドが、連結法にはワード法が用いられることが多いが、作家／作品を区分する応用分野における区分性の観点で、各方法の適否が体系的に比較・評価されているとはいえない。上記 (i), (ii) の評価では、これら各方法の組み合わせで得られる区分性の比較・評価も併せて行う。

2.1.1 評価に用いるコーパス

評価には表 2.1 に示す Dickens および James と同時代の 19 世紀の 3 作家、Thomas Hardy, George Eliot および William Thackeray による各 2 作品¹²のコーパスを用い、以下により分析に使用する語彙頻度データのクロス集計表を作成する。

表 2.1 評価に用いるコーパス¹³

作家	作品	創作年
Hardy	<i>Far from the Madding Crowd</i>	1872
	<i>Tess of the d'Urbervilles</i>	1891
Eliot	<i>Middlemarch</i>	1871-72
	<i>Silas Marner</i>	1861
Thackeray	<i>Vanity Fair</i>	1848

¹⁰ MDS: multi-dimensional scaling. ユークリッド距離を用いた場合、言語使用の差異を分析する手法としてコーパス言語学で多用される主成分分析と同じ結果が得られる (金、2007, 2009)。

¹¹ 同じデータの分析に、この 2 つの手法を併用することは、評価の視点を補完でき大変有効とされている (Arabie et al., 1987 岡太他訳 1990)。

¹² 作家による差異と、同じ作家の作品間の差異に着目して評価するため各 2 作品とした。なお、創作時期によって文体に差異があることを想定し、基本として創作年が 10 年程度離れた同じジャンルの作品から選択した。

¹³ いずれも Project Gutenberg からダウンロードしたものをを用いた。

(1) 分析対象語の選別

一般に語彙を除外すると、その語彙による説明力を失うリスクがあり (田畑、2016)、語彙の選別にあたっては分析の目的に応じた妥当性の検討が必要である。選別の方法として、ストップワードの設定によって、どのテキストにも高頻度で生起する機能語などを分析語彙から除外する方法があるが、Mahlberg (2015) は Burrows (1987) の、上位の高頻度語 (その殆どは機能語) は目立たない表現上のくせを反映しているとの指摘を引用し、著者推定においても注目する語である、と述べている。また他の方法として、テキストに偏って生起する語彙を、テキストの特徴語として抽出するため、カイ自乗検定、対数尤度比などが用いられてきた。Hoover (2003b) は、文体差異の分析に際して、頻度順でなく生起に特徴のある語¹⁴を優先する *modified method* を提案し、William Golding の *The Inheritors* における、語り手の視点のシフトによって生まれる言語の差異を浮かび上がらせている。また田畑 (2016) はデータ選別にあたり恣意性の問題や作業コストを考慮して、ランダムフォレストで抽出した特徴語の生起頻度データを用いて、テキスト内の言語変異を分析している。

本論では以下により、作家／作品区分に適さないと考えられる語を除外する。

① テキスト中の発話部の除外

登場人物の言葉づかいを反映する発話部は、作家自身の言葉づかいとは必ずしも言えず作家の区分に適さない。なお後藤 (2019) は発話部を除外せずテキスト全体の語彙で分析した場合と、地の文のみの語彙を用いた場合の結果を比較し、地の文語彙を用いた場合に、より明確な嗜好の差異が表れることを多変量分析の結果をもとに示している。

② 固有名詞の除外

固有名詞を含む、作品に固有な語彙は作品区分には適すが、同じ作家の作品の中でも作品によって異なることが多く作家の区分に適さない。なお便宜上、Hoover (2004) で著者推定に有効とされた「Culled at 70%」(全作品に生起するトークン数の 70%以上

¹⁴ セクション間における語彙頻度の変動係数 (CV: coefficient of variation、標準偏差と平均の比) の大きい語を優先している。

が 1 作品に集中する語を除外) の手法を適用し、さらに、この基準で除外されない固有名詞については、補完的に手作業で除外する。

③ 人称代名詞の除外

語りに生起する人称代名詞は、作品の文体（語りの人称）の違いを反映するが、同じ作家が作品によって異なる人称で著述することがあり作家の区分に適さない。なお Hoover (2003b) は人称代名詞を著者推定のための分析語彙から除外し、Hoover (2004) では、人称代名詞の除外と上記②の「Culled at 70%」を適用した場合に最も良い結果が得られたとしている。

(2) 見出し語化 (Lemmatize) による生起数の集約

著者推定を行う場合、および作品を文体の差異（どのように語っているか）でなく、その内容（何を語っているか）で区分する場合、屈折等で語形が変化する語を別の語として扱い分析することの有用性は低い。見出し語化 (Lemmatize) によって語の生起数を集約し、語彙の生起特性を浮き上がらせることは、語彙データにおける頻度分布がまばら (sparse) な特性への対応として有用である (Moisl, 2008)。本論では見出し語化のための定義ファイルとして、AntBNC Lemma List¹⁵ を使用する。

(3) クロス集計表の作成

① 作品に特徴的な語彙頻度などの文体的特徴の差は、一般に作家間で大きく、同作家の作品間では小さいと考えられる。そのため作家の区分（著者推定）性能では分析手法による優劣が出にくい。本論では、作品内に見られるような小さな語彙頻度の差によるグルーピング性能をも評価するため、各作品をそれぞれ先頭から章単位で複数のセクションに分割¹⁶したデータで分析し、グルーピングされたセクションが同一作品として正しくグルーピングされるか、誤って別作品として区分されるかによって区分性能を評価する（表 2.2）。各セクションは作品ラベルにサフィックス（作品ごとに A から始まる 1 字）を付して識別する（例：*Far from the Madding Crowd* では H1A, H1B, ..., H1F）。

¹⁵ antbnc_lemmas_ver_001、Laurence Anthony's Website, URL: <http://www.laurenceanthony.net/software/antconc/> からダウンロードした。

¹⁶ 章単位で概ね 10,000 語～15,000 語となるよう分割した。

表 2.2 作品コーパスのセクション構成一覧

作家	作品	ラベル ¹⁷	セクション数	トークン数
Hardy	<i>Far from the Madding Crowd</i>	H1	6	90,774
	<i>Tess of the d'Urbervilles</i>	H2	7	110,292
Eliot	<i>Middlemarch</i>	E1	16	208,628
	<i>Silas Marner</i>	E2	3	49,196
Thackeray	<i>Vanity Fair</i>	T1	14	250,735
	<i>The Virginians</i>	T2	13	232,764

- ② 各セクションについて、AntConc の WordList 機能によって語彙の頻度データを抽出する。なおこの処理は、頻度数を見出し語で集約するため、前記 (2) で述べた見出し語定義ファイルを指定して行う。
- ③ 各セクション別の語彙頻度データを、全ての分析対象作品（ここでは 6 作品）について語彙で串刺しにしてクロス集計表を生成する。
- ④ クロス集計表から固有名、人称代名詞、およびその他の作家／作品区分に適さないと考えられる語¹⁸のデータを除外する。

2.1.2 評価要素

本節では区分性能に影響を与える要素について述べる。

(1) 語彙生起数への重みづけ

区分性能を高めるため、生の生起数（疎頻度）に加工を施す各種手法である。

① TF (Term Frequency)、ターム頻度の重みづけ

多変量分析によるテキストのグルーピングはテキスト間の語彙の頻度差に基づいて

¹⁷ 多変量分析で得られた図、プロットなどで作品を識別するため、作家名の頭文字と各作家の 2 作品を区別する番号をラベルとしている。

¹⁸ 数字、s (縮約、s 属格のサフィックス) など。

行われるが、一般に高頻度語ではテキスト間の頻度差も大きいため高く評価され、中頻度で生起する語は相対的に低く評価されがちである。生起頻度の高い語は低い語より高い重要性をもつであろうが、その頻度差が示すほどに重要性に差はないとの考えから、頻度の高低による評価差を緩和するため、頻度数 (TF) を平方根や対数で圧縮する手法が示されている (Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017)。本論では圧縮度による効果の差異を評価するため、圧縮なし、1.5 乗根、平方根、2.5 乗根、立方根、4 乗根、5 乗根および対数で圧縮する。

② Z スコア

各語彙について全セクションにおけるバラつき (偏差) を標準偏差の逆数で重みづけした値であり、語彙全体として平均値 0、標準偏差 1 のデータとなる。(算出式:A2.1.2 (1) 参照)

③ DF (Document Frequency)、文書頻度による重みづけ

テキストの内容に特徴的な語彙はそのテキストに複数回生起することが多く、そうでない語彙は全テキストに散らばって生起する傾向がある。そこでテキスト数を N 、語彙が生起するテキスト数を df として、式 $\log(N/df)$ で生起数が重みづけされる。この式では 1 テキストのみに生起する語には最大の重み ($\log N$) が、全テキストに生起する語には重みは与えられない (重み 0)。この重みづけは逆文書頻度 (IDF, Inverse Document Frequency) と呼ばれ、TF と組み合わせてひとつの重み TF-IDF として扱われることがある (Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017)。

(2) 分析する上位ランク語数¹⁹

高い頻度で生起する語の多くは、習慣的／型にはまったものと想定され、著者推定に有用と考えられている (Hoover, 2003a, 2003b, 2007; Mahlberg, 2015)。一方、中程度の頻度で生起する語は、テキストの内容による分類や文体分析に有用と考えられる。またごく高頻度／ごく低頻度で生起する語はテキストの分類に有用でなく、分析対象から除外すべきとされるが、その閾値は示されていない (Moisl, 2008)。

Burrows (2002) は、その提唱する著者推定手法 *Delta*²⁰の性能を韻文コーパスの上位

¹⁹ 本論で頻度ランク最上位語から注目するランクまでのタイプ語数の意である。

²⁰ 著者が不明な作品と既知な作品 (候補となる参照コーパス) について、高頻度で生起する語の生起特性 (Z スコア) の差を求め、語全体でのそれらの差の計「Delta」が最も小さ

150 語で分析評価している。Hoover (2004) はこの手法 (*Delta*) の有効性を散文コーパスの上位ランク 800 までの語で検証し、また Hoover (2003b) でも同様に、上位 800 語までの語で *The Inheritors* などの文体の異同性を分析している。そして Hoover (2003b) では多くのランクの語まで含めて分析した場合に、概していい結果が得られているが、800 以上に分析語のランク数を増すことが、分析結果にどのような影響を与え得るかについて言及していない。

本論では、分析する上位ランク語数を以下のようにケース分けし、それぞれのケースにおける区分性の違いを評価する。

上位ランク語数 : 25, 50, 100, 200, 300, 400, 500, 600, 700, 800, 900, 1,000, 1,100,
1,200 の 14 ケース

他方、テキストに生起する語彙の約半数は 1 回しか生起しない語 (*hapax legomena*) で、単にある作品に生起するというだけで、他の作品との比較において特段その作品を特徴づける語でないことから、著者推定には勿論、テキスト内容による区分にも有用とされない。しかしながら、中頻度語の中でも頻度ランクが下位の語は、*hapax legomena* に類似した生起特性を持つことが想定され、そのような語は作家／作品の区分にあたって「ノイズ」として機能し、区分性能を低下させうると考えられる。そこで中頻度語の中で区分性能が低下する頻度ランクを見究めるため、以下のように分析する語彙をランクによってセグメント化し、それぞれのケースでの区分性能の違いを評価する。

ランクセグメント : 1~500, 501~1,000, 1,001~1,500, 1,501~2,000, 2,001~2,500,
2,501~3,000, 3,001~3,500, 3,501~4,000, 4,001~4,500, 4,501~
5,000

(3) クラスタ分析における処理条件

テキストのグルーピングにおいて、テキスト間の類似度の尺度となる距離の定義や、セクション間で距離の近いものを順次結合してクラスターとし、さらにクラスター同士をグループ化して、より大きなクラスターにまとめる連結方式が評価要素となる。その

くなる著者を、不明作品の著者と推定する手法である。

主なものは以下のとおりである²¹。

- ① 距離定義：ユークリッド (EUC)、マンハッタン (MAN)、キャンベラ (CAN)、および情報半径 (IRad)²²
- ② 連結方式：単連結法（最近隣法、single）、完全連結法（最遠隣法、complete）、群平均法(average)、およびワード法 (ward.D2)

2.1.3 評価の指標

本論ではテキストの語彙に以下の特徴があるものと仮定する。

- ① 頻出語の生起頻度は同じ作家の作品間では一貫して変わらないが、作家を異にする作品間では一貫して異なっている。それは頻出語は習慣的／型にはまったものと考えられるからである (Hoover, 2003b)。
- ② 語彙の生起頻度は同一作品内では類似していて、その差異は作家を同じくする他の作品との間におけるそれより小さい。

この仮定に基づき、複数の作品をそれぞれ複数のセクションに分割し、クラスター分析を用いて、各セクションに生起する語彙頻度の類似性でグルーピングした場合、同じ作家／作品のセクションが同じグループとして区分される度合い（以下、グルーピング確度）を、作家／作品の区分性能とする。

ここでグルーピング確度とは、いわばグループ内では一貫していて、グループ間では明瞭に区別される度合い、つまり、グループ内の文書はできる限り似通っているが、他のグループの文書とはできる限り異なっている度合いと考えられる。これは情報検索の分野における、「大規模な文書コレクションから、必要な情報を含む文書を見つけられる度合い」

²¹ それぞれの概要は Appendix A2.1.2 (2), (3) を参照。なお、距離による判別分析に多く用いられるマハラノビス距離は、データの分散の情報を用いて、どのグループに属するかが不明なデータと、候補となるデータグループの中心（平均ベクトル）および分散共分散行列から求まる距離であり、グループ間の距離に注目する本論では適用しない。

²² Information Radius, 情報半径。意味的類似性を確率分布の類似性で定義したものであり、他の3つの定義とは性格が異なるが、本論では距離の定義として扱う。

と類似しており、主な評価指標として以下のものがあげられている (Manning et al., 2008 岩野他訳 2012; Manning & Schütze, 1999 加藤他訳 2017)。

- ・ 適合率 (precision, 精度とも訳される)
- ・ 再現率 (recall)
- ・ F 値 (F measure)
- ・ 純度 (purity)
- ・ エントロピー (entropy)

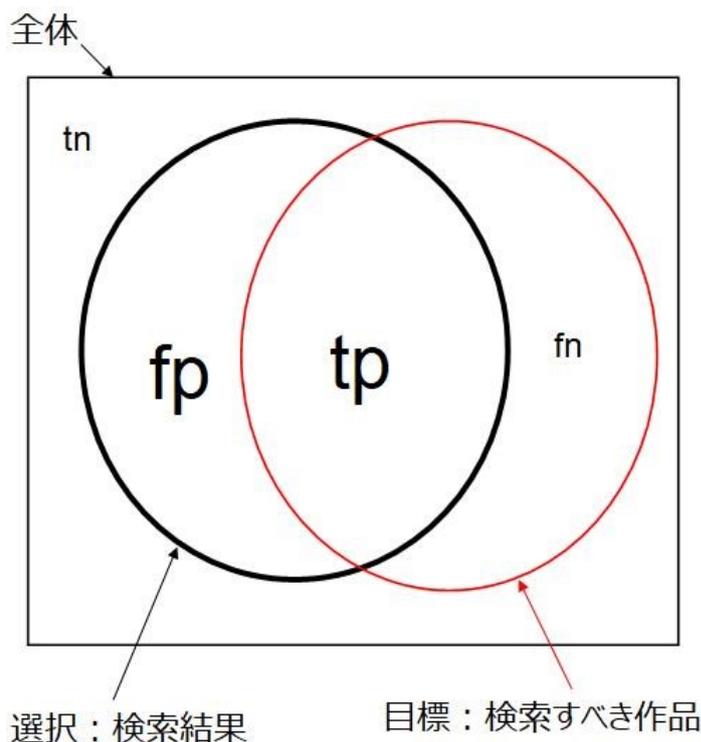
情報検索の分野において言及されることは少ないが、Gini 係数 (Gini index) もグルーピング確度の評価指標になり得ると考えられる。

これらの指標の概要²³と、モデルケース (3 作品の計 22 セクションが 4 つのクラスターにグルーピングされていて、3 作品のうちどの作品のセクションも優勢でない cluster 1 と、1 作品に完全にグルーピングされた cluster 2 を両極とし、その間の中間的なグルーピングの cluster 3, 4 で構成されたモデル) における各指標の試算例について以下に述べる。

(1) 適合率

適合率は、「検索結果に目標とした作品がどの程度含まれるか」という指標であり、その概要を図 2.1 に、またモデルケースにおける試算例を表 2.3 に示す。なお表の最下行は、各クラスターにおける適合率を、そのクラスターに含まれるセクション数で重みづけしたものであり、評価指標の評価にあたって着目する値である (以下、同じ)。

²³ Manning & Schütze (1999); Manning et al. (2008) を参考にした。



- tp: true positive
検索すべき作品のうち、検索されたもの
- tn: true negative
検索非対象作品で、検索されなかったもの
- fp: false positive
検索された作品のうち、検索対象でないもの
- fn: false negative
検索対象だが検索されなかったもの

$$\text{適合率} = \text{tp} / (\text{fp} + \text{tp})$$

図 2.1 適合率のイメージ

表 2.3 モデルケースにおける試算例（適合率）

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

適合率 (precision)

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.33	1.00	0.50	0.50
作品 2	0.33	0	0.50	0.33
作品 3	0.33	0	0	0.17
適合率	0.33	1.00	0.50	0.50
同上、加重	0.09	0.18	0.14	0.14

適合率はクラスター毎に最大となる作品のみで評価される。

(2) 再現率

再現率は、「目標とする作品のうち、どの程度が検索されたか」という指標である。その概要を図 2.2 に、またモデルケースにおける試算例を表 2.4 に示す。

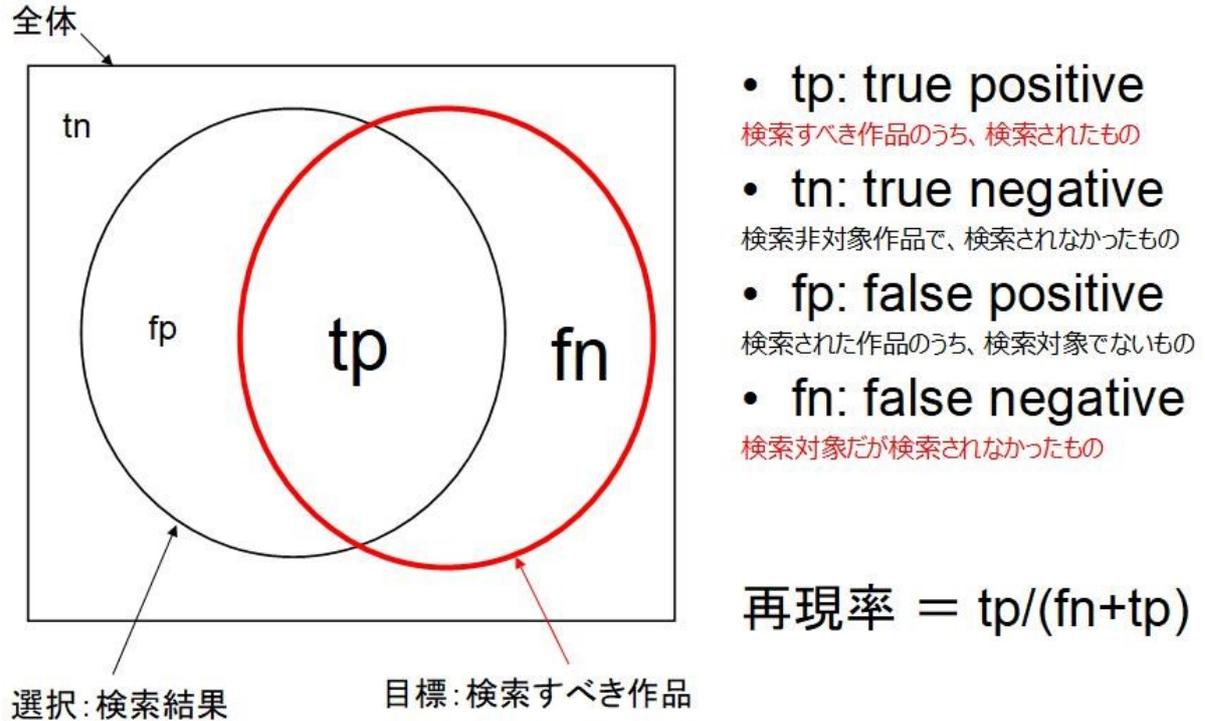


図 2.2 再現率のイメージ

表 2.4 モデルケースにおける試算例（再現率）

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

再現率 (recall)

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.17	0.33	0.25	0.25
作品 2	0.29	0	0.43	0.29
作品 3	0.67	0	0	0.33
再現率	0.67	0.33	0.43	0.33
同上、加重	0.18	0.06	0.12	0.09

再現率はクラスター毎に最大となる作品のみで評価される。

(3) F 値

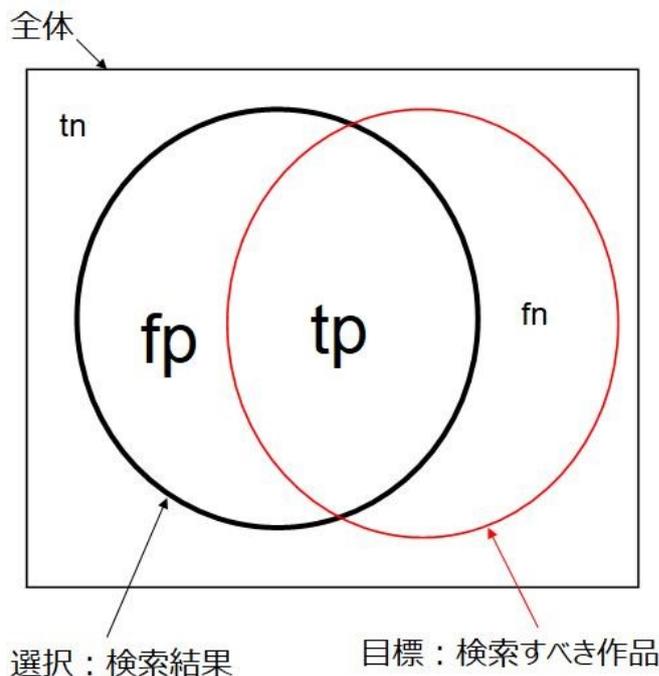
適合率と再現率にはトレードオフの関係がある。つまり例えば、「クラスター数=セクション数」とすれば適合率は1で最大になるが、再現率は非常に低くなる。「クラスター数=1」とすれば再現率は1で最大になるが、適合率は非常に低くなる。そこで、適合率と再現率に重みをつけた指標をF値といい、それぞれの重みを等しくした場合をF1という。F1の場合のF値は、適合率をP、再現率をRとして、 $2PR/(P+R)$ で表される。この指標もまた、クラスター毎に最大となる作品のみで評価される。モデルケースにおける試算例をAppendix A2.1.3 (1) に示す。

(4) 純度

純度は、「各クラスターにおいて最多となる作品のセクション数の合計を全セクション数で除した値」である。最多となる作品以外の作品のグルーピングは全く評価されない。モデルケースにおける試算例をAppendix A2.1.3 (2) に示す。

(5) エントロピー

エントロピーは、「検索結果を確率分布としてとらえ、その不確かさを測る」尺度であり、その概要を図2.3に示す。この図で $fp=0$ または $tp=0$ 、つまり tp か fp かの推測に際して不確かさがなければ $H=0$ となる。他方、 $Pt=Pf=0.5$ 、つまり tp か fp かの不確かさが最大するとき、エントロピーは最大の1となる。モデルケースにおける試算例を表2.5に示す。



- **tp: true positive**
検索すべき作品のうち、検索されたもの
- **fp: false positive**
検索された作品のうち、検索対象でないもの

検索結果のなかの tp と fp を確率としてとらえると

$$P_t = tp/(fp+tp)$$

$$P_f = fp/(fp+tp)$$

この選択のエントロピー H

$$H = - \sum_i P_i \log P_i$$

図 2.3 エントロピーのイメージ

表 2.5 モデルケースにおける試算例 (エントロピー)

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

Entropy

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.53	0	0.5	0.50
作品 2	0.53	0	0.5	0.53
作品 3	0.53	0	0	0.43
Entropy	1.58	0	1.00	1.46
同上、加重	0.43	0	0.27	0.40
同、標準化	1.00	0	0.63	0.92

表 2.5 の最下行では作品数に影響されない指標となるよう、値を標準化している。
cluster 1 は 3 作品のクラスターが同数で、どの作品のクラスターとも言い難いグルーピングであり、エントロピーは最大の 1 に、cluster 2 は作品 1 のみが含まれるセクション

で不確かさはゼロであり、エントロピーは最小の 0 となるケースである。エントロピーは各クラスター内の全ての作品についてのエントロピーの総和で算出されるため、セクション数が最大となる作品のみで評価される適合率などの場合と異なり、cluster 3 と cluster 4 で値は異なってくる。

(6) Gini 係数

Gini 係数とは、ランダムに 2 つの要素を取り出したとき、それぞれが別のクラスに属する確率である (秋光、2016)。図 2.4 にて分割前の黒 5、白 3 の玉の混ざり具合 (不純度) を Gini 係数値で表すと 0.47 になる。分割 1 で A と B に分割した場合、全体の不純度はそれぞれの Gini 値を球の数で加重平均した 0.37 に減少し、分割 2 では A と B が黒と白に完全に分割されるため Gini 値はゼロとなる (不純度ゼロ)。

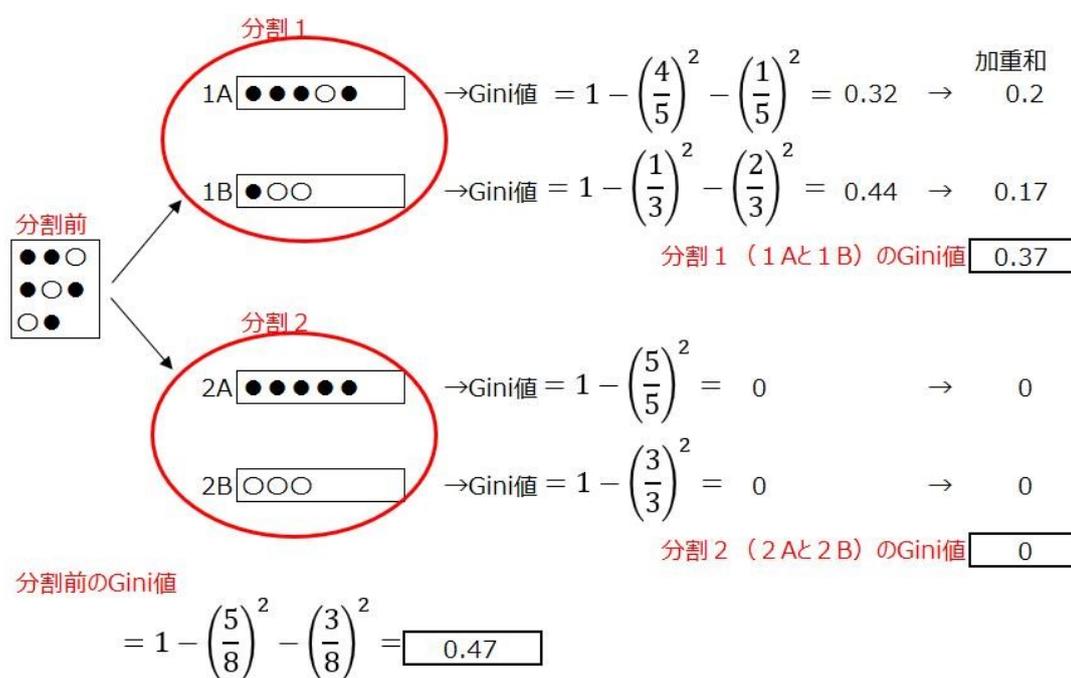


図 2.4 Gini 係数のイメージ

Gini 係数を本論のような応用分野に適用した先行研究はないが、エントロピーと同様に、各クラスターにおいて最も多くグルーピングされたクラスだけでなく、全クラスにおける不純度を総合した評価値が得られ、またエントロピーより、指標の意味が感覚的に捉えやすい特徴をもつ。本論ではこの Gini 係数を区分性能の評価指標として用いる。なお、Gini

係数とエントロピーは、最大値の値こそ違うが、似た特徴をもつとされている（秋光、2016）。モデルケースにおける試算例を表 2.6 に示す。

表 2.6 モデルケースにおける試算例（Gini 係数）

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

Gini index

Gini 係数	0.67	0	0.50	0.61
同上、加重	0.18	0	0.14	0.17
同、標準化	1.00	0	0.75	0.92

2.1.4 多変量分析による評価手順

多変量分析手法により区分性能を以下の手順で評価する。

- ① 2.1.1 節で述べたクロス集計表から、分析する最上位ランク語（1,200 語）までのデータを切り出し、各セクションで語彙頻度データ（疎頻度）を相対頻度化する。
- ② 相対頻度データによるクロス集計表を基に、頻度値に評価要素としての各種重みづけを施したクロス集計表を生成する。
- ③ その集計表から、EXCEL の VBA マクロによって、14 の上位ランク語別（上位 25, 50, 100, 200, ..., 1,000, 1,100, 1,200 語）にサブクロス集計表を切り出す²⁴。
- ④ 各サブクロス集計表を入力データとした、クラスター分析、MDS 等の多変量分析を、全 14 ケースについて R のスクリプトで自動化して処理する²⁵。

14 ケースのクラスター分析で、ケースごとに図 2.5 のような樹形図が得られる。この例

²⁴ VBA によるマクロの例を A2.1.4 (1) に示す。

²⁵ R (version 3.6.3) の Windows 環境で分析した。クラスター分析は hclust、MDS は cmdscale の関数を使用した。スクリプトの例を A2.1.4 (2) に示す。

は、樹形図をクラスター数が6になるクラスター高で区分し、各クラスターを枠で囲って表示したもので、各クラスターにおける作品セクションの混交状態は、左端から順に以下のようになっている。

「E1、E2 の混交」、「H1 のみ」、「H2、H1、E2 の混交」、「T2 のみ」、「T2、T1 の混交」、
「T1、T2 の混交」

つまり6つのうち2つのクラスターには異作品のセクションは混っていないが、他の4つのクラスターには混っている。本論ではこのような各クラスターにおける作品セクションの混交度合いを「不純度」として、以下により Gini 係数で定量評価する。

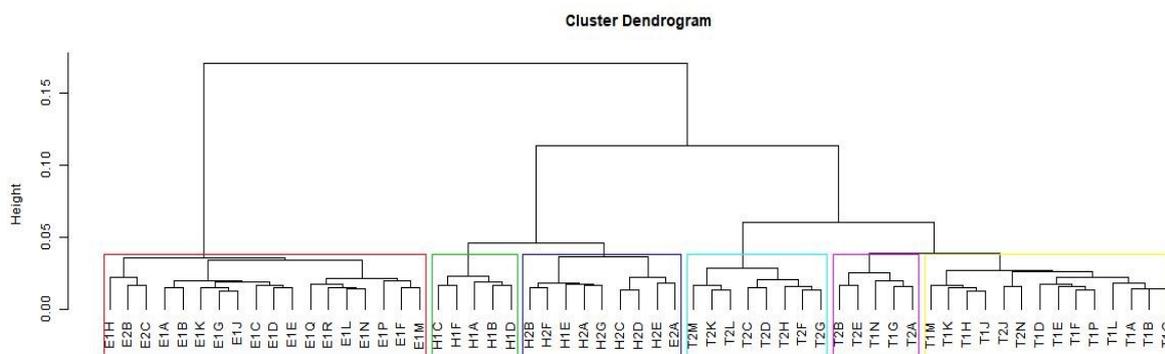


図 2.5 クラスタ分析による樹形図の例 (6 区分、500 語)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	
1																				
2																				
3																				
4																				
5																				
6																				
7																				
8																				
9																				
10																				
11																				
12																				
13																				
14																				
15																				
16																				
17																				
18																				
19																				
20																				
21																				
22																				
23																				
24																				
25																				
58																				
59																				
60																				
61																				
62																				

	(Far)	(Tess)	(MM)	(Silas)	(Vir.)	(Vir.)
	H1	H2	E1	E2	T1	T2
作品ラベル						
H1A 1 H1	6	7	16	3	14	13
H1B 1 H1						
H1C 1 H1						
H1D 1 H1	13		19		27	
H1E 2 H1						
H1F 1 H1						
H2A 2 H2						
H2B 2 H2						
H2C 2 H2			16			
H2D 2 H2			2			
H2E 2 H2				12	2	
H2F 2 H2				2	3	
H2G 2 H2						
E1A 3 E1	5	9	18	14	5	8
E1B 3 E1	0.000	0.370	0.198	0.245	0.480	0.000
E1C 3 E1	0	0.056	0.060	0.058	0.041	0
E1D 3 E1	0	0.198	0	0	0	0
E1E 3 E1	0	0.030	0	0	0	0
E1F 3 E1						
E1G 3 E1						
E1H 3 E1						
E1J 3 E1						

Cluster#	→	1	2	3	4	5	6	加重平均Gini
H1		5	1	0	0	0	0	
H2		0	7	0	0	0	0	
E1		0	0	16	0	0	0	
E2		0	1	2	0	0	0	
T1		0	0	0	12	2	0	
T2		0	0	0	2	3	8	

セクション計	作品区別-Gini	同上、加重-Gini	作家区別-Gini	同上、加重-Gini
	0.000	0.370	0.198	0.245
	0	0.056	0.060	0.058
	0	0.198	0	0
	0	0.030	0	0

セクション計	作品区別-Gini	同上、加重-Gini	作家区別-Gini	同上、加重-Gini
	0.000	0.370	0.198	0.245
	0	0.056	0.060	0.058
	0	0.198	0	0
	0	0.030	0	0

図 2.6 cutree 関数で得られるクラスターリングデータから不純度を評価するエクセル表

(1) クラスタ分析で得られたクラスタリングデータを、クラスター数（注目する区分数。例：作家の場合はコーパスの作家数に等しい数“3”、作品の場合は作品数に等しい数“6”）を指定して `cutree` 関数²⁶で処理し、各クラスターに含まれる作品セクションのデータ（セクションの識別ラベルとクラスターの番号）を得る²⁷。

(2) `cutree` 関数で得られたデータを、不純度を評価するエクセルに組み込んだ VBA マクロで、各上位ランク語別のワークシート（例：図 2. 6）に読み込み²⁸、ワークシートに記述されたエクセルの計算式²⁹で各クラスターに含まれる作品セクションの不純度（作家／作品の観点での混交度合い）を Gini 係数として算出する。図 2. 7 は図 2. 5 のクラスターについて、作品の区分性の観点で不純度を算出する例である。



図 2. 7 上位ランク語ケース別の不純度算出例（6 区分、500 語）

²⁶ 区分数またはクラスター高を指定することで、各クラスターに含まれる成分のデータ（本論ではセクションラベルとクラスター番号）を返す R の関数である。

²⁷ A2.1.4 (2) のスクリプトで、“cl-cut6.txt” 等のファイル名で出力されている。

²⁸ VBA によるマクロの例を A2.1.4 (3) に示す。

²⁹ 図 2. 6 を参照。計算式をセルのコメントとして記している。

図 2.7 の樹形図の 6 つのクラスターの順は、その下のエクセル表³⁰の Cluster# の順と一致していない。エクセル表の Cluster# 1 は樹形図では左から 2 つ目の、Hardy の作品 1 の 5 つのセクションを含むクラスターと対応しており、他作品のセクションを含まないため、「作品区別-Gini」の行で Gini 係数は 0 と計算されている。Cluster# 2 は樹形図では左から 3 つ目のクラスターに対応し、Hardy の作品 1 と 2 のセクションと Eliot の作品 2 のセクションが混っており、Gini 係数は 0.37 と計算されている。このようにして全てのクラスターについて Gini 係数が算出され、それぞれのクラスターに含まれるセクション数で加重平均された値 0.22、および不純なクラスターの数 4 が、このケースについての区分性の指標となる。

(3) 得られたケースにおける区分性の指標を、図 2.8 のように上位語ランク（図の軸ラベルでは「分析上位語数」）の 14 ケースについて集約し、上位語ランクによる区分性の変化を評価可能としている。なお、本節で例示した図 2.7 のケースの区分性は、図 2.8 では分析上位語数 500 におけるプロットに対応している。

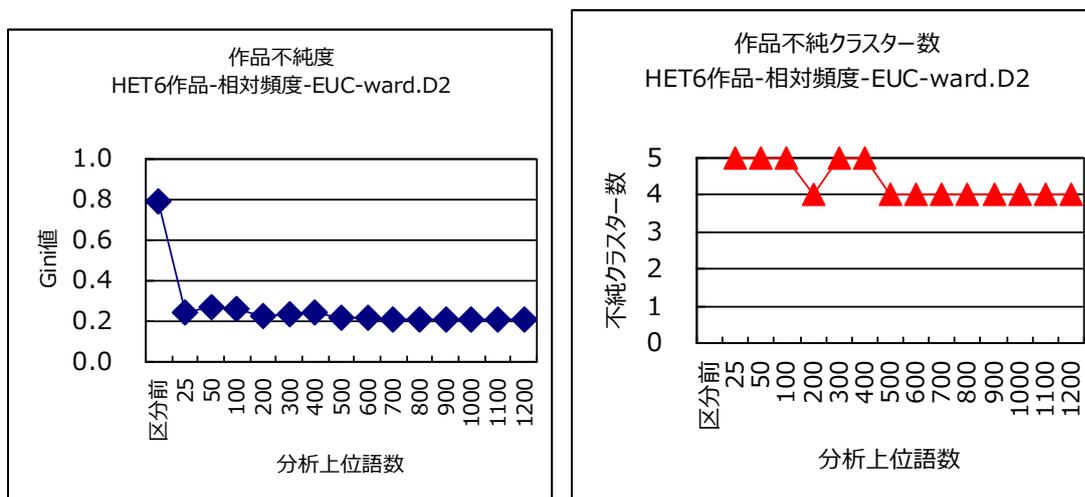


図 2.8 全 14 ケースの作品の不純度と不純クラスター数（例）

(4) 作家の区分性については、コーパスの作家数に対応してクラスター数が 3 になるクラスター高で cut し、各クラスターにおける作家としての不純度と不純クラスター数を、作品の場合と同様に算出する。

³⁰ 図 2.6 のワークシートから、Gini 係数を算出する部分を抜き出したものである。

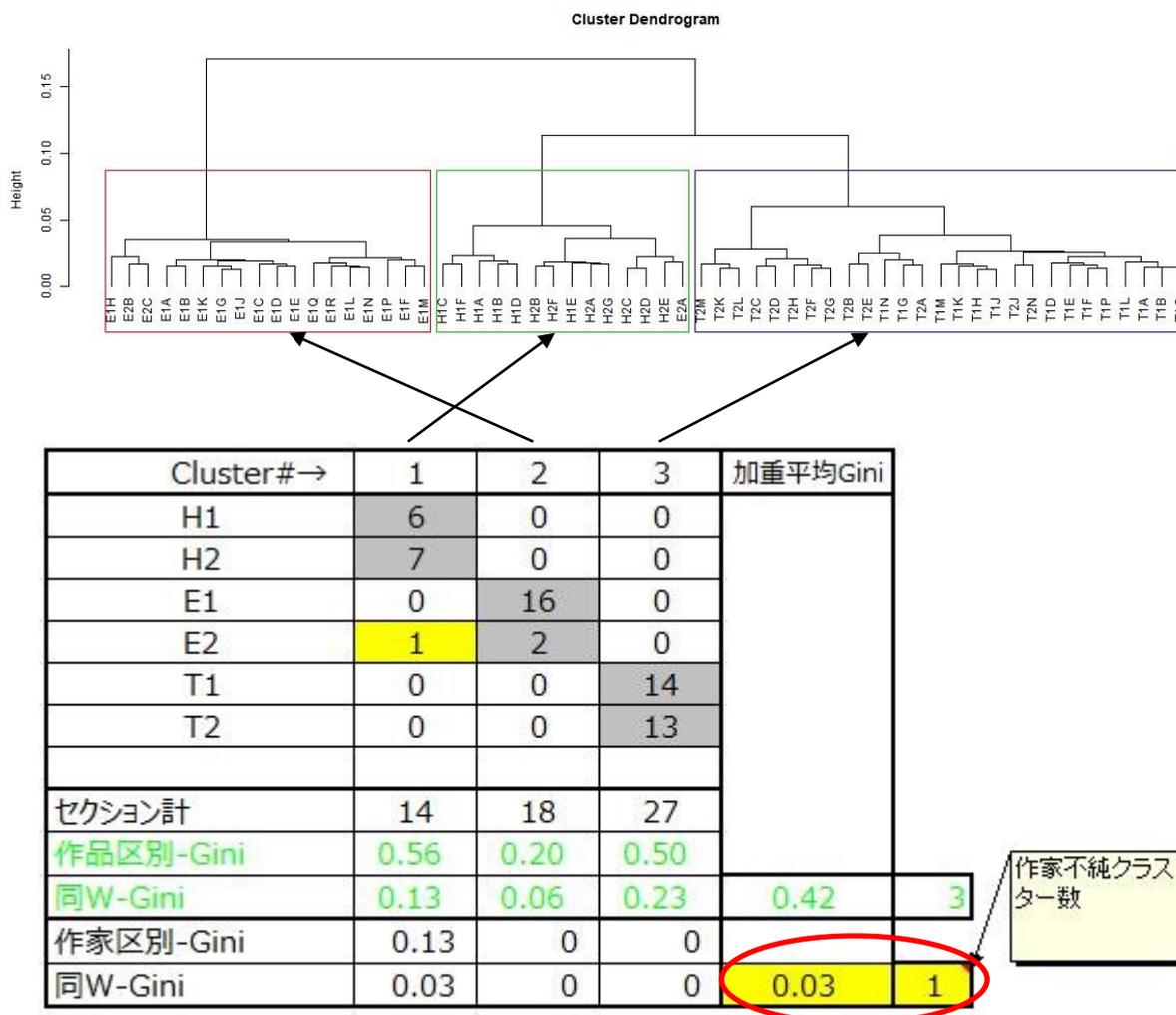


図 2.9 上位ランク語ケース別の不純度算出例 (3 区分、500 語)

cluster# 1 は樹形図の中ほどのクラスターに対応し、Hardy 作品のセクションが多く含まれたクラスターに、1 つだけ Eliot 作品のセクションが含まれ、作家として不純である。cluster# 2 と 3 は、それぞれ Eliot のみ、Thackeray のみの作品クラスターで構成され、作家として純なクラスターである。作品の場合と同様に各クラスターの Gini 係数が、それぞれのクラスターに含まれるセクション数で加重平均された値 0.03、および不純なクラスターの数 1 が、このケースの作家についての区分性の指標となる。

これらの指標を、作品の場合と同様に上位語ランクの 14 ケースについて集約し、上位語ランクによる作家の区分性の変化を評価可能としている。図 2.9 のケースは図 2.10 における分析上位語数 500 のプロットに対応している。

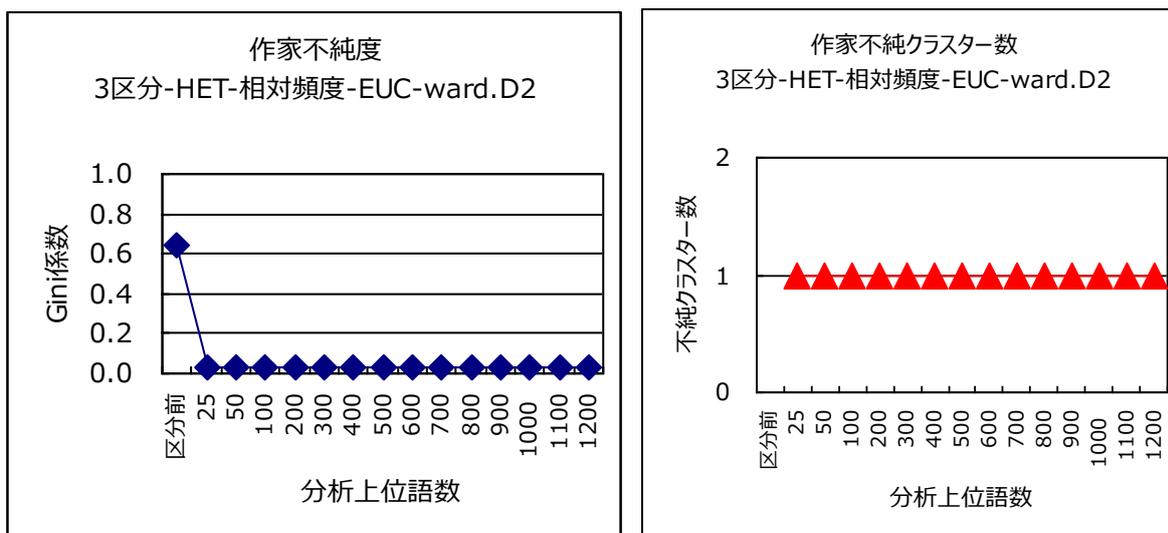


図 2.10 全 14 ケースの作家の不純度と不純クラスター数 (例)

2.2 区分性能の評価

本節では、2.1.1 節の表 2. 1 のコーパス (Hardy 等 3 作家 6 作品³¹) によるクロス集計表を用い、2.1.2 節の各評価要素を網羅的に組み合わせて、2.1.3 節で設けた仮定・評価基準に基づき、2.1.4 節の手順で区分性能を評価する³²。

2.2.1 語彙頻度の重みづけによる区分性

まず語彙頻度の重みづけによる区分性の差異を確認するため、代表的な処理条件 (距離定義: ユークリッド、クラスター連結法: ウォード法³³) の下で、以下の 10 種の頻度の重みづけを施した語彙データを用いて、作品/作家の区分性の観点で分析する。なお、他の距離定義・連結法を適用したケースを含む網羅的な分析結果については 2.2.2 節で述べる。

- ① 頻度圧縮を施さないデータ
- ② 1.5 乗根圧縮データ
- ③ 平方根圧縮データ

³¹ 以下の図表のタイトルでは各作家名から 1 字をとって「HET」または「HET6 作品」と略記し、分析したコーパスの識別名としている。

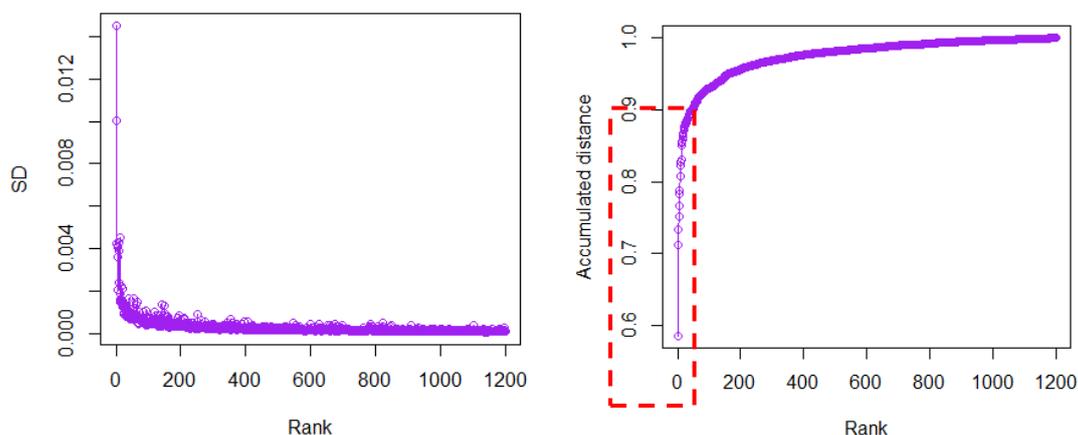
³² 各処理条件下での分析を、同じ R のスクリプトを用いて行い、条件ごとにフォルダ分けしてその結果を管理するために用いたツールを、A2.2 に示す。

³³ 以下 R の関数におけるパラメータ名 (ward.D2) で表記することがある。

- ④ 2.5 乗根圧縮データ
- ⑤ 立方根圧縮データ
- ⑥ 4 乗根圧縮データ
- ⑦ 5 乗根圧縮データ
- ⑧ 対数圧縮データ
- ⑨ Z スコア化データ
- ⑩ TF-IDF 化データ

(1) 頻度圧縮を施さないデータによる区分性

圧縮による効果を確認するため、まず元となる圧縮を施さないデータ³⁴による区分性を確認する。当頻度データの概略の特性と分析結果を以下に示す。図 2.11 の左の図は各ランクの語彙頻度の、全セクションにおけるバラつきの度合い（標準偏差）を示している。また同図の右の図は、各ランクの語彙の各セクション対における頻度差を、全セクションにおける標準偏差で代表させ、その値で算出したユークリッド距離を、最上位ランクから各ランクまで累積した距離を示している（以下、同じ）。



注：左の図の Y 軸は標準偏差（SD）、右の図の Y 軸は、全 1,200 語による距離を 1 としたときの、各ランクまでの語による距離の累積値である（以下、同じ）。

図 2.11 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離（圧縮なし）

右の図で、上位 50 語による累積距離は、全距離の約 90%を占めており、圧縮なしの

³⁴ 各語彙の疎頻度を、各セクションにおけるランク 1,200 までの頻度数の合計で相対化したデータによる。なおこのデータは②以降の各重みづけを施す元データとなる。

場合、分析結果に大きく影響するのは、ごく高頻度な語であることがうかがえる。

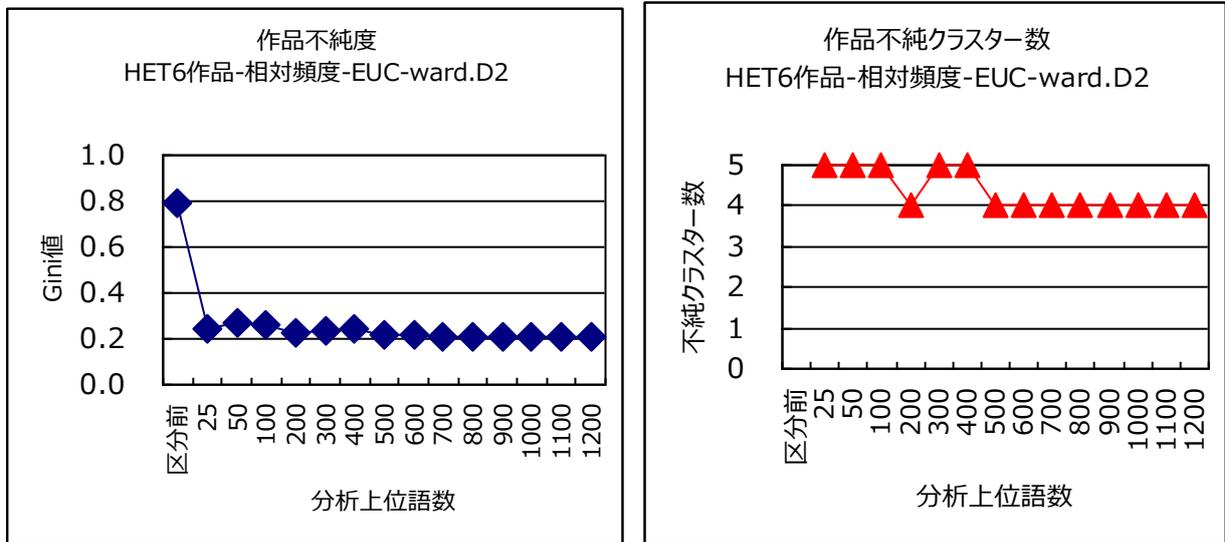


図 2.12 作品の不純度と不純クラスター数（圧縮なし）

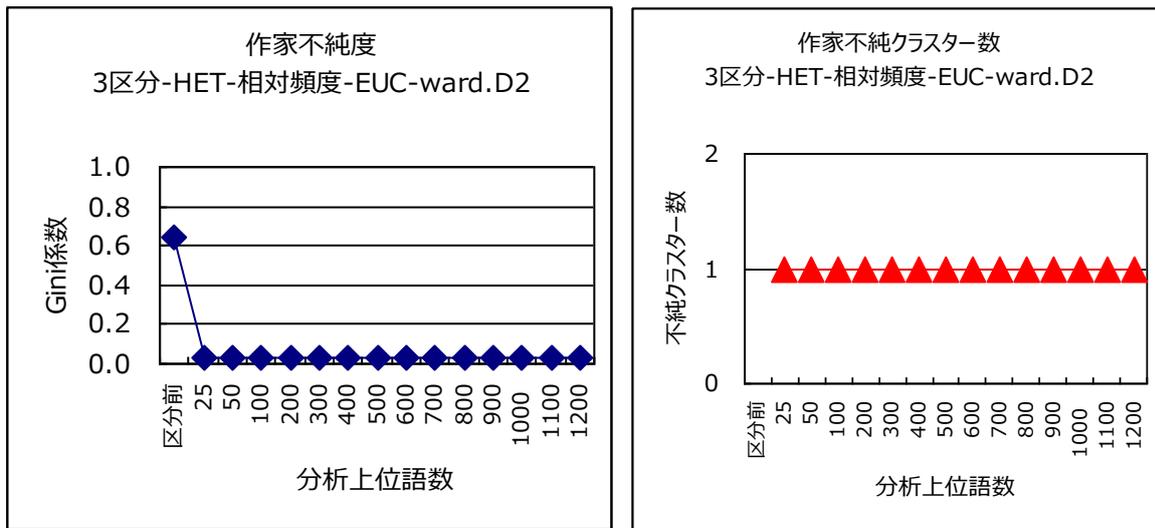


図 2.13 作家の不純度と不純クラスター数（圧縮なし）

図 2.12／図 2.13 は、それぞれ 6 区分／3 区分における作品／作家の区分性である。図 2.13 の左の図では作家の不純度は上位 25 語で大きく減少し、作家として殆ど区分されている。これは「高い頻度で生起する語の多くは、習慣的／型にはまったものと想定され、著者推定に有用と考えられている (Hoover, 2003a, 2003b, 2007; Mahlberg, 2015)」ことと符合している。他方図 2.12 の左の図では作品の不純度が高止まりしている。これは図 2.11 の右の図のように、上位 50 語で全語彙による距離の殆どが形成され、それ

以上分析語数を増やしても、作品の区分（テキストの内容による区分）に有用とされる内容語の生起特性が、反映されにくいことと符合している。不純なクラスター数もまた、作品／作家とも、分析語数を増やしても減少しない（図 2.12、図 2.13 の右の図）。このことは図 2.14 の MDS プロット³⁵が上位ランク 50 語と 500 語のケースで殆ど同じであることからもうかがえる。なお同図で各セッションラベルの 1 字目の H/E/T は作家の、2 字目の数字は作品の、また、3 字目のアルファベットは、各作品のセッションの識別子である（以下、同じ）。MDS プロットは作品セッションの大まかな区分状態の確認には向いているが、多次元データの様態を 2 次元のプロットで表現することによる限界もあり、例えば図 2.14 で E2A と H2E のセッションがどちらのクラスターに含まれるか判然としない。また、同一作家の作品セッション相互間のように比較的差異が小さい場合、プロットが重なって区分状態が確認しにくい。

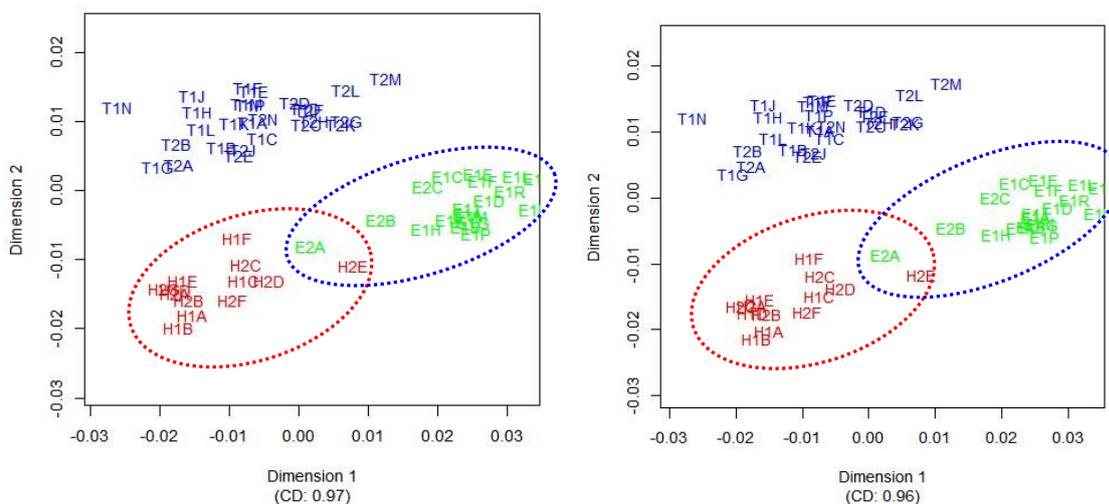


図 2.14 MDS プロット（圧縮なし； 左：50 語、右 500 語）

他方、クラスター分析の樹形図では、図 2.15 のように、クラスター高で 3 区分された

³⁵ このプロットは、語彙頻度を変数とするベクトル空間において、上位 50/500 語による各セッションのベクトルを、その相互間の距離を保ちつつ 2 次元座標に配置したものである。また、1 軸ラベル下部の CD の値は、各セッション間の元の処理データにおける距離とプロットされた距離の相関係数の 2 乗値（Coefficient of Determination, 決定係数）であり、プロットの当てはまり具合（説明力）の目安である（金、2007）。この例で CD 値は 1 にごく近く、このプロットでセッション間の位置関係の殆どが説明されていると解釈される。

真ん中のクラスターには、異なった作家の作品セクションが含まれ、作家として正しく区分されていないこと、また、図 2. 16 では 6 区分したクラスターのうちの 4 つに、それぞれ複数作品のセクションが含まれており、作品として不純なクラスターであることが確認できる。

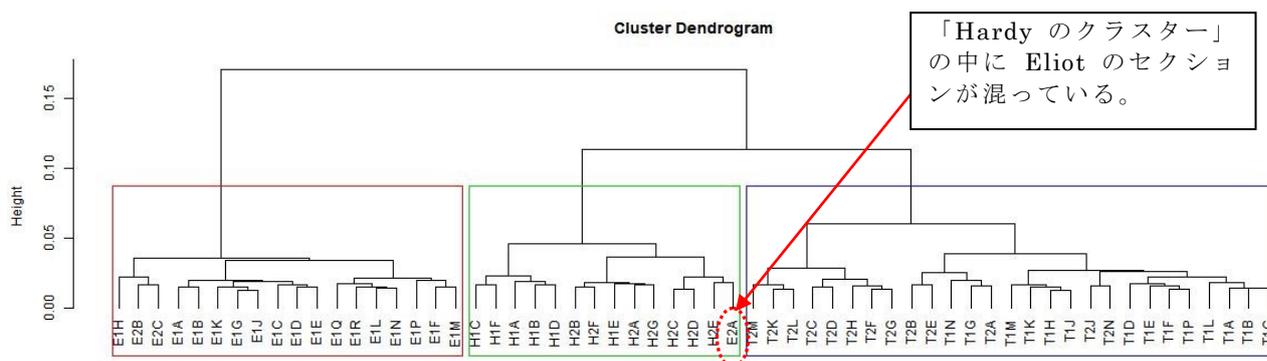


図 2. 15 樹形図（圧縮なし、3 区分、500 語）

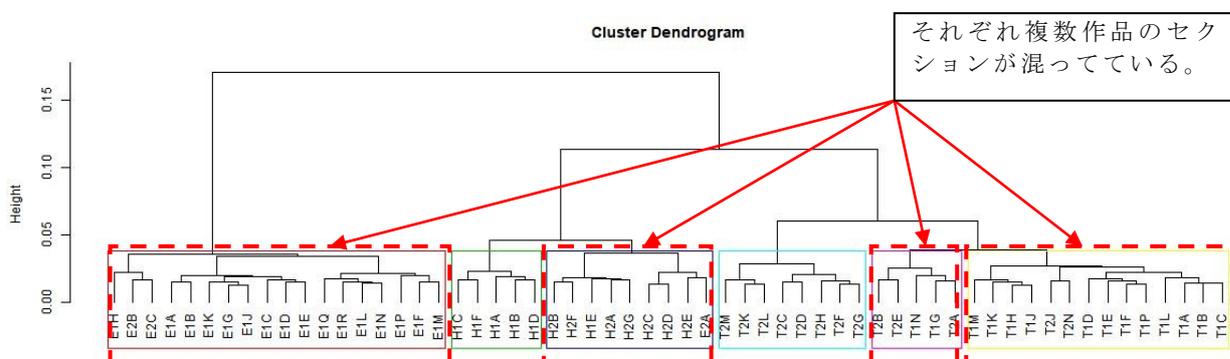
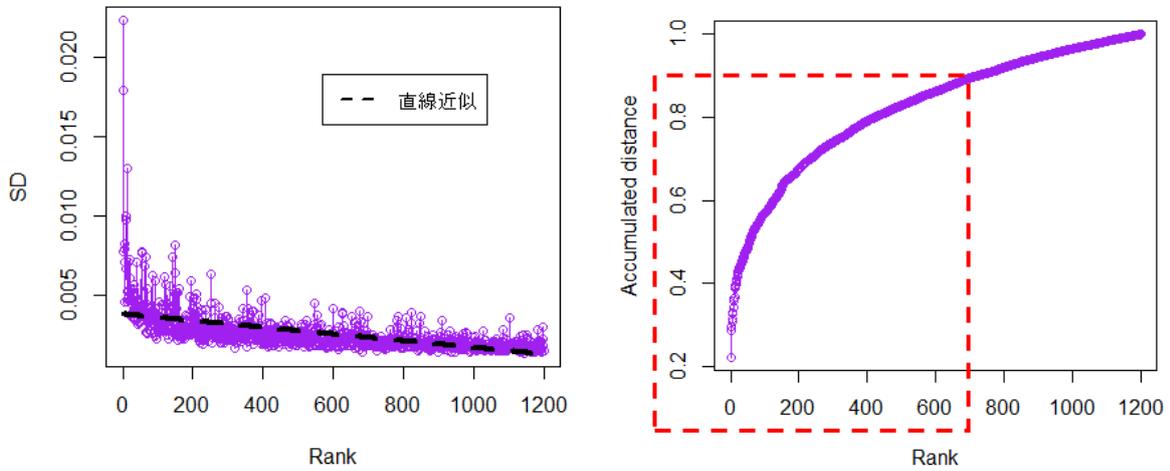


図 2. 16 樹形図（圧縮なし、6 区分、500 語）

(2) 1.5 乗根圧縮データによる区分性

頻度データの 1.5 乗根圧縮によってセクション間距離への高頻度語の影響度がやや抑制されるとともに、中頻度語の影響度が増大し図 2. 17 の右の図のように全累積距離の 90%が上位 700 語程度で形成されるデータになっている。



注 左図における直線近似は、R の nls 関数を用い、直線の関数 $ax+b$ に当てはめて得たものである（以下、同じ）。

図 2.17 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離（1.5 乗根）

そのため分析上位語数が増えるにつれ、多くの内容語の頻度特性が分析に加わることで、図 2.18 のように作品の区分性が向上し、上位 300 語以上で不純度が 0 になっている。また、図 2.19 のように上位 300 語以上で作家の不純度もまた 0 になっている。

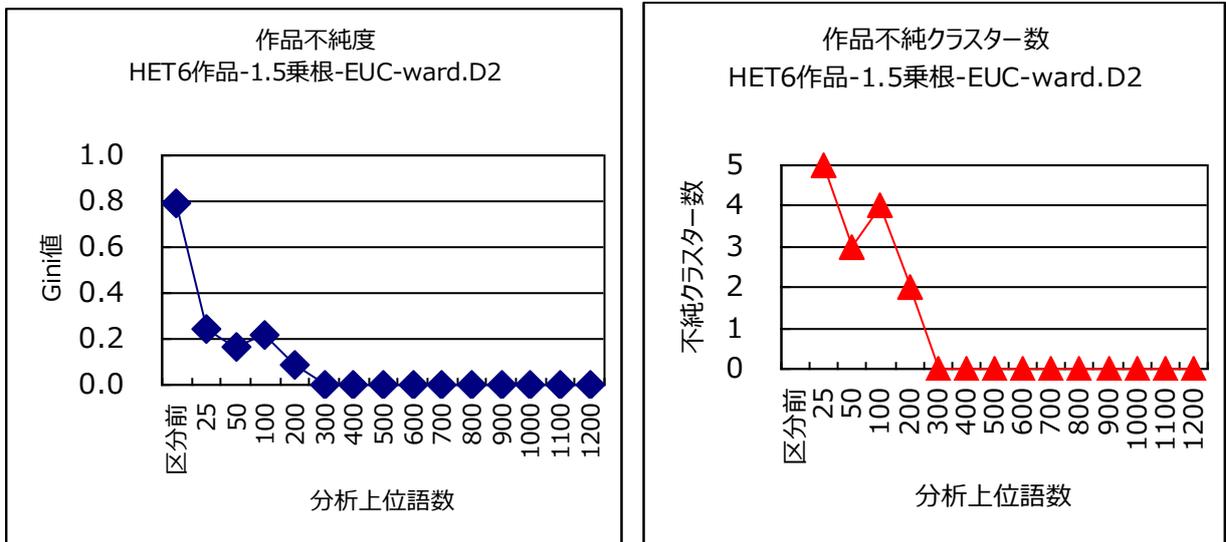


図 2.18 作品の不純度と不純クラスター数（1.5 乗根）

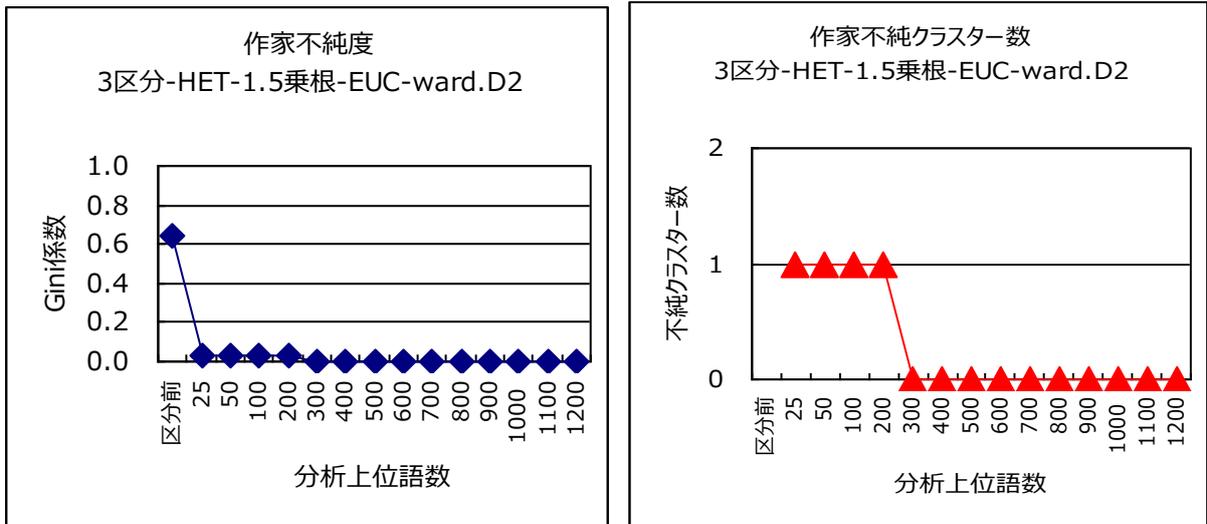


図 2.19 作家の不純度と不純クラスター数 (1.5 乗根)

1.5 乗根圧縮によって分析結果に影響を及ぼすこととなる語のランクが広がるため、上位ランク 50 語と 500 語のケースにおける MDS プロットに、やや違いが確認できる。図 2.20 左の 50 語によるプロットでは E2A のセクションが Hardy のセクションとともにグルーピングされ、不純クラスターとなっていたのが、同図右の 500 語によるプロットでは Eliot のグループに入って、3 クラスターとも作家として不純でなくなっている (図 2.19 の右の図参照)。

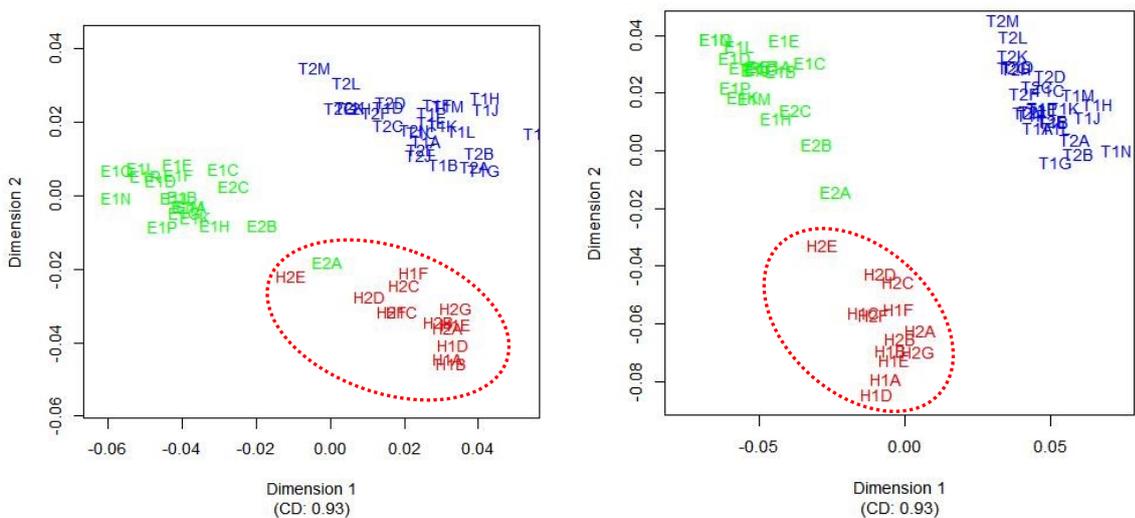


図 2.20 MDS プロット (1.5 乗根 ; 左 : 50 語、右 : 500 語)

図 2. 21 の上位ランク 50 語による樹形図では、左から 3 つ目のクラスターに Eliot 作品のセクションが混っていて、2 つ目のクラスターとともに形成される「Hardy のクラスター」は作家として不純である。また、6 区分したクラスターのうちの 3 つが、作品として不純である。

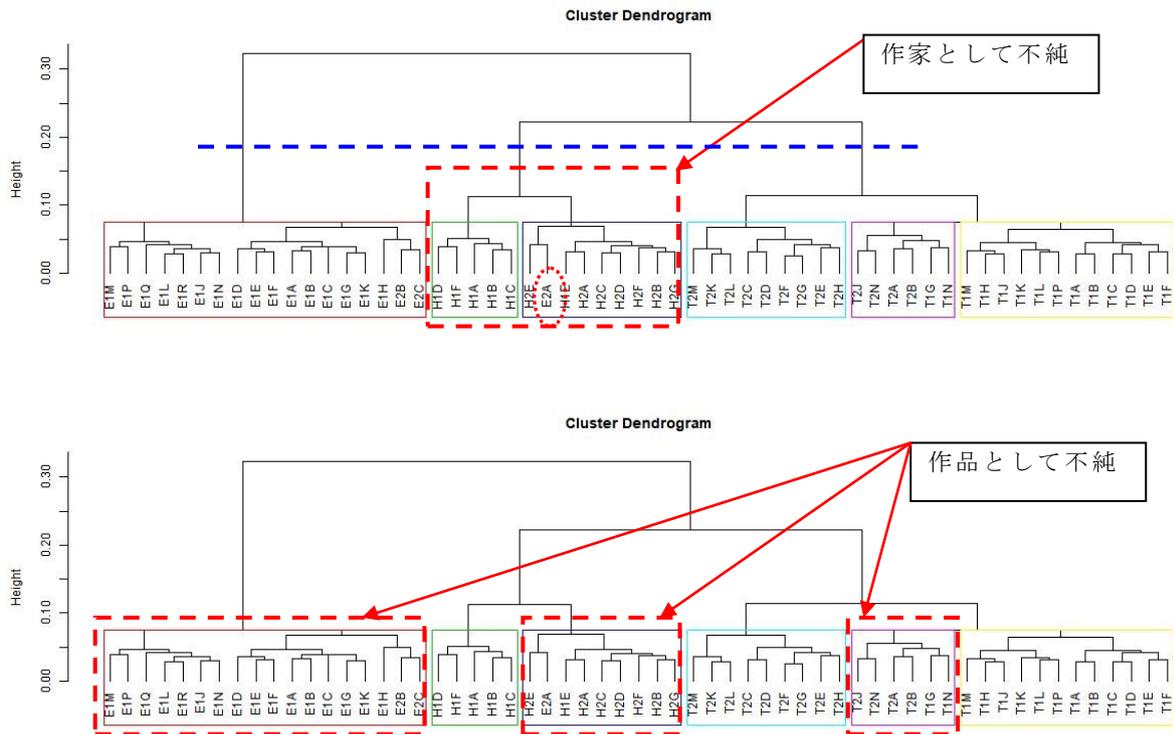


図 2. 21 樹形図 (1.5 乗根、50 語)

他方、図 2. 22 の上位ランク 500 語による樹形図では、区分数 3/6 で、それぞれ作家/作品で完全に区分されている。

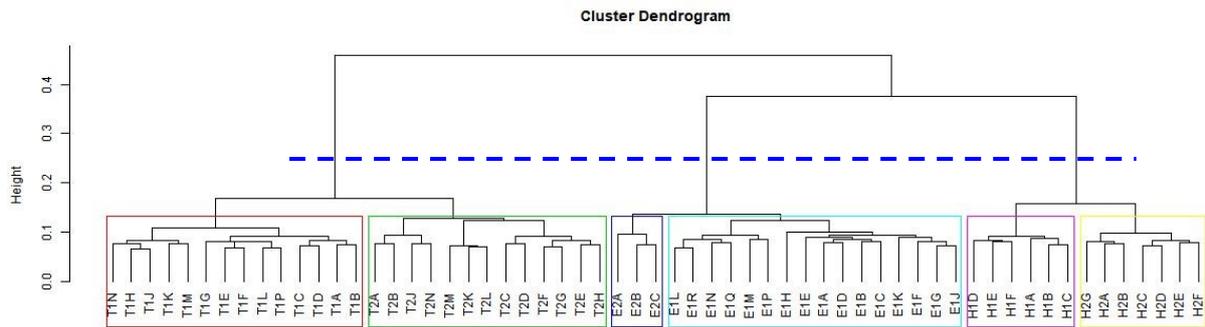


図 2.22 樹形図 (1.5 乗根、500 語)

(3) 平方根圧縮データによる区分性

圧縮度をより高めることで、セクション間距離への高頻度語の影響度がより抑制されるとともに、中頻度語の影響度が更に増大し、全累積距離の 90% が概ね上位 910 語で形成されるようなデータとなる (図 2.23 の右の図)。また同左の図のように、個々の語によって異なる頻度のバラつき特性³⁶は保持されつつも、破線で示されるように、ランクによるバラつきの差異は小さくなっており、より広範なランクの内容語の生起特性が、そのバラつきの大小に応じて分析に反映するデータであることをうかがわせる。

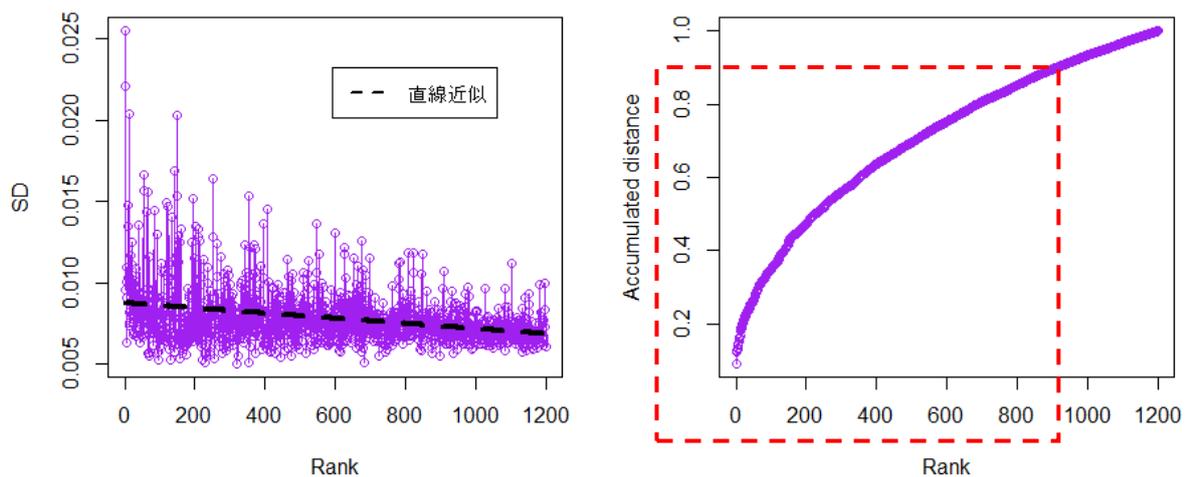


図 2.23 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離 (平方根)

³⁶ セクションに偏って生起する語 (特徴語) のバラつきは大きく、全セクションに同等に生起する語では小さい。

分析の結果、図 2. 24、図 2. 25 のように作品の区分性は 1.5 乗根の場合と同様に、上位 300 語以上で不純度が 0 であるが、作家の区分性は 1.5 乗根の場合より向上し、不純度は上位 100 語以上で 0 になっている。

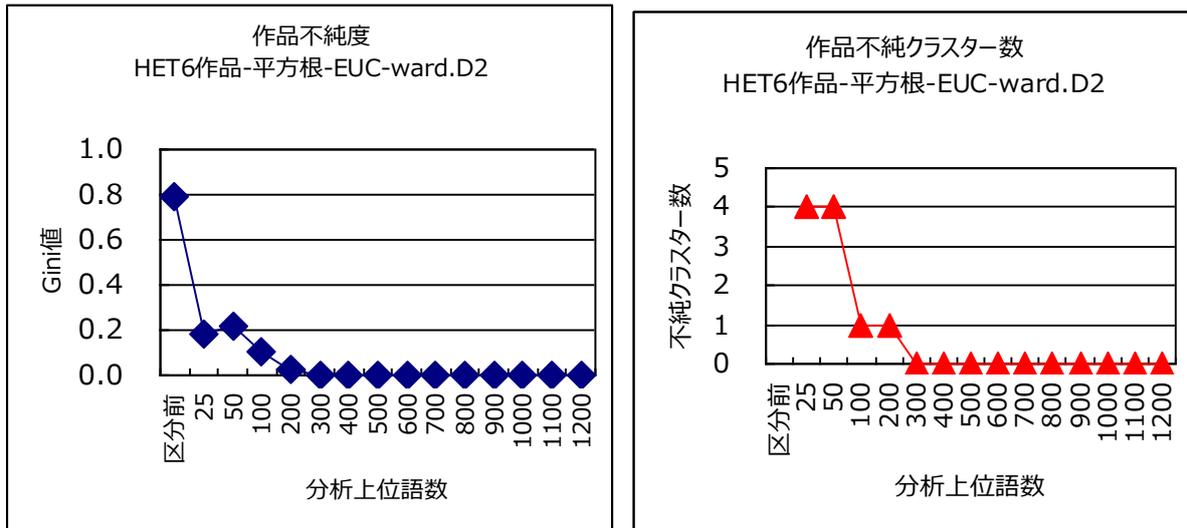


図 2. 24 作品の不純度と不純クラスター数（平方根）

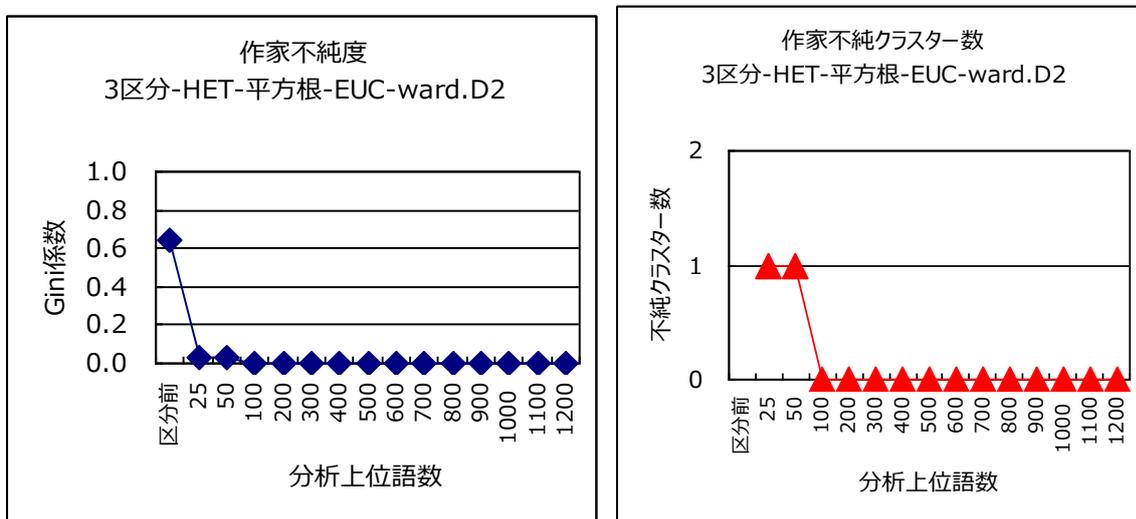


図 2. 25 作家の不純度と不純クラスター数（平方根）

また、上位ランク 500 語のケースの MDS プロットでは、E2A のセクションが Eliot のクラスターに含まれることが、より鮮明になっている（図 2. 26）。

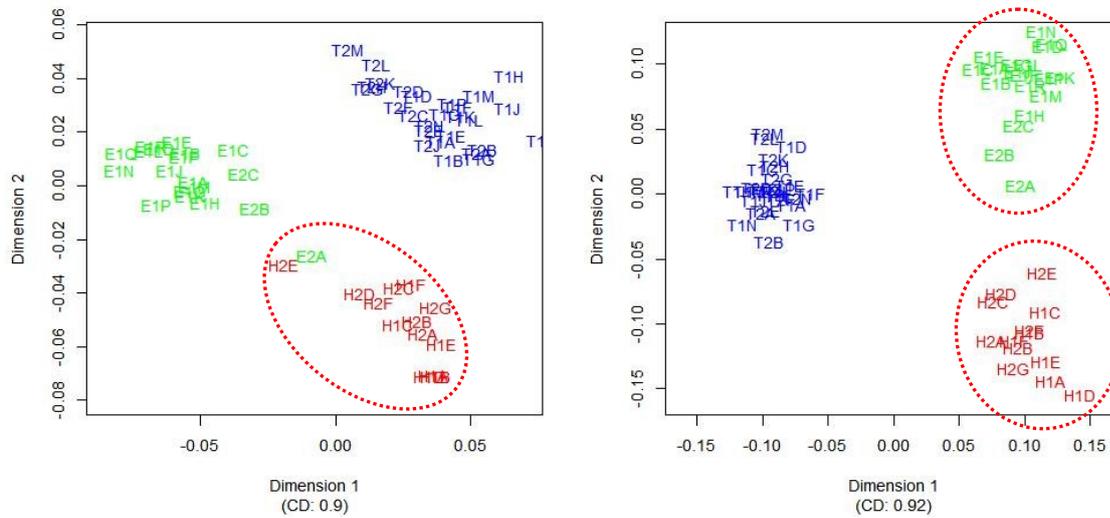


図 2. 26 MDS プロット (平方根; 左: 50 語、右: 500 語)

図 2. 27 の上位ランク 50 語による樹形図では、右から 2 つ目のクラスターに Eliot 作品のセクションが混っていて、右端のクラスターとともに形成される「Hardy のクラスター」は作家として不純である。また、6 区分したクラスターのうちの 4 つが、作品として不純である。

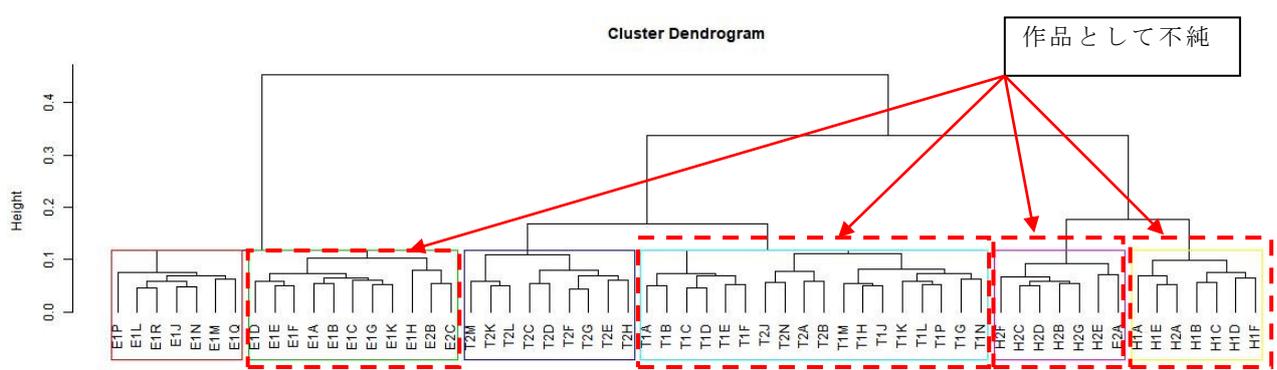
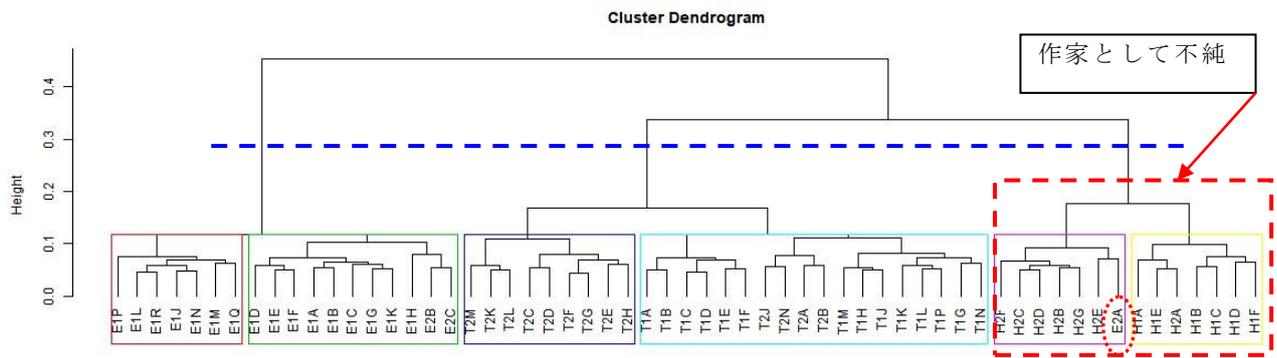


図 2.27 樹形図（平方根、50 語）

他方、図 2.28 の上位ランク 500 語による樹形図では、1.5 乗根圧縮の場合と同様に、区分数 3/6 で、それぞれ作家/作品で完全に区分されている。

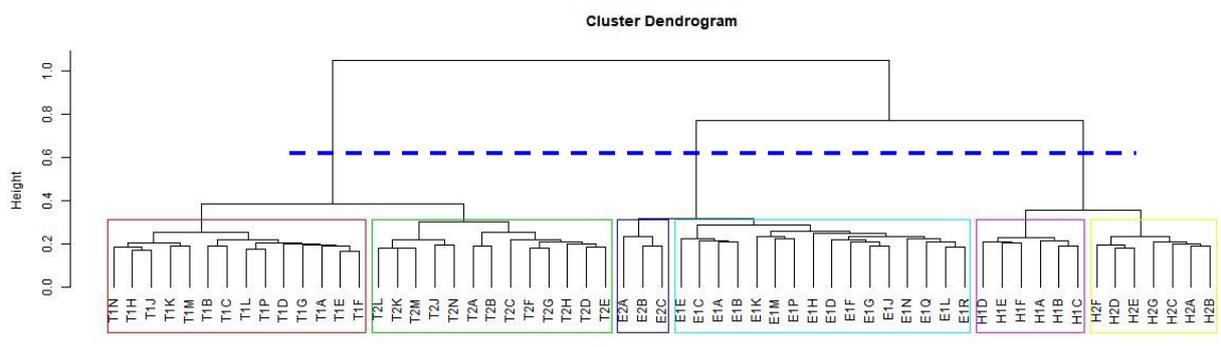


図 2.28 樹形図（平方根、500 語）

(4) 2.5 乗根圧縮データによる区分性

圧縮度を平方根よりさらに高めることで、図2.29の左の図にて破線で示されるように、セクション間距離への高頻度語の影響度がより抑制され、ランクによるバラつきの差異が小さくなっている。また、平方根圧縮までは残っていた最上位クラスのランク語による大きなバラつきが、ランク200~300の語のそれより小さくなっている。右の図では全累積距離の90%が形成されるランク数が、概ね上位970に拡大している。

区分性は、作品の不純度は上位 300 語以上で 0 (図 2. 30)、また作家の不純度は上位 100 語以上で 0 (図 2. 31) で平方根の場合と同じである。上位 500 語による MDS プロットにおける 3 作家のセクションのグルーピング状況もまた平方根の場合と同等である (図 2. 32)。

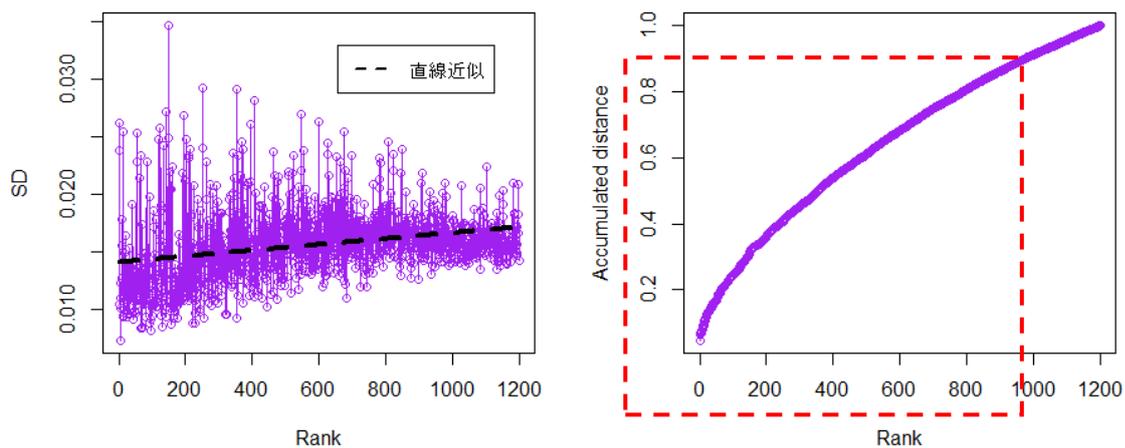


図 2.29 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離 (2.5 乗根)

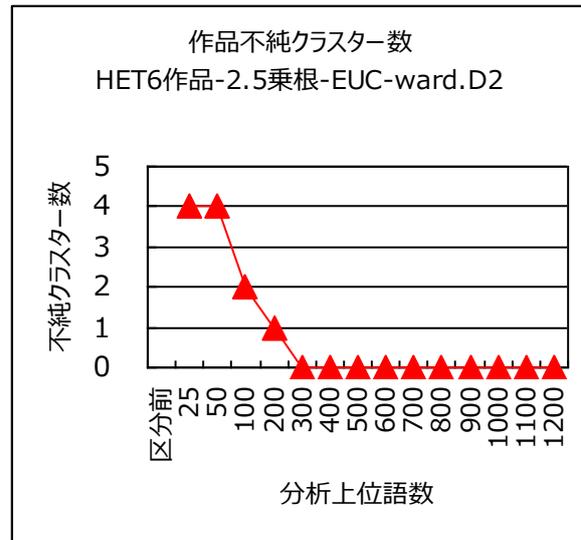
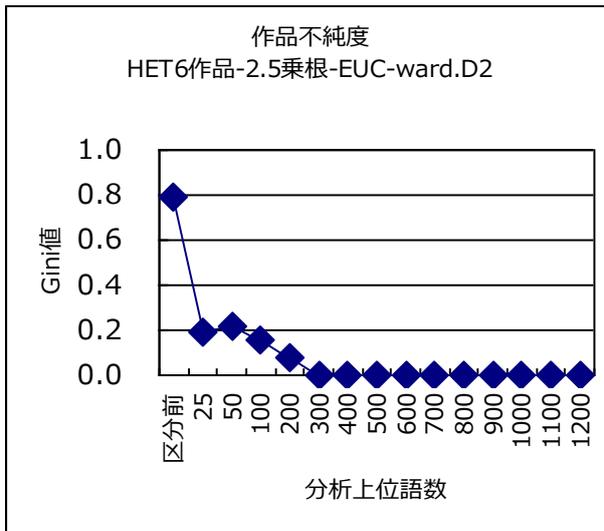


図 2.30 作品の不純度と不純クラスター数 (2.5 乗根)

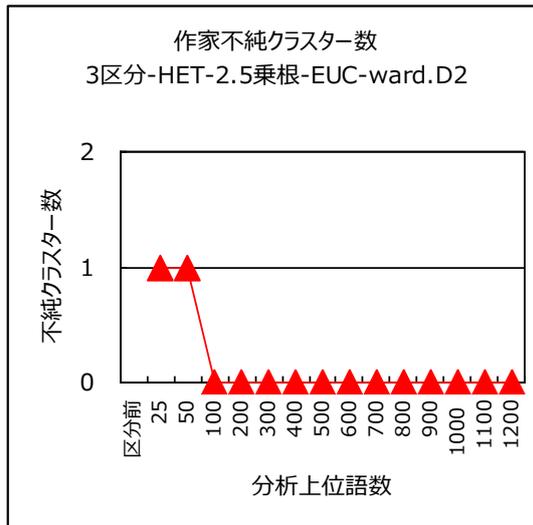
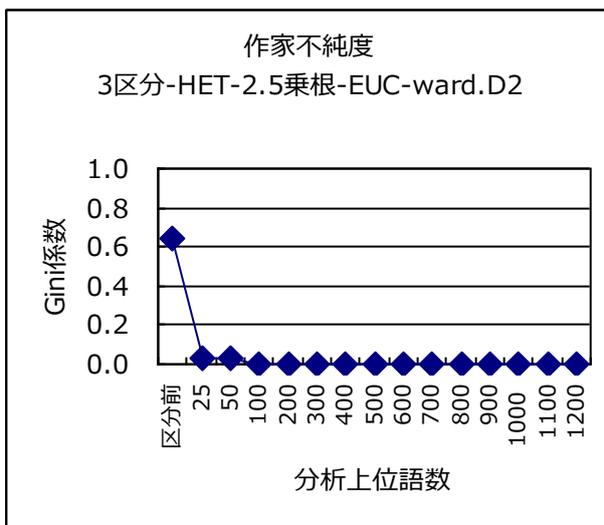


図 2.31 作家の不純度と不純クラスター数 (2.5 乗根)

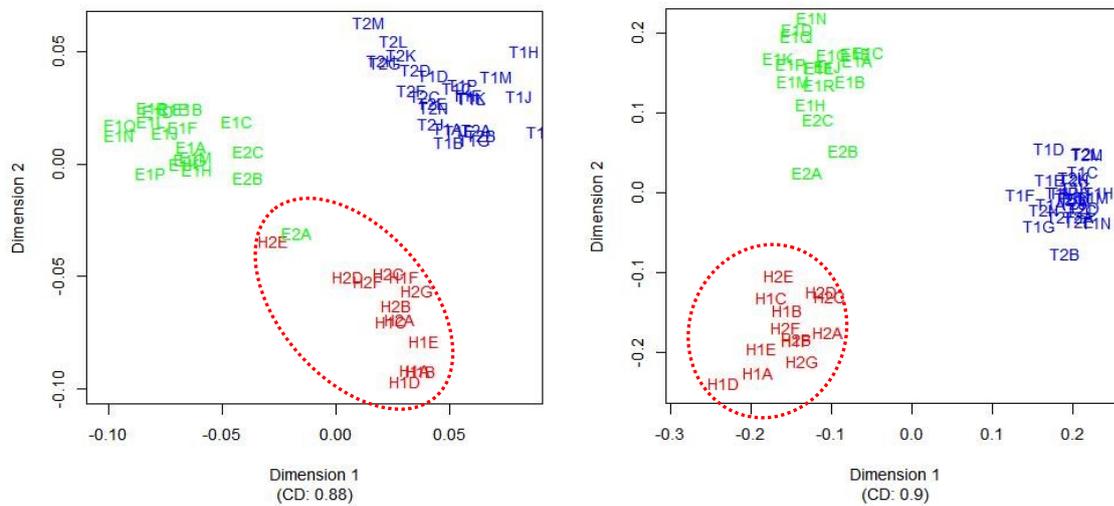


図 2. 32 MDS プロット (2.5 乗根； 左：50 語、右：500 語)

図 2. 33 の上位ランク 50 語による樹形図では、平方根圧縮の場合と同様に、右から 2 つ目のクラスターに Eliot 作品のセクションが混っていて、右端のクラスターとともに形成される「Hardy のクラスター」は作家として不純である。また、6 区分したクラスターのうちの 4 つが作品として不純である。

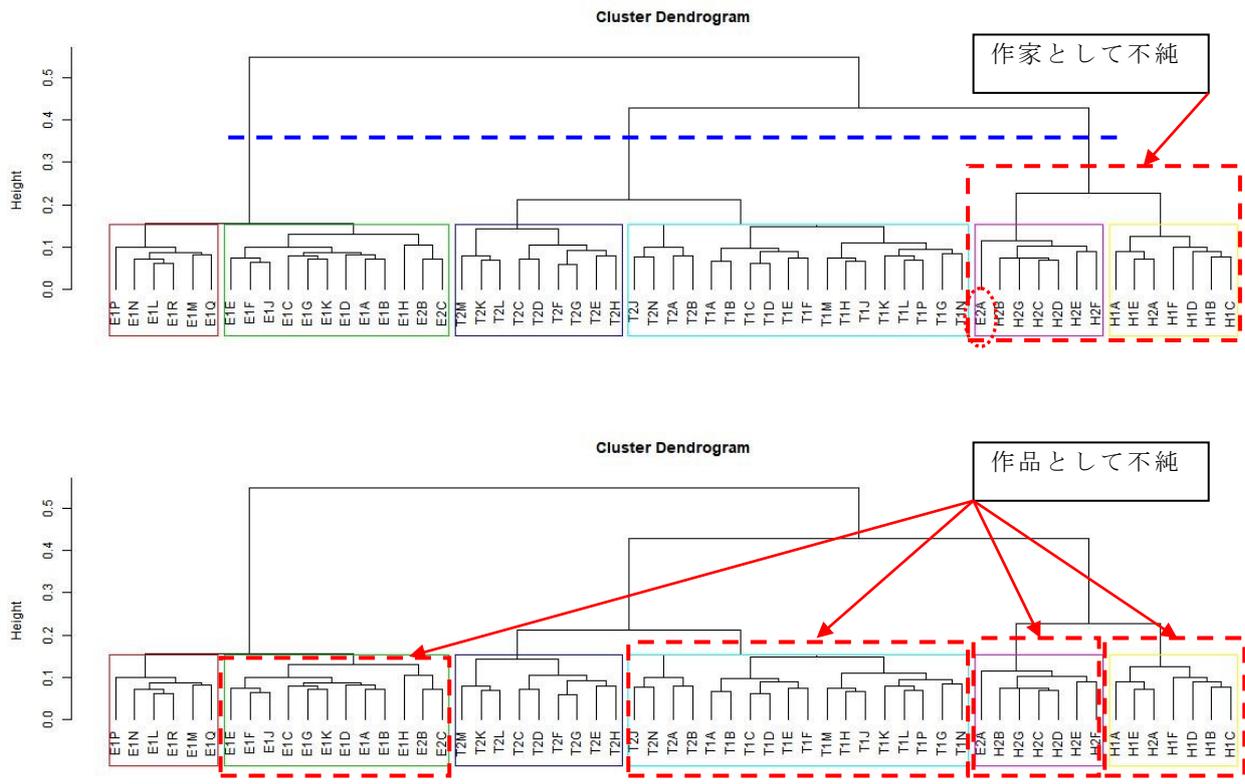


図 2.33 樹形図 (2.5 乗根、50 語)

他方、図 2.34 の上位ランク 500 語による樹形図では、1.5 乗根・平方根圧縮の場合と同様に、区分数 3/6 で、それぞれ作家/作品で完全に区分されている。

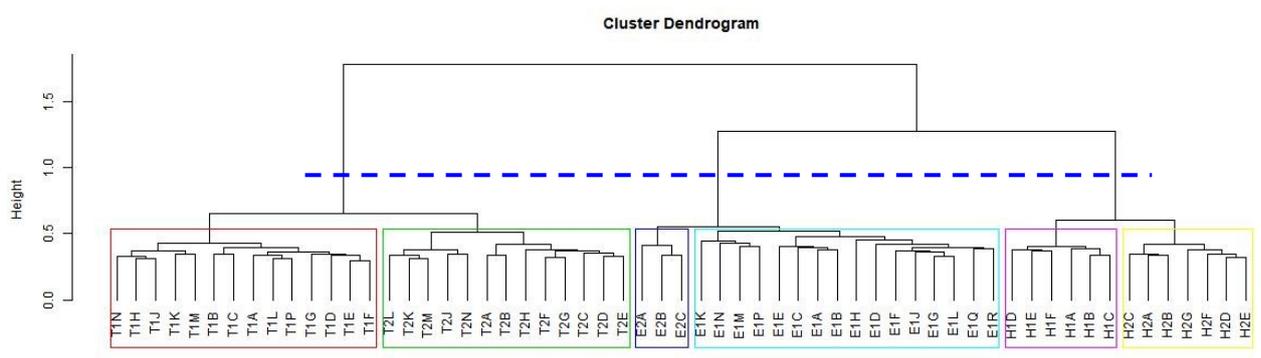


図 2.34 樹形図 (2.5 乗根、500 語)

(5) 立方根圧縮データによる区分性

圧縮度をさらに高めることで、図 2. 35 のように、セクション間距離への高頻度語の影響度が一層抑制され、逆に低頻度語の影響度が強化されている。また、全累積距離の 90% が形成される語数が、概ね上位 1,000 語に拡大している。

区分性は平方根や 2.5 乗根の場合と同様に、作品の不純度は上位 300 語以上で 0 (図 2. 36)、作家の不純度もまた上位 100 語以上で 0 (図 2. 37) になっている。

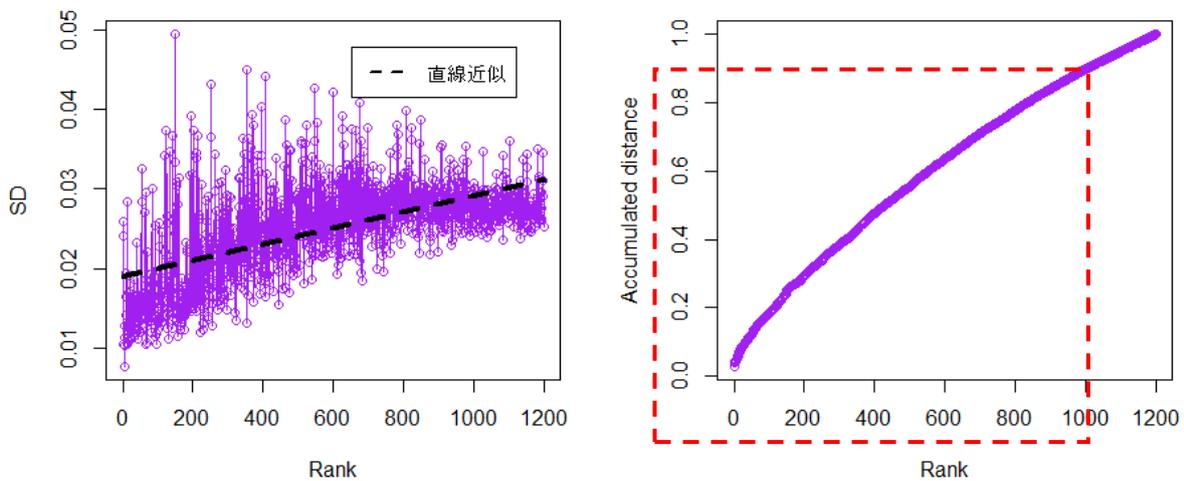


図 2. 35 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離 (立方根)

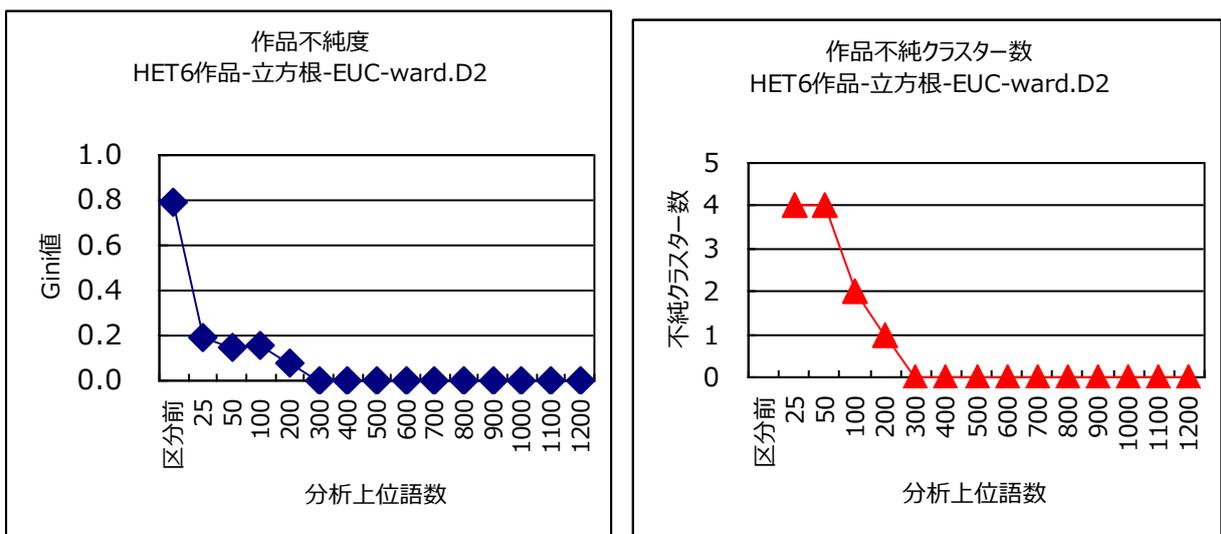


図 2. 36 作品の不純度と不純クラスター数 (立方根)

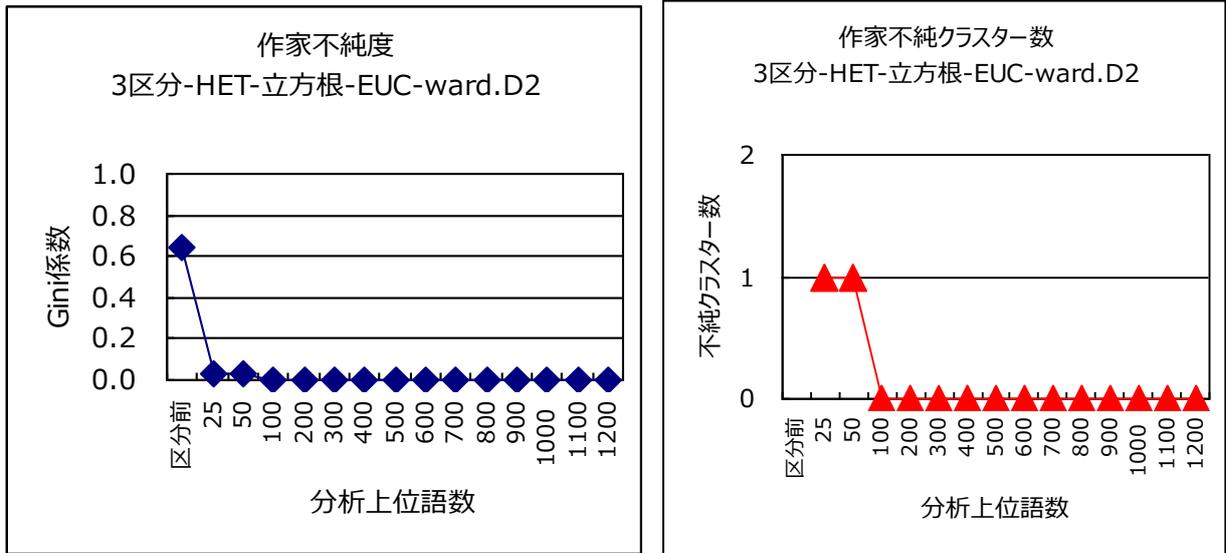


図 2. 37 作家の不純度と不純クラスター数（立方根）

MDS プロットの 500 語のケースにおける 3 作家のセクションのグルーピング状況は、2.5 乗根の場合より作家間の距離がやや大きくなっているが同等である（図 2. 38）。

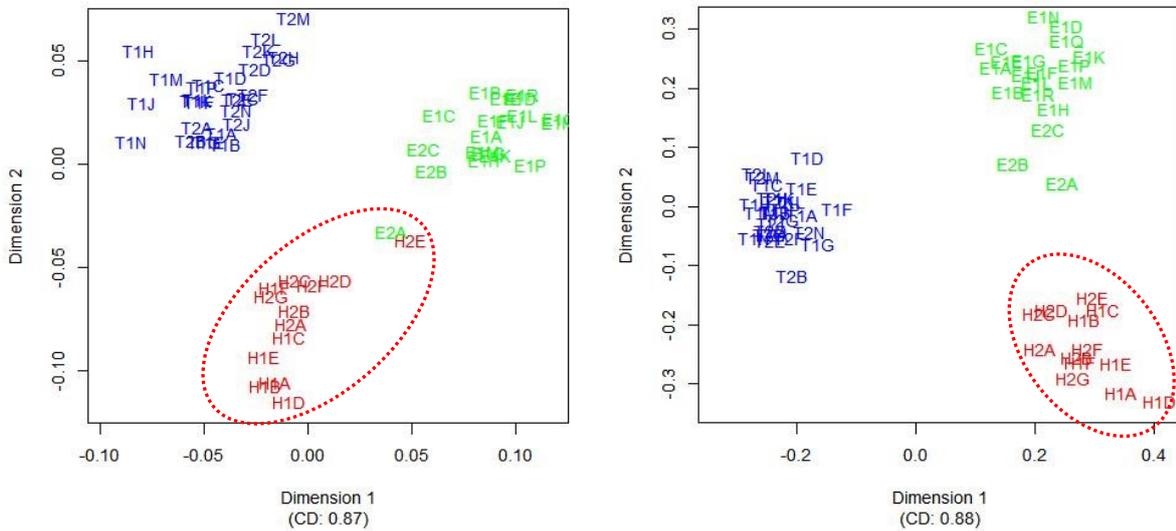


図 2. 38 MDS プロット（立方根； 左：50 語、右：500 語）

図 2. 39 の上位ランク 50 語による樹形図では、1.5 乗根～2.5 乗根圧縮の場合と同様に、「Hardy のクラスター」に Eliot のセクションが混っており、作家として不純である。また、6 区分したクラスターのうちの 4 つが、作品として不純である。

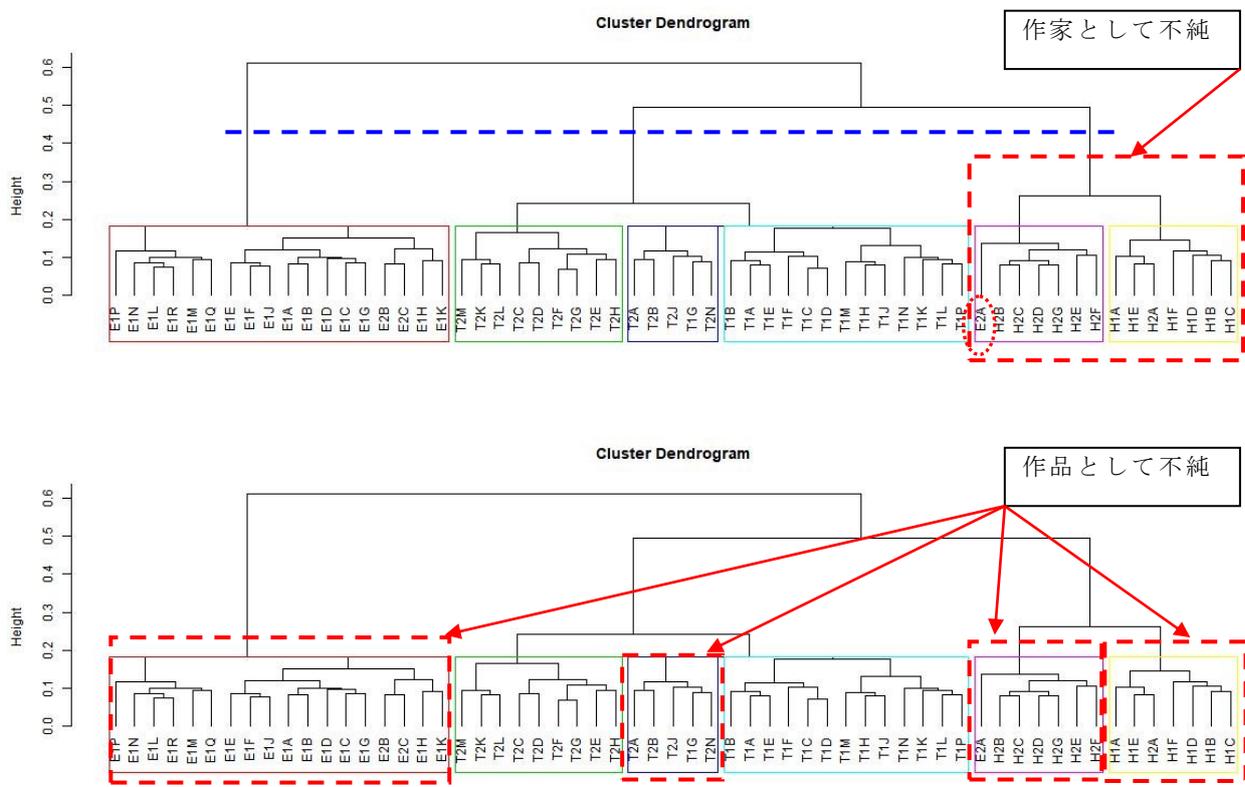


図 2.39 樹形図（立方根、50 語）

他方、図 2.40 の上位ランク 500 語による樹形図では、1.5 乗根～2.5 乗根圧縮の場合と同様に、区分数 3/6 で、それぞれ作家/作品で完全に区分されている。

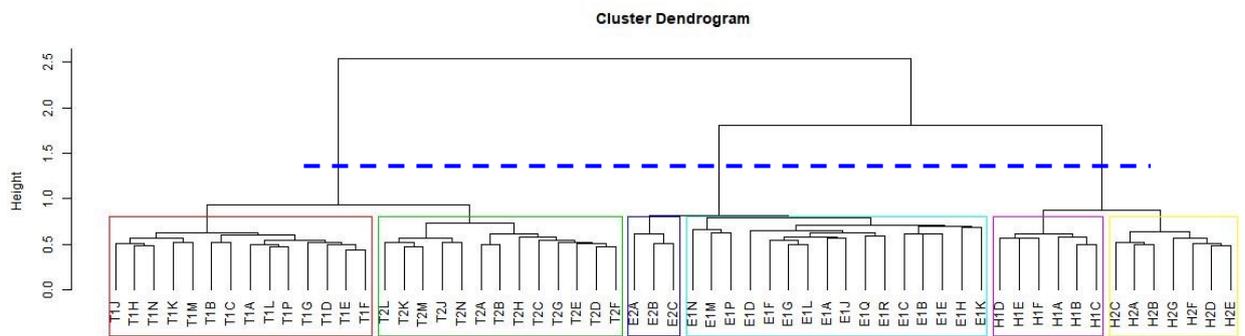


図 2.40 樹形図（立方根、500 語）

(6) 4乗根圧縮データによる区分性

圧縮度をさらに高めることで、セクション間距離への高頻度語の影響度が大きく抑制され、低頻度語の影響度は大きく強化されている。また、全累積距離の90%が形成される語数が、概ね上位1,030語にまで拡大している(図2.41)。

1.5乗根~立方根までの圧縮データによる場合と異なり、作品の不純度は上位400語で一旦0になるものの、以降の上位語ケースで、特にランク1,000超でむしろ高まり、区分性は低下している(図2.42)。他方、作家の区分性は1.5乗根~立方根で圧縮したデータによる場合より向上しており、不純度は上位50語以上で0になっている(図2.43)。

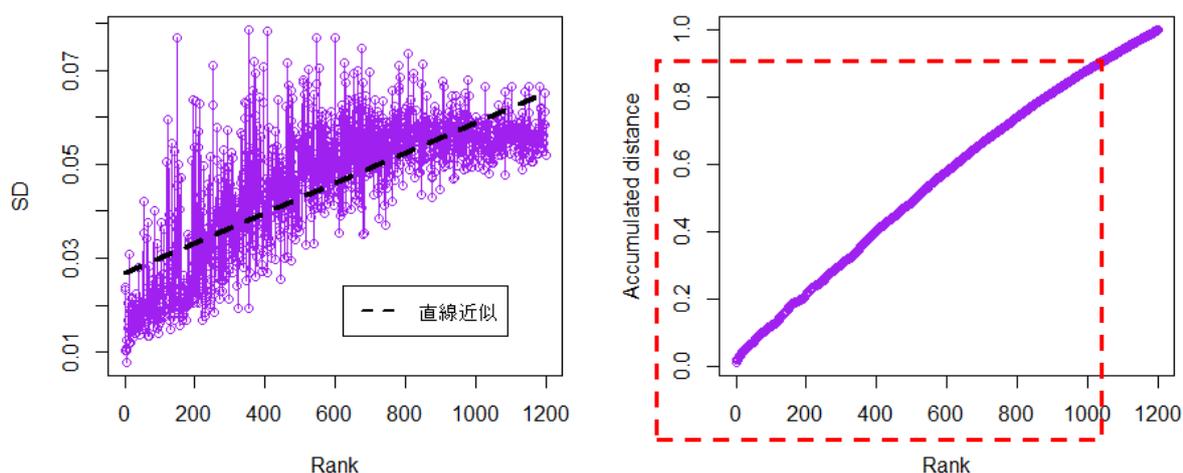


図 2.41 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離 (4乗根)

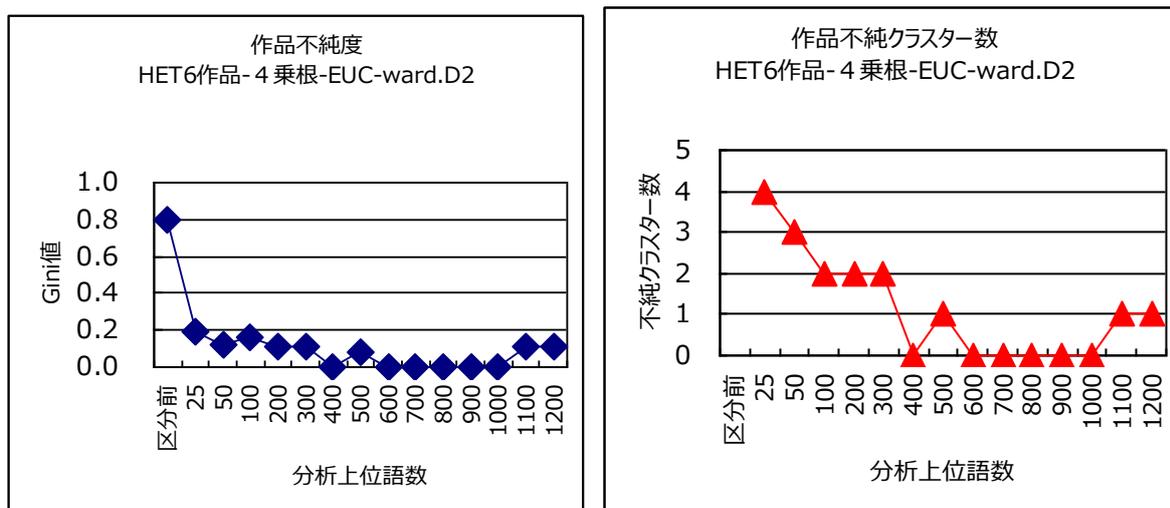


図 2.42 作品の不純度と不純クラスター数 (4乗根)

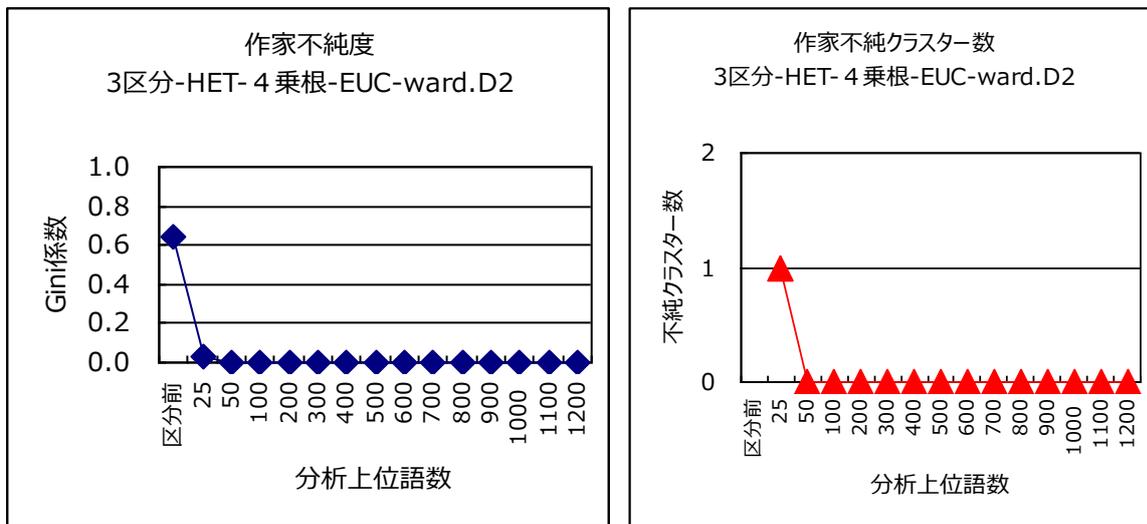


図 2.43 作家の不純度と不純クラスター数（4乗根）

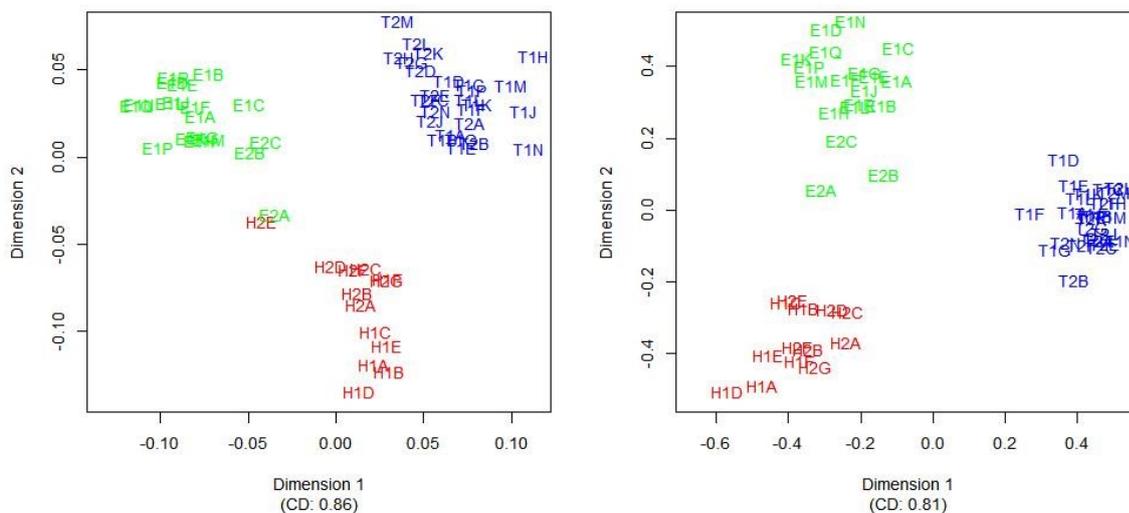


図 2.44 MDS プロット（4乗根； 左：50語、右：500語）

図 2.45 の上位ランク 50 語による樹形図では、6 区分したクラスターのうちの 3 つが、作品として不純であるが、立方根圧縮までのケースと異なり、その 3 つのクラスターに異作家のセクションは混っておらず、作家としては不純 0 で区分されている。

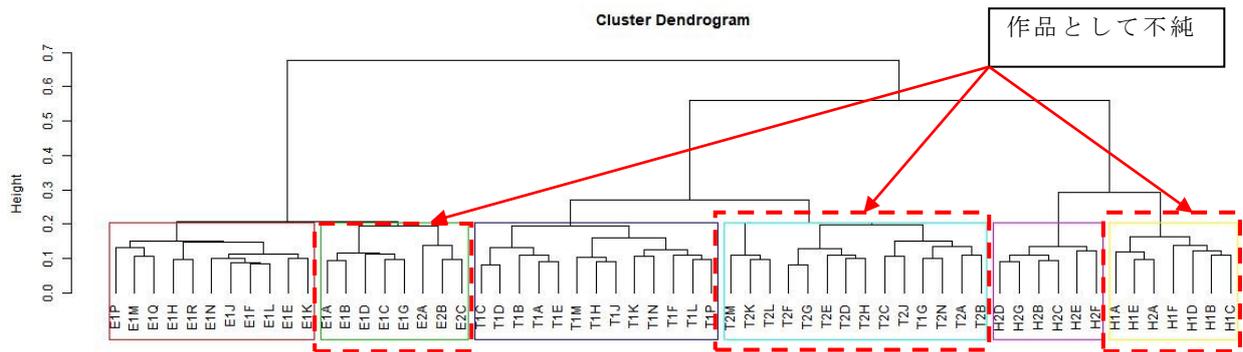


図 2.45 樹形図（4 乗根、50 語）

他方、図 2.46 の上位ランク 500 語による樹形図では、1.5 乗根～立方根圧縮の場合と異なり、6 区分した右端のクラスターが作品として不純である。

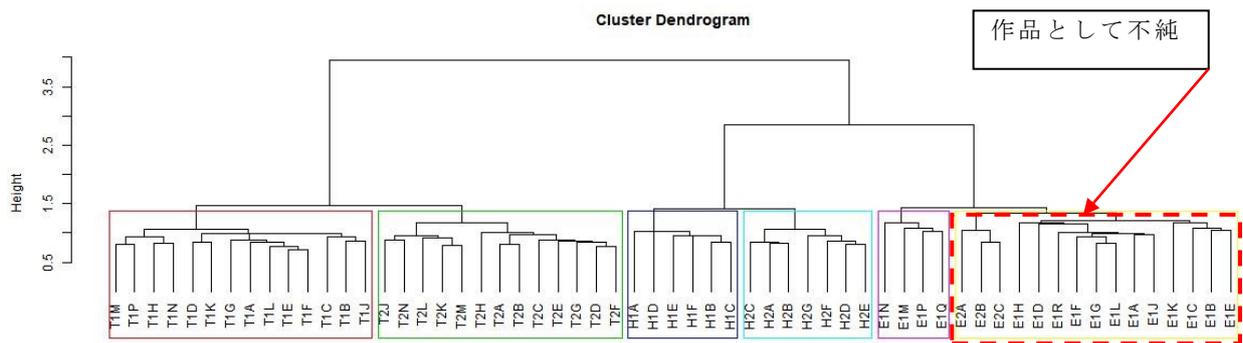


図 2.46 樹形図（4 乗根、500 語）

加えて 1.5 乗根～立方根圧縮では上位ランク 500 以降 1,200 まで、6 つのクラスターは作品で完全に区分されていたが、4 乗根圧縮では図 2.47 の上位 1,200 語の樹形図のように、左から 3 つ目のクラスターに、Hardy の 2 作品のセクションが混っており、ランク 1,100 以降で作品の区分性が低下している。

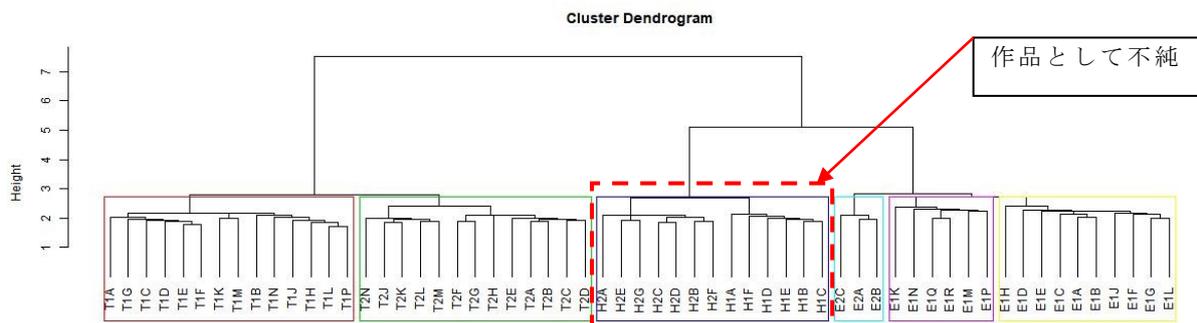


図 2.47 樹形図（4 乗根、1200 語）

(7) 5 乗根および対数圧縮データによる区分性

いずれの場合も、セクション間距離への影響度が高頻度語で抑制され、低頻度語で強化される特性は、4 乗根圧縮の場合より強化されるが、作家については 4 乗根圧縮の場合と同様に、上位 50 語で完全に区分された。作品の区分性は 5 乗根圧縮では 4 乗根の場合より低下したが、対数圧縮では同等であった（appendix A2.2.1 (1), (2)参照）。

(8) Z スコア化データによる区分性

Z スコア化データでは、2.5 乗根圧縮データの場合と同様に、概ね上位 970 語で全累積距離の 90%が形成されるが、累乗根や対数で圧縮したデータによる場合との大きな差異は、個々の語によって異なるバラつき特性が保持されず一定となることである（図 2.48）。

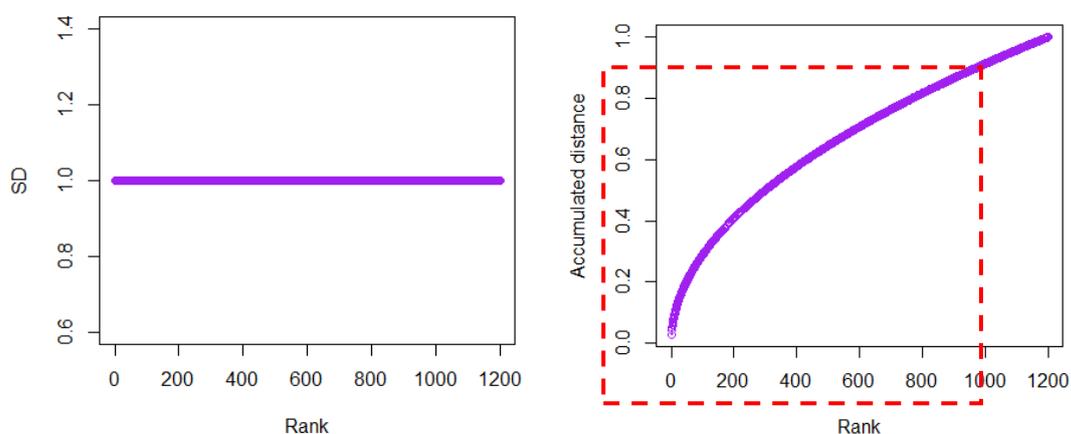


図 2.48 全セクションにおける標準偏差とセクション間の累積距離（Z スコア）

作品の区分性は、1.5 乗根～立方根までの累乗根圧縮データによる場合よりやや低く、不純度は上位 600 語以降のケースで 0 になる（図 2. 49）。他方作家の区分性は、4 乗根以上の圧縮データによる場合と同様に、不純度は上位 50 語以上で一貫して 0 になる（図 2. 50）。

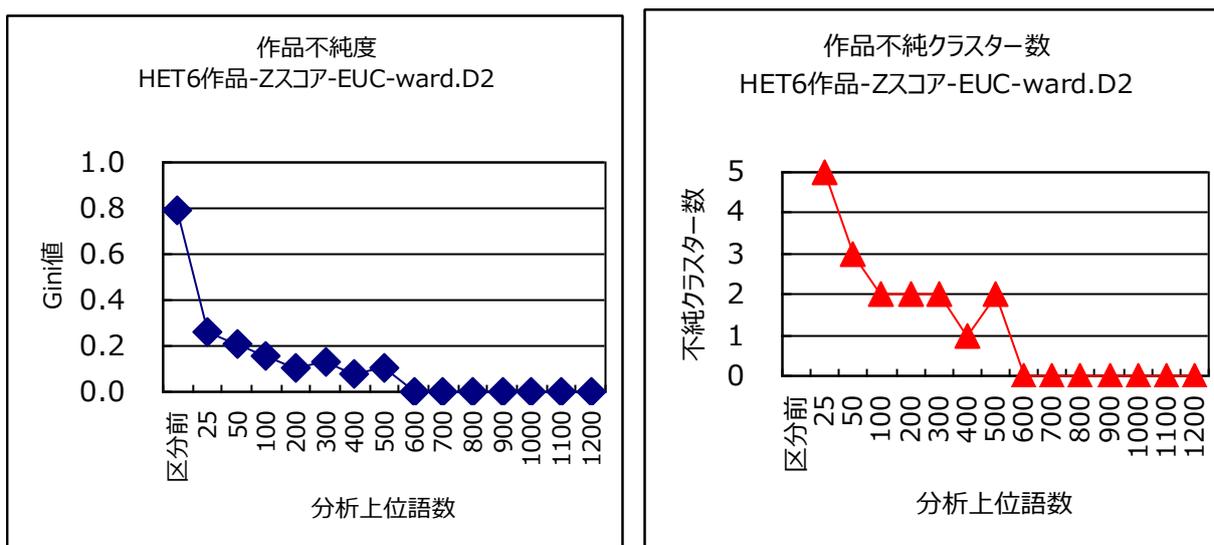


図 2. 49 作品の不純度と不純クラスター数（Zスコア）

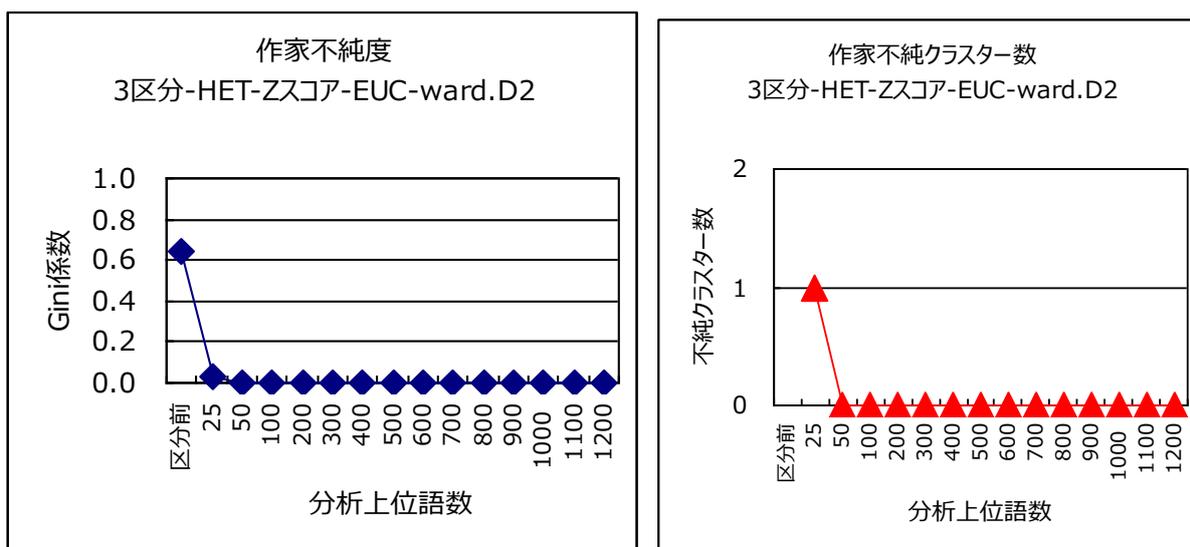


図 2. 50 作家の不純度と不純クラスター数（Zスコア）

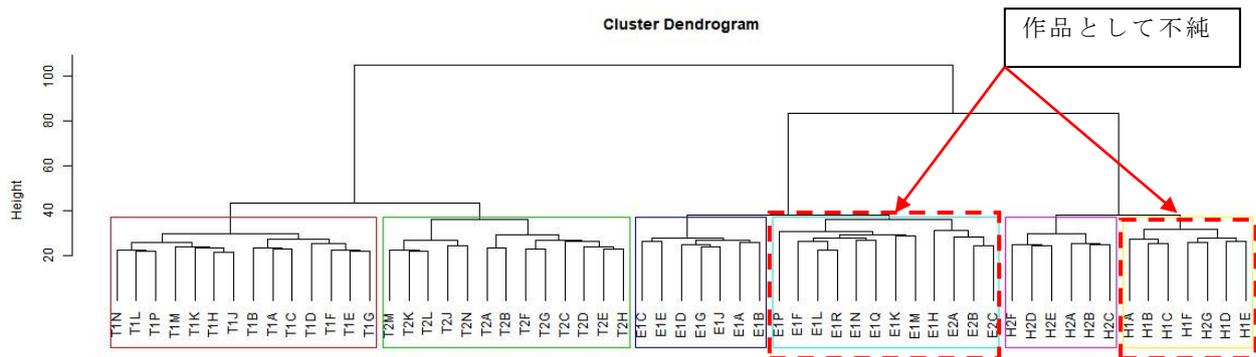


図 2.53 樹形図 (Z スコア、500 語)

(9) TF・IDF 化データによる区分性

語彙が生起するセクションの数による、頻度データへの逆の重みづけ (IDF, Inverse Data Frequency) による効果に注目するため、TF (Term Frequency) には重みづけを行わず、圧縮なしの相対頻度データを $1 + \log(59 / \text{生起セクション数})^{37}$ で重みづけした。すなわち、全セクションに生起する語の重みは 1 (重みなし) で、生起セクション数が減るほど重みが大数的に増加し、また、 n が大きくなるほど重みづけが強化されることになる。本節では n を 1、10、50 と変化させ、IDF 重み付加による効果を、作家および作品の不純クラスター数で比較した。なお、比較のため IDF 重みを行わない場合の不純クラスター数を図 2.54 に再掲する。

³⁷ \log の項の分子の 59 は評価に用いたコーパスにおける作品セクションの合計数である。

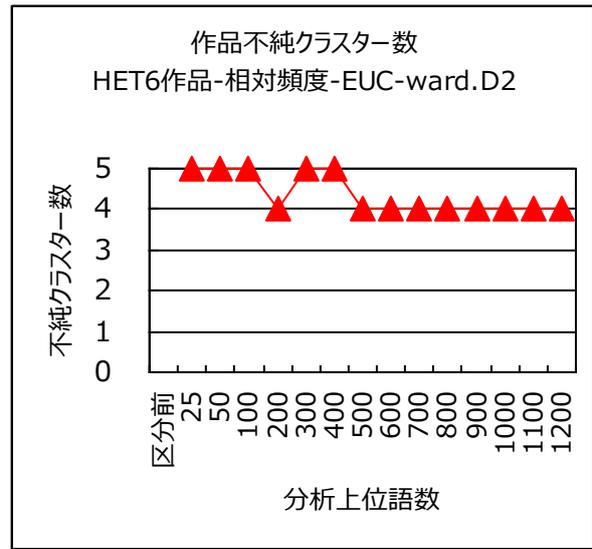
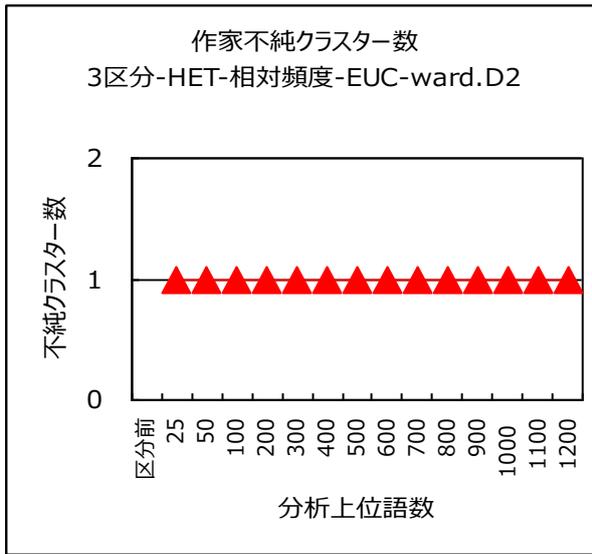


図 2.54 作家と作品の不純クラスター数 (IDF なし)

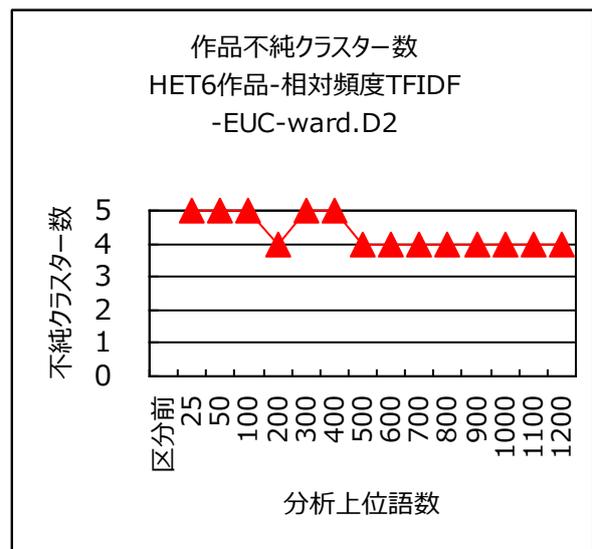
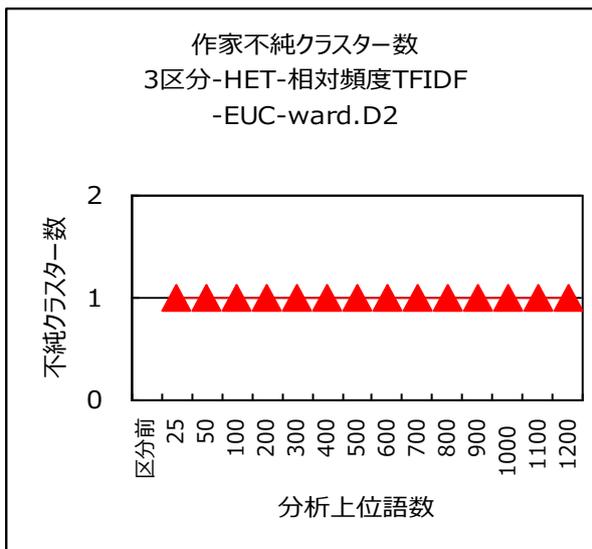


図 2.55 作家と作品の不純クラスター数 (n=1)

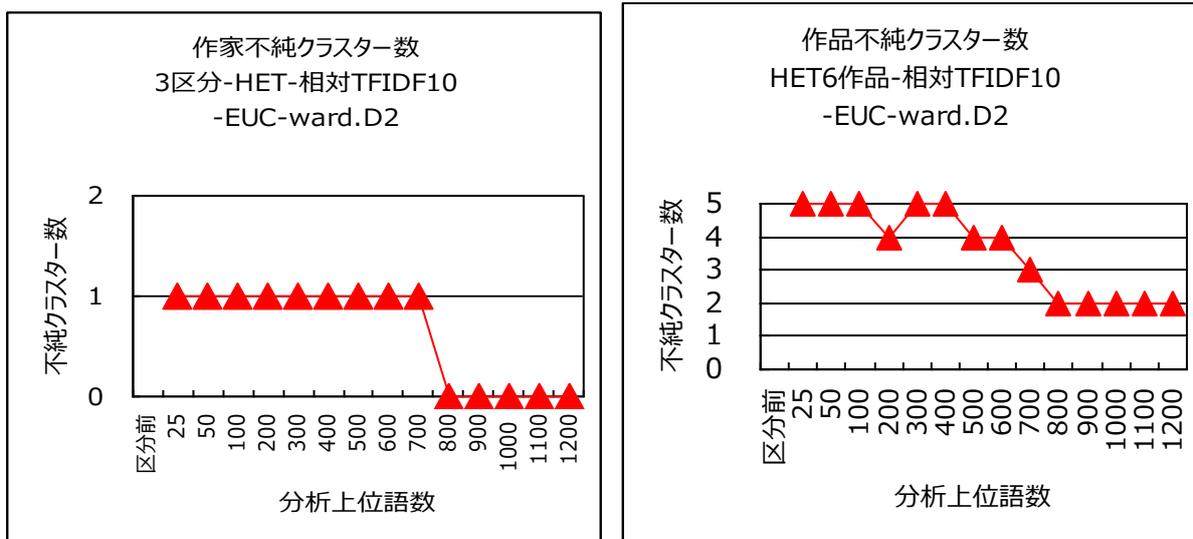


図 2.56 作家と作品の不純クラスター数 (n=10)

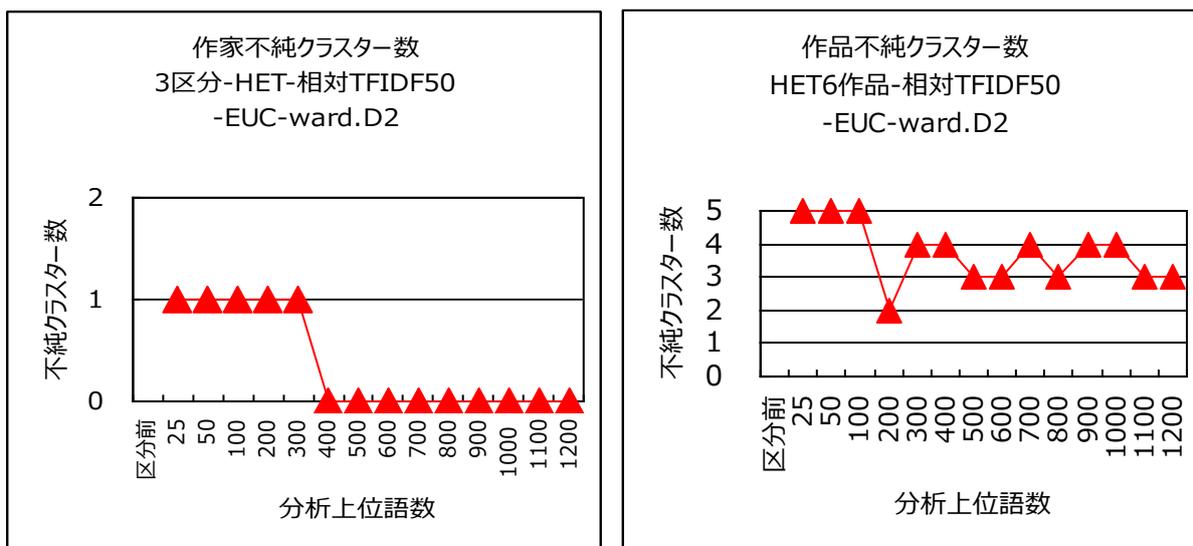


図 2.57 作家と作品の不純クラスター数 (n=50)

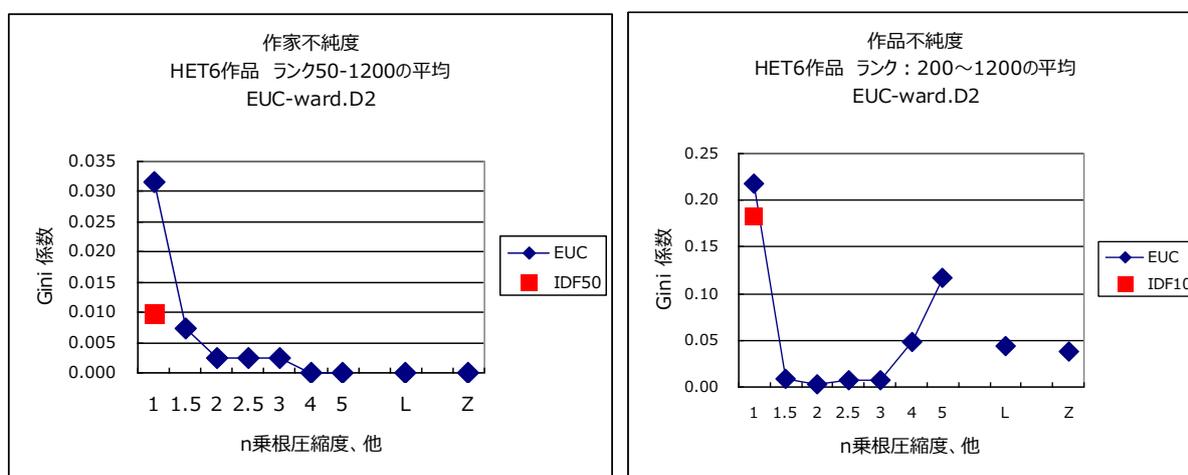
n=1 で得られた IDF 重みの平均値³⁸は、ランク 400 までは 1.1 未満、以降漸増してランク 1,200 では 1.6 となったが、図 2.55 のように不純クラスター数は図 2.54 の IDF を行わない場合と変化なく、IDF 重みによる効果はみられない。次に、n=10 の場合の重みは、ランク 200 までは 1.1 以下、以降漸増してランク 1,200 では 6.8 となり、図 2.56 のように上位ランク 800 語以上で作家、作品共に不純クラスター数が減少している。さらに n=50

³⁸ 頻度ランクによる傾向を把握するため、個々の語でなくランク 100 毎のセグメントにおける重みの平均値とした。

の場合の重みは、ランク 100 までは 1.0、以降漸増してランク 1,200 では 30.2 となり、図 2.57 のように上位ランク 400 語以上で作家の不純クラスター数をさらに減ずる効果がみられるが、作品の区分性は $n=10$ の場合より低下している。

(10) 語彙頻度の重みづけによる区分性のまとめ

区分性への効果が確認される頻度ランクは、適用した重みづけ手法によって多少異なるため、作品については上位ランク 200~1,200 語で、作家については同 50~1,200 語で得られた Gini 係数を平均した値を各手法における区分性として比較する（図 2.58）。



注：グラフにて、軸目盛の L は対数圧縮、Z は Z スコア。凡例の IDF50 は $n=50$ の場合、IDF10 は $n=10$ の場合である。

図 2.58 作家と作品の不純度（まとめ）

作家の区分性は圧縮度を高めるほど高くなっている。他方、作品の区分性は 1.5 乗根~立方根の圧縮度で最も高くなり、4 乗根以上では低下している。頻度圧縮による重みづけでは、個々の語彙の頻度や、セクション間のバラツキの大小関係が保持されつつ、セクション間の頻度差の、頻度ランクの高低による違いが縮小する。1.5 乗根~立方根で圧縮したデータで作品の高い区分性が得られたのは、この特性によって広範なランクの内容語を含む語彙の生起特性が、その大小関係に応じて分析に反映することとなったためと考えられる。4 乗根以上にさらに圧縮度を高めると、その効果が作品の区分については過剰なものとなって区分性が低下するが、作家間の語彙嗜好の差異は、同じ作家の作品間の語彙使用の差異より大きいため、作家の区分については過剰なものとはならず、不純度の低下傾向が保たれるものと考えられる。

他方、Zスコア化したデータでは、各語彙について全セクションにおけるバラつき（偏差）が標準偏差の逆数で重みづけされている。そのため、セクション間で頻度のバラつきが大きく、特徴語といえる語による影響は相対的に抑制され、他方どのセクションにもほぼ同等に生起し、特徴語とはいえない語による小さなバラつきが強調される傾向がある。このデータで作品について一定の区分性は得られるものの、1.5乗根～立方根で圧縮したデータによるものより低いのは、この特性によるものと考えられる。なお、作家についての区分性が4乗根以上で圧縮した場合と同様に高いのは、作家間の語彙嗜好の差異が作品間のそれより大きいため、その特性が過剰なものとはならないためと考えられる。TF-IDFでは、重みを強化することで作家の区分性は高まったが、作品の区分性への効果は確認できなかった。

2.2.2 クラスターの連結法・距離定義法による区分性

2.2.1節では距離定義にEUCを、クラスターの連結法にワード法(ward.D2)を適用し、語彙頻度の重みづけに各種の方法を適用して得られる作品／作家の区分性を比較した。本節では距離定義にIRadを適用した場合の区分性について前節と同様に分析し、次にIRadを含む4つの距離定義と4つの連結法を組み合わせた各ケースについて、圧縮なしデータ、1.5乗根、平方根、2.5乗根、および立方根で圧縮したデータ³⁹、ならびにZスコア化したデータを適用して作品の区分性⁴⁰を分析する。

(1) IRadの距離定義による区分性

距離定義にIRadを、連結法にward.D2を適用し、頻度に重みづけをしないデータによる分析では、2.2.1節で分析した1.5乗根から立方根で圧縮したデータにEUCとward.D2を適用したケースと同様、作品の不純度は上位300語以上で0(図2.59)、作家の不純度も上位100語以上で0(図2.60)となり高い区分性が得られた。

³⁹ 比較のための「圧縮なし」と、2.2.1節で作品について高い区分性が得られた重みづけ方法を適用した。4乗根、5乗根、対数、およびTF-IDFで重みづけしたケースは、プロットの輻輳を避けるため省略した。

⁴⁰ 作家の区分性より高度な区分性能が求められる作品の区分性で評価する。

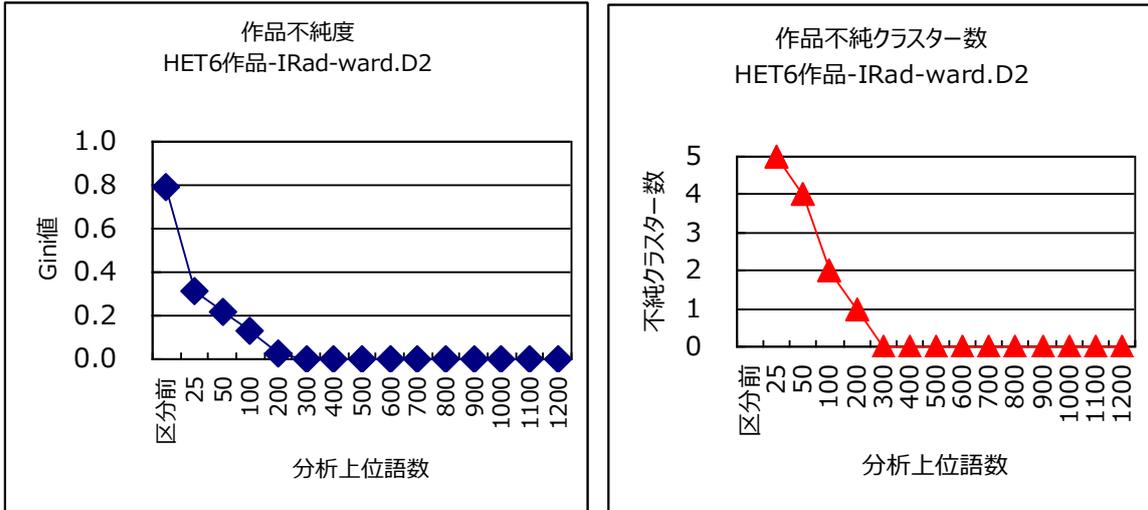


図 2.59 作品の不純度と不純クラスター数 (IRad)

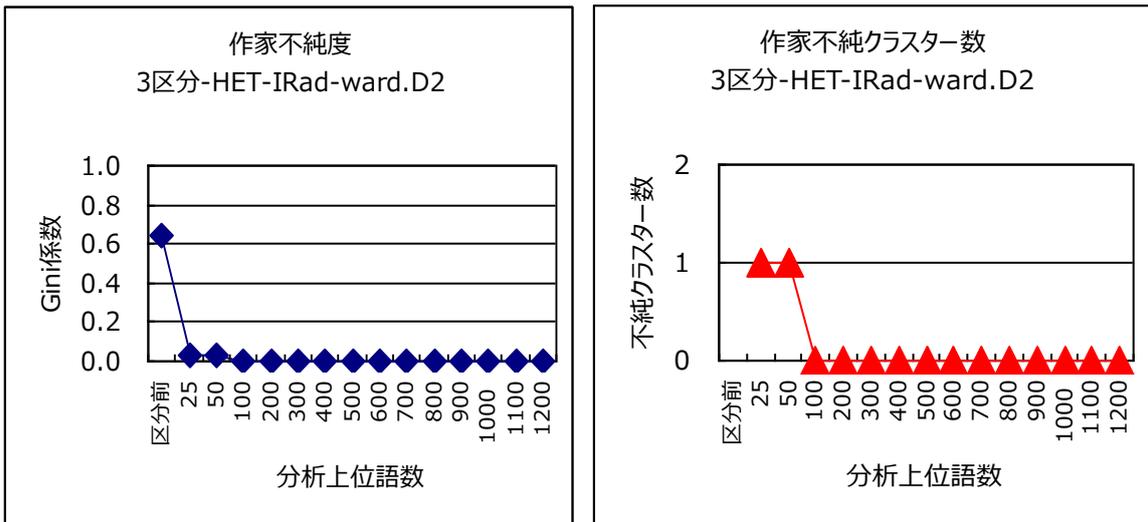


図 2.60 作家の不純度と不純クラスター数 (IRad)

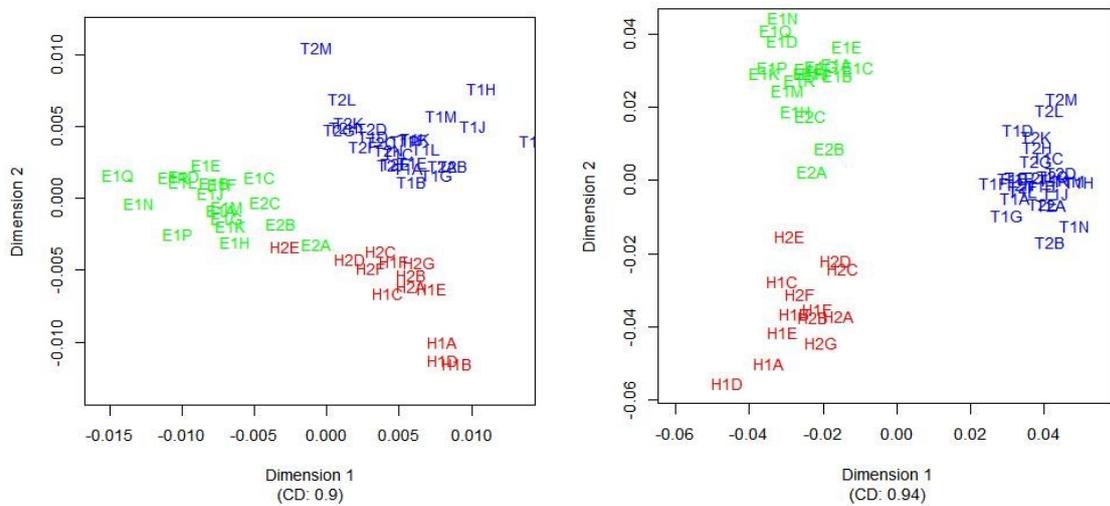


図 2. 61 MDS プロット (IRad ; 左 : 50 語、右 : 500 語)

(2) クラスタの連結法による区分性

距離定義と連結法を組み合わせた各ケースについて、各種重みづけを施した頻度データを用いて、2.2.1 節と同様な手順で分析して得られた区分性を図 2. 62～図 2. 65 に示す。なお、各評価要素を組み合わせて得られた区分性について、2.2.1 節で示したような詳細な記述は省略し、それぞれ上位ランク 200～1,200 語における不純度を平均した値による評価にとどめた。

連結法	圧縮なし	1.5 乗根	平方根	2.5 乗根	立方根	Z スコア
	1	1.5	2	2.5	3	
single	0.32	0.33	0.32	0.39	0.41	0.38
complete	0.33	0.11	0.25	0.28	0.33	0.25
average	0.23	0.21	0.31	0.31	0.36	0.28
ward.D2	0.22	0.008	0.002	0.007	0.007	0.038

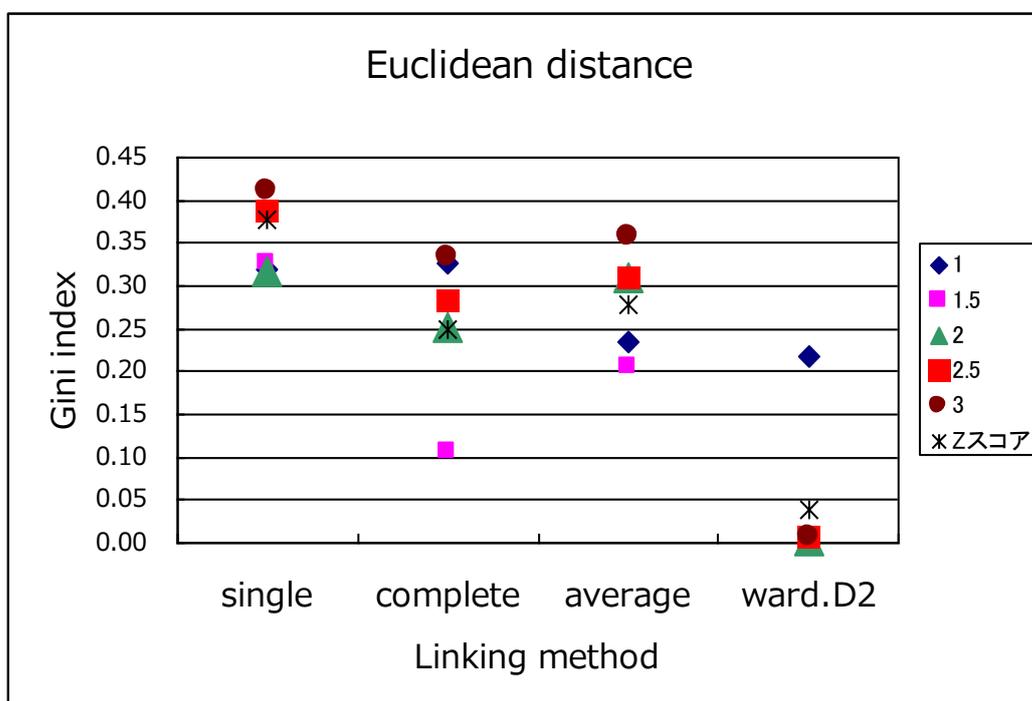


図 2. 62 ユークリッド距離によった場合の区分性

連結法	圧縮なし	1.5 乗根	平方根	2.5 乗根	立方根	Z スコア
	1	1.5	2	2.5	3	
single	0.33	0.35	0.35	0.38	0.40	0.38
complete	0.20	0.24	0.27	0.31	0.30	0.25
average	0.17	0.22	0.30	0.30	0.34	0.24
ward.D2	0.03	0.023	0.03	0.021	0.03	0.06

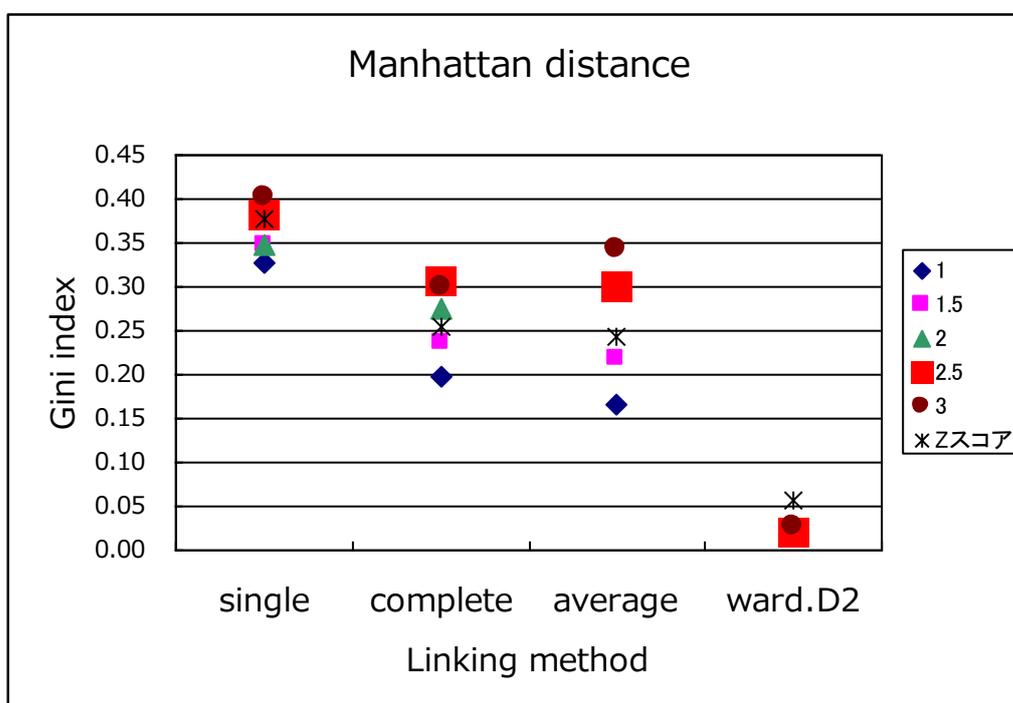


図 2. 63 マンハッタン距離によった場合の各区分性

連結法	圧縮なし	1.5 乗根	平方根	2.5 乗根	立方根	Z スコア
	1	1.5	2	2.5	3	
single	0.51	0.60	0.67	0.69	0.71	0.31
complete	0.36	0.37	0.39	0.39	0.39	0.14
average	0.40	0.41	0.41	0.40	0.40	0.11
ward.D2	0.08	0.11	0.13	0.13	0.18	0.04

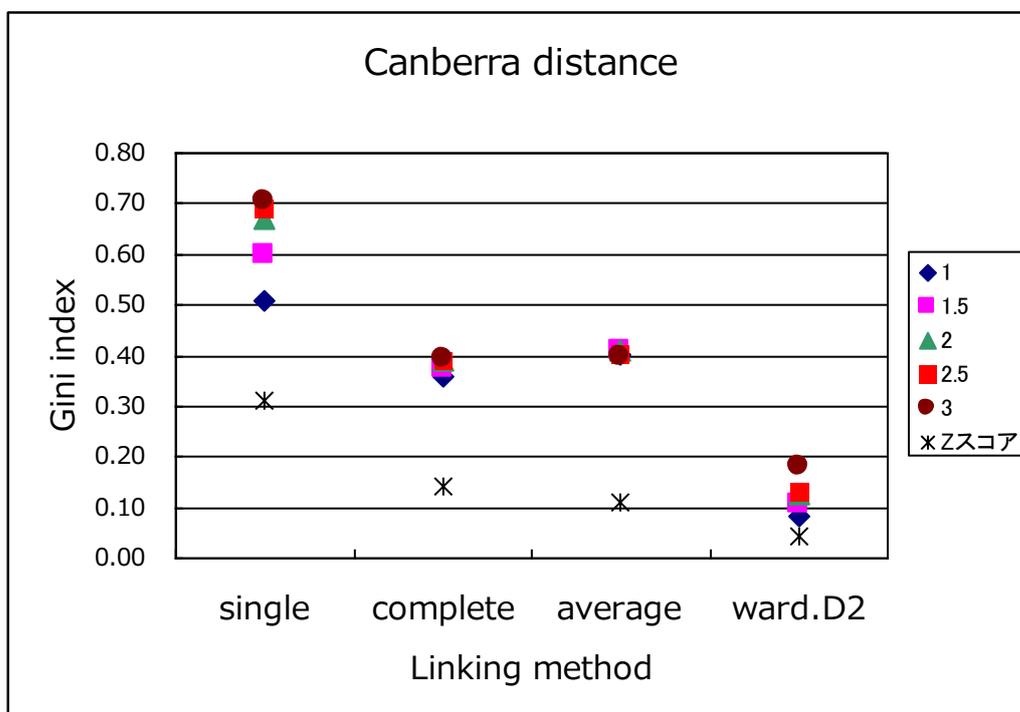


図 2.64 キャンベラ距離によった場合の各区分性

連結法	IRad
single	0.31
complete	0.20
average	0.27
ward.D2	0.002

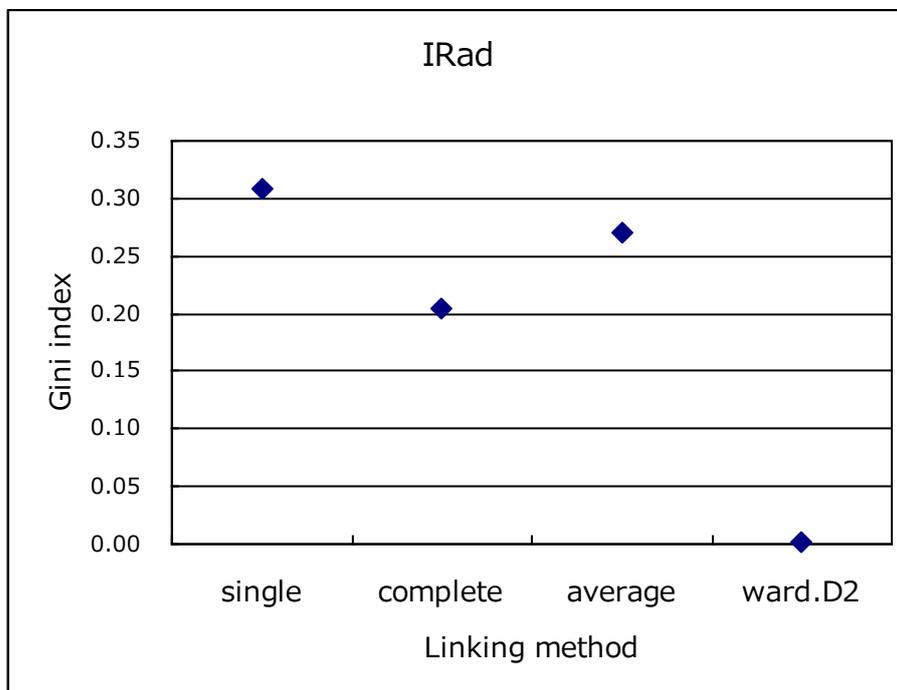


図 2.65 情報半径 (IRad) によった場合の各区分性⁴¹

4 つの全ての距離定義において連結法にウォード法 (ward.D2) を適用した場合に、最も高い作品の区分性が得られた。特にユークリッド距離との組み合わせでは 1.5 乗根から立方根の広い範囲の圧縮で高い区分性が、また、圧縮なしデータ・IRad の組み合わせでも高い区分性が得られた。

⁴¹ IRad では圧縮なしの頻度データによっている。

(3) 距離定義による区分性

連結法に前記 (2) で最も高い区分性が得られたワード法を適用し、4つの距離定義と8つの代表的な頻度への重みづけ方法の組み合わせで得られた作品の区分性を図 2.66 に示す。ここでも上位ランク 200~1,200 語における不純度を平均した値で評価している。適用する距離定義によって、高い区分性が得られる圧縮度は異なり、マンハッタン距離と、特に IRad では、圧縮なしの頻度データで高い区分性が得られている。また、ユークリッド距離を用いる場合は、圧縮することが重要と考えられ、そうした場合 1.5 乗根から立方根の範囲の圧縮で作品の高い区分性が得られている。

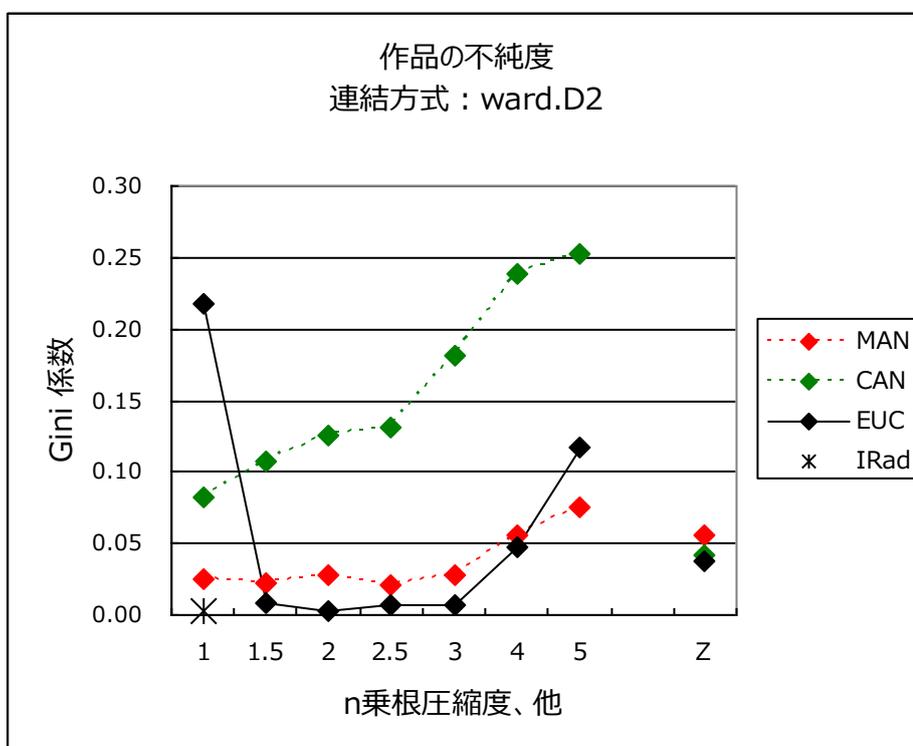


図 2.66 距離定義と語彙頻度への重みづけの組み合わせによる区分性 (連結法: ward.D2)

(4) 区分性のまとめ

頻度圧縮では、距離定義にユークリッド距離、クラスターの連結法に ward.D2 を適用し、1.5 乗根から立方根の広い範囲で圧縮された上位ランク 300 語以上による分析で高い作品の区分性が得られた。また、作家についても上位ランク 100 語以上による分析で高い区分性が得られた。

頻度を圧縮しないデータでは、IRad による距離定義と ward.D2 の連結法を適用して、上位ランク 300 語以上で高い作品の区分性が、作家についても上位ランク 100 語以上で高い区分性が得られた。

他方、Z スコアで重みづけした頻度データで得られる区分性は、頻度圧縮によるものよりやや低いが、作品では上位ランク 600 語以上、作家では同 50 語以上で高い区分性が得られており、適用にあたっての簡便さ⁴²もあり評価できる手法と考えられる。

(5) 他のコーパスによる区分性評価

評価に用いるコーパスによる区分性の違いを確認するため、表 2.2 の作品コーパスのうち、Hardy の作品を Dickens の作品に置き換えたコーパス⁴³ (表 2.7) を用いて、同様に分析した (図 2.67)。

表 2.7 Hardy の 2 作品を Dickens 作品に置き換えたコーパス

作家	作品	ラベル	セクション数	トークン数
Dickens	<i>The Mystery of Edwin Drood</i>	D1	4	54,092
	<i>Our Mutual Friend</i>	D2	12	174,243
Thackeray	<i>Vanity Fair</i>	T1	14	250,735
	<i>The Virginians</i>	T2	13	232,764
Eliot	<i>Middlemarch</i>	E1	16	208,628
	<i>Silas Marner</i>	E2	3	49,196

⁴² 乗根数など適用する圧縮度への意識が不要である。

⁴³ 分析結果の図の名称および図中のラベルで「DTE6 作品」と略称することがある。

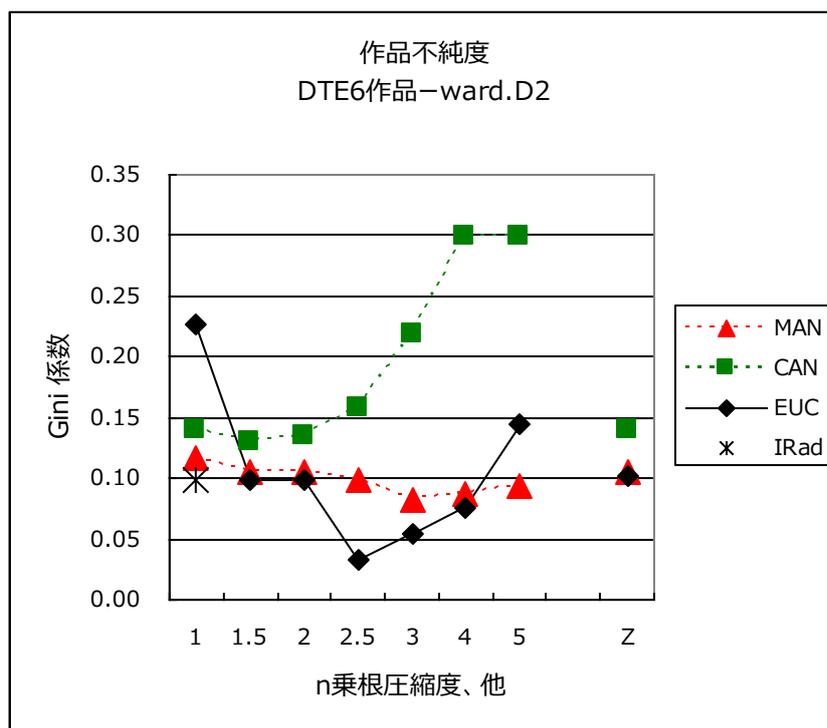


図 2. 67 Hardy の 2 作品を Dickens 作品に置き換えたコーパスによる区分性

このコーパスで得られた区分性の各種処理条件による差異は、基本的には表 2. 2 のコーパスで得られたものと類似している。しかし、EUC の距離定義を適用して高い区分性が得られる圧縮度が、HET6 作品では図 2. 66 のように 1.5 乗根～立方根の広い範囲でフラットになっているが、DTE6 作品の場合は図 2. 67 のように 2.5 乗根付近を底とした狭い範囲になっている。また、その圧縮度で得られる区分性は、距離定義に IRad を用いた圧縮なしデータの場合より高い。

この違いは、コーパスに含まれる作家の語彙嗜好や、各作品に用いられる語彙の差異の程度によるものと考えられる。差異が大きい作品間であれば、区分するのに十分な内容語の頻度データが、1.5 乗根のような軽い圧縮で確保され、逆に過度の圧縮で語彙の生起特性が歪められることになっても、それによる区分性の低下が顕在化しにくいからである。

また図 2. 66、図 2. 67 は、語彙使用の差異が大きい作品間の区分であれば、適用する頻度の重みづけ・距離定義の選択の幅が広がり、それぞれで同等の高い区分性が得られるが、差異が小さい作品間の場合は、距離定義に EUC を適用して n 乗根圧縮の乗根数を選択することで、より高い区分性が得られる可能性があることを示唆している。

2.3 ランクセグメントによる区分性能の評価

ごく高頻度／ごく低頻度で生起する語は、テキストの分類に有用でなく分析対象から除外すべき、とされるが、その閾値は示されていない (Moisl, 2008)。上位 800 語までの語彙データで分析している Hoover (2003b, 2004) を参考に、2.2 節ではより下位のランク語まで含めて分析した場合の区分性への影響を見究めるため、その 1.5 倍の上位 1,200 語まで拡大して評価した。その結果、語彙頻度の重みづけ、距離定義などの評価要素を組み合わせで行った分析の多くのケースで、区分性が確認され始めたランク以降、さらに下位ランクへと分析語数を増やすことで、逆に区分性が低下する事象は確認されなかった。しかしこのことをもって、ランク 1,200 に至る低位のランク語まで区分性を有するとは言えない。本節では頻度ランクによって以下の 500 語ごとのセグメントに分割した語彙データで分析することで、作家／作品区分に有用な語彙の頻度ランクの下限を見究める。

1～500, 501～1,000, 1,001～1,500, 1,501～2,000, 2,001～2,500, 2,501～3,000,
3,001～3,500, 3,501～4,000, 4,001～4,500, 4,501～5,000

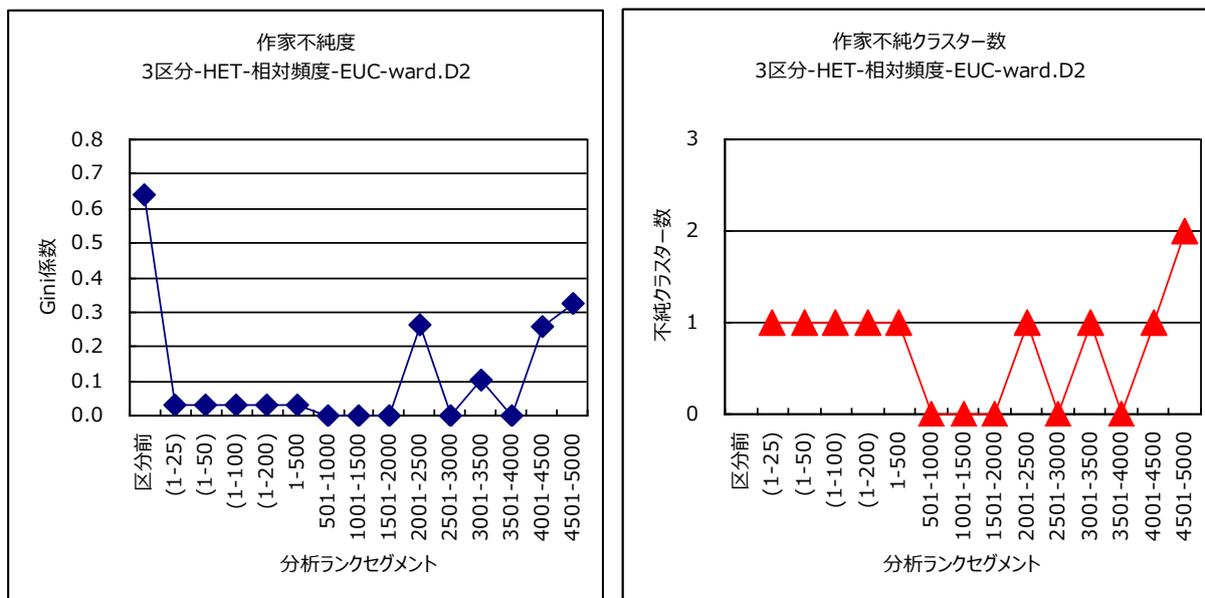
本節では 2.2 節の結果から、頻度の重みづけとして代表的なものと思われる「頻度圧縮なし」、「平方根圧縮」および「Z スコア化」した頻度データに、高い区分性が得られることが示された距離定義 (EUC) と連結法 (ward.D2) を適用して区分性を評価する。

なお分析には 2.2 節で用いたものと同じコーパスを用い、その上位ランク 5,000 語までの疎頻度データを各セクションで相対化したクロス集計表を基に、各ケースの頻度の重みづけを施したクロス集計表を生成して分析した。なお以下の各重みづけケースにおける分析結果の項には、比較のため 2.2.1 節で分析した上位ランク語による区分性の図を再掲する。

(1) 圧縮なしデータによるセグメントの区分性

作家の区分は図 2. 68、図 2. 69 のように、共に上位 25 語で不純度が大きく減少するものの、図 2. 68 では、ランク 501～2,000 の語彙も高い区分性を示しており、作家の区分に寄与する語彙が、必ずしも高頻度で生起する語（主に機能語）に限定されないことを示している。またランク 2,001 以降では、セグメントによって不純度が大きく高まっており、それらのランクの語による区分性は低いと考えられる。図 2. 69 では、不純クラ

スター数のプロットがランク 25~1,200 語までフラットになっているが、これは高頻度で生起する上位ランク語による高い区分性が、ランク 501 以降の語による影響をマスクしている結果と考えられる。



注：図にてランク 500 未満のプロットは、ランク 1 から各ランクまでの上位ランク語で得られた区分性である（以下、同じ）。

図 2.68 作家の不純度と不純クラスター数（セグメント、相対頻度）

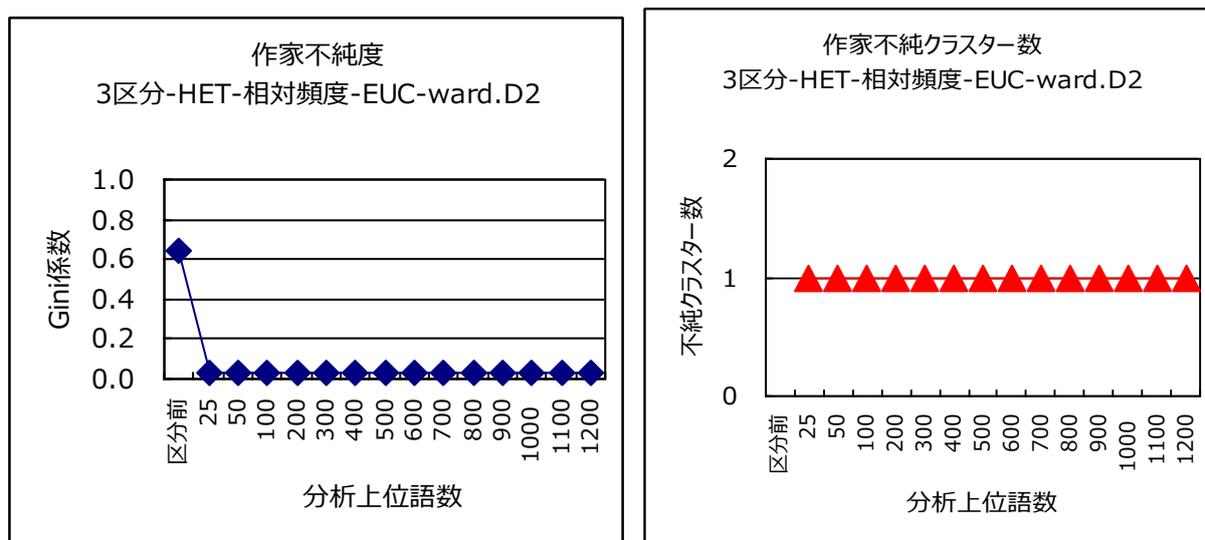


図 2.69 作家の不純度と不純クラスター数（相対頻度、再掲）

他方作品の区分では、図 2.70 のように、501-1,000 のセグメントで高い区分性が得られているが、それ以降のセグメントではランクが進むにつれ不純度が増加しており、区分性が低下することを示している。図 2.71 の上位ランク語による分析で不純度がランク 500 以降でフラットになっているのは、作家の場合と同じ理由によるものと考えられる。

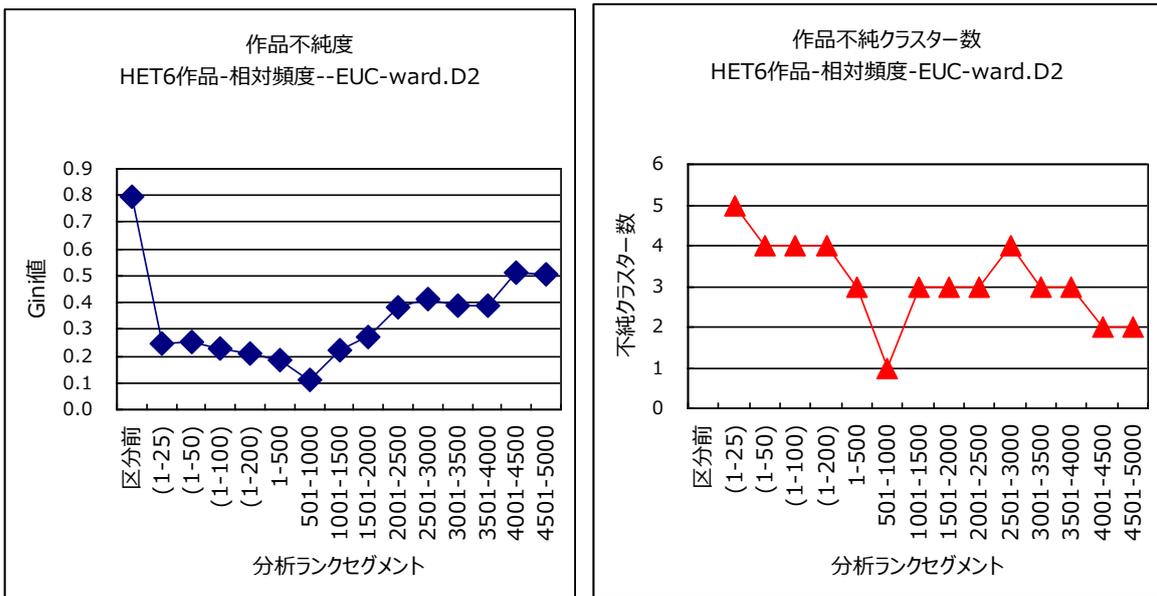


図 2.70 作品の不純度と不純クラスター数 (セグメント、相対頻度)

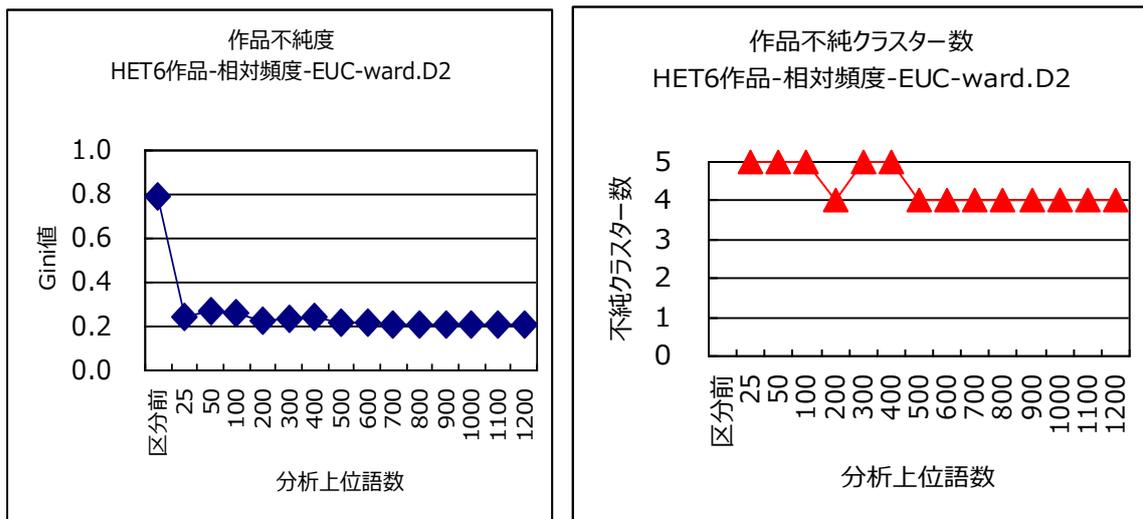


図 2.71 作品の不純度と不純クラスター数 (相対頻度、再掲)

(2) 平方根圧縮データによるセグメントの区分性

平方根圧縮した頻度データによる作家の区分性は、ランクセグメント・上位ランク語ともランク 1,200 まで同等である（図 2.72、図 2.73）。このことは、この圧縮度による語彙データでは、セクション間の頻度のバラつきが、ランクによって大きく異なることから頷ける。図 2.72 は、さらに上位 3,000 までのランクセグメントの語に、作家の区分性が認められることを示している。

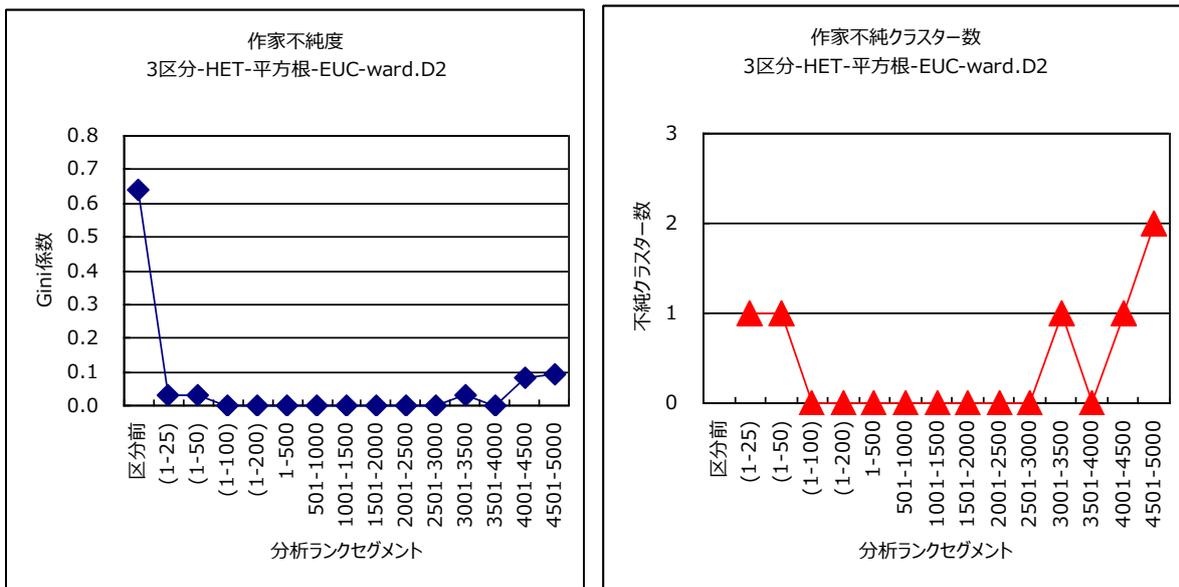


図 2.72 作家の不純度と不純クラスター数（セグメント、平方根）

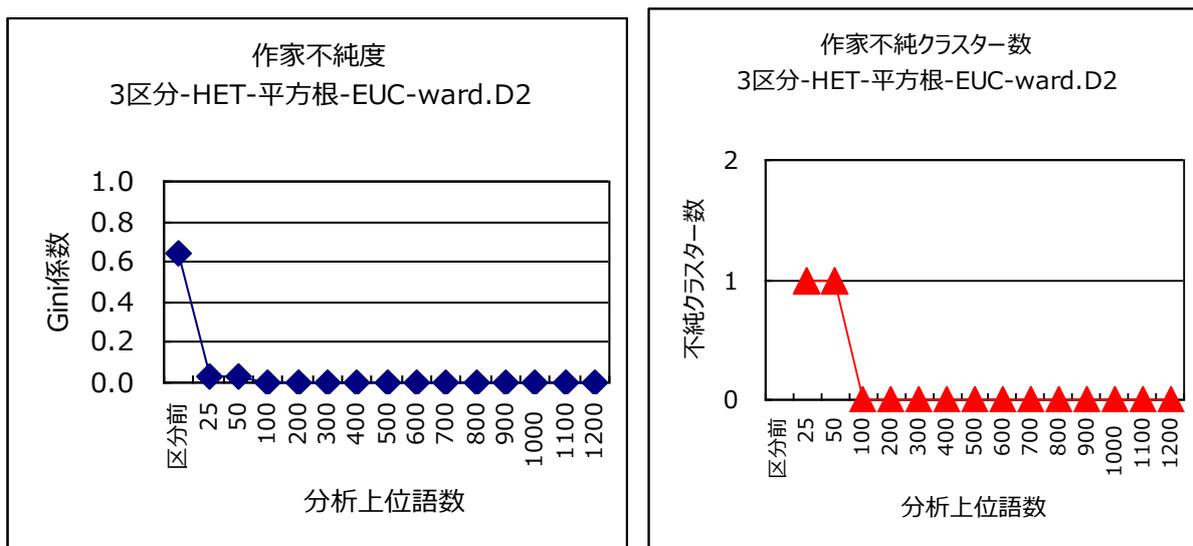


図 2.73 作家の不純度と不純クラスター数（平方根、再掲）

他方作品については、図 2.74 のようにランク 500 までは分析語数が増えるにつれ不純度は減少するものの、501 以降のランクセグメントでは、ランクが下がるにつれ不純度が増加している。図 2.75 でランク 500 以降についても不純度が 0 のままなのは、圧縮なしデータの場合と同様に、ランク 500 までの語による区分性の蓄積によって、500 以降のセグメントの不純性が顕在化しないためと考えられる。

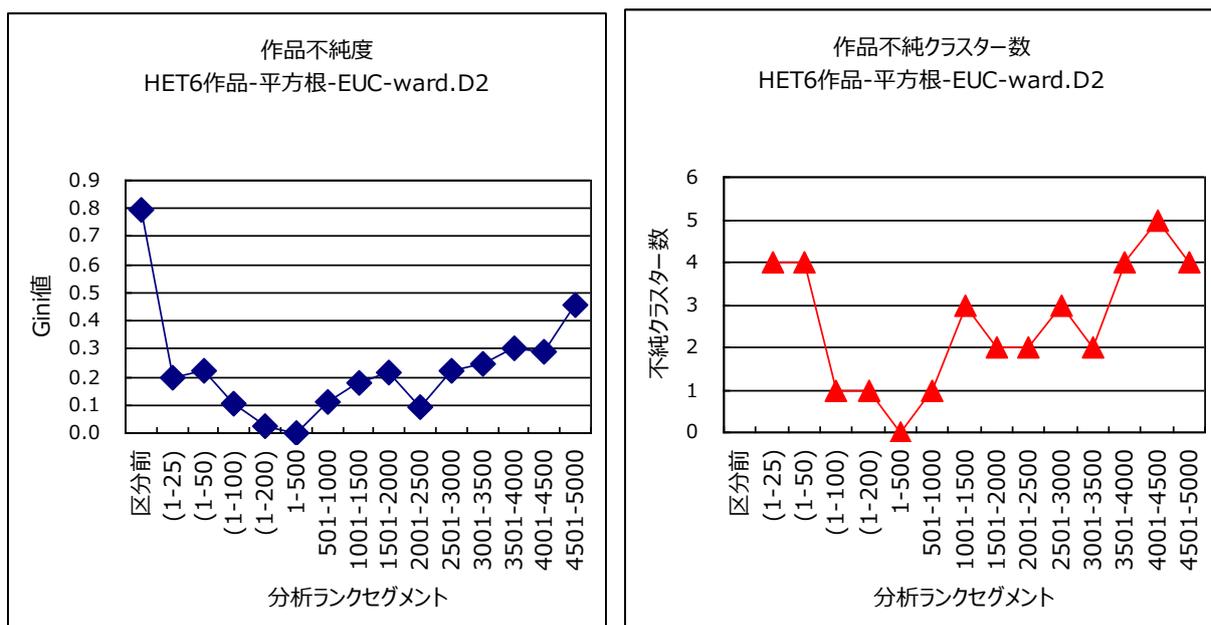


図 2.74 作品の不純度と不純クラスター数 (セグメント、平方根)

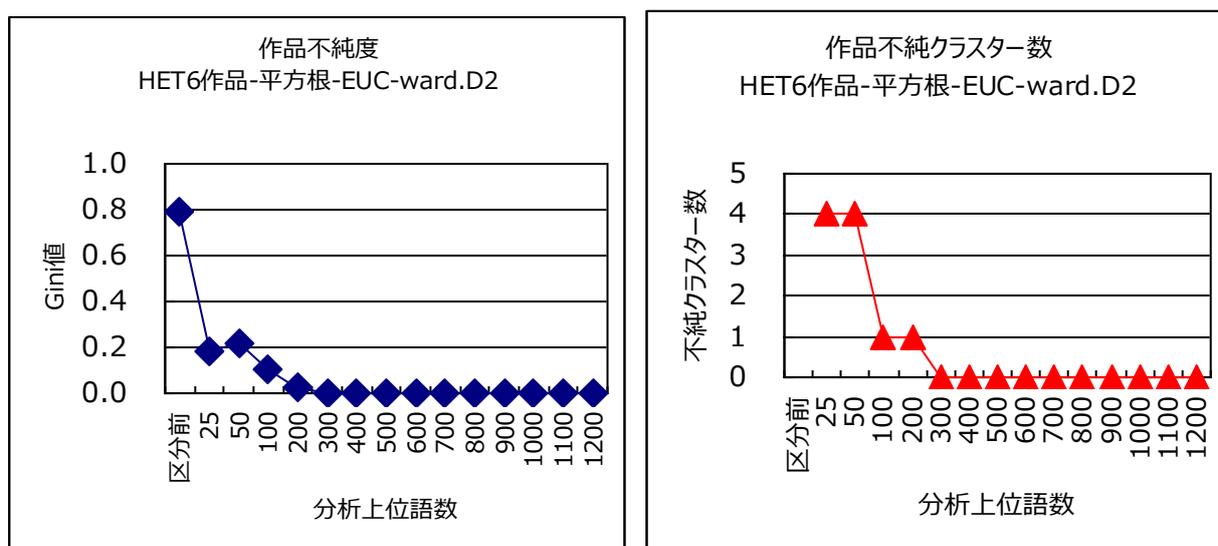


図 2.75 作品の不純度と不純クラスター数 (平方根、再掲)

(3) Zスコア化データによるセグメントの区分性

Zスコア化したデータによる作家の区分性は、ランクセグメント・上位ランク語ともランク 1,200 までは同等であり、基本的に平方根圧縮データにより得られるものと類似している（図 2.76、図 2.77）。また平方根圧縮による場合よりさらに低い、3,500 までのランクのセグメントで高い区分性が認められる（図 2.76）。

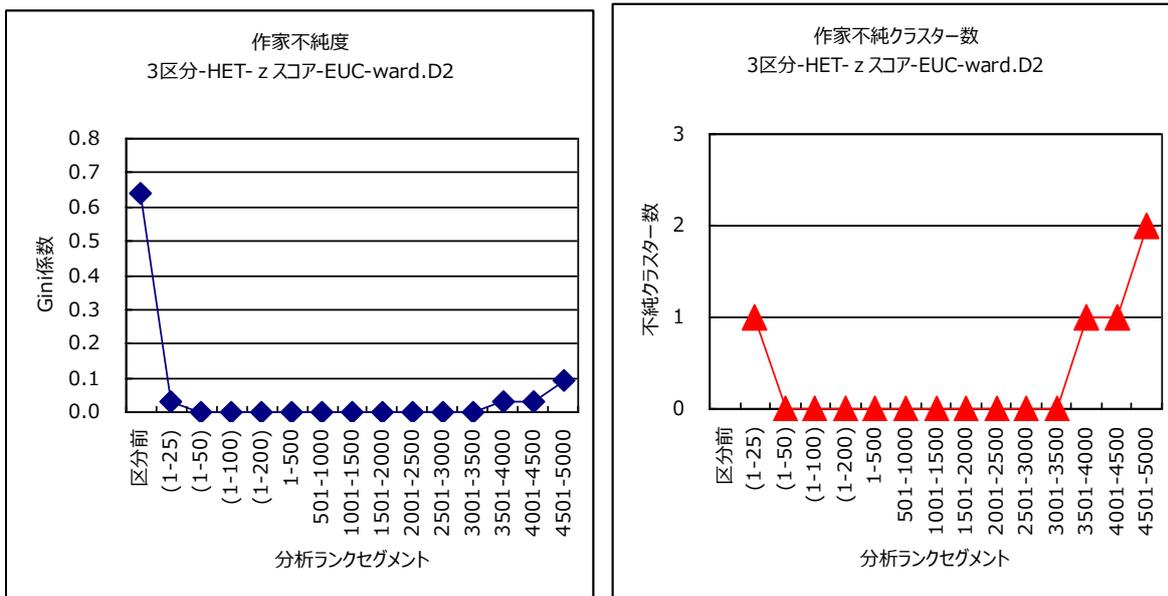


図 2.76 作家の不純度と不純クラスター数（セグメント、Zスコア）

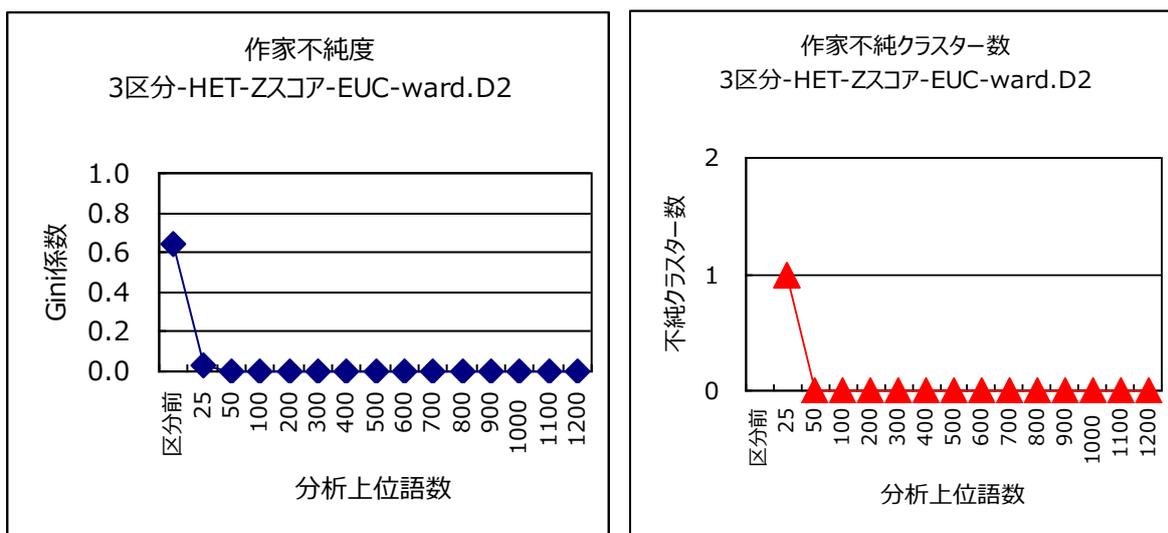


図 2.77 作家の不純度と不純クラスター数（Zスコア、再掲）

他方作品の高い区分性は、平方根圧縮の場合より下位の、ランク 1,000 までのセグメントで認められる（図 2.78）。このことは平方根圧縮の場合は上位ランク 300 で不純度 0 になるのに対して、Zスコアでは上位ランク 600 で 0 になることと符合していると考えられる。また、図 2.79 で上位 1,100 語以降について不純度が増加しないのは、平方根圧縮の場合と同様に、ランク 1,000 までの語による区分性の蓄積によって、1,000 以降のセグメントによる不純性が顕在化しないためと考えられる。

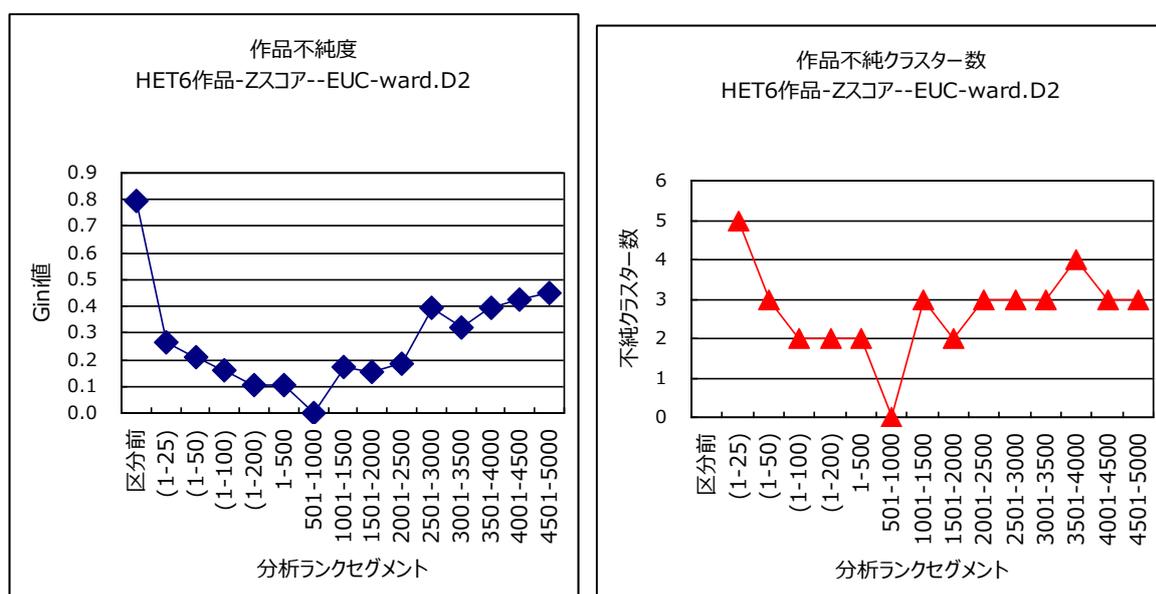


図 2.78 作品の不純度と不純クラスター数（セグメント、Zスコア）

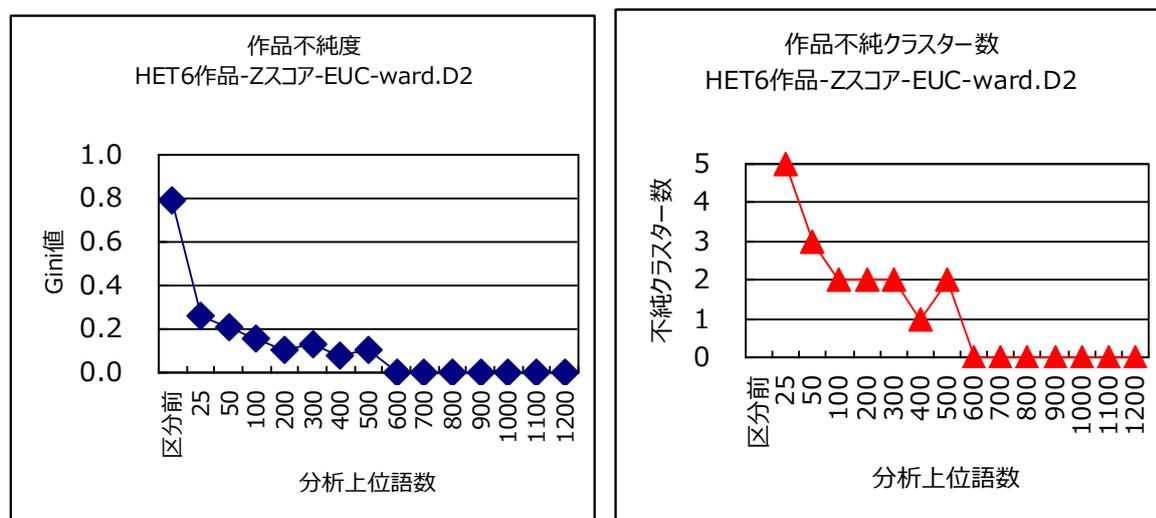


図 2.79 作品の不純度と不純クラスター数（Zスコア、再掲）

(4) セグメントによる区分性のまとめ

作家については、頻度圧縮なしのデータで上位ランク 2,000 まで、平方根圧縮と Z スコア化したデータではさらに伸びて、前者は同 3,000、後者は同 3,500 までのセグメントの語が区分性を持つことが確認された。他方作品については、頻度圧縮なしのデータと Z スコア化データで上位ランク 1,000 まで、平方根圧縮データでは同 500 までのセグメントの語で区分性が確認された。

ここで、作家と作品で高い区分性が確認されるセグメントのランクは大きく異なり、作家ではより低位のランクまで伸びている。これは、作家間の語彙嗜好の差異が作品間の語彙使用の差異より大きいためと考えられる。また頻度圧縮なしデータの上位ランク 2,000/1,000 までのセグメントで、それぞれ作家/作品の区分性が確認されたとはいえ、この圧縮なしデータでは上位ランクの語の頻度特性によって下位ランクの語のそれがマスクされる傾向が顕著に表れるため、セグメントでなく上位ランク語で分析する場合、そこに含まれる下位のランク語は区分性に殆ど寄与しない。

なお、区分性が確認されない下位のランクの語彙データを含めて分析することは、単に「ノイズ」として機能するだけでなく区分性を損なう要素になり得ることから、特に差異が微妙な作品間における分析では避けるべきものと考えられる。

(5) 他のコーパスによるセグメントの区分性評価

評価に用いるコーパスの違いによる区分性の違いを確認するため、2.2 節の区分性評価に用いたコーパスのうち、Hardy の 2 作品を Dickens 作品に置き換えたコーパス(表 2.7)の語彙データを用いて、2.5 乗根圧縮⁴⁴/Z スコア化したデータで評価した。

図 2.80 は、2.5 乗根圧縮データにおける作品の区分性である。この区分性は (2) の HET6 作品のコーパスについて、平方根圧縮したデータで評価した結果(図 2.74)と類似していて、上位ランク 500 までのセグメントで区分性が確認でき、501 以降のセグメントではランクが進むにつれ不純度が低下している。

⁴⁴ このコーパスで最も区分性が高かった圧縮度を適用した (2.2.2 (5) 参照)。

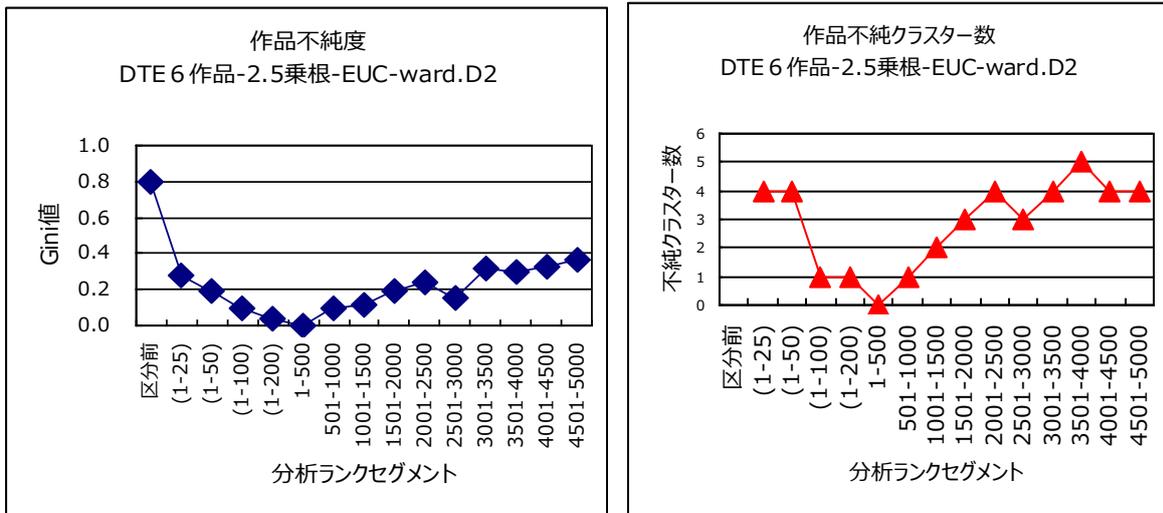


図 2.80 DTE6 作品の不純度と不純クラスター数 (セグメント、2.5 乗根)

図 2.81 は Z スコア化データによるセグメントの区分性である。この区分性は (3) の HET6 作品のコーパスについて、Z スコア化データで評価した結果 (図 2.78) と類似して、上位ランク 1,000 までのセグメントに高い区分性が確認される。また同様に、1,001 以降のランクセグメントではランクが進むにつれ不純度が増加している。

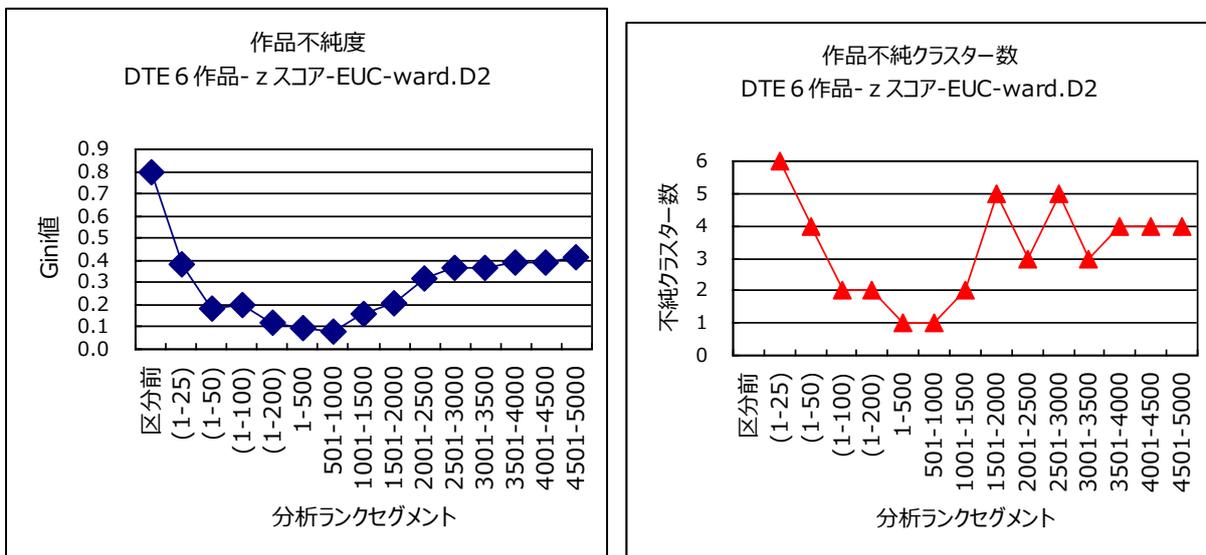


図 2.81 DTE6 作品の不純度と不純クラスター数 (セグメント、Z スコア)

2.4 ED と続編における語彙使用の異同性評価

2.2 節と 2.3 節で行った評価では、1.5 乗根～立方根で圧縮した上位 500 語の頻度データに、距離定義に EUC、連結法にワード法を適用したケースで作家／作品の高い区分性が得られた。Z スコア化したデータによっても一定の区分性が得られたものの、適切な累乗根数で圧縮したデータによる場合より低かった。また、頻度圧縮なしのデータに IRad の距離定義を適用したケースでも高い区分性が得られたが、分析に必要となる IRad による距離行列を算出する汎用的な関数がなく簡便な手法とはいえない⁴⁵。そこで本節では以下の処理条件を適用して異同性を評価する。

- ① 処理頻度の重みづけ：平方根圧縮⁴⁶
- ② クラスターの距離定義：ユークリッド距離 (EUC)
- ③ クラスターの連結法：ワード法 (ward.D2)
- ④ 分析対象語彙の頻度ランク：上位 500 語⁴⁷

2.4.1 2作品の異同性

ED と James による続編のコーパス⁴⁸を、表 2.8 のようにそれぞれ 4 つのセクションに分割⁴⁹し、2.1 節と同様な手順で、上位 1,200 語⁵⁰の相対頻度を平方根圧縮した頻度データによるクロス集計表を作成する。なお、この 1,200 語によるトークン数は、ED の全トークン数の 68%、続編のその 73%を占めており、そのうち上位 500 語によるトークン数は、それぞれ 89%を占めている。

⁴⁵ 本論で用いた関数 dist より、対応している距離の種類が多い proxy のパッケージにも IRad は含まれていない。

⁴⁶ 高い区分性が得られた 1.5 乗根～立方根の圧縮度の幅の中をとった。

⁴⁷ 作家についてはランク上位 100 語以上で高い区分性が確認されているため、作家／作品の双方について区分性が期待できる上位語数とした。

⁴⁸ Dickens [& James] (1873).

⁴⁹ 10,000～15,000 語で章単位でセクション化した。

⁵⁰ 上位 500 語でなく 1,200 語としたのは、2.2 節で区分性能の評価に用いた上位 1,200 語までのクロス集計表による分析環境を本節の評価に流用するためである。なお、異同性評価はそのうちの上位 500 語による分析結果で行う。

表 2.8 異同性を分析するコーパス

作家	作品	ラベル	セクション数	トークン数
Dickens	<i>The Mystery of Edwin Drood</i>	D1	4	54,092
James	<i>James' Continuation to ED</i>	J1	4	71,794

距離定義に EUC、連結法にウォード法を適用し、このクロス集計表の上位 500 語について、クラスター分析と MDS で分析して得られた樹形図と MDS プロットを図 2.82、図 2.83 に示す。

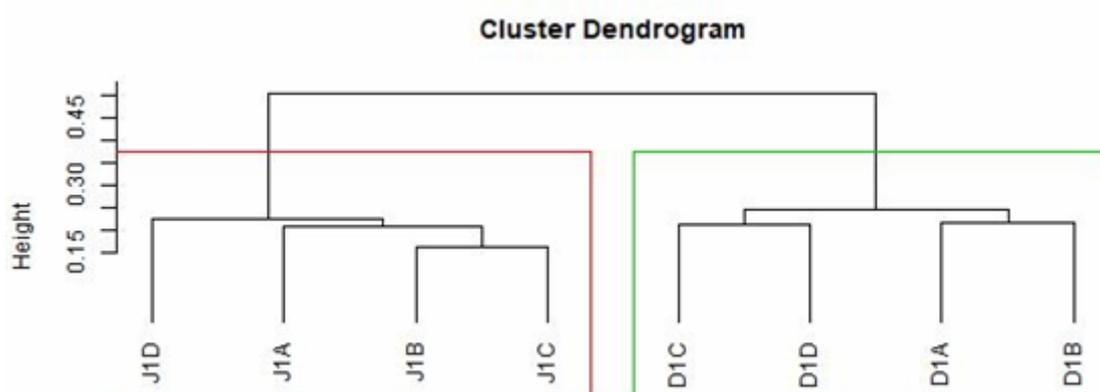


図 2.82 樹形図 (*ED* と続編、平方根、上位 500 語)

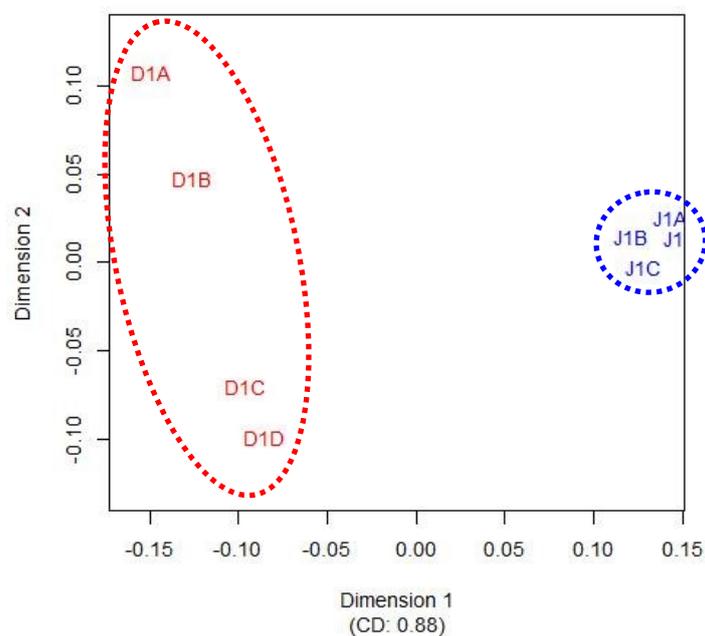


図 2.83 MDS プロット (ED と続編、平方根、上位 500 語)

表 2.9 各セクション間の距離行列

	D1A	D1B	D1C	D1D	J1A	J1B	J1C	J1D
D1A		0.22	0.23	0.24	0.35	0.32	0.33	0.35
D1B	0.22		0.22	0.23	0.33	0.30	0.31	0.34
D1C	0.23	0.22		0.21	0.31	0.29	0.29	0.31
D1D	0.24	0.23	0.21		0.31	0.28	0.28	0.31
J1A	0.35	0.33	0.31	0.31		0.19	0.21	0.23
J1B	0.32	0.30	0.29	0.28	0.19		0.16	0.21
J1C	0.33	0.31	0.29	0.28	0.21	0.16		0.19
J1D	0.35	0.34	0.31	0.31	0.23	0.21	0.19	

表 2.10 作品内／作品間の距離とそれらの比

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.24	0.28	1.15

樹形図では同じ作品の4つのセクションが、作品ごとにサブクラスターを形成している(図 2. 82)。作品間のセクション間距離の最小が 0.28 であるのに対して、作品内のその最大は 0.24 であることから、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、両作品の語彙嗜好は相違していることを示しているが、作品間の最小距離と作品内の最大距離の比(距離比)は 1.15 であって圧倒的な嗜好の相違があるとは言えない。

なお、図 2. 83 で続編の4つのセクションのプロットの広がり ED のそれよりはるかに狭く、続編におけるセクション間の語彙使用の差異が ED におけるそれより小さいことー語彙使用が平板なことーを示している。

2.4.2 他作家作品を含むコーパスとの異同性

2.4.1 節で ED と続編の語彙嗜好が相違しているとの結果が得られたが、その相違の程度を他の Dickens 作品/他作家の作品との間におけるそれと相対比較して異同性をより詳細に評価するため、ED と続編の2作品に、他の Dickens 作品と他作家の作品のコーパスを加えた表 2. 11 のコーパスで同様に分析した。

表 2. 11 他の Dickens 作品、他作家作品を含むコーパス

作家	作品	ラベル	セクション数	トークン数
Dickens	<i>The Mystery of Edwin Drood</i>	D1	4	54,092
	<i>Our Mutual Friend</i>	D2	12	174,243
Thackeray	<i>Vanity Fair</i>	T1	14	250,735
	<i>The Virginians</i>	T2	13	232,764
Eliot	<i>Middlemarch</i>	E1	16	208,628
	<i>Silas Marner</i>	E2	3	49,196
James	<i>James' Continuation to ED</i>	J1	4	71,794

分析で得られた樹形図と MDS プロットを図 2. 84、図 2. 85 に示す。この樹形図をクラスターが3つになるクラスター高でカットすると、続編は Dickens 作品と同じクラスターにグルーピングされる。これは続編の語彙嗜好は、評価に用いた Thackeray や Eliot の作品より

Dickens のそれに類似していることを示している。

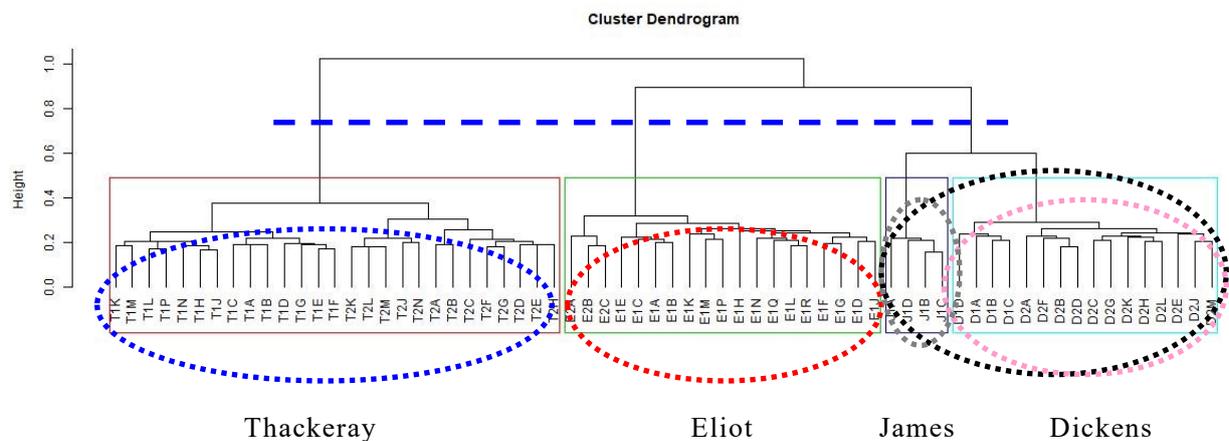


図 2.84 樹形図（上位 500 語、4 区分）

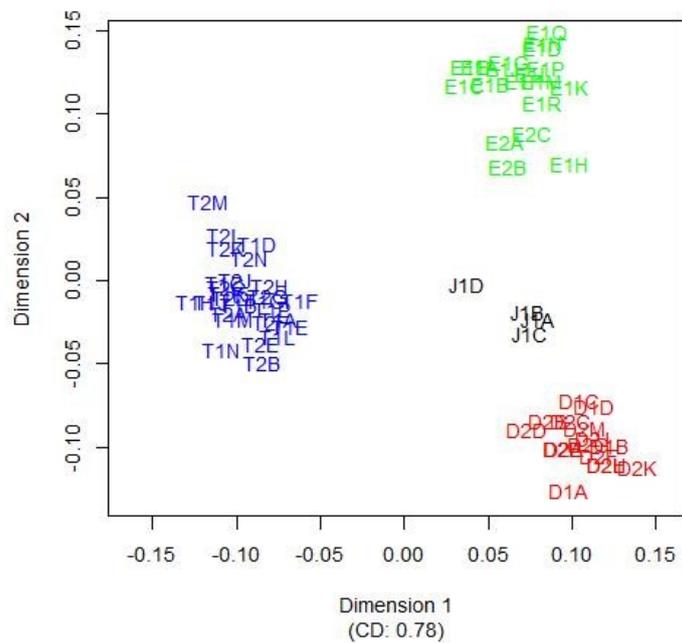


図 2.85 MDS プロット（上位 500 語）

2.5 評価結果のまとめ

2.5.1 高い区分性能が得られる分析手法の確立

小説テキストに生起する語彙の生起数を多変量分析手法を用いて分析し、作家／作品区分を行うに際して、高い性能が得られる手法を確立するため、以下により各種処理条件における区分性能を評価した。

(1) 評価用コーパスと語彙頻度データ

19世紀の3作家、Thomas Hardy, George Eliot および William Thackeray による各2作品のコーパスから、発話部テキスト、固有名、人称代名詞などを除外し、各作品を複数のセクションに分割した。各セクションのテキストから、コンコーダンスツール (AntConc, Lemma List 指定) を用いて、見出し語化した語彙による頻度データを抽出した。

(2) 多変量分析手法と処理条件

- ・手法は、階層的クラスター分析および多次元尺度法 (MDS)。
- ・距離定義は、ユークリッド、マンハッタン、キャンベラ、および IRad (情報半径) の4種類。
- ・連結方式は、単連結法、完全連結法、群平均法、およびワード法の4種類。

(3) 生起頻度の重みづけ、分析する上位ランク語

- ・重みづけは、圧縮なし、1.5乗根、平方根、2.5乗根、立方根、4乗根、5乗根、および対数による圧縮、Zスコア化、TF-IDFの10種類。
- ・上位ランク語数は、25, 50, 100, 200, 300, 400, 500, 600, 700, 800, 900, 1,000, 1,100, 1,200の14ケース。

(4) 分析するランクセグメント

作家／作品区分に有用な頻度ランクの下限を見究めるため、上位ランク5,000までの語彙を頻度ランク500ごとに分割した以下のセグメント。

- ・1~500, 501~1,000, 1,001~1,500, 1,501~2,000, 2,001~2,500, 2,501~3,000, 3,001~3,500, 3,501~4,000, 4,001~4,500, 4,501~5,000の10ケース。

(5) 性能評価にあたって設けた仮定

- ・頻出語の生起頻度は同じ作家の作品間では一貫して変わらないが、作家を異にする

作品間では一貫して異なる (Hoover, 2003b)。

- ・ 語彙の生起頻度は同一作品内では類似していて、その差異は作家を同じくする他の作品との間におけるそれより小さい。

(6) 性能評価の手順

評価用コーパスから抽出した語彙頻度データで、語彙と各セクションにおけるその生起数のクロス集計表を作成し、生起頻度に各種重みづけを付した 14 ケースの上位ランク語について、各種距離定義と連結方式を網羅的に組み合わせて多変量分析した。そして (5) の仮定に基づき、クラスター分析で得られた各クラスターに、同じ作家／作品のセクションが含まれる度合いを Gini 係数で評価した。また同様に 10 ケースのランクセグメントについて、上位ランク語による分析で確認された高い区分性が期待できる距離定義 (EUC) と連結方式 (ワード法) を適用して区分性を評価した。

(7) 作家／作品の高い区分性が期待できる処理条件

1.5 乗根～立方根で圧縮した上位 500 語の頻度データに、距離定義に EUC、連結法にワード法を適用したケースで高い区分性が得られた。Z スコア化したデータによっても一定の区分性が得られたものの、適切な累乗根数で圧縮したデータによる場合よりやや低かった。また、頻度圧縮なしのデータに IRad の距離定義を適用したケースでも高い区分性が得られた⁵¹。区分性能評価結果の概要を以下に述べる。

- ・ 頻度圧縮では、距離定義にユークリッド距離、クラスターの連結法に ward.D2 を適用し、1.5 乗根から立方根の範囲で圧縮された上位ランク 300 語以上による分析で高い作品の区分性が得られた。また、作家についても上位ランク 100 語以上による分析で高い区分性が得られた。
- ・ 頻度を圧縮しないデータでは、IRad による距離定義と、ward.D2 の連結法を適用して、上位ランク 300 語以上で高い作品の区分性が、作家についても上位ランク 100 語以上で高い区分性が得られた。
- ・ Z スコア化した頻度データで得られる区分性は、頻度圧縮によるものよりやや低か

⁵¹ ただし、分析に必要となる IRad による距離行列を算出する汎用的な関数がなく簡便な手法とはいえない。

ったが、作品では上位ランク 600 語以上、作家では同 50 語以上で高い区分性が得られた。

- ・ランクセグメントによる分析では、作家については、頻度圧縮なしのデータで上位ランク 2,000 まで、平方根圧縮と Z スコア化したデータでは、前者は同 3,000、後者は同 3,500 までのセグメントの語が区分性を持つことが確認された。他方作品については、頻度圧縮なしのデータと Z スコア化データで上位ランク 1,000 まで、平方根圧縮データでは同 500 までのセグメントの語で区分性が確認された。

2.5.2 ED と続編における語彙使用の異同性評価

作家／作品への高い区分性能が確認された以下の処理条件を適用して ED と続編における語彙使用の異同性を評価した。

- ① 処理頻度の重みづけ：平方根圧縮
- ② クラスターの距離定義：ユークリッド距離 (EUC)
- ③ クラスターの連結法：ワード法 (ward.D2)
- ④ 分析対象語彙の頻度ランク：上位 500 語

クラスター分析で得られた樹形図では同じ作品の 4 つのセクションが、作品ごとにサブクラスターを形成しており、MDS プロットにも同様な傾向が見られた。これは両作品の語彙嗜好が相違していることを示しているが、どの程度の差異かは 2 作品間での分析結果からは判然としない。そこでその相違の程度を他の Dickens 作品／他作家の作品との間におけるそれと比較して異同性をより詳細に評価することとし、ED と続編の 2 作品に、Dickens の *Our Mutual Friend* および評価用コーパスに含まれる Thackeray と Eliot の各 2 作品を含む 4 作家 7 作品のコーパスを用いて同様に分析した。その結果、続編は Thackeray や Eliot のセクションでなく Dickens のそれと先にクラスタリングしていた。これらの結果から、ED と続編における語彙嗜好は相違しているものの、続編の語彙嗜好は Thackeray や Eliot の作品より Dickens のそれと類似している可能性がある」と結論づけた。

3. 発話動詞の用法の異同性

本章では「発話動詞の用法」、および次章の「語意別の嗜好および人物造型」における異同性分析の対象となる、登場人物の発話や行為の様態を伝達する動詞（以下、SpV）をEDとその続編のテキストから抽出しデータベース化する。そしてそれをもとに、SpVの時制、発話部とSpVの位置関係などの観点で、両作品におけるSpVの用法の差異を分析し、加えてDickens作品で多く用いられている、発話が伝達部で中断されて表現されるsuspended quotationの用法の差異を分析する。さらに両作品におけるSpV全体としての嗜好の差異を、クラスター分析などの手法を用いて分析する。

3.1 SpVに関わるデータベースの構築

3.1.1 分析対象コーパスと話法

EDと続編のフルテキストのコーパス⁵²を分析対象とし、SpVは、以下の理由で発話を直接話法で伝達するものに限定する。

- ① 該当するテキストを抽出しやすい。

テキスト内の発話部を探索するキーとなる「引用符による括り」と、抽出対象SpVで構成した抽出式を用いてコーパスをサーチすることで、該当するテキストを効率的に抽出することができる。

- ② Dickens作品では直接話法による発話が多く十分なサンプルが得られる。

3.1.2 分析対象とするSpV

Segundo (2016) はDickensの14作品⁵³における発話動詞 (speech verbs) の用法の分析に際して、Scott (2013) の*WordSmith Tools version 6*を用いて、Project Gutenbergからダウンロードされたテキストから、発話部の閉じの引用符の直後に規則活用する過去形の発話動詞がある「'△*ed」⁵⁴のケースと、主部が人称代名詞のため倒置した

⁵² Dickens [& James] (1873).

⁵³ *Pickwick Papers, Oliver Twist, Nicholas Nickleby, The Old Curiosity Shop, Barnaby Rudge, Martin Chuzzlewit, Dombey and Son, David Copperfield, Bleak House, Hard Times, Little Dorrit, A Tale of Two Cities, Great Expectations, Our Mutual Friend* の14作品で、EDは含まれない。

⁵⁴ Project GutenbergからダウンロードされたDickens作品のテキストの多くは、発話部が

「'△he△*ed, '△she△*ed, '△I△*ed」の計4つのケースについて抽出している。これらの検索式では、発話部に先行する発話動詞は抽出されないが、Dickensの直接語法における発話の分析には足りるとしている。また、これらの検索式で抽出できない不規則活用動詞については、先行研究で示された *begin, bet, forbid, read, say, sing, speak, swear, tell* について検索したところ、抽出されたのは、*began, said, told* のみであったとしている。そしてそれらは人物造型にかかわる語ではなく、また、*say* は Dickens 作品で際立って多用されるものの、単独で発話の特徴づける語ではないとして、いずれも分析対象に含めていない。

本論では Segundo (2016) を参考にするものの、発話部に先行する SpV も含め、後述する手法によって ED と続編のコーパスから抽出した、以下の 73 の SpV について分析する。

accost, add, address, announce, answer, apologize, ask, assent, begin, bellow, bow, burst, call, caution, conclude, continue, cry, declare, demand, echo, ejaculate, emphasize, entreat, exclaim, explain, expostulate, falter, go, growl, hint, implore, inquire, interpose, interrupt, jerk, laugh, murmur, muse, mutter, observe, plead, pout, proceed, proclaim, pursue, read, reflect, rejoin, remark, remonstrate, repeat, reply, represent, resume, retort, return, roar, say, shriek, sigh, soliloquize, speak, stammer, stipulate, stop, submit, suggest, tell, think, thunder, urge, utter, whisper

3.1.3 発話部と SpV の位置区分とテキストの抽出

(1) 発話部と SpV の位置区分

SpV が発話の前に、発話の後に、または発話を中断 (suspended quotation) する位置に置かれるかにより 3 つに区分する。

- ① 発話の前 例: The Minor Canon answered, “Your late guardian is a [...]”
(下線、筆者、以下同じ)
- ② 発話の後 例: “And Mr. Jasper has gone home quite himself, has he?” asked
the Dean.

一重引用符で括られている。また、△はスペースの意、*は任意の文字列にヒットするメタ文字である。

- ③ 発話を中断 例: “And what,” **said** Mrs. Sparsit, pouring out her tea, “is the news of the day? Anything?”

なお、Lambert (1981) は聖書のことば⁵⁵を例にあげ、SpV の位置による文体的効果について以下のように述べている。

- i) Herod **said**, “John have I beheaded: but who is this, of whom I hear such things?”
- ii) “John have I beheaded: but who is this of whom I hear such things?” **said** Herod.
- iii) “John have I beheaded,” **said** Herod. “But who is this of whom I hear such things?”

ここで、i) は先頭に **and** が無いことを除けば、まさに欽定訳聖書のテキストそのものである⁵⁶。このような **tag-before-quotation** (すなわち **initial tag**) の形は、聖書では極めて一般的であって、権威・真正さを感じさせる。ii) は聖書にみられるのと異なり **final tag** の形になっていて、漠然とした奇異・非真正さを感じさせる。また、特段表情に富む表現法とは言えない。iii) はさらに奇異に感じられる。それは真正か、そうでないかということではなく、ii) の非真正さを感じさせる **final-tag** の形が、i) の真正さを感じさせる **initial-tag** の形と、ひとつのまとまりとして並存している点である。話者のことばが分断され、恭しく伝えられてはいないが、語りと発話が技巧的に絡み合っている。つまり、iii) は小説風だが ii) はそうでもない (Lambert, 1981)。

(2) 規則活用する SpV の過去形を含むテキストの抽出

規則活用 SpV の過去形の語尾 “ed” を抽出キーに含めた正規表現で **Search Term** を設定し、AntConc の **Concordance** 機能を用いて抽出する。上記 (1) の 3 つの例では基本的なケースとして発話部と SpV が隣接するテキストを挙げたが、実際には以下のように SpV と発話部の間に複数の語や句が挿入されることも多く、網羅性を高めるためには正規表現による抽出が必須である。

⁵⁵ 新約聖書のルカによる福音書第 9 章 (NT. Luke 9:9) のことばである。

⁵⁶ 発話部は New Revised Standard Version (NRSV) では引用符で括られているが、欽定訳では括られていない。

Mr. Grewgious **answered somewhat sharply**, “The especial reason of doing my duty, sir. Simply that.” (「発話の前」のケース)

“Joke? Ay; I never see a joke,” Mr. Honeythunder **frowningly retorted**. (「発話の後」のケース)

以下は本論で用いた正規表現の Search Term である⁵⁷(式中△はスペースの意、以下同じ)。

① SpV の位置が「発話の前」のケース

$([\wedge\Delta]?!.;)+\Delta\{1,10\}([a-z]+ed)[\Delta,;:]+([\wedge\Delta]?!.;)+\Delta*([\wedge\Delta])$

当 Search Term で、SpV の前の 1 語以上の最大 10 語、および SpV に続く発話部の始まりの引用符の前までの語 (語数制限なし) がマッチングの対象となる。なお、この式で抽出される “ed” で終わる語には、SpV 以外の動詞や過去分詞など分析対象外の語が多く含まれるため、個別に確認して SpV のケースを選別する (以下、同じ)。

② SpV の位置が「発話の後」および「発話を中断 (suspended quotation)」のケース

$^*(\Delta[\wedge\Delta]?!.;)*\{0,30\}\Delta([a-z]+ed)[\Delta,;:]$

当 Search Term で、先行する発話部の閉じの引用符に続く、SpV までの最大 30 語がマッチングの対象となる。なお、抽出されたケースが「発話の後」か「発話を中断」かは、次節で述べるエクセル化の手順の中で個々に確認して区別する⁵⁸ (以下、同じ)。

(3) 規則活用する SpV の現在形を含むテキストの抽出

上記 (2) で抽出されたテキストに含まれる過去形の SpV を 3 人称単数現在形にした語、およびそれら以外で、この 2 作品を通読する中で気づいた他の現在形 SpV を、以下のよ

うに抽出式に列挙し Search Term とした。

① SpV の位置が「発話の前」のケース

$([\wedge\Delta]?!.;)+\Delta\{1,10\}(\text{accosts|adds|\cdots|whispers})[\Delta,;:]+([\wedge\Delta]?!.;)+\Delta*([\wedge\Delta])$

② SpV の位置が「発話の後」および「発話を中断(suspended quotation)」するケース

⁵⁷ 分析に用いた Dickens [& James] (1873) のコーパスでは、発話部は二重引用符で括られている。

⁵⁸ Concordance 機能による抽出に際して、Search Window Size を大きく指定することで、マッチング対象語以降のテキストも確認可能である。

”(△[[^]”△?!.*]){0,30}△(accosts|adds|・・・|whispers)[.△,::]

(4) 不規則活用する SpV を含むテキストの抽出

Segundo (2016) で言及されている begin, forbid, read, say, sing, speak, swear, tell に go⁵⁹ と think を加えた 10 語の 3 人称単数現在形と過去形を、SpV の位置関係毎の抽出式に上記 (3) と同様に列挙し Search Term とした。

3.1.4 抽出したケースのエクセルワークシート化

AntConc で抽出し、テキストファイルとしてセーブしたデータを、エクセルの外部データ取り込み機能によりワークシートに展開する。ワークシートには、抽出した SpV、時制、発話部との位置区分、発話人物などを入力する列を設け、展開した各ケースについて、対応する元のテキストファイルを参照しつつ、それぞれの属性として入力する。また、ケース数を章単位で集計したり、抽出されたケースを必要に応じて元テキストで確認するため、各ケースが含まれるコーパスの章番号と行番号を記録するデータ列を追加するほか、さらに以下の属性のデータ列を追加する。

(1) 標準化人物名

文の主部における人物表現は固有名（人物名）の場合と人称代名詞の場合があり、固有名の場合は人物の氏名の他に、職名や人物に由来する別名が用いられる場合がある。例えば、ED にて、クロイスタラム聖堂小参事会員であるセプティマス・クリスパークルは、人称代名詞による他、文脈によって、Mr. Crisparkle, Minor Canon, Septimus, younger rook と、またその母との関係性から her son, her conciliatory son と表現され、さらに the other などと表現されることもある。そこでテキスト上の人物表現にかかわらず、抽出したケースを、同じ人物のものとして括って分析できるよう、抽出したテキスト上の人物名に対応する「標準化人物名」を定め属性として追加する。例えばこのセプティマス・クリスパークルの場合、標準化人物名は “Crisparkle” としている。

⁵⁹ 抽出後、go on（しゃべる、まくしたてる；続ける、継続する）の語意のケースを選別している。

(2) suspended quotation 関連の属性

ひとつの発話が伝達部で中断されて表現される *suspended quotation* について、Lambert (1981) は Dickens の初期から後期にわたる作品⁶⁰の中で、どのような意図でそれが用いられているか分析し、Schlicke (2000) もまた、それを Dickens 作品において人物と語り手の間の関係を、より複雑なものにする文体技法と評価している。さらに Mahlberg & Smith (2012) はコーパス言語学のツールを用いて、各 Dickens 作品の中から *suspended quotation* のケースを網羅的に抽出し、ED の場合、その生起比率⁶¹は初期の Dickens 作品より少ないものの、平均で 18.9%と分析している⁶²。本論では *suspended quotation* の ED における使用形態の特徴を把握して、続編におけるそれと比較するため、抽出した各ケースに以下の属性を付与する。

- ① 中断語数（発話を中断する語りのテキストの語数、列ラベル⁶³も同じ）

例：“And what,” said Mrs. Sparsit, pouring out her tea, “is the news of the day? Anything?” では 7 語。なお、Lambert (1981) は 5 語以上の場合を *suspended quotation* としている⁶⁴。

- ② *suspend* の機能区分（*body language*, 状況補足、など；列ラベルの略称：sus-class）

例：“And what,” said Mrs. Sparsit, pouring out her tea, “is the news of the day? Anything?”では「*body language*」。

- ③ *catchword suspension* の識別（列ラベルの略称：CS-ID）

catchword suspension とは、以下の例のように発話に含まれる一部の語句（発話の先頭部分の語句であることが多い）が、中断して表記される発話の双方にあるケースである。

“Pray,” retorts Edwin, turning merely his eyes in that direction, “pray why might it have been better for Mr. Drood to have known some hardships?”

⁶⁰ ED については言及していない。

⁶¹ Mahlberg & Smith (2012) では、発話が中断されるパラグラフ数の全発話パラグラフ数に対する比率で分析している。

⁶² *Oliver Twist* (1837-39) では 29.4%, *Bleak House* (1852-53) では 25.5%と分析されている (Mahlberg & Smith, 2012)。

⁶³ エクセルによるデータベースにおける列ラベルの意（以下、同じ）。

⁶⁴ Lambert (1981) は、直観として、それ以上の語数で中断されると出しゃばり感が生まれる (*intrusive*) ため、としている。本論では 5 語未満のケースも含めて「中断」に区分している。

④ catchword 語数（列ラベルの略称：CW 長）

catchword として双方の発話に含まれる語の数。③の例では「1」。

Lambert (1981) は、catchword suspension が用いられた発話は、中断可能で、かつ聞き手の都合に合わせて話してくれる親切な話者を、またときとして、気弱な吃音者をイメージさせることから、発話者が威厳のある人物で、その話を中断できないような場合に用いるのは不適切と述べている。逆に、権威があるとされる人物の発話を catchword suspension で表現することで当該人物を貶める効果が生まれる、としている⁶⁵。他方、Dickens 作品に頻繁に用いられている catchword suspension は、上流社会とはまるで異なった生活を語る Dickens 風語りの、リズムの一部になっているとも述べている。

(3) SpV の原形

各々の標準化人物の発話に用いられた SpV の生起数を、その時制にかかわらずまとめて抽出するため、生起した SpV の原形を内容とする列を設けている。

以上により作成したエクセルワークシートの概要を図 3.1 に示す。当シートにて、絞り込むべき列データをオートフィルタ機能で括ることで条件に合致したケースを抽出でき、またシート上部のカウント行で、その生起数の把握が可能な構造としている。

⁶⁵ Keats の *The Cap and Bells* の 21 段で、専制プリンスが小姓に命令する発話に catchword suspension を用いている例を挙げている。

カウント→	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
-------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

先行テキスト (右づめ)	抽出テキスト (左づめ)	line#	章	class	動詞 変化	時制	SV順	主部	Suspended quote 類型			SpV	人物	標準化人物
									中断 語数	sus- class	CS- ID			
of her. "Another?"	" says this woman, in a querulous,	13	1	後置	不規則	現在	VS	固有				says	this woman	Puffer
pe -- to the Dean,	" the younger rook interposes in a l	65	2	後置	規則	現在	SV	固有				interpose	the younger rook	Crisparkle
y taken -- taken --	" repeats the Dean; "when and how	69	2	中断	規則	現在	VS	固有	3	9	1	repeats	the Dean	Dean
n -- "Taken, sir,	" Tope deferentially murmurs. "-- P	71	2	後置	規則	現在	SV	固有				murmurs	Tope	Tope
reathed,"-- Tope,	" Mr Crisparkle interposes, with the	77	2	後置	規則	現在	SV	固有				interpose	Mr. Crisparkle	Crisparkle
e interposes, with	" the Dean (not unflattered by this i	79	2	中断	規則	現在	SV	固有	10	2		remarks	the Dean	Dean
n out of his Daze.	" Mr Tope repeats the word and its	81	2	後置	規則	現在	SV	固有				repeats	Mr. Tope	Tope
e himself, has he?"	" asked the Dean. "Your Reverence	83	2	後置	規則	過去	VS	固有				asked	the Dean	Dean
nephew with him?"	" the Dean asks. "No, sir," replies th	89	2	後置	規則	現在	SV	固有				asks	the Dean	Dean
ean asks. "No, sir,	" replies the Verger, "but expected,	91	2	中断	規則	現在	VS	固有	3	9		replies	the Verger	Tope
now." "Well, well,	" says the Dean, with a sprightly an	93	2	中断	不規則	現在	VS	固有	13	2		says	the Dean	Dean
jolly old Jack it is!	" cries the young fellow, with a cla	143	2	後置	規則	現在	VS	固有				cries	the young fellow	Edwin
ot yours, I know,	" Mr Jasper answers, pausing to co	145	2	後置	規則	現在	SV	固有				answers	Mr. Jasper	Jasper
Here's Mrs Tope!	" cries the boy. "Lovelier than ever!	155	2	後置	規則	現在	VS	固有				cries	the boy	Edwin
ne. Master Edwin,	" retorts the Verger's wife, "I can t	157	2	中断	規則	現在	VS	固有	4	9		retorts	the Verger's wife	Tope, Mrs.
y, as you call her,	" Mrs Tope blushing retorts, after	161	2	後置	規則	現在	SV	固有				retorts	Mrs. Tope	Tope, Mrs.
forget, Mrs Tope,	" Mr Jasper interposes, taking his p	163	2	中断	規則	現在	SV	固有	12	2		interpose	Mr. Jasper	Jasper
he looking. Jack?"	" Mr Jasper's concentrated face aga	199	2	前置	規則	現在	SV	PPN				returns	he	Jasper
a little proud of it,	" says the young fellow, glancing u	201	2	中断	不規則	現在	VS	固有	32	2		says	the young fellow	Edwin
"In point of fact,	" the former resumes, after some s	207	2	中断	規則	現在	SV	固有	17	2		resumes	the former	Edwin

凡例

カウント
line#
class
主部

オートフィルタで括られたケースの数
段落、文で整理したテキストの行番号
発話部の位置区分 (前置、後置、中断)
固有名/人称代名詞 (PPN)

sus-class
1: body language
2: 状況説明
3: 上記1+2
9: その他

CS-ID
1: Catchword suspension
SpV原形
生起したSpVの原形
人物
テキスト上の人物表記
cw長
Catchwordの語数

図 3.1 エクセルシートの概要

3.2 SpV 生起数の分析

3.1 節で構築したデータベースを用いて、各種観点における SpV の生起数を ED と続編で比較し、その異同性を分析する。

3.2.1 SpV の時制別生起数

ED と続編における、時制別の SpV 生起数とその比率を表 3.1 に示す。ED には過去時制の SpV が、続編には現在時制の SpV が多い。

表 3.1 SpV73 語の生起数

時制	疎頻度		相対頻度	
	ED	続編	ED	続編
過去	630	184	0.69	0.26
現在	280	528	0.31	0.74
合計	910	712	1	1

3.2.2 発話部と SpV の位置別生起数

ED と続編における、SpV の位置関係（発話部の前（前置）／後（後置）／発話を中断）別の生起数を表 3.2 に、その時制別の生起数を表 3.3 に示す。

表 3.2 SpV（全体）の位置による生起数

区分	疎頻度		相対頻度	
	ED	続編	ED	続編
前置	106	307	0.12	0.43
後置	441	144	0.48	0.20
中断	363	261	0.40	0.37
合計	910	712	1	1

表 3.3 SpV の時制・位置による生起数 (左：現在時制、右：過去時制)

区分	疎頻度		相対頻度	
	ED	続編	ED	続編
前置	47	247	0.17	0.47
後置	138	102	0.49	0.19
中断	95	179	0.34	0.34
合計	280	528	1	1

区分	疎頻度		相対頻度	
	ED	続編	ED	続編
前置	59	60	0.09	0.33
後置	303	42	0.48	0.23
中断	268	82	0.43	0.45
合計	630	184	1	1

Biber et al. (1999) では、小説⁶⁶・ニュース共に後置のケースが多いとされ、また小説における3つのケースの頻度順は final > medial > initial (後置 > 中断 > 前置) としている。表 3.2、表 3.3 で ED における生起頻度はどちらの時制でも、それと同じ後置 > 中断 > 前置の順であるが、続編では、全体 (現在時制+過去時制) と現在時制では前置が、過去時制では中断が最も多く、Biber et al. (1999) の頻度順と異なっている。なお、中断の比率はどちらの時制でも略同等である。

Lambert (1981) は、後置について「[前置に対して] 漠然とした奇異・非真正さを感じさせる。また、特段表情に富む表現法とは言えない」と述べている。他方中断については、「語りと発話が技巧的に絡み合っていて小説風な形式」と評している。

後置は Biber et al. (1999) のように現代ではすっかり定着したものであるが、小説における異化 (de-familiarization) の始まり⁶⁷とも考えられる。続編にその異化が加わる前の「真正さを感じさせる (Lambert, 1981) 前置と、まさに異化された形の中断が共に顕著に見られることは、続編における SpV の用法の特徴と考えられる。

3.2.3 「中断」のケースの類型別生起数

本節では両作品に多くみられる、発話部と SpV の位置関係が「中断」のケースについて、さらに詳細に分析する。「中断」は先ず、a) 単に、発話が語りによって中断されるものと、

⁶⁶ Longman Spoken and Written English Corpus (LSWE コーパス) の fiction subcorpus に含まれる 139 のテキストによる。そこには BrE の 79 テキスト、AmE の 41 テキストが含まれ、また年代では 1950 年以後のテキストが 112、以前のテキストが 27 である。

⁶⁷ SVO 順からの逸脱を異化ととらえた。

b) それに加えて、中断する語りに続く発話に、先行する発話の語句が繰り返される **catchword suspension** に区分される。本節ではこれらをさらに、発話を中断する伝達部の内容によって、i) 「SV」：単に主部（発話者）と SpV、ii) 「BL」：それに **body language** による描写を付加、iii) 「状況」：状況の説明を付加、iv) 「BL／状況」：BL と状況を共に付加、の 4 ケースに類型化して生起する箇所数を分析する。中断語数が 3 語以下のケースには、自ずと「SV」のタイプの箇所数が多く、4 語以上のケースには **body language** や状況のタイプの箇所数が多い⁶⁸。3.1.4 節でワークシートに付与したこれらの属性を用いてフィルタリングして得た、ED と続編における類型ケース別箇所数とその比率を表 3.4、表 3.5 に示す。

表 3.4 中断の類型ケース別箇所数

作品	中断語数	SV	BL	BL／状況	状況	小計	計	CW(再掲)
ED	3 語以下	141	0	0	10	151	363	20
	4 語以上	9	21	23	159	212		
続編	3 語以下	131	0	0	21	152	261	20
	4 語以上	7	5	13	84	109		

凡例 SV：単に主部（発話者）と SpV のケース

BL：主部と SpV に **body language** が付加されたケース

状況：主部と SpV に状況の補足が付加されたケース

BL／状況：主部と SpV に **body language** と状況の補足がともに付加されたケース

CW（再掲）： **catchword suspension** のケースの再掲
（以下、同じ）

表 3.5 中断の類型ケース別箇所比率

作品	中断語数	SV	BL	BL／状況	状況	小計	計	CW(再掲)
ED	3 語以下	39%	0%	0%	3%	42%	100%	5.5%
	4 語以上	2%	6%	6%	44%	58%		
続編	3 語以下	50%	0%	0%	8%	58%	100%	7.7%
	4 語以上	3%	2%	5%	32%	42%		

⁶⁸ Lambert (1981) は中断語数 5 語以上のケースを **suspended quotation** として扱っているが、本論では 5 語未満のケースも「中断」の区分に含めている。また簡易的に「SV」のケースを絞り込むための閾値を、S に冠詞がつきうることを考慮して 3 語とした。

EDの「中断」のケースの箇所数は、表3.4のように続編のその1.4倍あり、また表3.5のように、EDでは伝達部にbody languageや状況描写が含まれるケースが59%を占めていた。その59%のうちの8割が「状況」のケースで、場の状況を補足する描写に「中断」が多用されていた。またEDではbody languageが含まれるケースの箇所比率が続編の1.7倍と多く、「中断」の形がより活用されていると考えられる。他方続編では、「状況」のケースが40%を占めるものの、「SV」のケースが最も多く53%を占めていた。

3.2.4 catchword suspension の用例の分析

Lambert (1981) は、「中断」、特に catchword suspension (以下、CS) は、i) 威厳のある人物の発話に用いるのは不適切で、あえてそうした場合、当該人物を貶める効果が生まれる、とする一方、ii) Dickens 作品に頻繁に用いられている catchword suspension は、上流社会とはまるで異なった生活を語る、Dickens 風語りのリズムの一部になっている、とも述べている。

そこでEDと続編で用いられているCSが、これらの用法のどちらに相当するかを以下により確認する。EDは上流社会を場とした作品ではなく、そこに登場する人物は一般人である。そこで人物の威厳(権威)を話し相手との相対性において想定し、権威が高い人物から低い人物への発話の伝達に用いられたCSに、発話人物を貶める狙いが含まれていればi)のケース、そうでなければii)のケースと考えた。そして権威が低い人物から高い人物へ、あるいは権威が同等の相手へ向けた発話の伝達にCSが用いられるケースでは、あえて発話人物を貶めることはないと考えii)のケースとした。EDに生起するCSの全ケースにおける、発話者とその相手との間の権威関係を表3.6に示す。表にて権威が高い人物から低い人物への発話のケースに水色マーカーを付している。

表 3.6 CS の各ケースにおける発話者の相対的権威 (ED)

ケース	発話者	相手	二者間の権威
1	Edwin	Rosa	=
2	Durdles	Jasper	<
3	Neville	Crisparkle	<

4	Rosa	Helena	=
5	Edwin	Neville	=
6	Edwin	Neville	=
7	Grewgious	Rosa	>
8	Grewgious	Rosa	>
9	Rosa	Grewgious	<
10	Jasper	Grewgious	<
11	Grewgious	Jasper	>
12	Grewgious	Edwin	>
13	Grewgious	Edwin	>
14	Jasper	Grewgious	<
15	Honeythunder	Crisparkle	=
16	Jasper	Rosa	>
17	Billickin	Grewgious	<
18	Twinkleton	Billickin	=
19	Billickin	Twinkleton	=
20	Puffer	Jasper	<

この表にて水色マーカーを付した、権威が高い人物から低い人物へ向けた発話の、CSによるテキストを以下に示す。(先頭の数字は表 3. 6 のケース番号に対応している。)

- ⑦ “**I refer**, my dear,” said Mr Grewgious, laying his hand on Rosa’s, as the possibility thrilled through his frame of his otherwise seeming to take the awful liberty of calling Miss Twinkleton my dear, “**I refer** to the other young ladies.”
- ⑧ “**I made**,” he said, turning the leaves; “**I made** a guiding memorandum or so -- as I usually do, for I have no conversational powers whatever [...]”
- ⑩ “I am glad you say so. **Because**,” proceeded Mr Grewgious, who had all this time very knowingly felt his way round to action on his remembrance of what she had said of Jasper himself, “**because** she seems to have some little delicate instinct that [...]”

- ⑫ “[...] And **I’ll ask**,” said Mr Grewgious, dropping his voice, and speaking with a twinkling eye, as if inspired with a bright thought, “**I’ll ask** Bazzard. He mightn’t like it else. -- Bazzard!”
- ⑬ “**Likely so**,” assented Mr Grewgious, “**likely so**. I am a hard man in the grain.”
- ⑭ “**I am unconsciously**,” he observes, with a smile, as he folds his hands upon the sun-dial and leans his chin upon them, so that his talk would seem from the windows ([...]) to be of the airiest and playfullest, “**I am unconsciously** giving offence by questioning again. I will simply make statements, therefore, and not put questions. [...]”

これらのいずれのケースにも、発話者の権威を貶める狙いは感じられない。

次に続編に生起する CS の全ケースにおける、発話者とその相手との間の権威関係を表 3.7 に示す。同様に権威が高い人物から低い人物への発話のケースに水色マーカーを付している。

表 3.7 CS の各ケースにおける発話者の相対的権威（続編）

ケース	発話者	相手	二者間の権威
1	Grewgious	Datchery	=
2	Datchery	Jasper	>
3	Datchery	Jasper	>
4	Jasper	Datchery	<
5	Billickin	Rosa	>
6	Puffer	Rosa	>
7	Grewgious	Crisparkle	=
8	Grewgious	Crisparkle	=
9	Puffer	Bessie ⁶⁹	>
10	Puffer	Padler ⁷⁰	=
11	Deputy	Jasper	<

⁶⁹ 続編で Puffer の娘と Jasper の間に生まれた女兒とされる人物。

⁷⁰ 続編で Bessie の養母とされる人物。

12	Fopperty ⁷¹	Grewgious	<
13	Solomon ⁷²	Bessie	>
14	Grewgious	Crisparkle	=
15	Solomon	Bessie	>
16	Solomon	Datchery	=
17	Grewgious	Puffer	>
18	Jasper	Jasper	=
19 ⁷³	Crisparkle, Mrs.	Crisparkle, Mrs.	=
20	Crisparkle	Edwin	>

続編における、権威が高い人物から低い人物へ向けた発話の、CSによるテキストを以下に示す。(先頭の数字は表 3.7 のケース番号に対応している。)

- ② “**Because,**” answers Datchery, approaching the Minor Canon closely, and speaking in a low tone, “**because** that visit was, in my opinion, connected with the disappearance of Edwin Drood – [...]”
- ③ “**Excuse me,**” remarked Datchery, as Jasper reseated himself, “**excuse me** if it has only just occurred to me that I should apologize for any remark that I have made to cause your feelings a shock, but [...]”
- ⑤ “**You may think,** Miss,” she said to Rosa one day when they were alone together, “**you may think,** and hall [sic] the world may think, if it wants to, that a boardin’ school is a proper place for young ladies; [...]”
- ⑥ “**Pardon me, kind sir,**” she replied, still looking sharply at Rosa, if anything sharp could be said to come from her bleared eyes, “**pardon me, kind sir,** but it’s little I know, and [...]”
- ⑨ “**Of course there be,** lovey,” the Puffer continues, “**of course there be.** What may it be, sweetey.”

⁷¹ 続編で Padler の息子と、また Bessie の異母兄とされる人物。

⁷² 続編で Sapsea と義兄弟の関係とされる人物。

⁷³ 独白のケースである。

- ⑬ “Do you see, my child,” the old man says after a short silence, and taking her hand in his; “Do you see that all these flowers grow with their faces turned toward this spot, [...]”
- ⑮ “Nay, child,” answers the old man, in earnest but loving tones, as they seat themselves in their accustomed place, “nay, child, of what avail are such unhappy thoughts as those to which you have just given utterance? [...]”
- ⑰ “I would say,” exclaimed Mr Grewgious, still greatly excited, “I would say he had the heart of a murderer, and with that ring could prove what I said! [...]”
- ⑳ “I’m so happy, my dear boy,” he exclaims, “I’m so happy, I cannot express it! Datchery,” (who had been a silent spectator all this time,) “Datchery,” grasping his hand, “you are welcome. [...]”

これらのケースにもまた、発話者の権威を貶める狙いは感じられない。従って両作品における CS は、「摂政時代の上流社会の文学で「洒落た」表現法とされた CS を、Dickens 風語りのリズムの一部として用いている (Lambert, 1981)」ものと考えられる。

次に両作品における「中断」のケースを、中断する語りの内容で、「SV のみ」と、それに「BL」／「状況」が加わったケースに二分し、さらにそのそれぞれを、CS と catchword を伴わない suspended quotation (以下、非 CS) に区分して、箇所数、平均中断語数などを比較する (表 3.8、表 3.9)。

表 3.8 中断部が「SV」のケース

作品	CS 区分	箇所数	平均中断語数	CW 語数
ED	非 CS	149	2.7	-
	CS	1	3	2
続編	非 CS	132	2.3	-
	CS	6	2.5	2.8

注 CW : catchword (以下、同じ)

表 3.8 は、中断部が主部と SpV のみのケースであり、自ずと平均中断語数は ED と続編で大差ない。このケースの CS・非 CS を合計した箇所数は両作品で略同数だが、CS が ED で

1箇所なのに対して、続編には6箇所見られた。Lambert (1981) は、ヴィクトリア時代のCSのcatchwordについて、1度発話された語句がCSの形をとって繰り返されたものか、あるいは、実際に2度発話されたものかは、判然としないと述べている。以下に抽出した両作品のCSで、多くのcatchwordは呼びかけや詠嘆的な語句であり、実際に2度発話されたものと考えられる。なお、実際に2度発話されたものと推定した箇所の項番を、白抜きの活字で示している。

(ED)

- ① “Likely so,” assented Mr Grewgious, “likely so. I am a hard man in the grain.”

(続編)

- ① “Of course there be, lovey,” the Puffer continues, “of course there be. What may it be, sweetly.”
- ② “Polly Padler!” exclaimed the Puffer; “Polly Padler! I’d never believe it on ye that ye’d forgit your old friends so easy! [...]”
- ③ “Let me go!” roared Deputy; “Let me go! I hain’t done nuffin to you, Jarsper!”
- ④ “He is a noble fellow,” answers Uncle Sol, “a noble fellow, and carries a good heart under his waistcoat, as I have had an opportunity to observe before to-day;”
- ⑤ “Poor thing!” she ejaculates, “poor thing, I hope it will not kill her. I’ll tell you what, Sept. ; we must have her come to live with us. [...]”
- ⑥ “I’m so happy, my dear boy,” he exclaims, “I’m so happy, I cannot express it! Datchery,”

次に中断部として「SV」に body language や状況の補足が付加されたケースを比較する(表 3.9)。

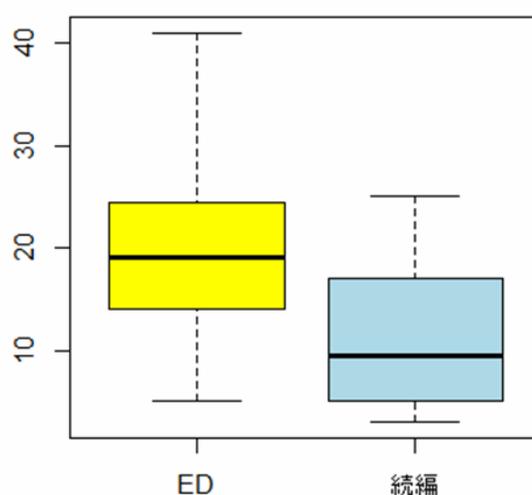
表 3.9 中断部に「BL」／「状況」が付加されたケース

作品	CS 区分	箇所数	平均中断語数	CW 語数
ED	非 CS	194	9.5	-
	CS	19	20.2	2.2

続編	非 CS	109	7.5	-
	CS	14	11.4	2.7

両作品の各 CS 区分における中断語数のばらつき状況を図 3.2、図 3.3 に、CW 語数のばらつき状況を図 3.4 に示す。このケースにおける CS の比率は続編の方が ED より高いが、続編における平均中断語数、中断語数の中央値、中断語数のバラつきは、ともに ED におけるその約半分である（表 3.9、図 3.2）。また、CW 語数のバラつきも小さい（図 3.4）。

他方、非 CS では、ED における箇所数は続編のその約 2 倍である。また、平均中断語数、中断語数の中央値に両作品間で大きな差はないが、中断語数のバラつきは ED の方が大きい（表 3.9、図 3.3）。



注：箱の中央の太い線が中央値⁷⁴、箱の上部が上側ヒンジ（中央値より大きい値の中央値）、下部が下側ヒンジ（中央値より小さい値の中央値）、最上部と最下部はそれぞれ最大値と最小値を示す。

図 3.2 ED と続編の中断語数のばらつき (CS)⁷⁵

⁷⁴ 語数順に並べたとき、その値より小さなケースの数と大きなケースの数が等しくなる語数の値である。

⁷⁵ R の boxplot 関数を使用して得た図である（以下、同じ）。

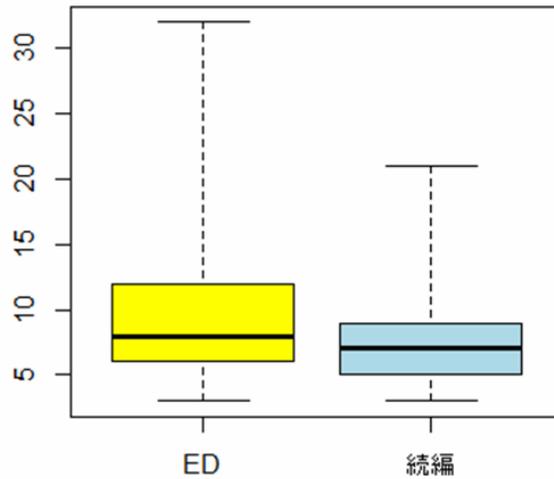


図 3.3 ED と続編の中断語数のばらつき (非 CS)

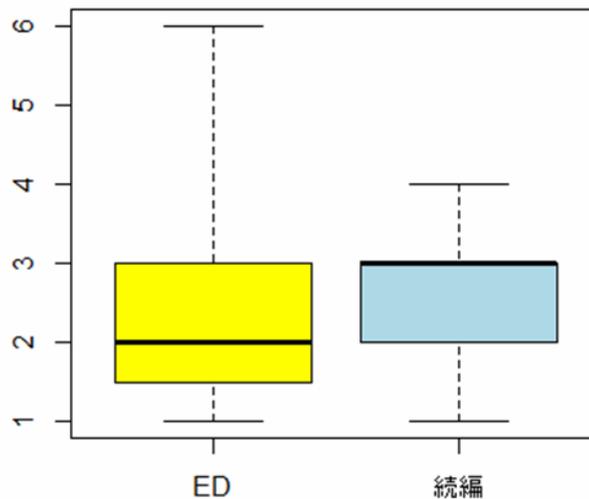


図 3.4 ED と続編における CW 語数のばらつき

このケースの CS の代表例として、以下に両作品から生起順にそれぞれ 10 例示す。なお、実際に 2 度発話されたものと推定したケースの項番を、白抜きの活字で示している。

(ED)

- ① “Do you object,” Edwin inquires with a majestic turn of his eyes downward upon the fairy figure -- “do you object, Rosa, to her feeling that interest?”
- ② “Own brother, sir,” observes Durdles, turning himself about again, and as unexpectedly forgetting his offence as he had recalled or conceived it; “own brother to Peter the Wild

Boy! But I gave him an object in life.”

- ③ “**Since it is your pleasure**, sir,” answered the young man, with a quick change in his manner to sullen disappointment; “**since it is your pleasure** to check me in my impulse, I must submit.”
- ④ “Indeed, my dear, **I will**,” replied Rosa, in a tone of affectionate childishness that went straight and true to her heart; “**I will** be as good a friend as such a mite of a thing can be to such a noble creature as you. [...]”
- ⑤ “**I suppose**, Mr Neville,” says Edwin, quick to resent the indignant protest against himself in the face of young Landless, which is fully as visible as the portrait, or the fire, or the lamp, “**I suppose** that if you painted the picture of your lady-love -- ”
- ⑥ “**Pray**,” retorts Edwin, turning merely his eyes in that direction, “**pray** why might it have been better for Mr Drood to have known some hardships?”
- ⑦ “**I refer**, my dear,” said Mr Grewgious, laying his hand on Rosa’s, as the possibility thrilled through his frame of his otherwise seeming to take the awful liberty of calling Miss Twinkleton my dear, “**I refer** to the other young ladies.”
- ⑧ “**I made**,” he said, turning the leaves; “**I made** a guiding memorandum or so -- as I usually do, for I have no conversational powers whatever [...]”
- ⑨ “**Could I**,” said Rosa, rising, as he jerked out of his chair in his ungainly way, “**could I** ask you most kindly to come to me at Christmas, if I had any thing particular to say to you?”
- ⑩ “**I will wager**,” said Jasper, smiling -- his lips were still so white that he was conscious of it, and bit and moistened them while speaking -- “**I will wager** that she hinted no wish to be released from Ned.”

(続編)

- ① “And you did **perfectly right, sir**,” replies Grewgious, approaching the visitor, “**perfectly right, sir**. The apology should come from us. Should not the apology come from us, Bazzard?”
- ② “**Because**,” answers Datchery, approaching the Minor Canon closely, and speaking in a low tone, “**because** that visit was, in my opinion, connected with the disappearance of Edwin Drood – [...]”

- ③ “Excuse me,” remarked Datchery, as Jasper reseated himself, “excuse me if it has only just occurred to me that I should apologize for any remark that I have made to cause your feelings a shock, but [...]”
- ④ “Not another word,” interrupted Jasper, pleasantly, “not another word concerning this subject, if you please. There is no one to blame, and no one regrets more than I that [...]”
- ⑤ “You may think, Miss,” she said to Rosa one day when they were alone together, “you may think, and hall [sic] the world may think, if it wants to, that a boardin’ school is a proper place for young ladies; [...]”
- ⑥ “Pardon me, kind sir,” she replied, still looking sharply at Rosa, if anything sharp could be said to come from her bleared eyes, “pardon me, kind sir, but it’s little I know, and [...]”
- ⑦ “What should you say,” rejoined Grewgious slowly, “what should you say, Reverend Sir, if I should tell you that I had some new developments, and that [...]”
- ⑧ “Now, I don’t believe,” he continued, addressing the Minor Canon, “I don’t believe, mind you, that this John Jasper knows where young Landless is; [...]”
- ⑨ “Let me tell you, sir,” continued Fopperty, who had stopped to wipe his eyes, from which the tears had started at the recollection of the scene he was describing; “let me tell you that, even if such sights as these are sad, they sometimes do a power of good. [...]”
- ⑩ “Do you see, my child,” the old man says after a short silence, and taking her hand in his; “Do you see that all these flowers grow with their faces turned toward this spot, as though [...]”

両作品で、catchword が実際に 2 度発話されたものと推定したのは 10 例中 3~4 例であり、この「BL」 / 「状況」のケースの CS では、両作品とも概ね 2/3 が、1 度発話された語句が CS の形をとって繰り返されていると考えられる。

3.2.5 SpV の語彙嗜好の分析

本節では ED と続編の SpV73 語の生起頻度を多変量分析し、両作品における語彙嗜好を比較する。SpV 73 語の生起数の概要を表 3.10 に示す。この表は ED と続編における生起

数の合計で降順にソートしたもので、列タイトルの D は ED を、J は続編を表し、それらをそれぞれ前後で 2 分割した識別 (0, 1) を付している⁷⁶。SpV 73 語の全トークン数のうち、上位 20 語によるものが 86% を占めている。また、SpV のタイプ語数は、ED で 70 語、続編で 41 語で、ED に生起して続編に生起しない語は以下の 31 語である。

assent, demand, hint, urge, announce, apologize, echo, growl, pout, reflect, stop, submit, bellow, bow, burst, declare, emphasize, entreat, expostulate, falter, implore, jerk, laugh, muse, plead, proclaim, represent, shriek, sigh, stammer, stipulate

他方、続編に生起して ED に生起しない語は、roar, thunder, utter の 3 語であり、ED における SpV 語彙の豊かさがうかがえる。

表 3. 10 ED と続編における SpV 生起数の概要

降順	SpV	D0	D1	J0	J1
1	say	194	206	87	60
2	return	39	34	27	13
3	ask	14	28	28	20
4	continue	0	2	48	40
5	reply	19	11	28	28
6	cry	26	24	19	13
7	answer	10	15	18	15
8	add	7	12	14	23
9	exclaim	4	3	13	20
10	rejoin	7	0	10	13
11	repeat	9	13	3	4
12	proceed	7	5	0	14
13	resume	10	3	6	6

⁷⁶ ED と続編間の差異と、同じ作品内の差異を比較して異同性を評価するため、2 作品をそれぞれ複数のセクションに分割する必要があるが、SpV は比較的生起数が少ないため、データがまばらになりすぎないように 2 分割にとどめた。

14	remark	10	1	5	8
15	ejaculate	0	2	10	8
16	inquire	3	7	7	2
17	pursue	6	9	1	1
18	murmur	3	1	1	11
19	interrupt	2	0	7	6
20	retort	8	6	0	1
:	:	:	:	:	:
72	thunder	0	0	0	1
73	utter	0	0	0	1

ED と続編における SpV の頻度上位 10 語の生起比率を図 3.5、図 3.6 に示す。両作品とも say が最も多く生起しており、*ED* では全生起数の 44% を占めている。他方、続編における say の占有率は *ED* におけるその半分以下の 20.6% で、生起数では約 1/3 である。また、*ED* の上位 10 語に含まれる repeat, pursue, retort は、続編の上位 10 語に入っていない。逆に、続編の上位 10 語に含まれる continue, exclaim, rejoin は、*ED* の上位 10 語に入っていない。特に continue は、続編に 88 件生起して say に次ぐ頻度ランク 2 位だが、*ED* に生起するのは 2 件のみ（ランク 31 位）で大きな差がみられる。これらから *ED* と続編に用いられている SpV の生起傾向にかなりの差異がうかがえる。

上位10語	生起比率
say	44.0%
return	8.0%
cry	5.5%
ask	4.6%
reply	3.3%
answer	2.7%
repeat	2.4%
add	2.1%
pursue	1.6%
retort	1.5%
その他	24.2%

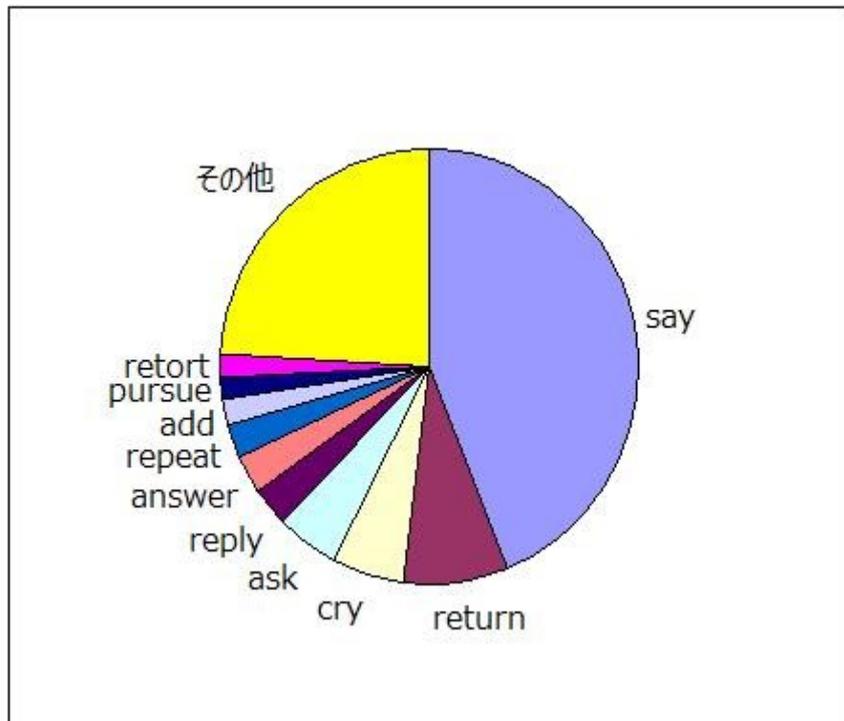


図 3.5 EDにおける SpV の頻度上位 10 語の生起比率

上位10語	生起比率
say	20.6%
continue	12.4%
reply	7.9%
ask	6.7%
return	5.6%
add	5.2%
answer	4.6%
exclaim	4.6%
cry	4.5%
rejoin	3.2%
その他	24.6%

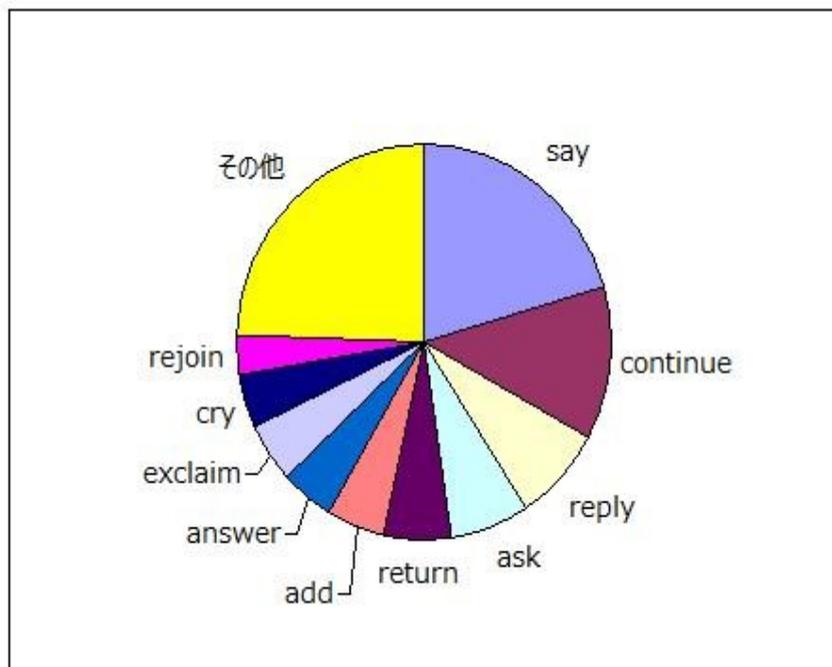


図 3.6 続編における SpV の頻度上位 10 語の生起比率

表 3. 10 のクロス集計表をもとに、4つのセクションにおける SpV 73 語の頻度を、クラ

スター分析と MDS で分析⁷⁷した結果を以下に示す。

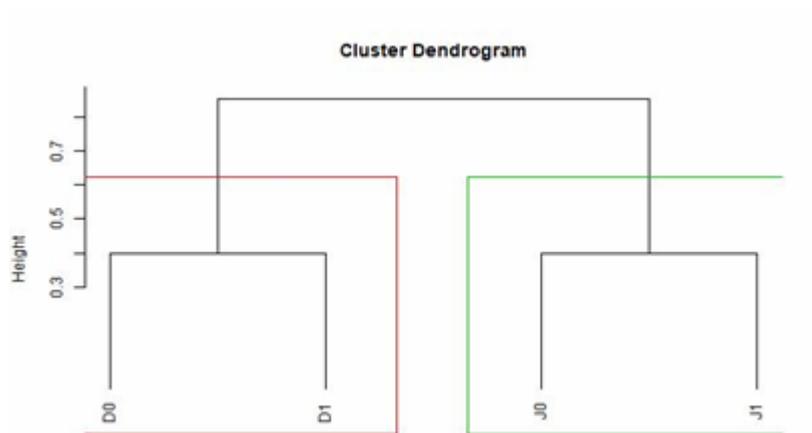


図 3.7 ED と続編に生起する SpV 73 語による樹形図

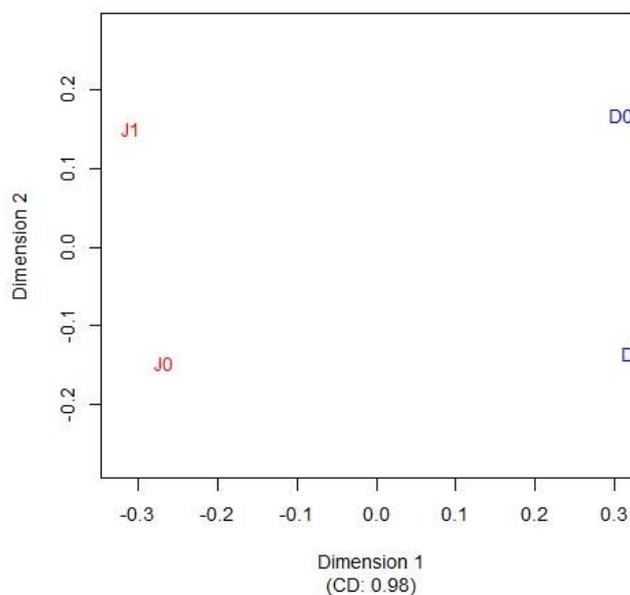


図 3.8 ED と続編に生起する SpV 73 語による MDS プロット

⁷⁷ 分析に用いた R の version は 3.6.3 (以下、同じ)、距離定義はユークリッド、クラスターの連結には Ward.D2 を用いてライブラリ hclust および cmdscale により分析した。say の生起数が突出して多いため、第 2 章の知見に基づき、生起数を平方根圧縮した頻度データによって分析した。

表 3.11 各セッション間の距離行列 (SpV 73 語)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.40	0.65	0.67
D1	0.40		0.65	0.69
J0	0.65	0.65		0.40
J1	0.67	0.69	0.40	

表 3.12 作品内／作品間の距離とそれらの比 (SpV 73 語)

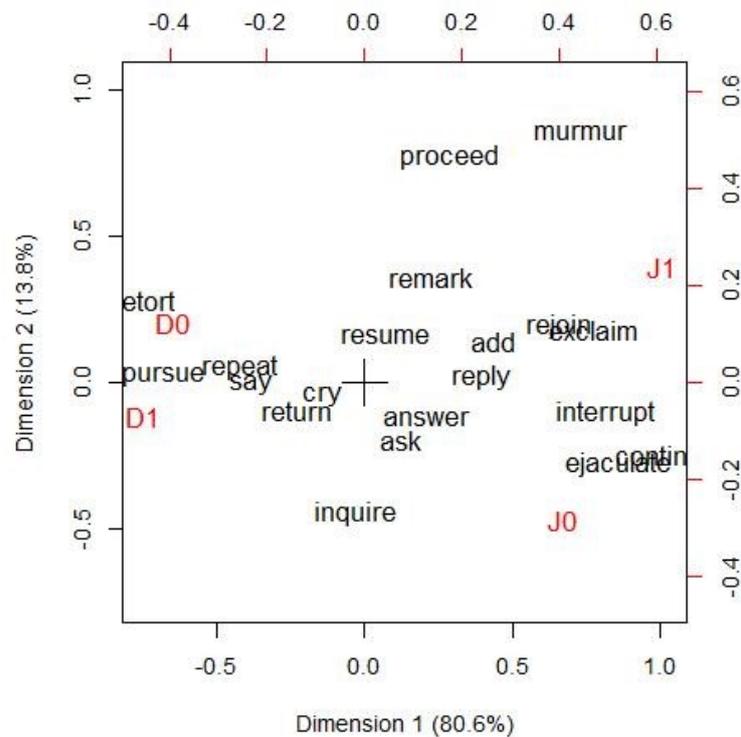
作品内の 最大距離	作品間の 最小距離	距離比
0.40	0.65	1.62

樹形図では同作品の 2 つのセッションが、それぞれサブクラスターを形成している。セッション間距離は、作品間の最小が 0.65 であるのに対して、作品内のその最大は 0.40 であることから、作品間のセッション間距離は、作品内のどのセッション間距離より大きく、73 語の SpV の嗜好が両作品で明らかに異なっていることを示している。

次に、SpV 73 語の上位 20 語⁷⁸に着目して、D0, D1, J0, J1 の 4 つのセッションにおける生起数を対応分析⁷⁹した結果を図 3.9 に示す。

⁷⁸ 語彙のプロットが過度に輻輳しないよう語数を上位 20 語に絞った。

⁷⁹ セクションと語彙のそれぞれの異同性に加え、セッションと語彙の間の親近性をも Biplot として表すことのできる対応分析 (Correspondence Analysis) を使い、ライブラリは corresp を用いた。なお、頻度データは疎頻度によった。



注：各軸ラベルの括弧内のパーセント値は各軸の寄与率で、処理データの持つ全情報のうち各軸で表現されている情報の比率である。この図の場合両軸で約 94% であり、ほぼ全容がこの 2 軸で表現されていることになる。

図 3.9 ED と続編における SpV 上位 20 語の対応分析結果の Biplot

このプロットから上位 20 語の SpV の各セクションにおける生起傾向を大略把握することができる。すなわち、D0, D1 の近傍にプロットされた語は、ED に多いことを、J0, J1 の近傍にプロットされた語は、続編に多いことを、また中央付近にプロットされた語は、両作品に同程度に生起していることを示している。例えば *pursue* は ED (特に D1) の近傍に、*[r]etort* は同様に D0 の近傍にプロットされ、それぞれのセクションに多く生起することがわかる。*ejaculate*, *contin[ue]*, *interrupt* は J0, J1 に近い最右端にプロットされており、圧倒的に続編に多いこと、また、*cry*, *answer* は中央付近にプロットされており、全セクションに同程度に生起していることを示している。

3.3 評価結果のまとめ

(1) SpV の時制、発話部との位置関係における異同性

ED には過去時制の SpV が、続編には現在時制の SpV が多い。また発話部と SpV の位置関係別の生起数は、ED ではどちらの時制でも Biber et al. (1999) と同じ「後置>中断>前置」の順である。他方続編では、現在時制は「前置」のケースが最多で、過去時制では「中断」のケースが最多である。なお、過去時制で次いで多いのは「前置」のケースである。「後置」を小説における発話伝達表現の異化の始まりと、また、「中断」をそれが更にすすんだ、「語りと発話が技巧的に絡み合った小説風な形式 (Lambert, 1981)」とみた場合、続編で「前置」のケースが目立つことは注目すべき特徴と考えられる。

(2) 伝達部の語りが発話を中断するケースの異同性

伝達部の語りが発話を「中断」するケースを、語りの内容で「SV：主部と SpV」、「BL：body language」、「状況：状況の説明」、「BL/状況：BL と状況」の 4 つに類型化して分析したところ、ED では伝達部に body language による描写や状況説明が含まれるケースが 59% を占めていた。また、そのうち「状況」のケースが 8 割を占め、場の状況を補足する描写に「中断」が多用されていた。また ED において body language が含まれるケースが続編の 1.7 倍であることと併せ、ED では「中断」の形がより活用されていると考えられる。続編では「状況」のケースが 40% を占めるものの、「SV」のケースが最も多く 53% を占めていた。

Lambert (1981) は、「中断」、特に catchword suspension (CS) は、i) 威厳のある人物の発話に用いるのは不適切で、あえてそうした場合、当該人物を貶める効果が生まれるとする一方、ii) Dickens 作品に頻繁に用いられている catchword suspension は、上流社会とはまるで異なった生活を語る、Dickens 風語りのリズムの一部になっている、とも述べている。

そこで ED と続編に用いられている CS が、これらの用法のどちらに相当するか、両作品に見られる各 20 の全ケースについて確認したところ、i) の用法に該当するケースはみられなかった。従って両作品の CS は、前記 ii) の用法に該当するものと推定した。

(3) 「中断」の各ケースにおける catchword suspension (CS)／非 CS の異同性

「中断」のケースを、伝達節の内容によって「SV」と、それに「BL」／「状況」が加わったケースに二分し、さらにそのそれぞれを、catchword suspension (CS) と非 CS に区分して、両作品における箇所数、平均中断語数などの差異を比較した。

第一に「SV」のケースでは、CS・非 CS を合計した箇所数は両作品で略同数だが、CS が ED で 1 箇所なのに対して、続編には 6 箇所見られた。また CS の catchword (CW) について、1 度発話されたものが CS の形をとって繰り返されたものか、あるいは実際に 2 度発話されたものか考察したところ、その多くが呼びかけや詠嘆的な語句であり、実際に 2 度発話されたものと推定した。

第二に「BL」／「状況」のケースにおける CS の比率は続編の方が ED より高いが、続編の平均中断語数、中断語数のバラつきは、ED のその約半分であり、CW 語数のバラつきも小さい。また CW は「SV」のケースと異なり、両作品とも概ね 2/3 の箇所について、実際に 2 度発話されたものではなく、1 度発話された語句が CS の形をとって繰り返されたものと推定した。他方非 CS における ED の箇所数は続編のその約 2 倍と多い。両作品間で平均中断語数に大きな差はないが、中断語数のバラつきは ED の方が大きい。

(4) SpV の語彙嗜好の異同性

ED と続編から抽出した 73 タイプ語の SpV は、ED に 70 語、続編に 41 語生起し、ED の方が語彙が豊かである。両作品ともに say の生起頻度が最多で、ED においては SpV の全トークン数の 44% を占めるが、続編では 21% にすぎない。両作品それぞれの頻度上位 10 語のうち 3 語は、他の作品の上位 10 語に含まれず、特に continue は続編には 88 語生起して頻度ランクは say に次ぐ 2 位（生起比率 12%）だが、ED に生起するのは 2 語のみ（31 位）であり、両作品で用いられている SpV の嗜好に、かなりの差異がうかがえる。また、両作品をそれぞれ 2 つのセクションに分割し、73 の SpV の語彙頻度データを 2.4 節と同様な条件で分析したところ、同じ作品の 2 つのセクションがクラスター分析でサブクラスターを形成しており、両作品の SpV の嗜好が相違していることが確認された。

4. 語意別の嗜好および人物造型の異同性

3章ではSpV（登場人物の発話や行為の様態を伝達する動詞の、本論における略称）の用法の異同性分析に加え、SpVの生起特性をクラスター分析、多次元尺度法（MDS: multi-dimensional scaling）などの手法を用いて分析し、EDと続編で各SpVの用いられる頻度（以下、語彙嗜好）に全体として差異があることを示した。Segundo (2016) はDickens作品の特徴のひとつとして、発話動詞（Speech verb）が登場人物を特徴づけ、その造型に貢献していると指摘している。そこで本章ではSpVの語意別に語彙嗜好の差異を分析し、さらにその語彙選択が作り出す人物造型の差異について考察する。そのため両作品に登場し、当該人物の発話を伝達するSpVのトークン数が一定数以上の人物を対象とし、その人物に用いられるSpVを、i) その語意が人物の感情／個性に関わるものでなく、作者の語彙嗜好や言語習慣によって選択されると考えられるもの、ii) 人物による感情／個性の差異を表現するため作者によって選択されると考えられるもの、および iii) 語意より発話の様態に特徴がある語、に区分し、それらを更に語意によって細区分する。さらに、それぞれの区分／細区分語彙の生起頻度を、クラスター分析などの手法を用いて分析し、両作品における語意別の語彙嗜好、およびそれによる人物造型の異同性を評価する。

4.1 分析方法

4.1.1 分析対象とする人物

EDと続編の双方に登場する人物の発話を伝達するSpVのトークン数を表4.1に示す。本章ではトークン数が70以上⁸⁰の7人の人物（Crisparkle, Datchery, Edwin, Grewgious, Jasper, Puffer, Rosa；同表にてマーキング）の発話に用いられるSpVを分析対象とする。なお表4.1ではEDと続編の作品間の差異と、同じ作品内での差異を比較して、両作品における語彙嗜好の異同性を評価するため、3章と同様に両作品をそれぞれ前半と後半に2分割している。以下、表ラベルのDはDickensのEDを、JはJamesの続編を、続く数字は2つのセクションの識別を表す。

⁸⁰ 一定の分析データ数を確保するため、SpVの両作品でのトークン数が70以上の人物とした。

表 4.1 ED と続編の双方に登場する人物の、セクション別 SpV トークン数

人物	D0	D1	J0	J1	合計
Bazzard	11	0	1	2	14
Billickin	0	27	5	0	32
Crisparkle	55	56	18	26	155
Crisparkle, Mrs.	22	0	2	3	27
Datchery	0	34	34	53	121
Dean	9	7	0	0	16
Deputy	10	6	11	7	34
Durdles	34	4	10	15	63
Edwin	47	14	0	17	78
Grewgious	72	87	48	20	227
Helena	19	15	0	11	45
Honeythunder	9	17	0	0	26
Jasper	69	36	79	32	216
Neville	20	26	0	21	67
Puffer	2	19	41	11	73
Rosa	37	56	6	16	115
Sapsea	18	12	0	9	39
Tartar	0	20	1	0	21
Tope	4	0	2	2	8
Tope, Mrs.	2	2	0	0	4
Twinkleton	5	9	4	0	18

なお、Dean, Honeythunder, Tope 夫人など、続編に登場しない人物はこの表に含めていない。

4.1.2 SpV の語意／働きによる区分

Leech (1983) は、発話行為における Austin や Searle による区分を、発話行為動詞の研究にあてはめ、Speech-act verbs を以下のように区分している。

- ① Content-descriptive (発話の語義的／語用的内容を伝える語。発話行為理論における locutionary, illocutionary, および perlocutionary な行為の語。)
- ② Neutral (①でも③でもない語。例：say, repeat, reply)
- ③ Phonically descriptive (発話の内容というより様態に関わる意味の語。例：grunt,

hiss, mumble, mutter, shout, whine, whisper)

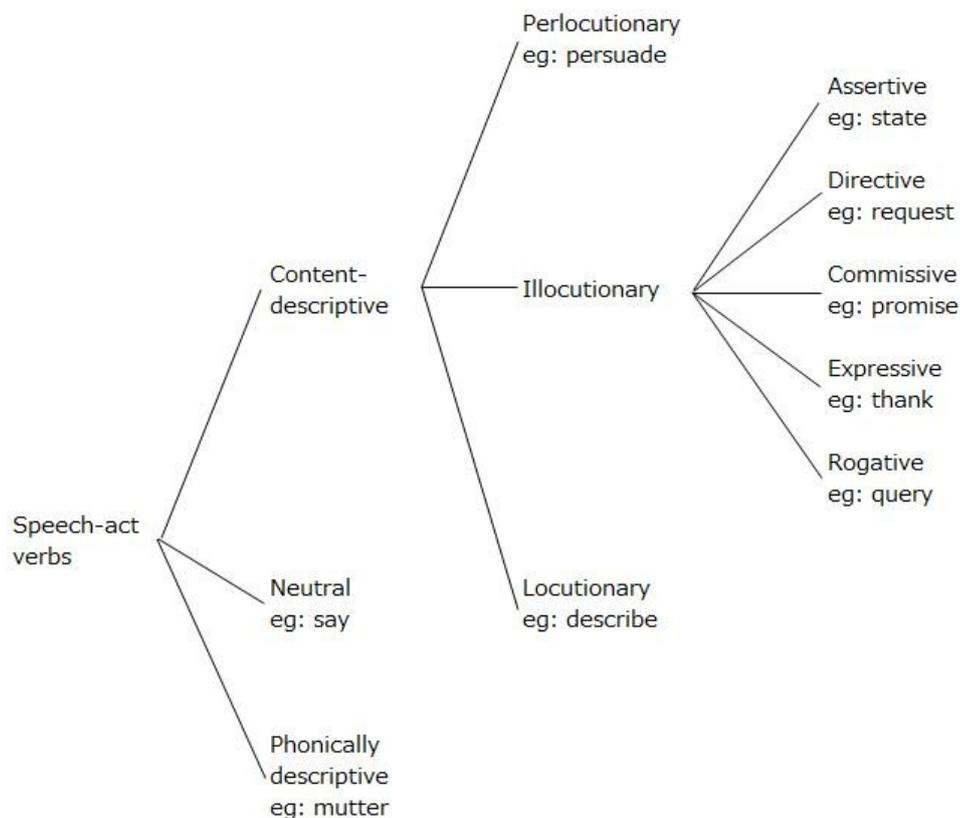


図 4.1 Leech (1983) による Speech-act verbs の区分

本章では、語彙嗜好と人物造型の2つの観点における分析を行うため、SpVを人物の感情／個性表現との関係が薄いと思われる語（Neutral、以下N）と、人物の感情／個性表現との関係が濃いとされる語（Character-descriptive、以下C）、そしてLeech (1983)を参考に語意より発話の様態に特徴がある語（Phonically descriptive、以下P）に区分する⁸¹。Leech (1983)でContent-descriptiveに区分される語のうち、例えばanswer/askのように、単に「答える／尋ねる」こと以上の内容や様態の語意を含まない語、continue/repeatのように「（中断後また）続ける／繰り返す」という、発話の時間的な位置づけを示す語などは、人物の感情／個性表現の差異につながらない語であり、本論ではNに区分する。Nに区分した語については、その語意によって、「言う」、「尋ねる」、「続ける」、「答える」、「そ

⁸¹ Phonically descriptiveな語は人物の感情／個性表現との関係も濃いと考えられるが、語意より発話の様態に特徴がある語でもあり、C区分の語とは別に扱う。

の他」に、また C に区分した語については同様に、「さえぎる」、「叫ぶ」、「異議」、「その他」にそれぞれ細区分する。表 4.2～表 4.4 に 7 人の人物の発話の伝達に用いられる、N, C, P に 3 区分した 59 の SpV⁸²を示す。

表 4.2 7 人の人物に関わる SpV (N 区分)

細区分	SpV	SpV としての語意 ⁸³
言う	address	〔…に〕向けて言う；〈抗議などを〉〔…に〕申し入れる；〈人〉に話しかける。
	announce	告知する；表明する；〈客〉の来着を大声で告げる〔取り次ぐ〕。
	observe	(所見として)〈…と〉述べる，評する；(何気なしに)口にする。
	read	読み上げる，音読する；〈人〉に読んで聞かせる〔伝える〕。
	remark	言う，一言する，所見を述べる；SYN 言う：気づいたことなどを言う。
	represent	(言葉で)表す，表現する，叙述する；〈…だと〉言う，主張する，断言する。
	say	〈言葉を〉言う。
	speak	話す，ものを言う，口をきく，しゃべる。
	tell	〈人〉に告げる，知らせる，報じる，教える，言葉に表す，(口に出して)言う，述べる。
尋ねる	ask	〈人〉に〈ものを〉尋ねる，問う；SYN 尋ねる：相手に情報を求める《一般的な語》。
	demand ⁸⁴	〔人に〕要求する，尋ねる。
	inquire	尋ねる，問う，問い合わせる；SYN 尋ねる：事実または真相を尋ねる。
続ける	continue	(中断後また)続ける；(前に)引き続いて述べる。
	go	(go on), 〔行動・習慣などを〕続ける；しゃべる，〔…のことを〕(くどくどと)まくしたてる。
	proceed	(一時中断した後で)言葉を続ける。
	pursue	《まれ》 続ける (continue), 言い続ける。
	resume	〈一度やめたことを〉再び始める，〈話・議論などを〉また〔再び〕続ける。
答える	answer	〈人・質問など〉に答える，返事する.; SYN 返答する：言葉・文書・動作で返答する《一般的な語》。
	rejoin	答える，応答する，答弁する。
	reply	答える，返事をする；SYN 返答する：特定の問いに言葉・文書で回答する。
	return	〈受けたものに相応するものを〉返す，応じる，報いる；答える，返事をする，答弁する；言い返す。

⁸² 3 章で抽出した 73 の SpV のうち、7 人の人物に用いられない語を除外した。

⁸³ 『新英和大辞典 (第 6 版)』(研究社)による (以下、同じ)。

⁸⁴ ED のみに生起し、「尋ねる」の語意で用いられている。

その他	add	〈言葉を〉付け加える; 〈...と〉付け加えて言う[書く].
	assent	[提案などに] 同意する, 賛成する ; 相づちを打つ; [要求を] (消極的に)承諾する, 認める.
	begin	談話を始める, 言い出す.
	call	大声で呼ぶ, ...に呼び掛ける; 叫ぶ; 大声で伝える[命令する].
	caution	...に警告する, 注意する.
	conclude	〈...と〉決定する, 結論を下す , 〈...と〉推論する; 締めくくる , (...と言って)語を結ぶ.
	explain	説明する, 明らかにする; ...の理由を説く; 〈行為などを〉弁明[釈明]する.
	repeat	繰り返して言う.; 〈人の言ったことを〉そのまま伝える, 復唱する.
	stop	じゃまする, 阻止する; 自制する, 思いとどまる.
	submit	(意見・考慮などを求めて)提起する, 恭しく述べる, 〈...ではないかと〉思いますと言う.
	suggest	...と言い出す, 勧める; 示唆する.
think	〈...だと〉思う, 考える , 考える, 心に抱く, 想像する, 思い描く.	

表 4.3 7人の人物に関わる SpV (C 区分)

細区分	SpV	SpV としての語意
さえぎる	interpose	さえぎる, 差出口をする, 異議を差しはさむ.
	interrupt	(口を出して) 〈話・談話など〉の腰を折る, 〈人〉の話[仕事]のじゃまをする.
叫ぶ	cry	大声で呼ぶ; 叫ぶ, どなる.
	ejaculate	〈祈りや感情のこもった言葉を〉不意に発する, 突然叫び出す.
	exclaim	(苦痛・怒り・喜び・驚きなどで)叫ぶ, 大声で言う.; 〈...と〉叫ぶ, 絶叫する.
異議	remonstrate	いさめる, 忠告する ; 抗議する, 異議を唱える.
	retort	...と言い返す, 切り返して言う ; SYN 返答する : 批判などに即座に鋭く口答える.
その他	accost	〈人〉に(大胆に)近づいて言葉を掛ける;(こちらから)挨拶する.
	apologize	わびを言う, 謝罪[陳謝]する; 弁明する.
	hint	ほのめかす, (暗に)におわす[言及する], あてこする.
	muse	熟考する, 沈思する; よく考えて言う.
	plead	嘆願する, 懇願する , 弁じる, 抗弁する; 表明する, 申し開きをする.
	reflect	つくづく考える, 沈思する, 熟考する, 思案する.
	urge	〈人を〉せきたてる, しきりに促す, 勧説する, 激励する.

表 4.4 7人の人物に関わる SpV (P 区分)

区分	SpV	SpV としての語意
P	bow	(挨拶・敬意などのために)腰をかがめる, おじぎする; 〈謝意・同意などを〉おじぎをして[うなずいて]示す.
	burst	突然〔ある状態に〕なる, 急に〔ある行動を〕始める.
	echo	おうむ返しに繰り返す, そっくりまねる.
	falter	どもる, 口ごもる., たじろぐ, ためらう, ひるむ; 口ごもり [どもり]ながら言う.
	jerk	だしぬけに高い声で言う, とぎれとぎれに話す.
	murmur	ぶつぶつとつぶやく, こぼす, ぐずぐず言う; 他の人には聞こえないくらい低い声で話す.
	mutter	ささやく, つぶやく; (特に)ぶつぶつ言う, ぐずぐず言う.
	pout	口をとがらす, ふてくされる.
	shriek	きゃっと言う[叫ぶ, 笑う]; 金切り声で言う.
	stammer	(当惑・興奮などのために)口ごもる, どもる.
	thunder	どなる; 口をきわめて非難する, 弾劾する.
whisper	ささやく, 小声で話す; 耳打ちする, (中傷・陰謀などの目的で)ひそひそ話す.	

4.1.3 分析するケースと分析手順

語彙嗜好の観点における異同性の分析は、N、C、P に区分した語について行い、人物造型の観点における分析は、C と P に区分した語について行う。前者の観点での分析は区分／細区分したケース別に、ED と続編を計 4 つのセクションに区分して行い、後者の観点については、セクションを人物別・作品別に区分して分析する。具体的な手順は以下のとおりである。

(1) 各分析ケースの SpV について、セクション別の生起数による語彙頻度表(以下、クロス集計表)の作成

7人の人物のそれぞれについて、3.1 節で構築した SpV のデータベースから、エクセルのオートフィルタ機能を用いて各 SpV⁸⁵の 4 つのセクション別の生起数を抽出してワークシートを作成し、それらに各 SpV に付与した N, C, P の区分／細区分の属性、7人

⁸⁵ データベースの「SpV 原形」の列で抽出する (つまり時制の区別なし)。

の生起数（疎頻度）の合計数、その相対頻度数⁸⁶、および平方根圧縮した頻度数⁸⁷の列を加える。

このワークシートを用い、オートフィルタ機能で分析ケースに対応した区分／細区分の属性を指定して各分析ケース向けのクロス集計表を生成する。当ワークシートの概略構造を図 4.2 に示す⁸⁸。

⁸⁶ 各セクションに生起する SpV の総数には差がある。そこで各セクションについて、分析対象 SpV の疎頻度を全 SpV の総数で相対化し、生起比率による分析を行う。

⁸⁷ 頻度差が大きい SpV を含むケースの分析に使用する。

⁸⁸ 図 4.2 には平方根圧縮したデータの列は省略している。

1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	Orisparkle			Datchery			AQ	AR	BB	BC	BD	BE	BF	BG		
												D0	D1	J0	J1	D0	D1									J0	J1
2			計→	55	56	18	26	0	34	34	53	Rosa			7人の計			282	302	226	175	相対頻度	1	1	1	1	
3	SpV	区分	細区分	D0	D1	J0	J1	D0	D1	J0	J1	D0	D1	J0	J1	D0	D1	J0	J1	7人の計			D0	D1	J0	J1	
4	accost	C	その他							1	0	1	1	1	0	0.004	0.003	0.004	0	7人の計			0.004	0.003	0.004	0	
5	add	N	その他			0	2			1	3	5	10	6	13	0.018	0.033	0.027	0.074	7人の計			0.018	0.033	0.027	0.074	
6	address	N	言う							0	1	1	0	4	4	0.004	0	0.018	0.023	7人の計			0.004	0	0.018	0.023	
7	announce	N	言う									0	1	0	0	annouce	0	0.003	0	0	7人の計			0	0.003	0	0
8	answer	N	答える	0	2	2	1			2	3	3	12	10	6	answer	0.011	0.04	0.044	0.034	7人の計			0.011	0.04	0.044	0.034
9	apologize	C	その他									0	1	0	0	apologize	0	0.003	0	0	7人の計			0	0.003	0	0
10	ask	N	尋ねる			1	1	0	2	0	3	7	23	19	14	ask	0.025	0.076	0.084	0.08	7人の計			0.025	0.076	0.084	0.08
11	assent	N	その他	2	0							0	1	0	0	assent	0.028	0.003	0	0	7人の計			0.028	0.003	0	0
12	begin	N	その他							0	1	1	2	0	2	begin	0.004	0.007	0.011	0.011	7人の計			0.004	0.007	0.011	0.011
13	bow	P		0	1							0	1	0	0	bow	0	0.003	0	0	7人の計			0	0.003	0	0
14	burst	P										1	0	0	0	burst	0.004	0	0	0	7人の計			0.004	0	0	0
15	call	N	その他									0	0	0	1	call	0	0	0	0.006	7人の計			0	0	0	0.006
16	caution	N	その他									0	1	0	0	caution	0	0.003	0	0	7人の計			0	0.003	0	0
17	conclude	N	その他					0	1					0	0	conclude	0	0.003	0	0	7人の計			0	0.003	0	0
18	continue	N	続ける	0	1	3	5			7	4	0	2	33	20	continue	0	0.007	0.146	0.114	7人の計			0	0.007	0.146	0.114
19	cry	C	叫ぶ	0	3			0	2	0	1	6	7	1	7	cry	0.071	0.063	0.044	0.04	7人の計			0.071	0.063	0.044	0.04
20	demand	N	尋ねる									1	2	0	0	demand	0.004	0.007	0	0	7人の計			0.004	0.007	0	0
21	echo	P										1	0	0	0	echo	0.004	0	0	0	7人の計			0.004	0	0	0
58	tell	N	言う									0	1	3	0	tell	0.004	0.01	0	0	7人の計			0.004	0.01	0	0
59	think	N	その他	5	0							0	4	6	2	think	0.021	0.02	0.009	0	7人の計			0.021	0.02	0.009	0
60	thunder	P												0	0	thunder	0	0	0	0.006	7人の計			0	0	0	0.006
61	urge	C	その他	0	2							1	0	2	0	urge	0.004	0.007	0	0	7人の計			0.004	0.007	0	0
62	whisper	P										1	0	3	1	whisper	0.004	0	0.013	0.006	7人の計			0.004	0	0.013	0.006

図 4.2 各分析ケース向けのクロス集計表を生成するワークシート

(2) 各ケースのクロス集計表をクラスター分析、多次元尺度法 (MDS: multi-dimensional scaling) 等で多変量分析⁸⁹

① 各分析ケース向けに生成したクロス集計表を分析⁹⁰し、クラスター分析で得られた樹形図における4つのセクションのクラスタリング状況、主要な語の頻度のバープロット、および MDS で得られた4つのセクションのプロット位置に注目する。なお、分析語の中に突出して頻度の高い語が含まれるケースでは、当該語による分析結果への過度な影響を緩和するため、平方根圧縮した頻度データのクロス集計表を用いる。

なお樹形図では、各セクションにおける SpV の生起比率の類似度に従って、階層的にクラスターが構成され、MDS ではその類似度が高いセクションは近傍に、低いセクションは離隔してプロットされる。

② ①の分析の中で出力された、各セクション間の距離を要素とする距離行列⁹¹を用いて、作品を異にするセクション間の距離と、同じ作品のセクション間の距離の比で、両作品の語彙嗜好の異同性を評価する。ここで、同じ作品のセクション間の距離の最大値が、異作品間のその最小値より小さければ、全セクションは同じ作品でグルーピングされることから、作品間の語彙嗜好は異なっていると判断する。他方大きければ、両作品のセクションの中に、嗜好が他作品のセクションと類似するセクションがあつて、異なつた作品のセクションが混つてグルーピングされることから、作品間の語彙嗜好の異同性は確認できないと判断する。なおいずれの場合も、語彙の中で特徴的な生起傾向を示す SpV に着目し異同性評価を補足する。

③ 人物造型の異同性は、細区分したケース別に、セクションを人物別・作品別に区分したクロス集計表を用いて同様に分析・評価する。なおこの分析では、各人物についての両作品間の距離、および各ケースにおける特徴的な SpV の生起傾向に注目して評価する。

⁸⁹ R (version 3.6.3) の環境下で、クラスター分析は `hclust`、多次元尺度法 (MDS) は `cmdscale` を使用する。3章の分析ではセクションと語彙の関係を `Biplot` 表示するため対応分析も用いたが、4章ではプロットからセクション間の距離を把握しやすい MDS を用いる。セクション間の距離はユークリッド距離で評価し、`hclust` におけるクラスターの結合法は `ward.D2` を用いる (以下、同じ)。

⁹⁰ 分析に使用した R のスクリプトを Appendix A4.1.3 (1) に示す。

⁹¹ 処理データを R の関数 `dist` で処理して得られる各セクション間の距離である。

4.2 Nに区分した SpV の語彙嗜好の異同性

本節ではNに区分した SpV、およびそれを細区分した SpV について、ED と続編における語彙嗜好の異同性を分析する。

4.2.1 Nに区分した全 SpV

Nに区分した 33 語（825 トークン）の生起数のクロス集計表を表 4.5 に示す。

表 4.5 Nに区分した全 SpV の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
say	125	145	53	34	357
ask	7	23	19	14	63
continue	0	2	33	20	55
return	20	12	13	7	52
reply	7	7	19	15	48
add	5	10	6	13	34
answer	3	12	10	6	31
repeat	6	10	2	1	19
rejoin	5	0	6	7	18
remark	5	1	4	5	15
proceed	6	1	0	7	14
think	6	6	2	0	14
inquire	2	4	6	0	12
pursue	4	6	1	1	12
resume	6	0	3	1	10
address	1	0	4	4	9
assent	8	1	0	0	9
read	1	0	3	4	8
explain	4	2	0	1	7
go	3	3	0	1	7
observe	2	3	0	1	6
begin	1	2	0	2	5
suggest	1	4	0	0	5
tell	1	3	0	0	4
demand	1	2	0	0	3
announce	0	1	0	0	1
call	0	0	0	1	1
caution	0	1	0	0	1

conclude	0	1	0	0	1
represent	0	1	0	0	1
speak	1	0	0	0	1
stop	1	0	0	0	1
submit	1	0	0	0	1
計	233	263	184	145	825

各分析結果を図 4.3、図 4.4 および表 4.6、表 4.7 に示す。なお、N 区分の全 SpV のタイプ語数は 33 語と多く、また最上位ランク語 say のトークン数が他の語より圧倒的に多いため、生起数を平方根圧縮したクロス集計表を用いて分析した。

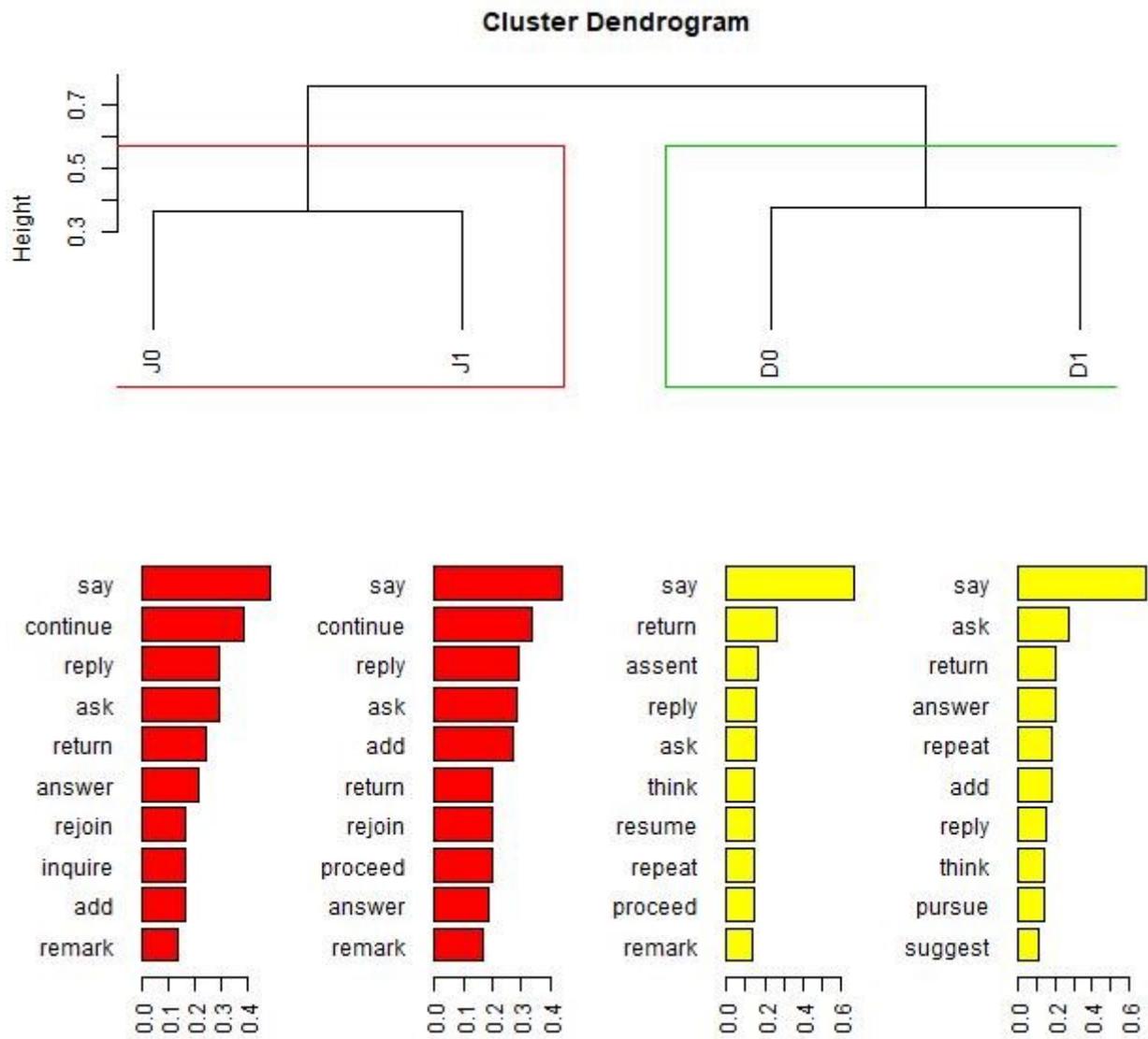
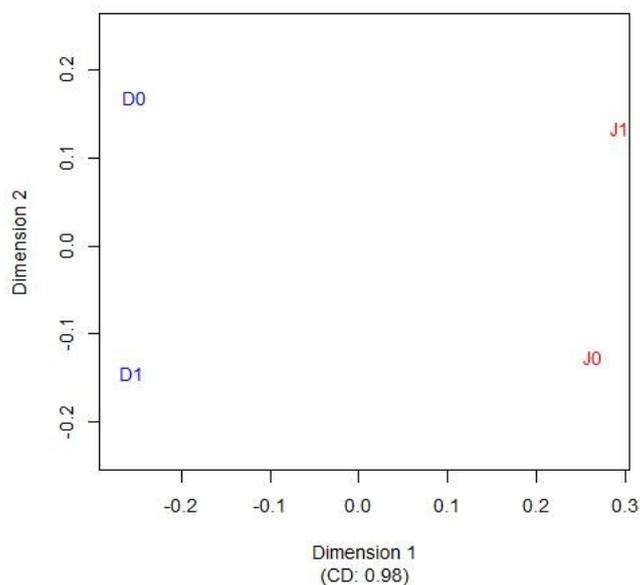


図 4.3 樹形図と SpV 頻度数のバープロット (N 区分の全 SpV)



注：図下部の CD の値は、各セクション間の元の処理データにおける距離とプロットされた距離の相関係数の 2 乗値 (Coefficient of Determination, 決定係数) であり、プロットの当てはまり具合 (説明力) の目安となる (金, 2007)。

図 4.4 MDS プロット (N 区分の全 SpV)

表 4.6 各セクション間の距離行列 (N 区分の全 SpV)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.38	0.60	0.60
D1	0.38		0.58	0.62
J0	0.60	0.58		0.37
J1	0.60	0.62	0.37	

表 4.7 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分の全 SpV)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.38	0.58	1.52

樹形図では同作品の 2 つのセクションが、それぞれサブクラスターを構成している。作品間のセクション間距離の最小が 0.58 であるのに対して、作品内のその最大は 0.38 であることから、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、

語彙嗜好は両作品で異なっている。なお表 4.5 で、最上位ランク語から累積した生起数が全生起数の 70% を占める say, ask, continue, return, reply のうち、続編で say に次ぐ高頻出語である continue の、ED でのランクは 23 であり大きく異なっていた。また、ED の SpV のタイプ語数は 32 語、続編のそれは 22 語であった。

4.2.2 「言う」に細区分した N 区分 SpV

語意で「言う」に細区分した 9 語（402 トークン）の生起数のクロス集計表を表 4.8 に示す。

表 4.8 N 区分の SpV を「言う」に細区分した語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
say	125	145	53	34	357
remark	5	1	4	5	15
address	1	0	4	4	9
read	1	0	3	4	8
observe	2	3	0	1	6
tell	1	3	0	0	4
announce	0	1	0	0	1
represent	0	1	0	0	1
speak	1	0	0	0	1
計	136	154	64	48	402

各分析結果を図 4.5、図 4.6 および表 4.9、表 4.10 に示す。なお、この細区分語のタイプ語数は 9 語と比較的多く、また最上位ランク語 say のトークン数が他の語より圧倒的に多いため、N 区分の全 SpV の場合と同様に平方根圧縮したクロス集計表を用いて分析した。

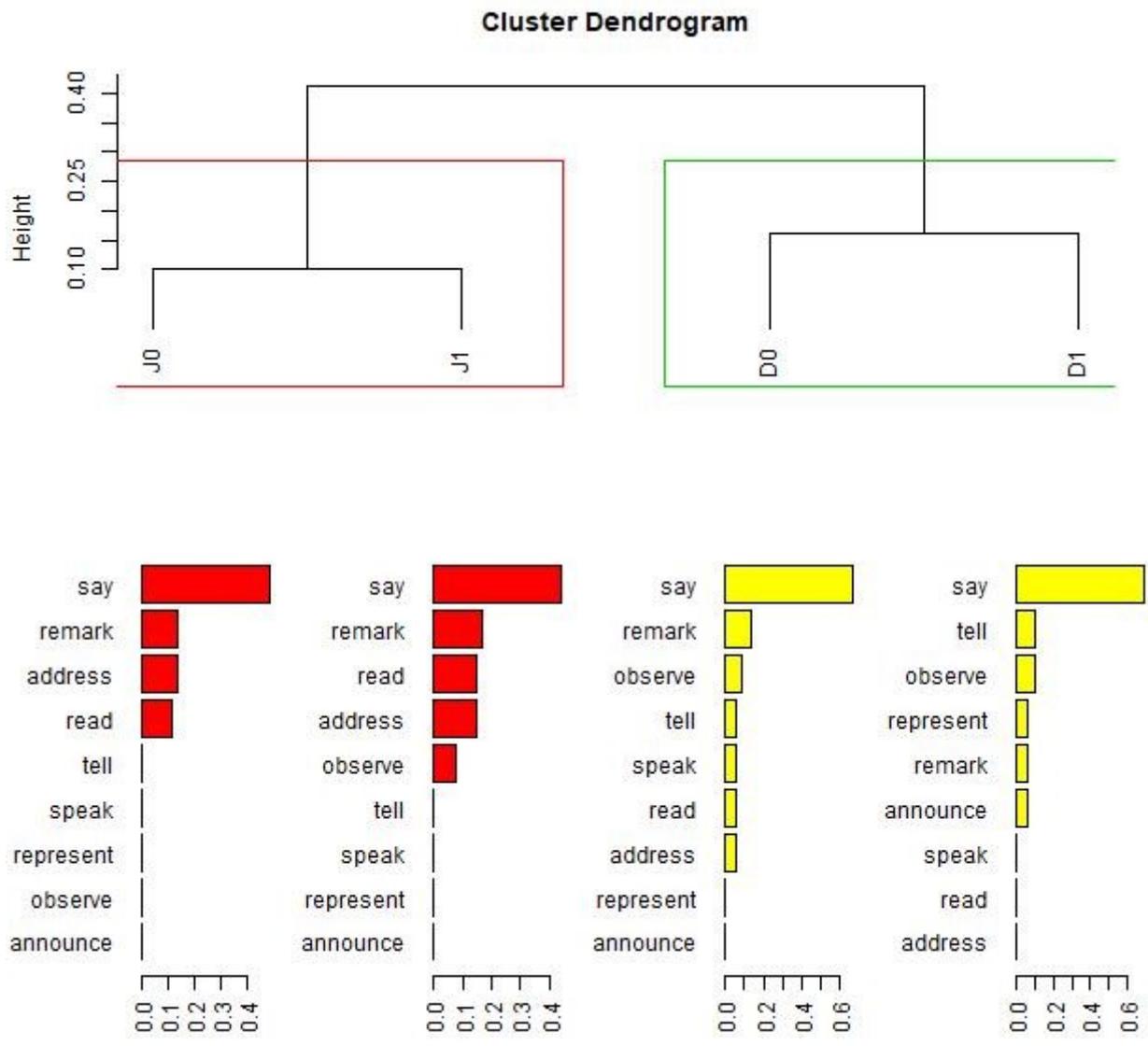


図 4.5 樹形図と SpV 頻度数のバープロット (N 区分「言う」)

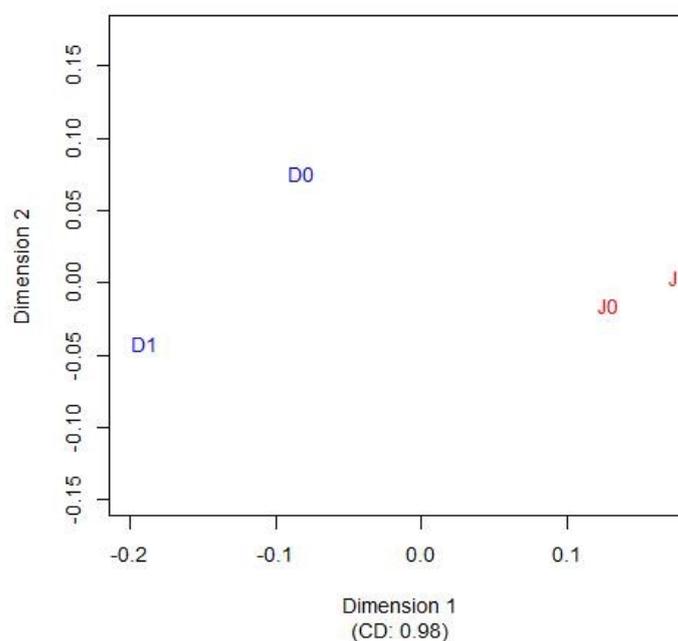


図 4.6 MDS プロット (N 区分「言う」)

表 4.9 各セクション間の距離行列 (N 区分「言う」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.16	0.24	0.28
D1	0.16		0.33	0.37
J0	0.24	0.33		0.10
J1	0.28	0.37	0.10	

表 4.10 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分「言う」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.16	0.24	1.48

樹形図では同作品の 2 つのセクションが、それぞれサブクラスターを構成している。作品間のセクション間距離の最小が 0.24 であるのに対して、作品内のその最大は 0.16 であることから、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、語彙嗜好は両作品で異なっている。

この細区分語は続編より ED に約 2.6 倍多く生起し、2 作品で共に頻度ランク 1 の say は、ED の全生起数の 93% を、続編の 78% を占めている。ランク 2 の remark の say との生起数の差は大きく、ED では say の 2%、続編では同 10% にすぎない。それに続くランク 3、4 の語は、ED では observe, tell、続編では address, read であり異なっている。

4.2.3 「尋ねる」に細区分した N 区分 SpV

語意で「尋ねる」に細区分した 3 語（78 トークン）の生起数のクロス集計表を表 4. 11 に示す。

表 4. 11 N 区分の SpV を「尋ねる」に細区分した語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
ask	7	23	19	14	63
inquire	2	4	6	0	12
demand ⁹²	1	2	0	0	3
計	10	29	25	14	78

各分析結果を図 4. 7、図 4. 8 および表 4. 12、表 4. 13 に示す。なお、この細区分語のタイプ語数は 3 語と少なく、また最上位ランク語 ask のトークン数の他の語との差異は比較的小さいため、頻度圧縮なしの相対頻度によるクロス集計表を用いた（以下、同じ）。

⁹² ED で全てこの語意で用いられている。

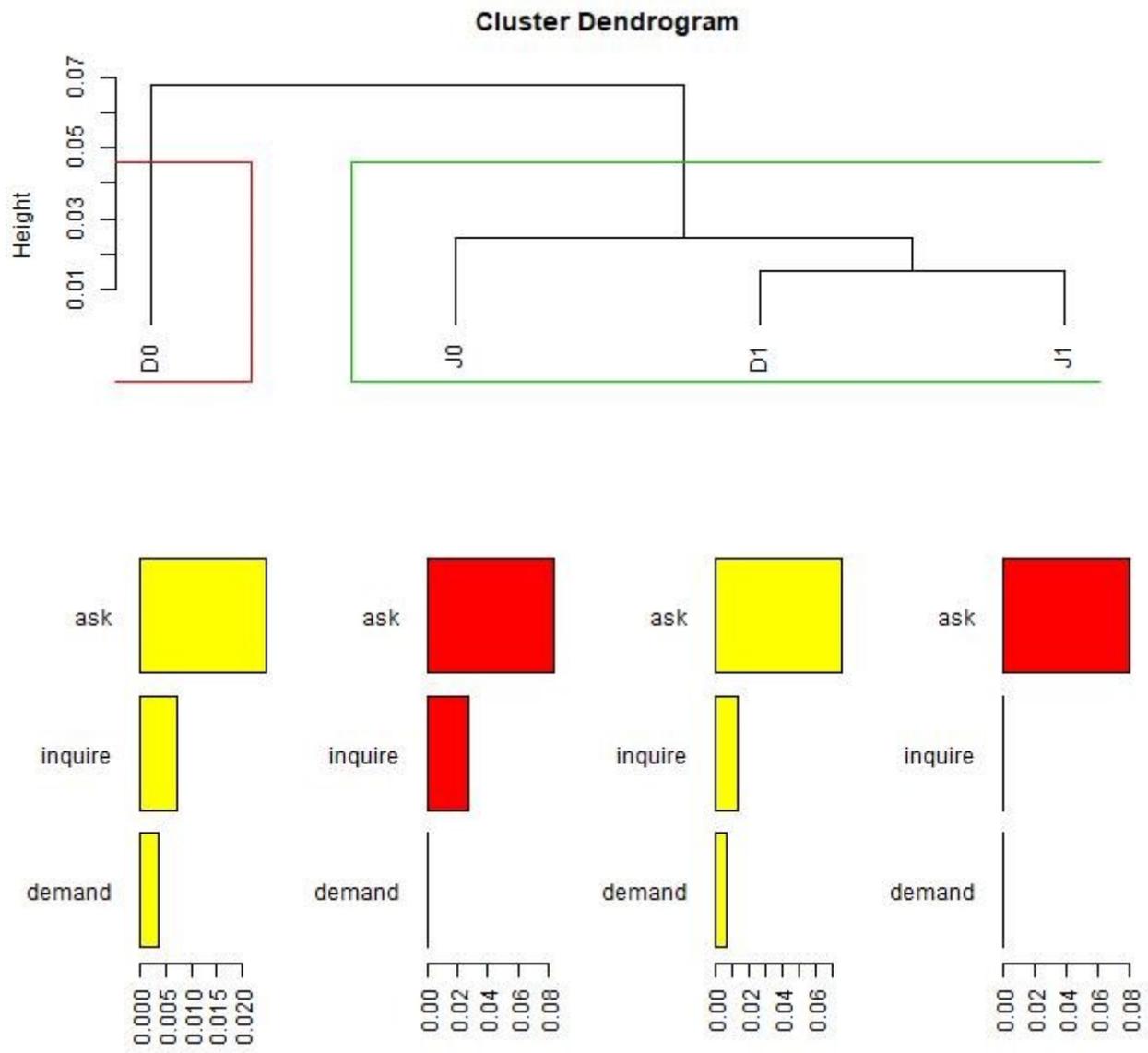


図 4.7 樹形図と SpV 頻度数のバープロット (N 区分「尋ねる」)

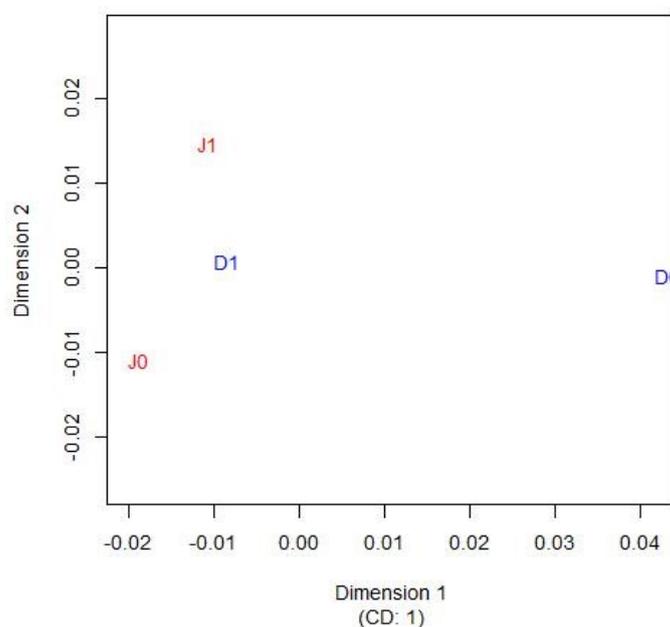


図 4.8 MDS プロット (N 区分「尋ねる」)

表 4.12 各セクション間の距離行列 (N 区分「尋ねる」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.05	0.06	0.06
D1	0.05		0.02	0.02
J0	0.06	0.02		0.03
J1	0.06	0.02	0.03	

表 4.13 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分「尋ねる」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.05	0.02	0.30

樹形図では、異作品のセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.02 であるのに対して、作品内のその最大は 0.05 であることから、作品間の語彙嗜好の異同性は確認できない。

ask は両作品とも最上位ランクで、ED の生起数の 77%、続編のその 85% を占めている。次いで inquire が用いられ、概して生起傾向は両作品で類似している。また、ED には

この語意で demand が 8%用いられている。

4.2.4 「続ける」に細区分した N 区分 SpV

語意で「続ける」に細区分した 5 語（98 トークン）の生起数のクロス集計表を表 4. 14 に示す。

表 4. 14 N 区分の SpV を「続ける」に細区分した語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
continue	0	2	33	20	55
proceed	6	1	0	7	14
pursue	4	6	1	1	12
resume	6	0	3	1	10
go (on)	3	3	0	1	7
計	19	12	37	30	98

各分析結果を図 4. 9、図 4. 10 および表 4. 15、表 4. 16 に示す。

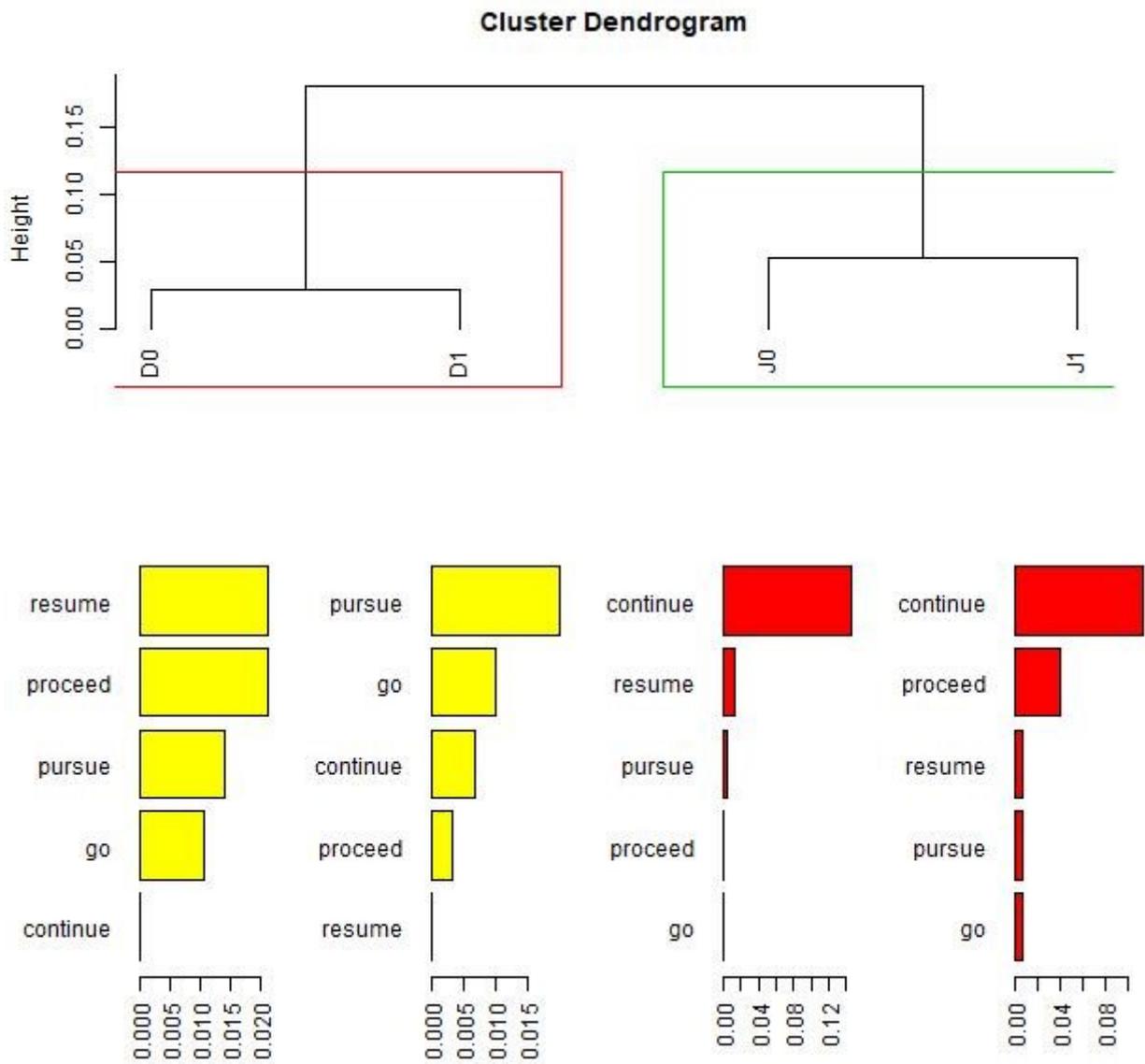


図 4.9 樹形図と SpV 相対度数のバープロット (N 区分「続ける」)

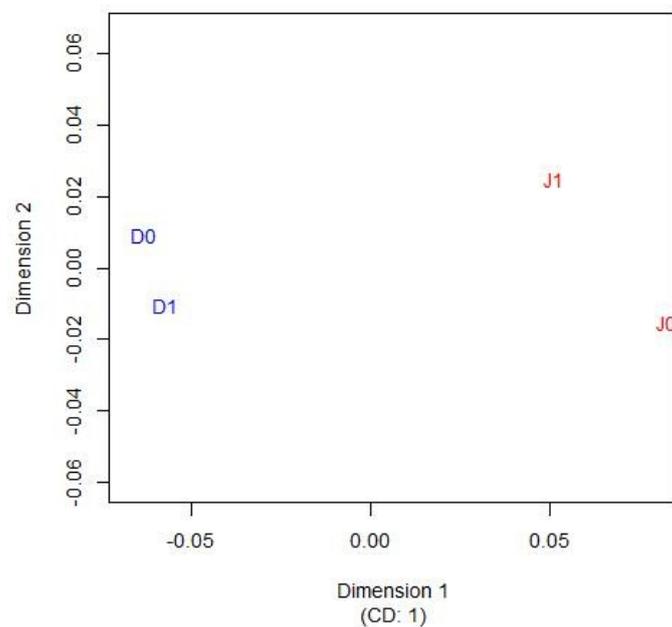


図 4.10 MDS プロット (N 区分「続ける」)

表 4.15 各セクション間の距離行列 (N 区分「続ける」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.03	0.15	0.12
D1	0.03		0.14	0.11
J0	0.15	0.14		0.05
J1	0.12	0.11	0.05	

表 4.16 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分「続ける」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.05	0.11	2.21

樹形図では同じ作品の 2 つのセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.11 であるのに対して、作品内のその最大は 0.05 であり、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、語彙嗜好は両作品で異なっている。

N 区分語全体で、say に次ぐ高頻出語である continue は、「続ける」の SpV の中では最上位ランクで、続編では生起数の約 80% を占めているが、ED では 6% に過ぎない。他方、ED で 32% を占め最上位ランクの pursue は、続編では 3% に過ぎずランク 4 である。ランク 2、3 の語は両作品とも proceed, resume である。ED で 19% (6 件) を占めるランク 4 の go は、続編では 1% (1 件) のみ生起している。

4.2.5 「答える」に細区分した N 区分 SpV

語意で「答える」に細区分した 4 語 (149 トークン) の生起数のクロス集計表を表 4.17 に示す。

表 4.17 N 区分の SpV を「答える」に細区分した語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
return	20	12	13	7	52
reply	7	7	19	15	48
answer	3	12	10	6	31
rejoin	5	0	6	7	18
計	35	31	48	35	149

各分析結果を図 4.11、図 4.12 および表 4.18、表 4.19 に示す。

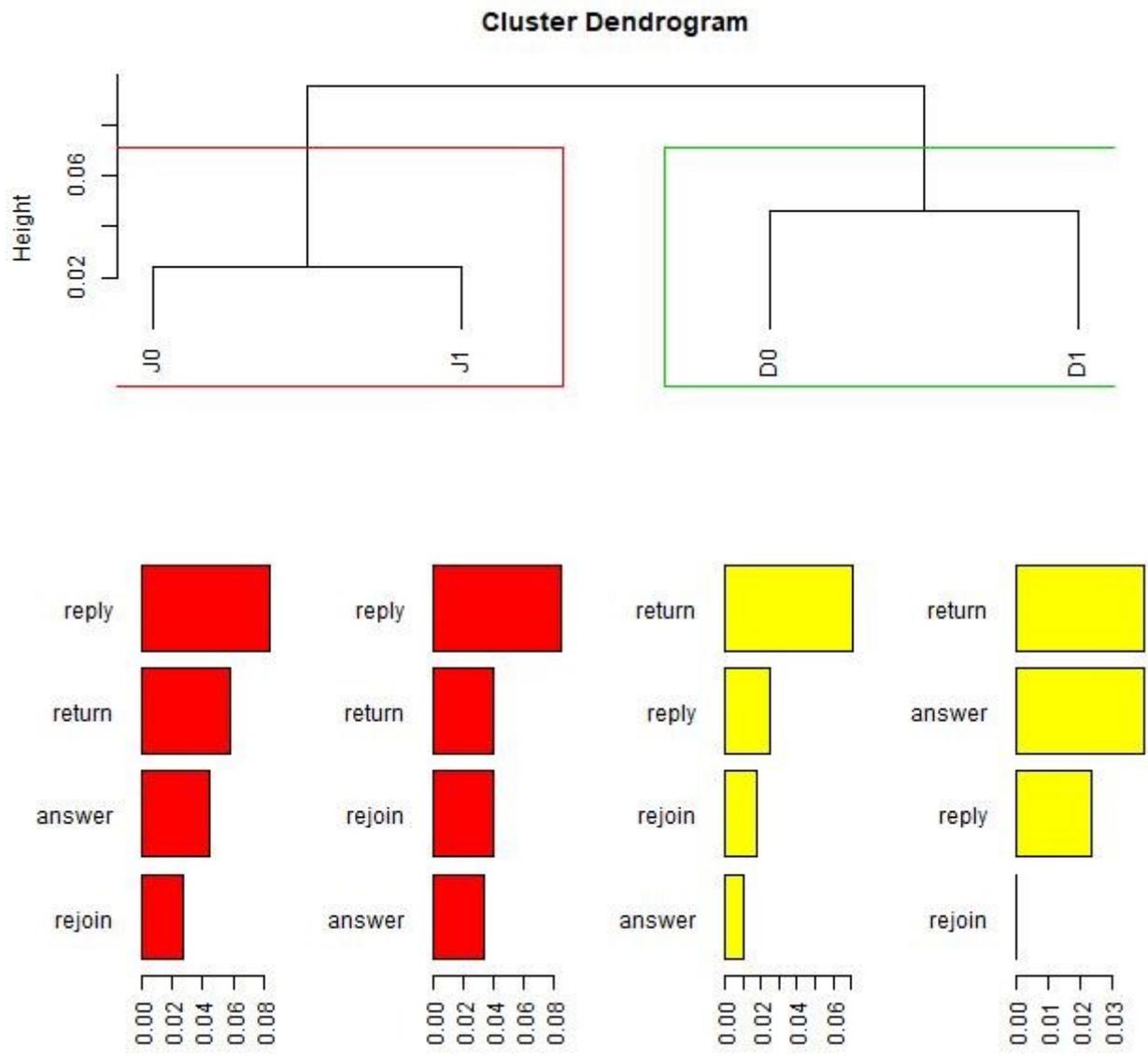


図 4.11 樹形図と SpV 相対度数のバールプロット (N 区分「答える」)

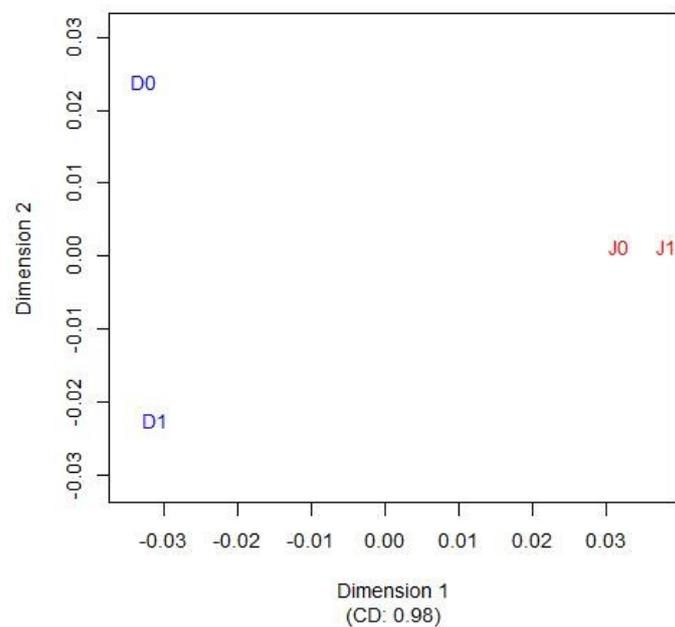


図 4.12 MDS プロット (N 区分「答える」)

表 4.18 各セクション間の距離行列 (N 区分「答える」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.05	0.07	0.08
D1	0.05		0.07	0.07
J0	0.07	0.07		0.02
J1	0.08	0.07	0.02	

表 4.19 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分「答える」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.05	0.07	1.49

樹形図では同じ作品の 2 つのセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.07 であるのに対して、作品内のその最大は 0.05 であり、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、語彙嗜好は両作品で異なっている。

なお、上位ランク 3 語 (return, answer, reply) の生起数で、ED の 92%、続編の 84%を占めるが、それらのランク順は両作品で異なっている。ED の最上位ランク語は return で 48%を占め、続編のそれは reply で 41%を占めている。

4.2.6 「その他」に細区分した N 区分 SpV

語意で「その他」に細区分した 12 語 (98 トークン) の生起数のクロス集計表を表 4. 20 に示す。

表 4. 20 N 区分の SpV を「その他」に細区分した語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
add	5	10	6	13	34
repeat	6	10	2	1	19
think	6	6	2	0	14
assent	8	1	0	0	9
explain	4	2	0	1	7
begin	1	2	0	2	5
suggest	1	4	0	0	5
call	0	0	0	1	1
caution	0	1	0	0	1
conclude	0	1	0	0	1
stop	1	0	0	0	1
submit	1	0	0	0	1
計	33	37	10	18	98

各分析結果を図 4. 13、図 4. 14 および表 4. 21、表 4. 22 に示す。

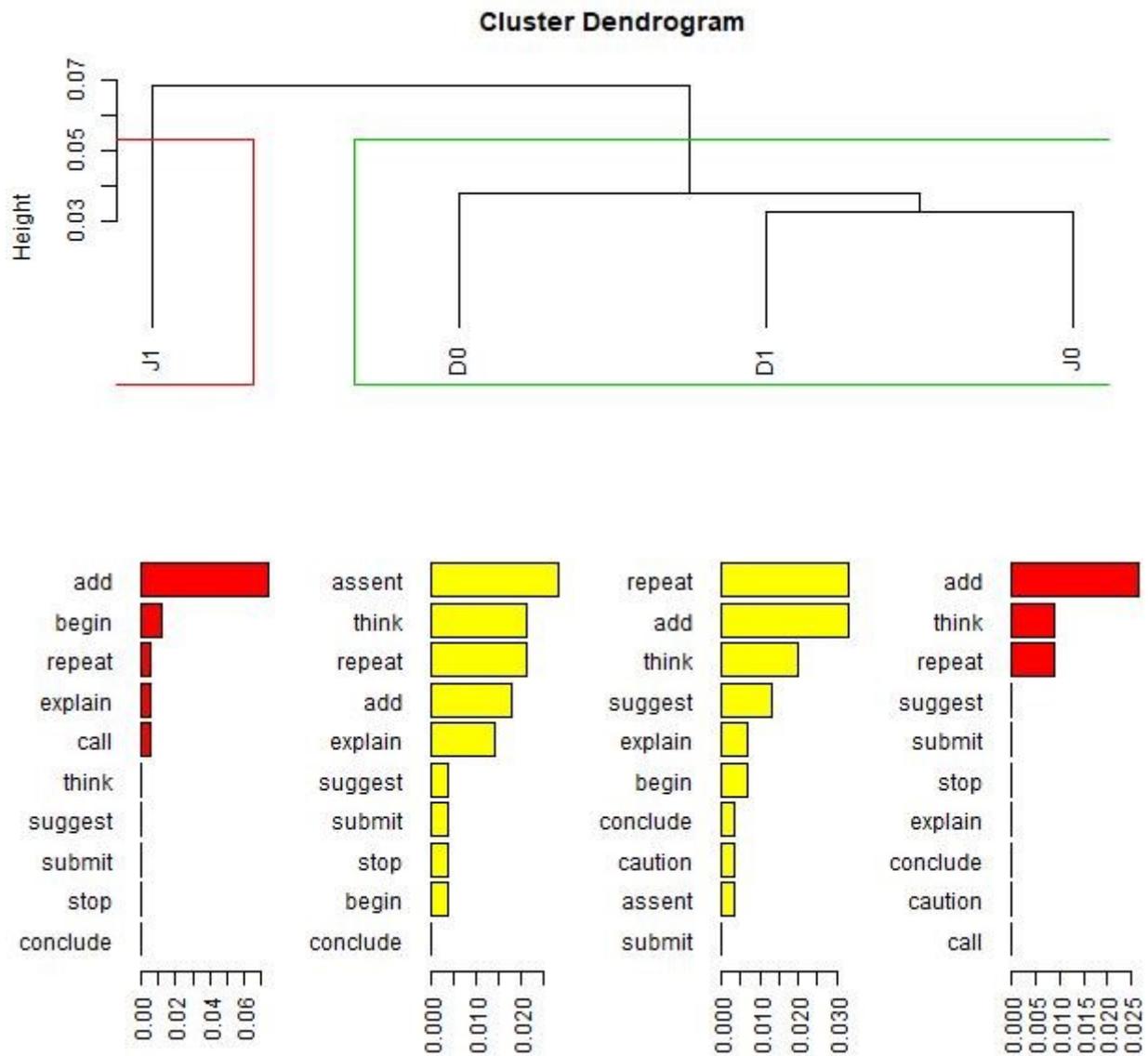


図 4.13 樹形図と SpV 相対度数のバープロット (N 区分「その他」)

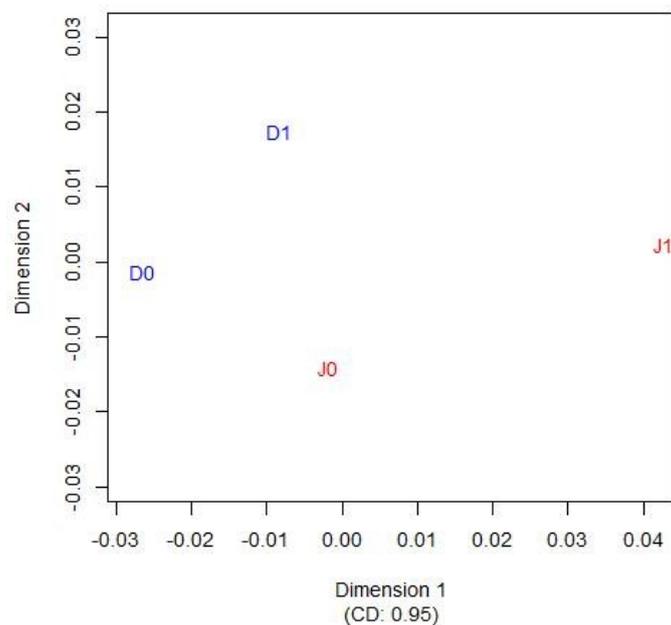


図 4.14 MDS プロット (N 区分「その他」)

表 4.21 各セクション間の距離行列 (N 区分「その他」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.03	0.04	0.07
D1	0.03		0.03	0.06
J0	0.04	0.03		0.05
J1	0.07	0.06	0.05	

表 4.22 作品内／作品間の距離とそれらの比 (N 区分・「その他」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.05	0.03	0.64

樹形図では、異作品のセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.03 であるのに対して、作品内のその最大は 0.05 であることから、作品間の語彙嗜好の異同性は確認できない。

上位の 3 語 (repeat, add, think) は、ED における全生起数の 61% を占め、それぞれほぼ同比率で生起している。他方続編においては全生起数の 86% を占め、うち add が突出して

68%を占めている。また、続編のタイプ語数はEDのその約半分である。

4.3 C および P に区分した SpV の語彙嗜好と人物造型の異同性

Segundo (2016) は、Dickensの作品では仕草等の描写によって人物造型を非言語的に伝えることに加え、発話テキスト内の地域的な語彙変異、人目をひく発話の欠陥／言い回しの繰り返しなどによって言語的に伝えることで、人物造型を印象的なものとしているとして、発話テキストの語彙に注目した多くの先行研究を紹介し、その中から以下の例をあげている。

(1) 方言：人物描写として基礎的なもの

Cockney English で発話することで印象を深めている人物：*Pickwick Papers* の Sam Weller、*Martin Chuzzlewit* の Sarah Gamp

(2) 個人言語による個性化

Hard Times における Sleary (サーカスの親方) の舌もつれ (lispng)。

‘**Th**quire!’ said Mr. Sleary, who was troubled with asthma, and whose breath came far too thick and heavy for **the letter s**, ‘Your **th**ervant! Thi**th** **ith** a bad pie**the** of bithnith, thi**th** **ith**. You’ve heard of my Clown and hi**th** dog being **th**uppo**th**ed to have morri**th**ed?’ (*Hard Times*, ch. 6)⁹³

Slearyは/s/の音がうまく発音できていない(下線筆者、以下同じ)。

(3) 決まり文句の繰り返し

Oliver Twist におけるGrimwig氏の *eat his head*

‘A bad one! I’ll **eat my head**⁹⁴ if he is not a bad one,’ growled Mr. Grimwig, speaking by

⁹³ この lispng のテキスト例は Segundo (2016) の中で示されておらず、筆者による Dickens (1854) からの引用である。

⁹⁴ “I’ll eat my hat: used to emphasize a speaker’s belief that a fact, statement, etc., is true.” (Long, 1979, 150). Dickens は Grimwig に hat を head と言い換えさせている。

some ventriloquial power, without moving a muscle of his face. (*Oliver Twist*, ch. 41 / Segundo, 2016, p. 116)⁹⁵

他方Segundo (2016) は、発話の解釈はそれを伝達する動詞 (Speech verbs, 発話動詞) により大きな影響をうけ、人物像の肉付けに貢献しうるとの観点から、発話動詞の選択もまたDickensの人物造型手法のひとつと考えることができる、と指摘している。そして以下の例をあげるとともに、コーパス言語学の手法を用いて、Dickensの初期の作品*Pickwick Papers*から後期の作品*Our Mutual Friend*に至る14の小説⁹⁶を分析し、それらから特徴的な発話動詞を抽出し人物造型との関連について論述している。

‘You’re right, Oliver, you’re right; they WILL think you have stolen ’em. Ha! ha!’ *chuckled* the Jew, *rubbing his hands*, ‘it couldn’t have happened better, if we had chosen our time!’ (*Oliver Twist*, Ch. 16 / Segundo, 2016, p. 116)

chuckled を用いることで、*rubbing his hands* の醸し出す強欲さを強め、意地悪さを前景化している。

‘A bad one! I’ll eat my head if he is not a bad one,’ *growled* Mr. Grimwig, speaking by some ventriloquial power, without moving a muscle of his face. (*ibid.*, Ch. 41 / Segundo, 2016, p. 116)

growled を用いることで、Grimwig氏が激しい気質の短気な人物であることが示され、普通用いられるのとは異なる奇抜な文句 *I’ll eat my head* による文体的役割を強めている。

本節では Segundo (2016) と同様に発話動詞に注目するものの、特徴的な発話動詞に限定せず、人物の感情／個性表現との関係が濃いと思われる C および P に区分した SpV につい

⁹⁵ このテキストの出典は Segundo (2016) の中で示されていない。内容は筆者が Dickens (1837) で確認している (本節の *Oliver Twist* からの引用において以下同じ)。

⁹⁶ 14 作品に *The Mystery of Edwin Drood (ED)* は含まれていない。

て、ED と続編における生起頻度の異同性を作品別・人物別に分析し、人物造型との関連につき考察する。

4.3.1 C に区分した全 SpV

語意によって細区分した SpV についての分析に先立ち、C に区分した全 SpV について両作品における嗜好の異同性を分析する。その SpV14 語（133 トークン）の生起数のクロス集計表を表 4.23 に示す。

表 4.23 C に区分した全 SpV の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
cry	20	19	10	7	56
exclaim	4	2	9	10	25
interrupt	1	0	7	2	10
ejaculate	0	1	5	3	9
interpose	5	1	1	1	8
retort	4	3	0	1	8
hint	1	3	0	0	4
accost	1	1	1	0	3
urge	1	2	0	0	3
reflect	1	1	0	0	2
remonstrate	1	0	1	0	2
apologize	0	1	0	0	1
muse	1	0	0	0	1
plead	0	1	0	0	1
計	40	35	34	24	133

各分析結果を図 4.15、図 4.16 および表 4.24、表 4.25 に示す。

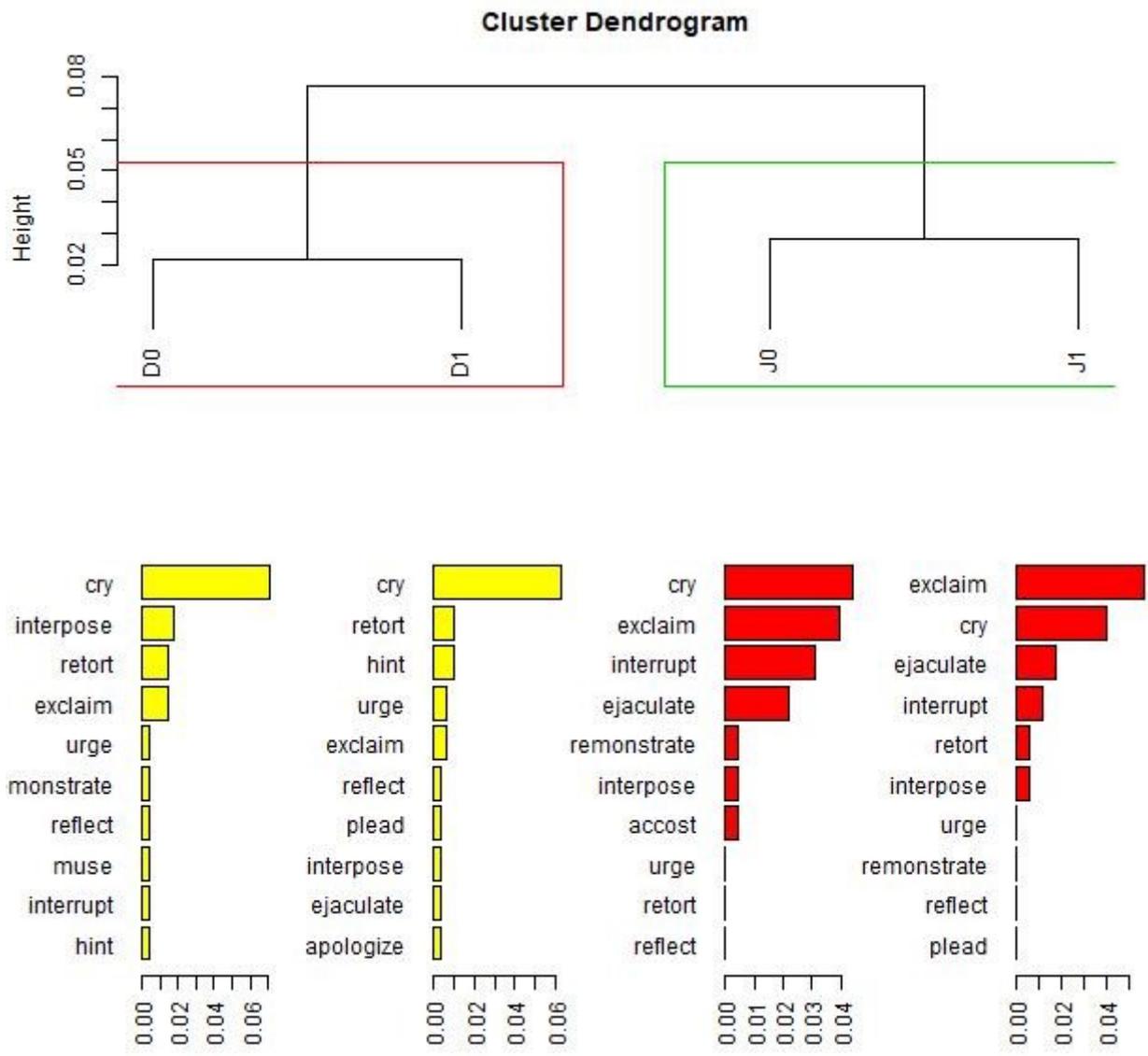


図 4.15 樹形図と SpV 相対度数のバープロット (C 区分の全 SpV)

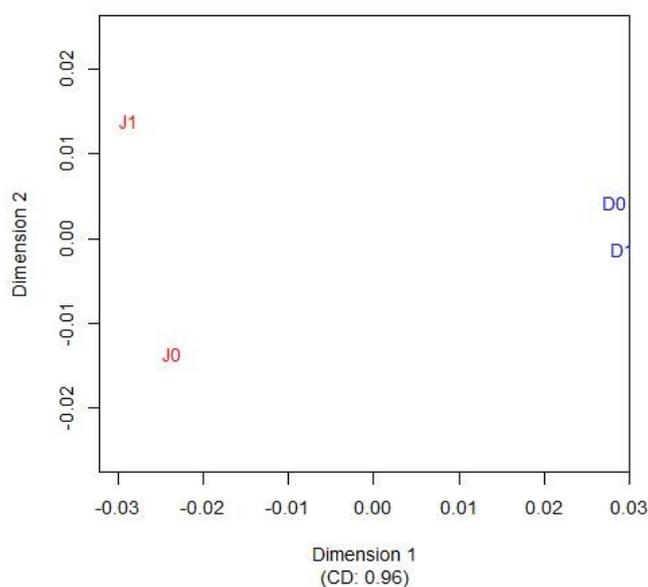


図 4.16 MDS プロット (C 区分の全 SpV)

表 4.24 距離行列 (C 区分の全 SpV)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.02	0.06	0.06
D1	0.02		0.06	0.06
J0	0.06	0.06		0.03
J1	0.06	0.06	0.03	

表 4.25 作品内／作品間の距離とそれらの比 (C 区分の全 SpV)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.03	0.06	1.95

樹形図で同じ作品の 2 つのセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.06 であるのに対して、作品内のその最大は 0.03 であり、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、語彙嗜好は両作品で異なっている。

また、ED の頻度最上位語の cry は全生起数の 52% を占め、続編のそれは exclaim で 33%

を占めている。EDでランク2のretortの生起数は7で9%を占めるが、続編での生起数は1で2%にすぎない。また、EDでinterruptやejaculateすることは少ない（生起数計2、3%以下）が、続編では多く（計17、29%）ランク3、4に入っている。これらのSpVの生起特性については、各々の細区分SpVの節で改めて詳細に述べる。

4.3.2 「さえぎる」に細区分したC区分SpV

語意で「さえぎる」に細区分した2語（18トークン）のSpV生起数のクロス集計表を表4.26に示す。

表 4.26 C区分のSpVのうち「さえぎる」を意味する語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
interrupt	1	0	7	2	10
interpose	5	1	1	1	8
計	6	1	8	3	18

この語意のSpVは、タイプ数、トークン数が共に少なく、またD1での生起数が1件のみで他のセクションへのそれと大差があるため、各作品を2セクションに分割したクロス集計表を、多変量分析して行う嗜好の差異評価は省略する。なおこのSpVは、interruptは続編に、interposeはEDに多く生起している。

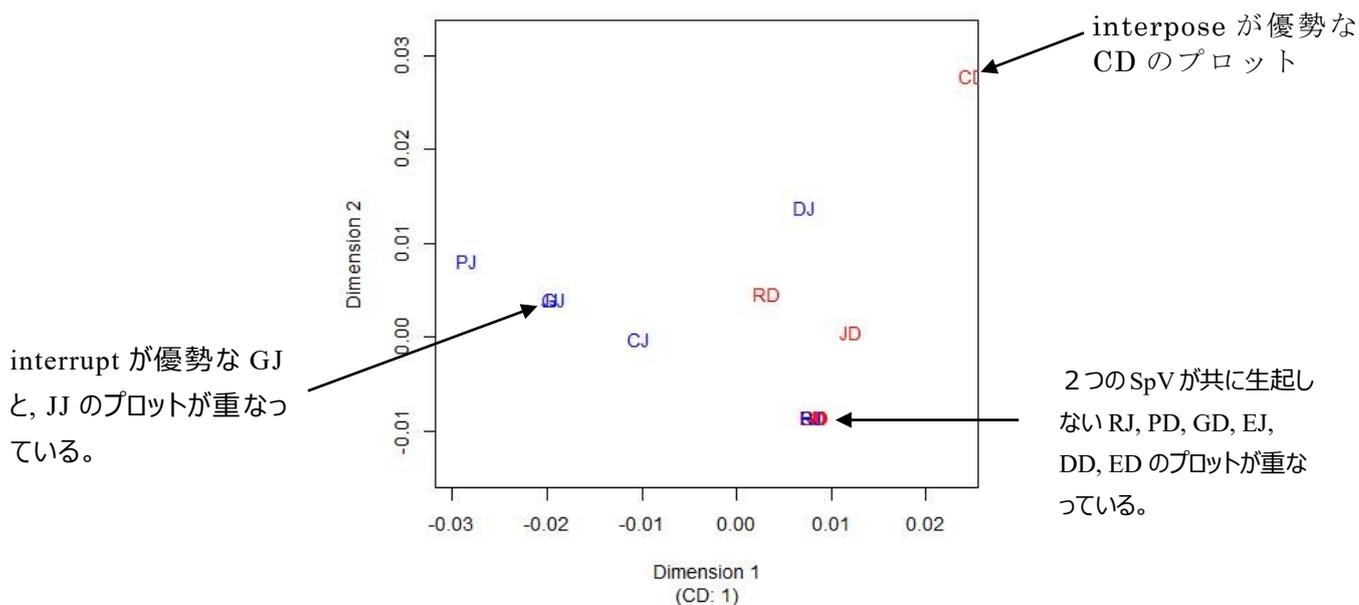
次にSpVの生起数を人物別・作品別に分析する。対象の7人の人物別のクロス集計表を表4.27に示す。なお人物別に区分することで、各セクションの生起数が少なくなるため、作品を前半と後半に2分割せず作品単位で分析する（以下、同じ）。

表 4.27 C区分「さえぎる」のSpVの人物別生起数

SpV	Crisparkle		Datchery		Edwin		Grewgious		Jasper		Puffer		Rosa		計	
	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J
interrupt	0	1	0	1	0	0	0	2	0	3	0	2	1	0	1	9
interpose	4	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	6	2
計	4	1	0	3	0	0	0	2	1	3	0	2	2	0	7	11

注：人物名の下D/Jは、Dickens (ED)/James (続編) の略号である（以下、同じ）。

分析に際して、各人物・作品のセクションによって細区分 SpV の総数は異なるため、疎頻度でなく相対化する必要があるが、細区分 SpV の計で相対化すると、例えば CD⁹⁷で 4 件生起した *interpose* と CJ で 1 件生起した *interrupt* が同じ相対頻度になってしまい、生起数の多寡の情報が失われてしまう。そこで語彙嗜好の分析の場合と同様に、各人物・作品における 59 語の SpV の総生起数でそれぞれ相対化している（以下、同じ）。そのため例えば表 4. 27 で続編の *Grewgious* と *Puffer* (GJ と PJ) の 2SpV の生起数（疎頻度）は同じだが、相対化頻度数が異なるためプロット位置はズレている。逆に、続編の *Grewgious* と *Jasper* (GJ と JJ) は、疎頻度の生起数は異なるが、相対化頻度数に差がないためプロット位置は一致している。分析で得られた各人物・作品別セクションの MDS プロットを図 4. 17 に、また各人物についての ED・続編間の距離を表 4. 28 に示す。



注：セクションラベルは人物名の最初の文字と、ED/続編の識別（ED は D、続編は J）で構成されている（例：CD は *Crisparkle* の ED、GJ は *Grewgious* の続編）（以下、同じ）。

図 4. 17 MDS プロット（人物別、C 区分「さえぎる」）

図 4. 17 の MDS プロットは、7 人物・2 作品による 14 セクションの相互間で算出した、2 つの SpV の相対頻度差による距離（EUC 距離）の情報を用いて、その距離を保存しつつ各

⁹⁷ 人物名 (*Crisparkle*) と作品識別 (*Dickens*) の各最初の文字で作家・作品を CD と簡記している（以下、同じ）。

セクションを2次元の座標にプロットしたものである。なお、RJ, PD, GD, EJ, DD, EDの6つのセクションには2SpVがともに生起しておらず、他のセクションとの距離がこの6つのセクションで同一なため、重なってプロットされている。

表 4.28 人物別のED・続編間の距離 (C区分「さえぎる」)

人物	ED-続編間の距離	生起する作品
Crisparkle	0.04	両作品
Datchery	0.02	続編のみ
Edwin	0	なし
Grewgious	0.03	続編のみ
Jasper	0.03	両作品
Puffer	0.04	続編のみ
Rosa	0.01	EDのみ

表 4.28 の「ED・続編間の距離」は図 4.17 のプロットにて各人物についての両作品の2つのプロット間の距離に対応している。(なお Edwin については両作品とも2つの SpV が生起しておらず、作品間の距離は 0 になっている。) その大小は各人物についての全 SpV の語彙嗜好(含む、人物造型)の差異の指標にはなるが、SpV 間の語意の差による、より微妙な人物造型の差異の指標にはならない⁹⁸。したがってこの距離の大小と、クロス集計表に示された個々の SpV の、作品別/SpV 別の生起数の差異に注目して、人物造型の異同性を考察する(以下、同じ)。

Crisparkle と Jasper は、ED では間接的な語意の interpose で「さえぎる」のに対し、続編では直接的な語意の interrupt で「さえぎって」いる。また Datchery, Grewgious, Puffer は ED で「さえぎる」ことはないが、続編では「さえぎって」いる。Rosa は逆に ED で「さえぎって」いるが、続編では「さえぎる」ことはない。

なお Grougious, Puffer におけるこの 2 SpV の生起数は、Crisparkle, Jasper におけるその半分以下だが、前 2 者については 59 の SpV 全体の生起数が少ないため相対頻度が大きくなり、両作品間の距離が後 2 者のそれと大差ないものになっている。

⁹⁸ 例えば、同じ細区分語意の語彙 a と b の頻度差が 2 作品で同じとして、この 2 語が共に ED より続編に多く生起する場合と、語彙 a は続編に多く、語彙 b は ED に多く生起する場合の距離は等しくなる。前者はこの語意の SpV が続編に多く生起するケースであり、続編においてその語意による人物造型がよりなされていると考えられる。後者はその語意による人物造型は両作品で同等だが、語彙 a と b の語意の違いによる造型差があるケースと考えられる。

4.3.3 「叫ぶ」に細区分したC区分 SpV

語意で「叫ぶ」に細区分した3語(90トークン)のSpV生起数のクロス集計表を表4.29に示す。EDでは最上位ランク語cryが全生起数の85%を占め、より格式ばったexclaimは13%を占めるのみである。他方続編では、exclaimが43%を占め、つづくcryとの2語で82%を占める。突発的な発話であることを印象づけるejaculateは、EDでは1件用いられているにすぎないが続編では多用されている。

表 4.29 C区分のSpVのうち「叫ぶ」を意味する語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
cry	20	19	10	7	56
exclaim	4	2	9	10	25
ejaculate	0	1	5	3	9
計	24	22	24	20	90

各分析結果を図4.18、図4.19および表4.30、表4.31に示す。

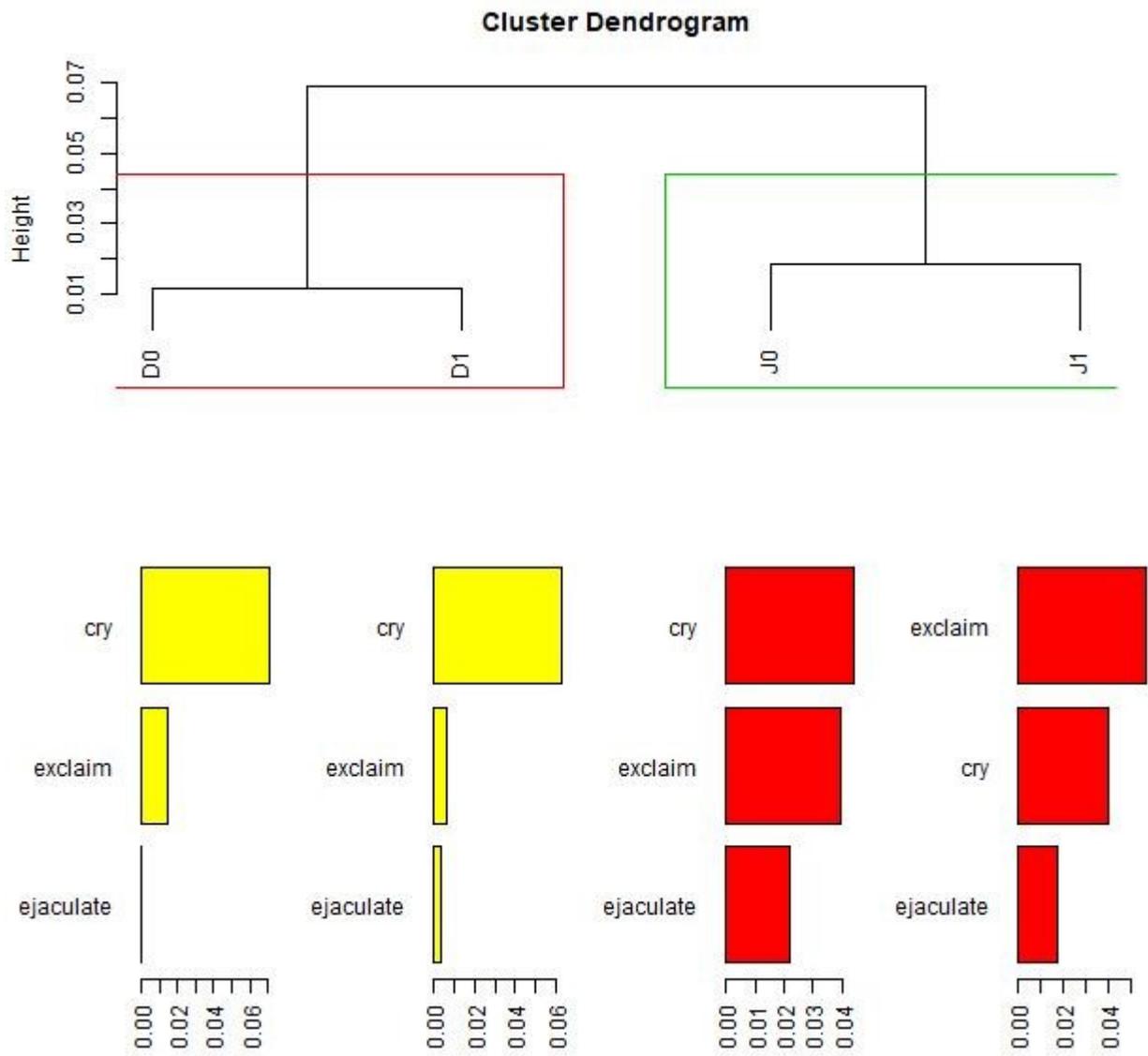


図 4.18 樹形図とバープロット (C 区分「叫ぶ」)

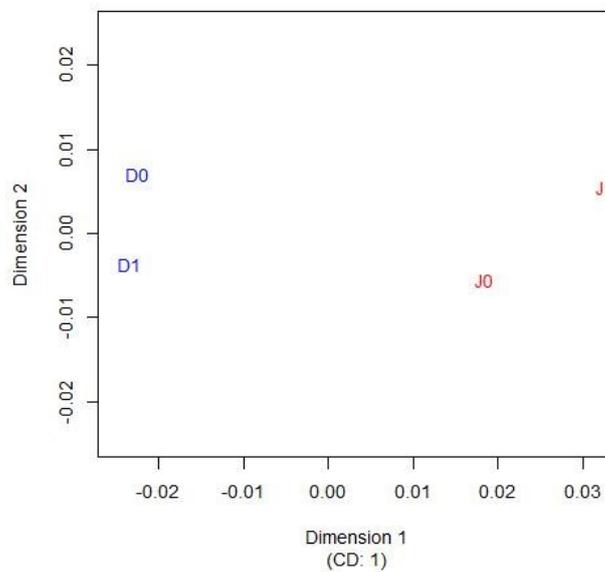


図 4.19 MDS プロット (C 区分「叫ぶ」)

表 4.30 各セクション間の距離行列 (C 区分「叫ぶ」)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.01	0.04	0.06
D1	0.01		0.04	0.06
J0	0.04	0.04		0.02
J1	0.06	0.06	0.02	

表 4.31 作品内／作品間の距離とそれらの比 (C 区分「叫ぶ」)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.02	0.04	2.29

樹形図で同じ作品の 2 つのセクションがサブクラスターを構成している。さらに、作品間のセクション間距離の最小が 0.04 であるのに対して、作品内のその最大は 0.02 であり、作品間のセクション間距離は、作品内のどのセクション間距離より大きく、語彙嗜好は両作品で異なっている。

次に、この語意の SpV の使用傾向を人物別・作品別に分析する。人物別のクロス集計表を表 4.32 に示す

表 4.32 C 区分「叫ぶ」の SpV の人物別生起数

SpV	Crisparkle		Datchery		Edwin		Grewgious		Jasper		Puffer		Rosa		計	
	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J
cry	3	0	2	1	5	0	7	1	7	11	2	2	13	2	39	17
exclaim	3	4	0	4	0	0	1	4	1	3	0	4	1	0	6	19
ejaculate	0	0	0	1	0	0	1	2	0	3	0	2	0	0	1	8
計	6	4	2	6	5	0	9	7	8	17	2	8	14	2	46	44

分析で得られた各人物・作品別セクションの MDS プロットを図 4.20 に、また各人物についての ED・続編間の距離を表 4.33 に示す。

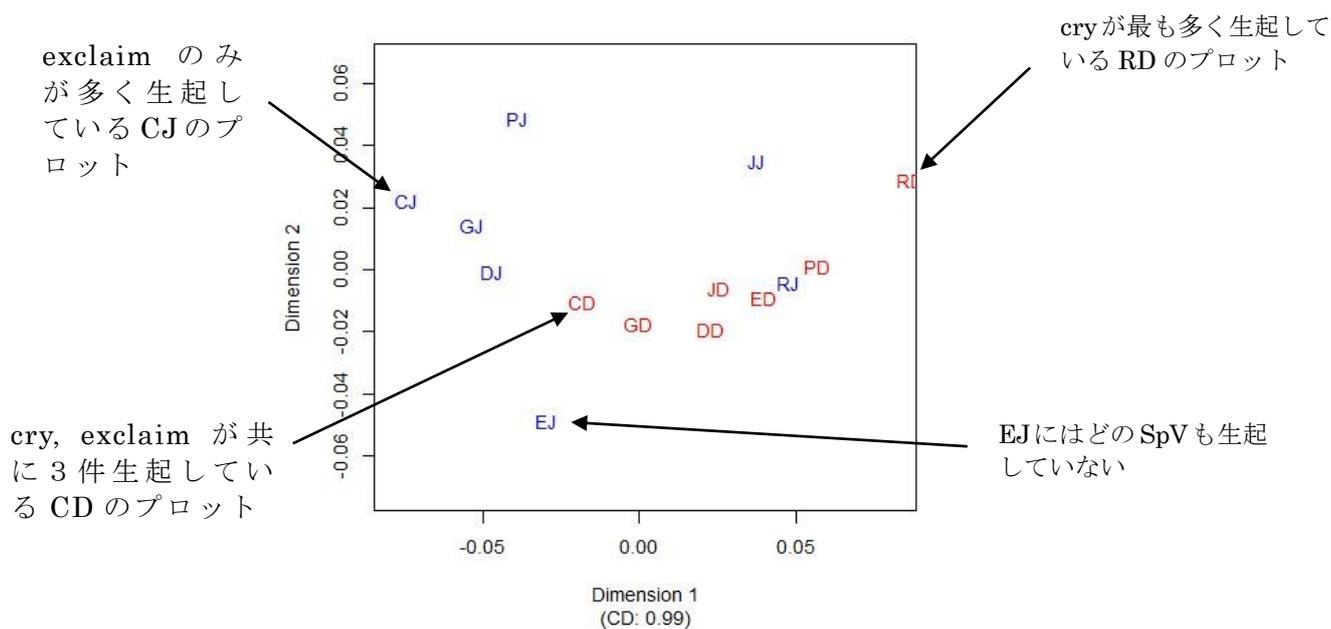


図 4.20 MDS プロット (人物別、C 区分「叫ぶ」)

表 4.33 人物別の ED・続編間の距離 (C 区分「叫ぶ」)

人物	ED-続編間の距離	生起する作品
Crisparkle	0.07	両作品
Datchery	0.07	
Edwin	0.08	ED のみ
Grewgious	0.06	両作品

Jasper	0.05
Puffer	0.11
Rosa	0.05

頻度ランク上位の2語、cry と exclaim は、Datchery, Grewgious, Puffer の発話には、ED で cry が、続編で exclaim が多用され、ED と続編で嗜好が逆転している。他方、Jasper, Rosa の発話には両作品とも cry が多用されている。Crisparkle は ED ではこの2語を同頻度用いているが、続編では exclaim のみを用いている。Edwin は ED では cry を用いているが、続編ではいずれの語も用いていない（Edwin の続編における SpV 生起数は少ない）。

頻度ランク3の ejaculate は、ED では危険を顧みず一人で突然やってきた Rosa にびっくり仰天した Grewgious が、“Lord bless me!” と発するシーンで用いられている。他方、続編には8つの発話に生起し、Grewgious と Datchery が、それぞれ Jasper を念頭に “Damn him!” と発する際に用いられている。また Grewgious のもう1つの発話、Jasper の3つの発話、および Puffer の2つの発話にも用いられているが、いずれも「〈祈りや感情のこもった言葉を〉不意に発する、突然叫び出す；(不意に)絶叫する⁹⁹⁾」という状況での発話ではなく、またその殆どに感嘆符はつけられていない。

4.3.4 「異議」に細区分したC区分 SpV

語意で「異議」に細区分した2語（10トークン）のSpV生起数のクロス集計表を表4.34に示す。

表 4.34 C 区分の SpV のうち「異議」を意味する語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
retort	4	3	0	1	8
remonstrate	1	0	1	0	2
計	5	3	1	1	10

この語意のSpVは「さえぎる」を意味するSpVと同様に、タイプ数、トークン数が共に少なく、また続編セクションへの生起数が各1件のみと少ないため、このクロス集計表を多変量

⁹⁹⁾ 『新英和大辞典（第6版）』（研究社）による。

分析して行う嗜好の差異評価は省略する。なおこの語意のSpVはEDで多用されている。

次に、この語意のSpVの使用傾向を人物別・作品別に分析する。人物別のクロス集計表を表4.35に示す。

表 4.35 C 区分「異議」の SpV の人物別生起数

SpV	Crisparkle		Datchery		Edwin		Grewgious		Jasper		Puffer		Rosa		計	
	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J
retort	0	0	0	0	2	0	1	0	3	1	0	0	1	0	7	1
remonstrate	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1
計	0	0	0	0	2	0	1	0	4	2	0	0	1	0	8	2

分析で得られた各人物・作品別セクションの MDS プロットを図 4.21 に、また各人物についての ED・続編間の距離を表 4.36 に示す。

2 SpV が共に生起しない 9 つのセクションが重なってプロットされている。

retort のみが 1 回生起するセクション GD, RD が重なってプロットされている。

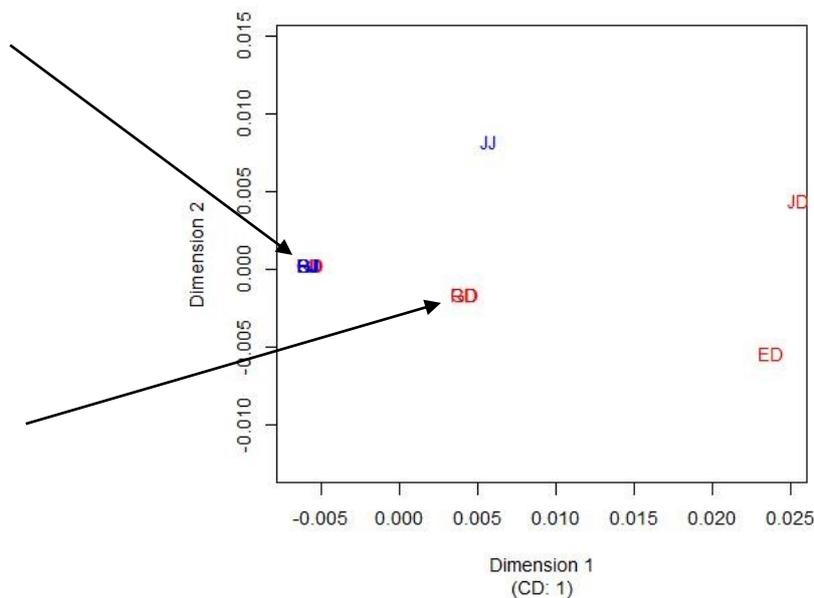


図 4.21 MDS プロット (人物別、C 区分「異議」)

表 4.36 人物別の ED・続編間の距離 (C 区分「異議」)

人物	ED-続編間の距離	生起する作品
Crisparkle	0	なし
Datchery	0	なし
Edwin	0.03	ED のみ
Grewgious	0.01	ED のみ
Jasper	0.02	両作品
Puffer	0	なし
Rosa	0.01	ED のみ

ED では Edwin, Grewgious, Jasper, Rosa が、計 8 つの場で「異議」を唱えており、うち 7 つで retort が、1 つで remonstrate が用いられている。続編では Jasper のみが retort と remonstrate を 2 つの場で用いている。remonstrate を用いるのは、ED・続編を通して Jasper 1 人である。

なお、この 2 つの SpV の Jasper の発話への生起数は、7 人 (実質 4 人) へのその 60% を占めているが、Jasper の全 SpV の生起数が Edwin のその 3 倍近くあるため、相対頻度に基づく距離では Edwin のそれを下回っている。

4.3.5 「その他」に細区分した C 区分 SpV

語意で「その他」に細区分した 7 語 (15 トークン) の SpV 生起数のクロス集計表を表 4.37 に、人物別のクロス集計表を表 4.38 に示す。

表 4.37 C 区分の SpV のうち「その他」を意味する語の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
hint	1	3	0	0	4
accost	1	1	1	0	3
urge	1	2	0	0	3
reflect	1	1	0	0	2
apologize	0	1	0	0	1
muse	1	0	0	0	1
plead	0	1	0	0	1
計	5	9	1	0	15

表 4.38 C 区分「その他」の SpV の人物別生起数

SpV	Crisparkle		Datchery		Edwin		Grewgiuous		Jasper		Puffer		Rosa		計	
	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J
hint	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	4	0
accost	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	1
urge	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0
reflect	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
apologize	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
muse	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
plead	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
計	4	0	1	1	0	0	1	0	4	0	0	0	4	0	14	1

この語意の SpV は ED には 7 タイプ語 (14 トークン) が 5 人の発話に生起するが、続編に生起するのは accost の 1 語 (1 トークン) のみであり、多変量分析による ED・続編間の嗜好の差異評価や、人物別の差異評価は省略する。

この SpV には微妙な／心的内面を表現する、ほのめかす (hint)、促す (urge)、熟考する (reflect, muse) を意味する語が含まれるが、これらは続編には生起していない。そのうち urge, reflect は Crisparkle と Rosa の発話のみに用いられている。

4.3.6 P に区分した SpV

発話の様態を示す「P」に区分した 12 語 (27 トークン) の SpV 生起数のクロス集計表を表 4.39 に示す。

表 4.39 P 区分 SpV の生起数

SpV	D0	D1	J0	J1	計
murmur	1	1	1	3	6
mutter	1	0	4	1	6
whisper	1	0	3	1	5
pout	2	0	0	0	2
bow	0	1	0	0	1
burst	1	0	0	0	1
echo	1	0	0	0	1
falter	0	1	0	0	1

jerk	0	1	0	0	1
shriek	1	0	0	0	1
stammer	1	0	0	0	1
thunder	0	0	0	1	1
計	9	4	8	6	27

この SpV は全体として *ED* と続編に同程度の頻度で生起しているが、タイプ語数は *ED* の 11 語に対して続編では 4 語と少なく、上位ランクの *murmur*, *mutter*, *whisper* の生起数が、*ED* では計 13 語中の 4 語にすぎないのに対して、続編では計 14 語中の 13 語を占めている。各分析結果を図 4. 22、図 4. 23 および表 4. 40、表 4. 41 に示す。

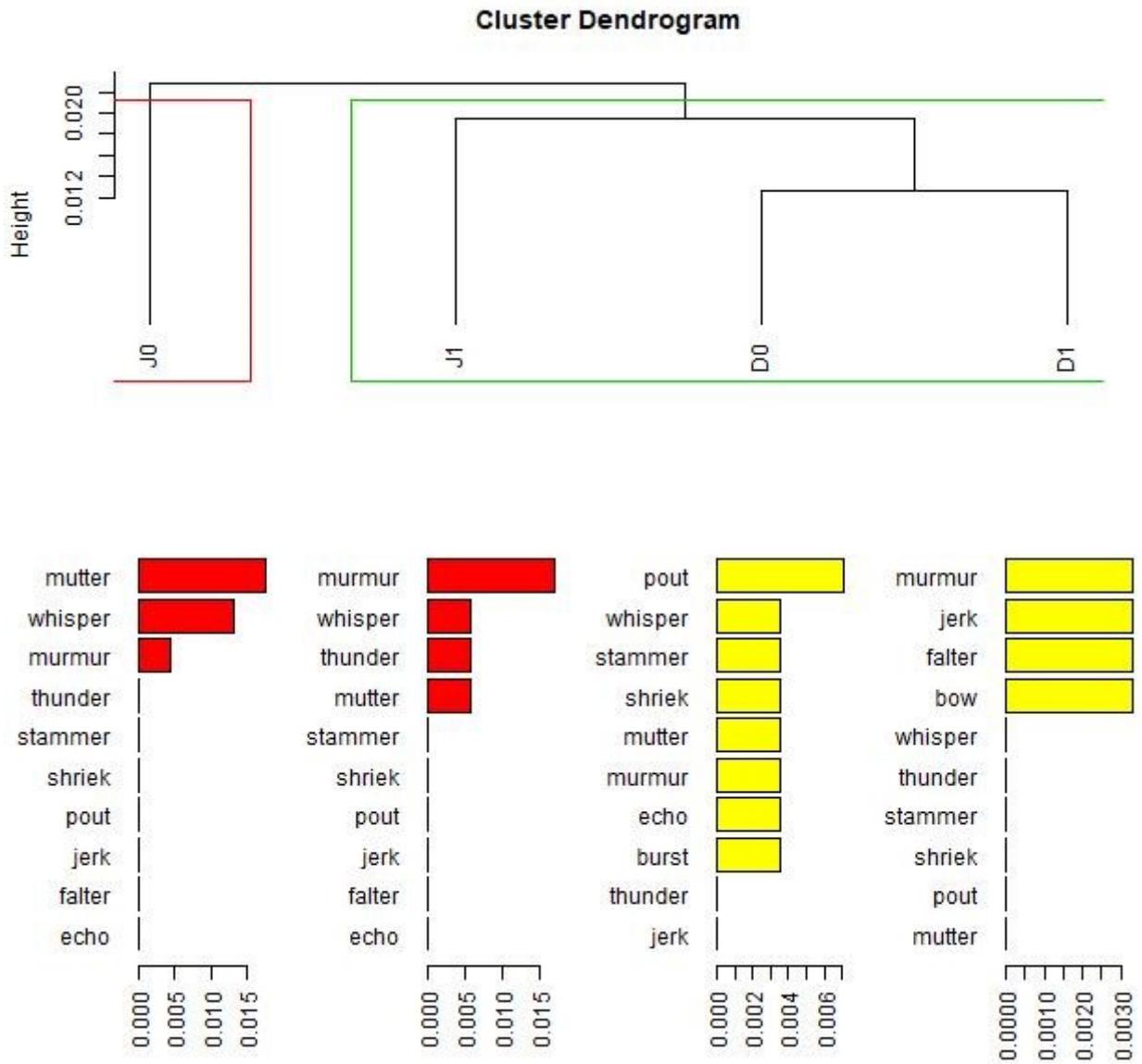


図 4.22 樹形図と生起数のバープロット (P 区分)

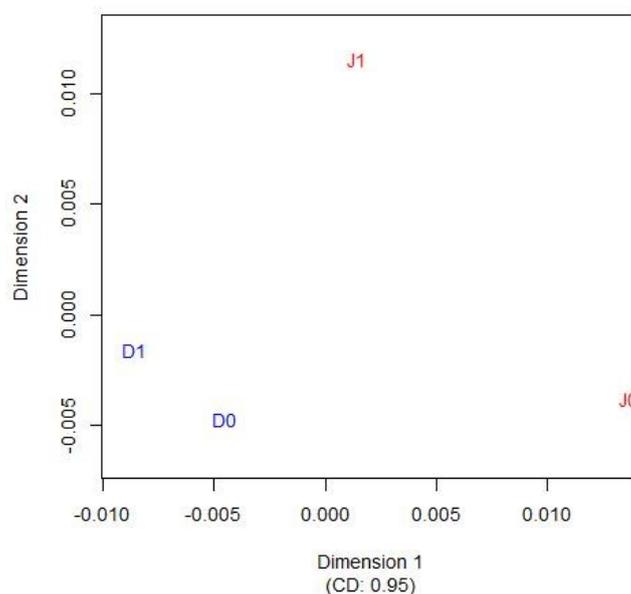


図 4.23 MDS プロット (P 区分)

表 4.40 各セクション間の距離行列 (P 区分)

	D0	D1	J0	J1
D0		0.013	0.020	0.018
D1	0.013		0.023	0.018
J0	0.020	0.023		0.020
J1	0.018	0.018	0.020	

表 4.41 作品内／作品間の距離とそれらの比 (P 区分)

作品内の最大距離	作品間の最小距離	距離比
0.020	0.018	0.90

樹形図では、異作品のセクションがサブクラスターを構成している。また、2 作品間のセクション間距離の最小値 0.018 より、続編のセクション間距離が 0.020 とやや大きいことから、作品間の語彙嗜好の異同性は確認できない。

次に、P 区分 SpV の使用傾向を人物別・作品別に分析する。人物別のクロス集計表を表 4.42 に示す。

表 4.42 P 区分 SpV の人物別生起数

SpV	Crisparkle		Datchery		Edwin		Grewgious		Jasper		Puffer		Rosa		計	
	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J	D	J
murmur	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	2	2	4
mutter	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	0	0	1	5
whisper	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	0	1	0	0	1	4
pout	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0
bow	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
burst	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
echo	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
falter	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
jerk	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
shriek	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
stammer	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
thunder	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
計	3	0	1	0	2	1	1	0	2	9	0	2	4	2	13	14

この SpV は、ED の生起数の計 13 語中 7 語が Rosa と Crisparkle の発話に、続編の計 14 語中 9 語が Jasper の発話に生起している。分析で得られた各人物・作品別セクションの MDS プロットを図 4.24 に、また各人物についての ED・続編間の距離を表 4.43 に示す。

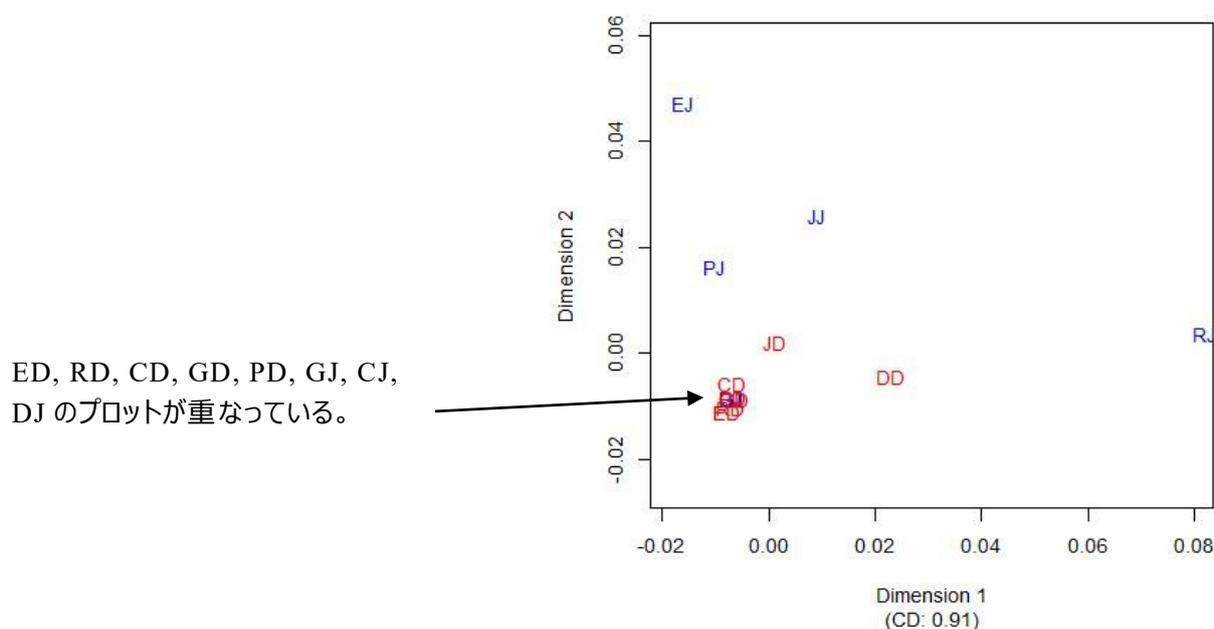


図 4.24 MDS プロット (人物別、P 区分)

表 4.43 人物別の ED・続編間の距離（P 区分）

人物	ED-続編間の距離	生起する作品
Crisparkle	0.02	EDのみ
Datchery	0.03	EDのみ
Edwin	0.07	両作品
Grewgious	0.01	EDのみ
Jasper	0.04	両作品
Puffer	0.03	続編のみ
Rosa	0.09	両作品

続編で最も多い Jasper の 9 語のうち 6 語が murmur と mutter で 6 つのシーンで用いている。他方、Jasper は ED で murmur を 1 つのシーンで用いているのみである。この 2 語の生起数が次いで多い Rosa の発話では、続編で Edwin との再会を果たしたシーンに murmur が 2 か所用いられている。また、ED では Rosa の発話に pout, burst, shriek といった感情的・衝動的な発話を伝達する SpV が用いられているが、続編ではどの人物にも用いられていない。

なお、Edwin と Rosa の SpV の生起数は、いずれも疎頻度では Jasper のそれより少ないが、この 2 人については全 SpV の生起数が、それぞれ Jasper のその 1/3、1/2 程度と少ないため、相対頻度では Jasper より大きくなり両作品間の距離も大きくなっている。

4.4 N、C、P 区分 SpV の分析結果

4.4.1 N 区分 SpV における語彙嗜好

人物の感情／個性表現との関係が薄いと思われる N 区分の SpV において、「N 全体」とそれを語意で「言う」、「続ける」、「答える」に細区分した SpV については、ED と続編をそれぞれ 2 分割したセクションの中に、嗜好が他作品のセクションと類似するセクションはなく、両作品の語彙の嗜好が異なることが確認された。他方、「尋ねる」と「その他」に細区分した SpV については、両作品のセクションの中に、嗜好が他作品のセクションと類似するセクションがあり異同性を確認できなかった（表 4.44）。なお、N 区分 SpV のタイプ語数は ED では 32、続編では 22 であった。

表 4.44 N区分 SpV における作品内／作品間の距離比およびグルーピング

区分／ 細区分	タイプ数	トークン数	作品内の 最大距離	作品間の 最小距離	距離比	グルーピング
N 全体	33	825	0.38	0.58	1.52	○
言う	9	402	0.16	0.24	1.48	○
尋ねる	3	78	0.05	0.02	0.30	×
続ける	5	98	0.05	0.11	2.21	○
答える	4	149	0.05	0.07	1.49	○
その他	12	98	0.05	0.03	0.64	×

注：「グルーピング」の列にて、「○」は樹形図を2つに区分したサブクラスターに含まれるセクションが、それぞれ同作品のセクションであることを、「×」は異作品のセクションが混っていることを示す（以下、同じ）。

各区分／細区分のケースについて、特徴的な生起傾向を示す SpV に着目して、多変量分析による評価を補足する。「N 全体」の SpV については、生起数の 70% を占める say, ask, continue, return, reply のうち、続編で say に次ぐ高頻出語の continue が、ED では上位語ランク 23 にすぎないなど、嗜好が両作品で異なっている。

「言う」を意味する SpV は続編より ED に約 2.6 倍多く生起し、2 作品で共に頻度ランク 1 の say は、ED の全生起数の 93% を、続編の 78% を占めている。ランク 2 の remark と say との生起数の差は大きく、ED では say の 2%、続編では同 10% にすぎない。それに続くランク 3、4 の語は、ED では observe, tell、続編では address, read と異なるなど、嗜好が両作品で異なっている。

「尋ねる」を意味する SpV については、ED・続編ともに、ask が多用され、次いで inquire が用いられており、生起傾向は類似している。

「N 全体」で say に次ぐ頻度で生起する continue は、続編では「続ける」を意味する SpV の最上位ランクで生起数の約 80% を占めているが、ED では 6% に過ぎない。他方、ED で 32% を占め最上位ランクの pursue は、続編では 3% に過ぎないなど、嗜好が両作品で異なっている。

「答える」を意味する SpV は、上位ランクの 3 語 (return, answer, reply) で、ED の 92%、続編の 84% を占めるが、それらのランク順は両作品で異なっている。最上位ランク語は ED では return が 48% を占め、続編では reply が 41% を占めるなど、嗜好が両作品で異な

っている。

「その他」の SpV のうち上位の 3 語 (repeat, add, think) は、ED における全生起数の 61% を占め、それぞれほぼ同比率で生起している。他方続編においては全生起数の 86% を占め、うち add が突出して 68% を占めている。また、続編のタイプ語数は ED のその約半分である。よって語彙の嗜好は両作品で異なっていると考えられる。

4.4.2 C/P 区分 SpV における語彙嗜好・人物造型

人物の感情／個性表現との関係が濃いと思われる C 区分の SpV において、「C 全体」とそれを語意で「叫ぶ」に細区分した SpV については、ED と続編をそれぞれ 2 分割したセクションの中に、嗜好が他作品のセクションと類似するセクションがなく、両作品の語彙の嗜好が異なることが確認された。他方、「さえぎる」と「異議」に細区分した SpV については、タイプ数、トークン数が共に少なく、また生起数がごく少ないセクションがあるため、また、「その他」に細区分した SpV については続編に殆ど生起しないため、共にセクション間の語彙嗜好による異同性評価は省略した。発話の様態に関わる P 区分の SpV については、両作品のセクションの中に、嗜好が他作品のセクションと類似するセクションがあり、異同性を確認できなかった (表 4. 45)。なお、ED の C 区分 SpV のタイプ語数は 14、続編のそれは 8 であり、P 区分 SpV ではそれぞれ 11、4 であった。

表 4. 45 C/P 区分 SpV における作品内／作品間の距離比およびグルーピング

区分／ 細区分	タイプ数	トークン数	作品内の 最大距離	作品間の 最小距離	距離比	グルーピング
C 全体	14	133	0.028	0.055	1.95	○
さえぎる	2	18	-	-	-	-
叫ぶ	3	90	0.019	0.042	2.29	○
異議	2	10	-	-	-	-
その他	7	15	-	-	-	-
P 全体	12	27	0.020	0.018	0.90	×

語意で細区分した各ケースについて、特徴的な生起傾向を示す SpV に着目して評価を補足する。「さえぎる」を意味する 2 つの SpV は、ED には *interpose* が、続編には *interrupt* が多く生起している。また *Crisparkle* と *Jasper* の語彙使用は ED・続編間で異なり、ED では間接的な語意の *interpose* で「さえぎる」のに対し、続編では直接的な語意の *interrupt* で「さえぎって」いる。また、*Datchery*, *Grewgious*, *Puffer* は ED で「さえぎる」ことはないが、続編では「さえぎって」いる。*Rosa* は逆に ED で「さえぎって」いるが、続編では「さえぎる」ことはない。これらは作品間で人物造型が相違していることを示すものと考えられる。

「叫ぶ」を意味する SpV は ED では *cry* が多く用いられるのに対し、続編ではそれに加えて、格式ばった *exclaim* がより多く用いられている。ED には *Crisparkle* を除いて¹⁰⁰*cry* が多用されている。他方続編では、*Crisparkle*, *Datchery*, *Grewgious*, *Puffer* の発話に *exclaim* が、*Jasper*, *Rosa* のそれに *cry* が、それぞれより多く用いられている。これらの人物のうち、*Crisparkle* はクロイスタラム聖堂小参事会員、*Datchery* はクロイスタラムの町に現れた白髪頭の老紳士、また *Grewgious* は *Rosa* の後見人で法律顧問・地代受取代行業に従事しており、いずれも社会的地位をうかがわせる年配者である。他方、*Jasper* は音楽教師・聖堂の聖歌隊長であるが *Crisparkle* より若年であり、*Rosa* は女子寄宿学院の生徒である¹⁰¹。ここから続編における *cry* と *exclaim* の選択は、人物の社会的地位・年齢に合わせた人物造型を意図したものと考えられる。また、突発的な発話であることを印象づける *ejaculate* は、ED では危険を顧みず一人で突然やってきた *Rosa* にびっくり仰天した *Grewgious* が、“*Lord bless me!*” と発する 1 つの場面で用いられているのみである。他方、続編には 8 つの発話に生起し、*Grewgious* と *Datchery* の、それぞれ *Jasper* を念頭にした “*Damn him!*” の発話に用いられており、いずれも感嘆符がつけられている。他の 6 つの発話は「〈祈りや感情のこもった言葉を〉不意に発する」という状況でのものではなく、またその殆どに感嘆符はつけられていない。従って続編において *ejaculate* が選択される発話の状況は ED より広いと考えられる。なお ED において *Grewgious* と *Jasper* は、いずれも冷静で感情に流されにくい人物として描かれているが、続編で *Edwin* 失踪への嫌疑が *Jasper* に向い、追求する側の *Grewgious* と、される側の *Jasper* の緊張が高まっていく中で、*Grewgious* の 2 つの発話と *Jasper* の 3 つの発話に *ejaculate* が用いられていることは、人物造型の相違をうかがわせる。

¹⁰⁰ *Crisparkle* では *cry* と *exclaim* が同数である。

¹⁰¹ *Dickens* (1870 小池訳 2014) の登場人物欄を参考にした。

「異議」を意味する SpV は ED で多用されていて、Edwin, Grewgious, Jasper, Rosa が、計 8 つの場で「異議」を唱えているが、続編では Jasper が 2 つの場で唱えているのみであり、人物造型の相違をうかがわせる。

「その他」に細区分した SpV には、微妙な／心的内面を表現する語を含むが、続編には 7 語中 1 語しか用いられていない。続編の人物描写は平板に感じられるが、その一因になっていると考えられる。また、urge, reflect は Crisparkle と Rosa の発話のみに用いられており、この 2 人の人物造型の一部になっていると考えられる。

P 区分の SpV は ED と続編に同程度の頻度で生起しているが、タイプ語数は ED の 11 語に対して続編では 4 語と少なく、また ED のトークン数の計 13 語中 7 語が Rosa と Crisparkle の発話に、続編の計 14 語中 9 語が Jasper の発話に生起している。続編で追い詰められた Jasper は、このうちの 6 語 (murmur, mutter) を 6 つのシーンで用いている。他方、Jasper は ED では murmur を 1 つのシーンで用いているのみである。この 2 つの SpV の生起数が次いで多い Rosa の発話では、続編で Edwin との再会を果たしたシーンに murmur が 2 か所用いられている。次に、ED では Rosa の発話に pout, burst, shriek といった感情的・衝動的な発話を伝達する SpV が用いられているが、続編で Jasper から逃れる生活の中で精神的に成長した Rosa には、また他の人物にもこれらの SpV は用いられていない。これらの違いは語彙嗜好の差異とともに、Jasper と Rosa の人物造型の、両作品における相違をうかがわせるものと考えられる。

4.5 評価結果のまとめ

(1) N 区分 SpV の異同性

人物の感情／個性表現との関係が薄く、語彙の選択が作者の嗜好や言語習慣によると考えられる N 区分 SpV のうち、「N 全体」と、それを「言う」、「続ける」、「答える」、「その他」に語意で細区分した SpV で、ED と続編における語彙使用 (嗜好) が異なっていた。例えば「続ける」の語意に、続編では continue が圧倒的に多く用いられ約 80% を占めていたが、ED では 6% を占めるに過ぎず、他方、ED で最も多く 32% を占める pursue は、続編では 3% を占めるに過ぎなかった。他方、「尋ねる」の語意の SpV については、両作品とも ask が多用される中で、次いで inquire が用いられ嗜好は類似していた。

(2) C 区分 SpV の異同性

人物の感情／個性表現との関係が濃いと思われる C 区分 SpV のうち、「C 全体」とそれを語意で「叫ぶ」に細区分した SpV については、両作品における語彙の嗜好が明らかに異なっていた。「叫ぶ」の語意の SpV には、ED で殆どの人物の発話に cry が多用されていたが、続編では Crisparkle, Datchery, Grewgious など社会的地位のある年配者には exclaim が、若年者である Jasper, Rosa には cry が多用され、人物の社会的地位・年齢による使い分けがうかがえた。また ejaculate は ED で Grewgious の 1 つの発話のみに用いられていたが、続編では Grewgious と Jasper の発話に多用されていた。

他の語意の SpV についても、語彙選択に差異が見られた。例えば「さえぎる」の語意には、Crisparkle と Jasper の発話に、ED では間接的な語意の interpose を、続編では直接的な語意の interrupt を用いていた。また Rosa は、ED で「さえぎって」いるが、続編で「さえぎる」ことはない。ED では Grewgious, Crisparkle, Jasper は、いずれも冷静な人物として描かれているが、続編では Edwin 失踪への嫌疑が Jasper に向う中で、追求する側の Grewgious, Crisparkle と、される側の Jasper の緊張が共に高まっており、これらの語彙選択が両作品における人物造型の一部になっていると考えられる。なお「その他」に細区分した SpV には、微妙な／心的内面を表現する語を含むが、続編には 7 語中 1 語しか用いられていない。続編の人物描写は平板に感じられるが、その一因になっていると考えられる。

(3) P 区分 SpV の異同性

発話の様態に関わる P 区分 SpV は両作品に同程度生起し、ED の 13 語中 7 語が Rosa と Crisparkle の発話に、続編の 14 語中 9 語が Jasper の発話に用いられている。続編で追い詰められた Jasper は、つぶやい (murmur/mutter) たり、ささやい (whisper) たりすることが多くなり、murmur/mutter を 6 つのシーンで用いているが、ED では murmur を 1 つのシーンで用いているのみである。また、続編で Jasper から逃れる生活の中で精神的に成長した人物として描かれている Rosa は、ED のように口をとがらせ (pout) たり、感情的・衝動的に話し (burst, shriek) たりすることがなくなる。これらの語彙選択は、両作品における Jasper や Rosa の人物造型の相違をうかがわせるものと考えられる。

5. 語りの時制の異同性

Dickens 作品には章全体またはその一節が現在時制で語られている作品があり、その背景／意図について研究されてきた (Quirk, 1961; Carlisle, 1971; Beckwith & Reed, 2002)。ED¹⁰²は章によって語りの時制が異なっていて、それぞれの章の中での時制の斉一性は高いが、現在時制語りの章の一連の会話の中で、発話を伝達する SpV¹⁰³が一時的に過去時制にシフトし、逆に過去時制語りの章の中で、同様に現在時制にシフトする箇所がある。本章ではこの一時的な時制シフトの様態を分析し、続編¹⁰⁴におけるそれと比較する。そのため先ず語りの時制に関する先行研究を概観し、次に第3章で構築した SpV のデータベースを活用して、両作品の中で語りの時制がシフトする箇所を確認する。そして本章では、前章までで用いた統計的な分析を離れ、シフトした箇所を含む一連の会話シーンのテキストを、先行研究による知見をベースとして精読し、シフトによる効果、先行研究で確認されている現在時制語り用法の使用状況などにつき分析し、それらの両作品における異同性を評価する。

5.1 現在時制による語り

小説では全知の語り手を想定して過去時制で語られることが多いが、現在時制で語られる場合、何らかの文体的意味が含まれると考えられる。以下の節では主に現在時制語りの特質について先行研究を概括する。

5.1.1 現在時制語りの基本的な用法

Casparis (1975) は現在時制語りを、current report と historical Present (以下、本論ではHP と略す) に大別している。current report はラジオのフットボールの試合中継のように、i) 知覚された出来事とその自然な順序で、ii) その出来事について思いめぐらす時間のないまま (従って思いめぐらすことなく)、記述されるものである。従って出来事が非論理的に提示されたり予測されたりすることはなく、また、語りに突飛な記述や、過度に手の込んだ構文を選択することは、current report の特徴とされる迫真性を損なうことになる¹⁰⁵。

¹⁰² 本論では Dickens の *The Mystery of Edwin Drood* を ED と略している。

¹⁰³ 登場人物の発話や行為の様態を伝達する動詞の本論における略称である。

¹⁰⁴ T. P. James による ED の完全版 (Dickens [& James] (1873) の続編部分を本論では続編と略している。

¹⁰⁵ ただし、語られる出来事のスピードが遅くなるにつれて緊張が減少する一方で、current

他方HPは、過去の出来事が現在時制で表現されるものであり、出来事が非論理的に提示／予測されることに加え、そこには i) 時間的空間的制約を超えた (ubiquity) 記述、ii) 洞察力 (clairvoyance) に基づく記述が含まれるとし、それぞれ次のように例示している。

i) のubiquityについて、current reportでは語り手が知覚する出来事の順序で語られることから、語りの時と場所に論理的な制約があるのに対し、以下のHPとされる一節では、語り手は、ありとあらゆる場所の霧を並列的に描写していて、時間的空間的制約を超えた記述になっている。

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river, where it rolls defiled among the tiers of shipping Fog on the Essex marshes, fog on the Kentish heights ... (*Bleak House*, ch. I / Casparis, 1975, p. 48)¹⁰⁶

ii) の clairvoyance は思いめぐらす力であって、小説の語り手には当然のものとして備わっているものだが、それに基づいて記述されたテキストは、もはや current report ではなくなる。以下はその観点で HP とされる一節である。

As they sit listening to the solemn swell, the confidence of last night rises in young Edwin Drood's mind, and he thinks how unlike this music is to that discordance. (*Edwin Drood*, ch. III, p. 29 / Casparis, 1975, pp. 48f)¹⁰⁷

5.1.2 non-narrative な現在時制用法

Casparis (1975) は、non-narrative な現在時制用法として3種類を挙げ、以下のように述べている。その1つは、Carlisle (1971) が現在時制語りの機能のひとつとした authorial comment で、作者／語り手が全知の立場で a) 意見を述べ(例:人間とは・・・というものだ)

report の範疇とされる中での、記述方法の選択肢 (descriptive choice) や詩的变化 (poetic variation) の自由度は増加しうる、とも述べている。

¹⁰⁶ Dickens (1852a).

¹⁰⁷ Dickens (1870a).

たり、 b) 読者に語りかけたりする際に用いられる現在時制表現である¹⁰⁸。

a. almost all men in their degree, some time or other, cherish very nearly the same feelings toward the ocean with me. (*Moby Dick*, ch. I/Casparis, 1975, p. 129)¹⁰⁹

b. Let the most absent-minded of men be plunged in his deepest reveries - stand that man on his legs, set his feet a-going, and he will infallibly lead you to water, if water there be in that region. (ibid.)

他の2つは彼が descriptive Present と呼ぶ、 a) 作品に出てくる場所の情景描写などの Descriptive Present as Background と、 b) as につづく直喩の部分（例：～のように）の Descriptive Present in Similes であり、いずれも現在時制で表現される。

a. In summer time, the town [New Bedford] is sweet to see; full of fine maples - long avenues of green and gold. And in August, high in air, the beautiful and bountiful horse-chestnuts, candelabra-wise, proffer the passer-by their tapering upright cones of congregated blossoms. (*Moby Dick*, ch. VI/Casparis, 1975, p. 129)

b. ... the flying turn [of the harpoon-line] caught him round the neck, and voicelessly *as Turkish mutes bowstring their victim*, he was shot out of the boat, ere the crew knew he was gone. (*Moby Dick*, last chapter; italics mine/Casparis, 1975, p. 129)

これら3つの用法は、いわゆる「永続性」とか「普遍の真実」を表現するのに用いられる現在時制形の一つに区分される。

5.1.3 その他の現在時制用法

その他の現在時制用法として、Casparis (1975) は、citative Present と“historical” Present

¹⁰⁸ 引用文の項番 a, b は先行する論述の a), b) に対応している（以下、同じ）。

¹⁰⁹ Melville (1851).（以下、当節の引用で同じ）

をとり上げ、以下のように述べている。

citative Present は、例えば聖賢のことばの引証を現在時制で行うケースであり、その場合、引用した内容が自分の主張と同じであること、つまり、その内容で自分の主張を裏打ちしているニュアンスとなる。他方、過去時制で行うと、引用した内容の正当性が限定されていること、つまり「誰それはこう言った、(しかし私はこう言う)」のニュアンスとなる。

“historical” Present¹¹⁰は、歴史的著述にHPを用いることである。「歴史の父」と呼ばれ、またその著述に初めて現在形を用いたことから “historical” Presentの父とも呼ばれる Herodotus、そして特にThucydidesは、神話と歴史を区別した最初の歴史家と言われている。神話が想像的な説話としての真実であるのに対し、歴史と年代記は経験的な真実であって現在形と親和性がある。ただ、同じ歴史的事実を題材にしても、一連の出来事が淡々と年代順に並べられ、因果関係や感情表白のない、事実の記録として提示される、current report やcamera-eyeのスライドショー効果に似た作品にもなれば、以下に引用したフランス革命を材料にした力作*French Revolution*のように、作者の感情が入り込んだ作品にもなる。

So hangs it, dubious, fateful, in the sultry days of July. It is the passionate printed advice of M. Marat, to abstain, of all things, from violence. Nevertheless the hungry poor are already burning Town Barriers, where Tribute on eatables is levied; getting clamorous for food. (*French Revolution*, p.152/Casparis, 1975, pp. 138f)¹¹¹

5.1.4 Dickens における現在時制語り

Quirk (1961) は Dickens の言語使用における特徴のひとつに「構造的 (structural) な語彙使用」を挙げ、例として「ED の語りにリズムカルと言えるほど交互に、現在時制と過去時制が用いられている」ことを指摘している。

Carlisle (1971) は、*Dombey and Son* (1846-48) は5つの章の全体と6つの章の一部が、現在時制にシフトして語られていることを指摘し、そうすることで、作中の出来事への読者

¹¹⁰ 過去の出来事が現在時制で表現される historical Present (HP)と区別される (Casparis, 1975)。

¹¹¹ Carlyle (1837)。

の興味を高め、また、丁度演劇の観客がその世界を経験するように、読み進めるにつれ提示される小説世界に、読者が参加することを求めていると述べ、以下の例を挙げている。

- ・ 主人公のひとりである Paul Dombey の死によって、読者が物語への興味を失うことを恐れ、続く号 (number) を現在時制語りにして読者の関心を引き付けている。
- ・ 連載出版 (serial publication) の形式で発表された *Dombey and Son* において (出版単位の) 最後の章を現在時制語りにする事で、続作への読者の興味を喚起している。

同様なケースは後の作品 *A Tale of Two Cities* (1859) にもみられるとし、以下の例を挙げている。

- ・ 先行する号の印象深い人物 (処刑されようとする Carton) から、続く号の逃亡する Darnay たちに読者の関心に移そうとするが、それが容易でないとして、続く号の語りを現在時制にシフトしている。

さらに *Dombey and Son* では、人物によって語る時制を使い分けることで、人物への読者の興味を操作しているとし、Dombey, Mrs. Skewton など強情で片意地のはった人物は現在時制で、Florence など多くの読者の共感が得られる人物は、一般的な過去時制で語られる例を挙げている。

Beckwith & Reed (2002) は、Dickens は現在時制の語りを *Bleak House* (1852), *Our Mutual Friend* (1864), *ED* (1870) の3作品で広範に用いているとし、以下のように論じている。i) *Bleak House* では3人称の語り手が、預言者エレミアのような権威でもって現在時制で語り、1人称過去時制で、つつましやかに主観的に語る Esther Summerson の語りとは対照をなしている。ここでは、Esther の自叙伝的な語り、非自叙伝的で非主観的とされる過去時制モードを用い、また、客観的で史実指向の3人称の語り手が、主観的とされる現在時制モードを用いている。ii) *Our Mutual Friend* は全体として3人称過去時制語りだが、章によっては現在時制で語られ、そこでは、*Bleak House* と異なって、同じ語りの声が全知の過去時制から、表層をシネマ的に探査する現在時制へとシフトしている。iii) *ED* で時制のシフトは新たなレベルとなって、*Our Mutual Friend* のように、ひとつの語りの声が過去時制と現在時制の間でシフトするものの、現在時制の章が表層に留まることなく深層に踏み

込む。例えばシネマで、voice-over とか象徴的表現とか、心的状態へのフェードインなどで、夢や願望のような表出されない心的行為の状態を明らかにするような描写である。

Beckwith & Reed (2002) はまた、*Bleak House* と *ED* の現在時制語りにおける焦点化人物を以下のように対比している。*Bleak House* における、道路掃除人 Jo が死んだすぐ後の、現在時制語りの以下の一節は、人物に焦点化していない¹¹²。

The light is come upon the dark benighted way. Dead!

Dead, your Majesty. Dead, my lords and gentlemen. Dead, Right Reverends and Wrong Reverends of every order. Dead, men and women, born with Heavenly compassion in your hearts. And dying thus around us every day. (*Bleak House*, ch. 47 / Beckwith & Reed, 2002, p. 308)¹¹³

他方、現在時制で語られる *ED* の最初の章の冒頭は、大聖堂の情景で始まり、そこに割り込んでいる槍先からトルコの盗賊、そしてサルタンの行列、1 万もの三日月形の刀、白い象の列といった断片的な意識が描写される。ここで語り手の所在は、Jasper の頭の中とも他の時空とも考えられる。語り手は Jasper が見ている夢が何か知ることができる。Jasper が夢をみているときでも、彼を焦点化人物と理解すべきだろうか？そうではなく、彼が見ているものは語り手をとおして伝えられ、それを焦点化と考えることになる。その描写に続き、アヘン窟での John Jasper の様子が以下のように語られる。

Shaking from head to foot, the man whose scattered consciousness has thus fantastically pieced itself together, at length rises, supports his trembling frame upon his arms, and looks around. He is in the meanest and closest of small rooms. (*ED*, p. 1 / Beckwith & Reed, 2002, p. 308)¹¹⁴

ここで焦点化は意識が戻った Jasper に移り、彼は Puffer やアヘンを吸う中国人や水夫を嫌悪しつつ眺める。

¹¹² この語りの焦点化人物は、登場人物の誰かではなく、作者 (inferred author) であると考えられる。

¹¹³ Dickens (1852b).

¹¹⁴ Dickens (1870b).

さらに第 14 章では以下のように、Drood が失踪する前夜の出来事を描写しているが、ここでは語り手は Drood が何を考えているか知っているかのようである。

Edwin Drood passes a solitary day. Something of deeper moment than he had thought has gone out of his life, and in the silence of his own chamber he wept for it last night. Though the image of Miss Landless still hovers in the background of his mind, the pretty little affectionate creature, so much firmer and wiser than he had supposed, occupies its stronghold. (*ED*, p. 124/Beckwith & Reed, 2002, p. 309)¹¹⁵

このように洞察力を発揮して人物の心を読む現在時制の語りを、Casparis (1975) は *current report* でなく HP に区分したが、Beckwith & Reed (2002) は、この一節の描写は過去の出来事を現在時制で回想しているのではなく、進行中の経験が現在時制語りの中に凝縮されているもの、ととらえ、HP ではなく *simultaneous narration* (*current report* に相当する Genette (1972/1985) の用語) の凝縮版 (*compacted version*) と捉えている。

5.2 ED と続編における語りの時制

5.2.1 ED と続編の各章における SpV の時制

3.1 節で SpV を ED と続編から抽出し、その生起する章、時制などのデータとともにデータベースを構築した。表 5.1 はそのデータベースから、両作品の各章における SpV の生起数を時制別に抽出したものである。なお、3.1 節で抽出した SpV は以下の 73 語である。

accost, add, address, announce, answer, apologize, ask, assent, begin, bellow, bow, burst, call, caution, conclude, continue, cry, declare, demand, echo, ejaculate, emphasize, entreat, exclaim, explain, expostulate, falter, go, growl, hint, implore, inquire, interpose, interrupt, jerk, laugh, murmur, muse, mutter, observe, plead, pout, proceed, proclaim, pursue, read, reflect, rejoin, remark, remonstrate, repeat, reply, represent, resume, retort, return, roar, say, shriek, sigh, soliloquize, speak, stammer, stipulate, stop, submit, suggest, tell, think, thunder, urge, utter, whisper

¹¹⁵ Dickens (1870b).

表 5.1 ED と続編の各章における時制別 SpV 数

ED				続編			
章 ¹¹⁶	SpV 数	過去時制	現在時制	章 ¹¹⁷	SpV 数	過去時制	現在時制
1	4	0	4	21	14	3	11
2	29	1	28	22	18	1	17
3	34	0	34	23	37	9	28
4	22	0	22	24	34	29	5
5	32	0	32	25	38	30	8
6	35	35	0	26	32	21	11
7	38	38	0	27	32	5	27
8	40	2	38	28	31	10	21
9	51	51	0	29	29	10	19
10	58	57	1	30	33	3	30
11	66	65	1	31	20	6	14
12	46	1	45	32	45	4	41
13	20	20	0	33	61	12	49
14	29	0	29	34	44	3	41
15	32	32	0	35	18	7	11
16	32	32	0	36	71	8	63
17	77	77	0	37	33	9	24
18	49	49	0	38	28	2	26
19	16	1	15	39	23	3	20
20	44	44	0	40	30	3	27
21	42	42	0	41	19	4	15
22	83	83	0	42	19	2	17
23	31	0	31	43	3	0	3
計	910	630	280	計	712	184	528
章の数		13	10	章の数		3	20

注：各章で主体的な時制の側の生起数にマーキングを付している。

ED について Beckwith & Reed (2002) は、第 6、7、9～11、13、15～18、20～22 の計 13 章の語りは過去時制、他の章は現在時制と述べており、表 5.1 はその区分と一致している。

¹¹⁶ James の完全版の原典部分の章区分は Dickens の ED のそれと相違していて、ED の 4-5、6-7、19-20 の各 2 章が合体している。そのため、最終章の章番号は 23 ではないが、当表の章区分は原典に従っている。

¹¹⁷ James の完全版では、原典部分の最終章は第 20 章であり、続編の章番号は 21 から始まる。以下、続編の章番号は ED のそれと区別するため、「続編 21 章」のように記す。

また *ED* では、各章の SpV の時制が、その章で主体的な時制と異なるケースは、ごく例外的で少数にとどまっている。

他方続編では、過去時制語りの章が計 3 章、現在時制語りの章が計 20 章で、圧倒的に現在時制語りの章が多い。また Quirk (1961) が *ED* について指摘した、現在時制と過去時制の交互使用が続編には見られない。さらに続編の各章には、その章で主体的な時制と異なる時制の SpV が平均で約 1/4 含まれており、*ED* より章内での時制の斉一性が低い。

5.2.2 *ED* における語りの時制

Quirk (1961) は、*ED* の各章における語りの時制に、現在時制と過去時制が交互に用いられていると指摘しているが、その選択要因には言及していない。*ED* は連載形式で 6 回に分けて出版され、そのうち 4 月、6 月、9 月¹¹⁸の掲載分の最後の章が現在時制になっている。その時制選択要因のひとつが「読者の続作への興味を維持するため、連載形式での出版単位の最後の章を、現在時制で語る (Carlisle, 1971)」ことであった可能性がうかがえる (表 5.2)。

表 5.2 *ED* 各章の serial publication における掲載月と語りの時制

Chapman & Hall. 1870 ¹¹⁹		
章	章タイトル	掲載月
1	The Dawn	Apr.
2	A Dean, and a Chapter also	
3	The Nuns' House	
4	Mr. Sapsea	
5	Mr. Durdles and Friend	
6	Philanthropy in Minor Canon Corner	May
7	More Confidences than One	
8	Daggers Drawn	
9	Birds in the Bush	
10	Smoothing the Way	June

¹¹⁸ 9 月が実際には最終号になったが、未完作品であるため 4 月、6 月と同様に扱った。

¹¹⁹ <http://www.droodinquiry.com/case-review/one> の掲載月が記載された、各冊子の表紙画像で確認した。(2023.2 現在リンク切れ)

11	A Picture and a Ring	
12	A Night with Durdles	
13	Both at their Best	July
14	When shall these Three meet again?	
15	Impeached	
16	Devoted	
17	Philanthropy, Professional and Unprofessional	Aug.
18	A Settler in Cloisterham	
19	Shadow on the Sun-dial	
20	A Flight	
21	A Recognition	Sept.
22	A Gritty State of Things comes on	
23	The Dawn again	

注：章タイトルにマーキングを施した章は現在時制語りである。

5.3 時制シフトの分析方法

5.3.1 分析対象とする章

本論で分析するのは、各章において主体的な時制が章によって相違する要因ではなく、一連の会話の流れの中で、SpV が主体的な語りの時制と異なる時制にシフトする様態とその要因である。表 5.1 のように、ED では第 2、8、12、19 章は現在時制が主体の章であるが、ごく少数の過去時制の SpV が生起している。第 10 章は逆に、過去時制が主体の章であるが、ごく少数の現在時制の SpV が生起している¹²⁰。続編については圧倒的に現在時制語りの章が多く、また章内の SpV の時制の斉一性が ED より概して低い。そこで主体となる時制が現在時制の章と過去時制の章から数章を選択し、始めの第 21、22、24 章を分析対象とする¹²¹。

¹²⁰ 第 11 章も 1 つの SpV が現在時制にシフトしているが、これはシェイクスピア『ウインザーの陽気な女房』の人物ピストルによる、盗みを「賢い人間なら引っぱり（コンヴェイ）と呼ぶ（第一幕第三場）」の一節 “convey, the wise it call,” as Pistol says. の引証部分であり、citative Present (Casparis, 1975) と考えられ分析は省略する。

¹²¹ 第 5 章の分析には、Dickens [& James] (1873) のテキストを用いている。

5.3.2 分析手順

(1) 会話をシーン別に区分

各会話シーンの文脈を把握するため、3.1 節で構築したデータベースに含まれない、SpV を欠いた発話（自由直接発話）や、発話の間に挿入された語りも含め、分析対象の章に含まれる会話を、「交わされる場所・参加する人物・話題」が同じシーンでグループ化する。

(2) 時制がシフトする箇所を確認

各会話シーンにおいて SpV や語りの時制が、その章で主体的な時制からシフトしている箇所を確認する。なお、過去の出来事に言及している箇所や仮定法が用いられている箇所などには過去時制の動詞の形が用いられるが、それらについては分析対象としない。

(3) 時制シフトの様態と要因を分析

各会話シーンを精読し、時制がシフトする箇所におけるシフトの様態と要因を、5.1 節に概括した時制についての所論をベースとして分析する。

5.4 時制シフトの分析

5.4.1 ED の第 2 章における過去時制へのシフト

ED の第 2 章は全体として現在時制で語られている。ところが、語りの時が他の発話と同じであるにもかかわらず、一部の発話が過去時制で伝達されているケースがみられる。それは Cloisterham 大聖堂の外で、Dean, Crisparkle, Tope の 3 人が、そこで持ち上がった Jasper の健康とその甥の Edwin の来訪を話題に話しているシーンである¹²²。

そのシーンで先に話題となるのは Jasper の健康である。Dean は Tope の話を聞いて Jasper の健康状態が悪いことを知るが、その間の会話が、Crisparkle による Tope の言葉づかいについての注意と、それへの Tope と Dean の反応を交えつつ現在時制で語られている。ここで注目するのは、唯一過去時制で伝達されている以下の発話である。

¹²² Dean は Cloisterham 大聖堂の主席司祭で、本作品の中では職名でのみ呼ばれている。Crisparkle は Dean を補佐する聖職者、Tope は大聖堂の案内係／用務員、Jasper は音楽教師／大聖堂の聖歌隊長、Edwin は Jasper の甥で Rosa の許嫁である (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

“And Mr. Jasper has gone home quite himself, has he?” asked the Dean. (下線は筆者、以下、同じ)

この場の 3 人の中で権威者である Dean の発話が過去時制で伝達されることで、当話題についての会話の終結感が生まれている。そして、次の Edwin の話題に移る前に、以下のように過去時制による語りでその場の情景描写が挿入され、話題の区切り感がより確かなものになっていると考えられる。

They all three looked toward an old stone gatehouse crossing the Close, with an arched thoroughfare passing beneath it. Through its latticed window, a fire shines out upon the fast-darkening scene, involving in shadow the pendent masses of ivy and creeper covering the building’s front. As the deep Cathedral bell strikes the hour, a ripple of wind goes through these at their distance, like a ripple of the solemn sound that hums through tomb and tower, broken niche and defaced statue, in the pile close at hand.

この語りの中で *Through its latticed window* 以降は現在時制語りになっているが、これは情景描写の Descriptive Present as Background と考えられる。以下はこのシーンの一連のテキストである¹²³。

発話者	SpV	発話などの概要 ¹²⁴	テキスト
Dean	-	「トープ、あれはジャスパーさんだね」	“Mr. Jasper, was that Tope?”
Tope	-	「さようでございます、首席司祭さま」	“Yes, Mr. Dean.”
Dean	-	「ずいぶん遅くまで仕事に残っていたものだな」	“He has stayed late.”
Tope	-	「さようでございます、首席司祭さま。わたしも一緒に残っておりましたんで。ジャスパーさんはこの頃少し身体の <u>ぐええ</u> が悪いんで」	“Yes, Mr. Dean. I have stayed for him, your Reverence. He has been <u>took</u> a little poorly.”

¹²³ 「発話などの概要」と「テキスト」部分の下線、太字は筆者（以下、同じ）。

¹²⁴ Dickens (1870 小池訳 2014) から内容を一部簡略化して引用した（以下、同じ）。

Crisparkle	interposes	「トープ、首席司祭さまに向って『 <u>ぐあい</u> 』と言うんだ。若い方からす[Crisparkle]が低い声で口をはさんで訂正する。	“Say ‘ <u>taken</u> ,’ Tope – to the Dean,” the younger rook <u>interposes</u> in a low tone with this touch of correction, as who should say: “You may offer bad grammar to the laity, or the humbler clergy, not to the Dean.”
-	-	聖堂案内係の頭であるトープ氏は、いつも見学者に偉そうな態度をとるのに慣れているので、自分への注意も黙殺する。	Mr. Tope, Chief Verger and Showman, and accustomed to be high with excursion parties, declines with a silent loftiness to perceive that any suggestion has been tendered to him.
Dean	repeats	「クリスパークルさんの言われたように、ぐあいと言う方が正しいのだよ — <u>ぐあい</u> — と」首席司祭さま[Dean]が繰り返す。	“And when and how has Mr. Jasper been taken – for, as Mr. Crisparkle has remarked, it is better to say taken – <u>taken</u> –” <u>repeats</u> the Dean; “when and how has Mr. Jasper been taken –”
Tope	murmurs	「 <u>ぐあい</u> 、でございますね」トープが恭しい口調でつぶやく。	“ <u>Taken</u> , sir,” Tope deferentially <u>murmurs</u> .
Dean	-	「— 悪くなったのはいつ頃で、どんな加減なのかね」	“– Poorly, Tope?”
Tope	-	「それがでございます、ジャスパーさんの呼吸が <u>どえらく</u> —」	“Why, sir, Mr. Jasper was <u>that breathed</u> –”
Crisparkle	interposes	「トープ、わたしなら『 <u>どえらく</u> 』などとは言わんな」クリスパークル氏が前と同じ口調で口をさしはさむ。	“I wouldn’t say ‘ <u>that breathed</u> ,’ Tope,” Mr. Crisparkle <u>interposes</u> , with the same touch as before. “Not English – to the Dean.”
Dean	remarks	「呼吸が大層ひどくて、の方がいいだろうな」と、首席司祭。	“Breathed to that extent,” the Dean (not unflattered by this indirect homage) condescendingly <u>remarks</u> , “would be preferable.”

Tope	repeats	<p>「ジャスパーさんが教会に入って来られました時、大層呼吸を切らしておいでで、間もなく発作のようなものを起されました。意識がおんぼろになって」と、トープ氏はクリスパークル師に、訂正できるものならやってみろ、とでも言うかのよう言う。「でも、少しお水を差し上げて、しばらくたちますと、おんぼろな意識がさめました」と、トープ氏は同じ言葉を強調して使う。まるで、「一度うまくやりおおせたんだから、もう一度やりますぜ」とでも言っているみたいだ。</p>	<p>“Mr. Jasper’s breathing was so remarkably short,” thus discreetly does Mr. Tope work his way round the sunken rock; “when he came in, that it distressed him mightily to get his notes out; which was, perhaps, the cause of his having a kind of fit on him after a little. His memory grew Dazed.” Mr. Tope, with his eyes on the Reverend Mr. Crisparkle, shoots this word out, as defying him to improve upon it; “and a dimness and giddiness crept over him as strange as ever I saw; though he didn’t seem to mind it particularly, himself. However, a little time and a little water brought him out of his Daze.” Mr. Tope repeats the word and its emphasis, with the air of saying, “As I have made a success, I’ll make it again.”</p>
Dean	asked	<p>「それでジャスパーさんは、すっかり元気になってお帰りになったのだね」首席司祭が尋ねる。</p>	<p>“And Mr. Jasper has gone home quite himself, has he?” asked the Dean.</p>
Tope	-	<p>「はいさようで。すっかり元気におなりです。それに、見たところお家の暖炉に火が入っているようで、結構なことです。今日の午後大聖堂は空気も壁もじっとりしてましたから、ジャスパーさんはひどくふるえていらしたですよ」</p>	<p>“Your Reverence, he has gone home quite himself. And I’m glad to see he’s having his fire kindled up, for it’s chilly after the wet, and the Cathedral had both a damp feel and a damp touch this afternoon, and he was very shivery.”</p>

-	(looked) ¹²⁵	三人は「門番小屋」と呼ばれる、往来をアーチでまたいで立っている古い石造りの家の方を見る。格子のはまった窓越しに、炉の火が外の暗闇に向かってまたたいている。	They all three looked toward an old stone gatehouse crossing the Close, with an arched thoroughfare passing beneath it. Through its latticed window, a fire shines out upon the fast-darkening scene, involving in shadow the pendent masses of ivy and creeper covering the building's front. As the deep Cathedral bell strikes the hour, a ripple of wind goes through these at their distance, like a ripple of the solemn sound that hums through tomb and tower, broken niche and defaced statue, in the pile close at hand.
Dean	asks	「ジャスパーさんの甥ごさんも一緒におられるのかな」首席司祭が尋ねる。	“Is Mr. Jasper’s nephew with him?” the Dean asks .
Tope	replies	「いいえ、まだです。でも、おっつけ来るはずですよ。そら、あそこの二つの窓の間に、ジャスパーさんの影が見えます。自分でカーテンを引いているところですよ」と、用務員[Tope]が答える。	“No, sir,” replies the Verger, “but expected. There’s his own solitary shadow betwixt his two windows – the one looking this way, and the one looking down into the High Street – drawing his own curtains now.”
Dean	says	「さて、さて」首席司祭は会談をお開きにするつもりで、明るく言う。「ジャスパーさんが甥ごさんをあんまり熱愛なさらねばよいがなあ。人間の愛情とはまことに尊いものじゃが、愛情に溺れてしまっちはいかん。」	“Well, well,” says the Dean, with a sprightly air of breaking up the little conference, “I hope Mr. Jasper’s heart may not be too much set upon his nephew. Our affections, however laudable, in this transitory world, should never master us; we should guide them, guide them. I find I am not disagreeably reminded of my dinner, by hearing my dinner-bell. Perhaps Mr. Crisparkle you will, before going home, look in on Jasper?”

5.4.2 ED の第 8 章における過去時制へのシフト

ED の第 8 章は全体として現在時制で語られているが、一部に語りが過去時制にシフトしたり、他の発話と同じ語りの時であるにもかかわらず、過去時制の SpV で伝達されてい

¹²⁵ SpV ではないが時制がシフトした語りの動詞を、括弧を付して記した (以下、同じ)。

る発話がみられる。それは Rosa と Helena¹²⁶を Nun's house¹²⁷ へ送り届けた帰り道の Edwin と Neville¹²⁸ の会話シーン、そしてその二人に Jasper が加わる三人の会話のシーンである。

始めのシーンの会話では、Rosa に惹かれている Neville は、(彼女より劣った人間とみている) Edwin が Rosa を大事にしていることを、また、Helena に惹かれている Edwin は、(彼女より劣った人間とみている) Neville が自分に冷ややかに接することを憤っていて、Neville が自分と Rosa の婚約について口にしたのを、「余計なことを言う」と腹を立てる。そしてそれまでの会話を振り返り、二人の様子が過去時制で以下のように語られている。

By this time they [had](#) both become savage; Mr. Neville out in the open; Edwin Drood under the transparent cover of a popular tune, and a stop now and then to pretend to admire picturesque effects in the moonlight before him.

二人の会話はここからさらにお互いの礼節の有無の議論に拡大し、「ぼくが以前住んでいた所では、そんな人間はただじゃすまされなかったろうな」との Neville の発話に、「例えば誰がすまさないって言うのかね」と Edwin が応じるが、その Edwin の発話が以下のように過去時制で伝達される。

“By whom, for instance?” [asked](#) Edwin Drood, coming to a halt, and surveying the other with a look of disdain.

ここで発話を過去時制で伝達することで、Edwin の自意識としての優位性を暗示するとともに、ここまで交わされてきた Edwin と Neville の 2 人による会話の場の終息、そして新たな場への移行が示されていると考えられる。

新たな場ではこの二人に Jasper が加わり、そこで Jasper は二人に仲直りするよう諭すも、その方向に向かう気配がない。そこで何としても二人の対立を収拾しようとする Jasper の発話が、以下のように過去時制で伝達される。

¹²⁶ Rosa は Edwin の許嫁で「尼僧院」女子学院の生徒、また Helena は Rosa と同じ女子学院の生徒で Rosa の親友である (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

¹²⁷ Rosa たちが学ぶ「尼僧院」女子学院の通称名である (ibid.)。

¹²⁸ Neville と Helena は兄妹で、Neville は Crisparkle の家に住み込んで教育を受ける (ibid.)。

“Perhaps,” **said** Jasper, in a smoothing manner, “we had better not qualify our good understanding. [...]”

この3人の中で年長者である Jasper の発話を過去時制で伝達することで、調停者としての Jasper の権威と、発話により期待される効果（言い争いの終結）を暗示していると思われる。このあと3人は Jasper の下宿へ向かう。以下はこのシーンの一連のテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
-	-	二人の青年[Edwin, Neville]は護衛したご婦人方[Rosa, Helena]が「尼僧院」の庭に入るのを見届けた後、一緒にゆっくりと歩き出す。	The two young men, having seen the damsels, their charges, enter the court-yard of the Nuns' House, and, finding themselves coldly stared at by the brazen door-plate, as if the battered old beau with the glass in his eye were insolent, look at one another, look along the perspective of the moonlit street, and slowly walk away together.
Neville	says	「ドルード君、この町に長く滞在する予定かい」ネヴィルが言う。	“Do you stay here long, Mr. Drood?” says Neville.
Edwin	-	「今度は長逗留しないよ」と素っ気ない答え。「明日ロンドンに戻る。来年の六月末までは、来たり戻ったりし、それからイギリスにおさらばするつもりだ」	“Not this time,” is the careless answer. “I leave for London again to-morrow. But I shall be here, off and on, until next Mid-summer; then I shall take my leave of Cloisterham, and England too; for many a long day, I expect.”
Neville	-	「外国へ行くの？」	“Are you going abroad?”
Edwin	-	「エジプトを少し目覚めさせてやるんだ」	“Going to wake up Egypt a little,” is the condescending answer.
Neville	-	「学問修業中なんだね」	“Are you reading?”

Edwin	repeats	エドウィンは軽蔑の口調で、「学問だって！いや、違う。実行、仕事、技術修業さ。父が経営していた会社の株を遺してくれたので、一人前になれば経営陣の末席を汚すことになるんだ。それまではジャックが後見人で、遺産管理人なんだ」	“Reading!” repeats Edwin Drood, with a touch of contempt. “No. Doing, working, engineering. My small patrimony was left a part of the capital of the Firm I am with, by my father, a former partner; and I am a charge upon the Firm until I come of age; and then I step into my modest share in the concern. Jack — you met him at dinner — is, until then, my guardian and trustee.”
Neville	-	「クリスパークル先生からきみのもう一つの好運のことを聞いたが」	“I heard from Mr. Crisparkle of your other good fortune.”
Edwin	-	「ぼくのもう一つの好運で、そりゃどういう意味だ」	“What do you mean by my other good fortune?”
-	-	ネヴィルは忍びやかにしてためらいがちな口のきき方をしたわけだが、それに対してエドウィンが、ひどく無礼な応対をしたのである。二人は立ち止り睨み合う。	Neville has made his remark in a watchfully advancing, and yet furtive and shy manner, very expressive of that peculiar air already noticed, of being at once hunter and hunted. Edwin has made his retort with an abruptness not at all polite. They stop and interchange a rather heated look.
Neville	says	「ドルード君、きみの婚約のことを何気なく言ったつもりだが、気にさわったかね」	“I hope,” says Neville, “there is no offence, Mr. Drood, in my innocently referring to your betrothal?”
Edwin	cries	「くそっ！」エドウィンはそう叫ぶと、先に立って歩き出す。「このおしゃべりのクロイスタラムの町では、誰も彼もすぐその話を持ち出すんだな。」	“By George!” cries Edwin, leading on again at a somewhat quicker pace. “Everybody in this chattering old Cloisterham refers to it. I wonder no public-house has been set up, with my portrait for the sign of the Betrothed’s Head. Or Pussy’s portrait. One or the other.”
Neville	-	「クリスパークル先生が大つぴらにこの話を持ち出したのは、ぼくの責任ではないぜ」	“I am not accountable for Mr. Crisparkle’s mentioning the matter to me, quite openly,” Neville begins.
Edwin	assents	「そりゃそうだ。きみの責任じゃない」	“No; that’s true; you are not,” Edwin Drood assents .
Neville	resumes	「しかし、今この話を持ち出したのは、ぼくの責任だ。きみがきつとそのことを大いに誇りに思っているに違いないと考	“But,” resumes Neville, “I am accountable for mentioning it to you. And I did so, on the supposition that you could not fail to be highly proud of it.”

		えたからだが」	
-	-	二人のギクシャクした会話の背景：Rosaに惹かれているNevilleは、(彼女より劣った)EdwinがRosaを大事にしていないことに憤り、Helenaに惹かれているEdwinは、(彼女より劣った)Nevilleが自分に冷ややかに接することに腹を立てている。	Now, there are these two curious touches of human nature working the secret springs of this dialogue. Neville Landless is already enough impressed by little Rosebud to feel indignant that Edwin Drood (far below her) should hold his prize so lightly. Edwin Drood is already enough impressed by Helena, to feel indignant that Helena's brother (far below her) should dispose of him so coolly, and put him out of the way so entirely.
Edwin	says	エドウィンが言う。「ネヴィル君、人間が誇りにに思っていることを、いつも口に出してしゃべるとは限るまい。また、他人にしゃべられて大いに嬉しくなるとは限るまい。」	However, the last remark had better be answered. So, says Edwin – “I don't know, Mr. Neville” (adopting that mode of address from Mr. Crisparkle), “that what people are proudest of they usually talk most about; I don't know either, that what they are proudest of they most like other people to talk about. But I live a busy life, and I speak under correction by you readers, who ought to know every thing, and I dare say do.”
-	-	この時までに二人とも業を煮やしに煮やしている。	By this time they had both become savage; Mr. Neville out in the open; Edwin Drood under the transparent cover of a popular tune, and a stop now and then to pretend to admire picturesque effects in the moonlight before him.
Neville	remarks	「きみのように有利な立場を持っておらず、やりなおそうと外地からやって来た男に、そんな非難がましい口をきくのは、あまり礼節に叶ったこととは思えないがねえ」と、ネヴィルが言う。	“It does not seem to me very civil in you,” remarks Neville, at length, “to reflect upon a stranger who comes here, not having had your advantages, to try to make up for lost time. But, to be sure, I was not brought up in ‘busy life,’ and my ideas of civility were formed among Heathens.”

Edwin	retorts	「どんな環境で育てられようと、最上の礼節というのは、人のお節介をやかないということじゃないかな。きみがまずそのお手本を見せてくれれば、ぼくもそれにならうと約束するよ」	“Perhaps the best civility, whatever kind of people we are brought up among,” retorts Edwin Drood, “is to mind our own business. If you will set me the example, I promise to follow it.”
Neville	-	「きみはかなり自分をご大層に思いすぎているようだね」むっとしてネヴィルがやり返す。「ぼくが以前住んでいた所では、そんな人間はただじゃすまされなかったろうな」	“Do you know that you take a great deal too much upon yourself,” is the angry rejoinder; “and that in the part of the world I come from, you would be called to account for it?”
Edwin	asked	「例えば誰がすまさないって言うのかね」とエドウィンは言う、立ち止って相手を馬鹿にしたように眺めまわす。	“By whom, for instance?” asked Edwin Drood, coming to a halt, and surveying the other with a look of disdain.
-	-	突然ジャスパーが二人の間に割って入る。どうやら彼もまた「尼僧院」のあたりを散歩していて二人に追いついたらしい。	But here a startling right hand is laid on Edwin’s shoulder, and Jasper stands between them. For it would seem that he, too, has strolled round by the Nuns’ House, and has come up behind them on the shadowy side of the road.
Jasper	says	「ネッド[Edwin]、いい加減にしたまえ。いいかね、きみは土地の人間で今夜はいわば主人役の立場じゃないか。ネヴィル君はお客様なんだから、歓待する義務があるのだよ。」そして二人の真中に立って歩きながら、「ネヴィル君、失礼をお許し下さい。しかしあなたも気持を鎮めて下さらなくては。」	“Ned, Ned, Ned!” he says . “We must have no more of this. I don’t like this. I have overheard high words between you two. Remember, my dear boy, you are almost in the position of host tonight. You belong, as it were, to the place, and in a manner represent it toward a stranger. Mr. Neville is a stranger, and you should respect the obligations of hospitality. And, Mr. Neville,” laying his left hand on the inner shoulder of that young gentleman, and thus walking on between them, hand to shoulder on either side, “you will pardon me; but I appeal to you to govern your temper too. Now, what is amiss? But why ask! Let there be nothing amiss, and the question is superfluous. We are all three on a good understanding, are we not?”

Edwin	-	二人は無言のまま睨み合っていたが、エドウィンがだしぬけに言う。「ジャック [Jasper]、ぼくに関する限りは腹なんか立てていないよ」	After a silent struggle between the two young men who shall speak last, Edwin Drood strikes in with, “So far as I am concerned, Jack, there is no anger in me.”
Neville	says	「ぼくもです、でも、ずっと遠くで暮していたぼくの過去はいきさつを知っていたなら、あんな辛辣な言葉を吐けばぼくが深く傷つけられることくらいわかったはずですがね」と、ネヴィル。	“Nor in me,” says Neville Landless, though not so freely, or perhaps so carelessly. “But if Mr. Drood knew all that lies behind me, far away from here, he might know better how it is that sharp-edged words have sharp edges to wound me.”
Jasper	said	「四の五の言わず、お互いを認め合った方がいいのではないかね」ジャスパーがなだめるように言う。「ネッドは率直に、わだかまりなく腹を立てていないことがきみにもわかった。ネヴィル君、きみもそうなんだろう」	“Perhaps,” said Jasper, in a smoothing manner, “we had better not qualify our good understanding. We had better not say anything having the appearance of a remonstrance or condition; it might not seem generous. Frankly and freely, you see there is no anger in Ned. Frankly and freely, there is no anger in you, Mr. Neville?”
Neville	-	「はい、全然」とは答えるが、あまり率直でもなく、わだかまりない態度でもない。	“None at all, Mr. Jasper.” Still, not quite so frankly or so freely; or, be it said once again, not quite so carelessly perhaps.
Jasper	-	「じゃあ、これでよし！ わたしの住まいはすぐそこだ。ワインとグラスはテーブルの上に載っているし、クリスパークルさんのお宅はすぐそこだ。ネッドは明日出発だろう。ネヴィル君と一緒に家にご案内して、旅立ちの杯を上げようじゃないか」	“All over then! Now, my bachelor gate-house is a few yards from here, and the heater is on the fire, and the wine and glasses are on the table, and it is not a stone’s throw from Minor Canon Corner. Ned, you are up and away to-morrow. We will carry Mr. Neville in with us, to take a stirrup-cup.”
Edwin	-	「大賛成だね、ジャック」	“With all my heart, Jack.”
Neville	-	「ぼくも大賛成です」ネヴィルはそう答えざるを得ない気持ちになるが、あまり気が進まない。自分で癩癩を抑えられなくなってしまいそうなのに気付いているからだ。	“And with all mine, Mr. Jasper.” Neville feels it impossible to say less, but would rather not go. He has an impression upon him that he has lost hold of his temper; feels that Edwin Drood’s coolness, so far from being infectious, makes him red-hot.

5.4.3 ED の第 10 章における現在時制へのシフト

ED の第 10 章は全体として過去時制で語られているが、一部に現在時制による語りや、語りの時が変わらないにもかかわらず、発話が現在時制で伝達されているケースがみられる。後者のケースは、Neville の粗暴な行動について Crisparkle の居室で交わされた、Crisparkle とその母の間の会話のシーンに見られる。このシーンの会話は登場する人物がこの 2 人だけであるにも関わらず、その発話の多くは伝達動詞を伴っており、また、それらが過去時制であることから、落ち着いた会話の雰囲気醸し出されている。

Neville の荒れた行動を Jasper から聞かされた Crisparkle の母は、Neville への悪い印象を深めている。Crisparkle はそれを和らげようと、その行動は Edwin の挑発が発端だったと説明する。時制がシフトするのは、それに Crisparkle の母が「それから、温めたワインを飲んだからだよ」と返す以下の発話である。

“And under mulled wine,” **adds** the old lady.

このシーンでは、この発話の前も後も、SpV は一貫して過去時制である。この現在時制で伝達された発話は、それまでの落ち着いた会話のやり取りが崩れ、衝動的な発話が成り行きで発せられたかの状況をうかがわせている。なお直前の Crisparkle の発話が自由直接話法であることで、語り手の不在感が生まれて素早い会話のやり取りが印象づけられ、時制シフトの効果がより高められている。以下はこのシーンの一連のテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
Crisparkle	said	聖堂小参事会員セプティマス・クリスパークル氏は、母に向かって言った。「かあさんは少しネヴィル君にきつすぎると思いませんか」	“Now, don’t you think, Ma, dear,” said the Minor Canon to his mother one day as she sat at her knitting in his little book-room, “that you are rather hard on Mr. Neville?”
Crisparkle, Mrs.	returned	「いいえ、ぜんぜんそうは思わないわ」	“No, I do not, Sept,” returned the old lady.
Crisparkle	-	「じゃあ、かあさん、少し話し合しましょうよ」	“Let us discuss it, Ma.”

Crisparkle, Mrs.	added	「わたしは話し合うのは少しも反対しないよ、セプト。」老婦人の帽子の揺れ具合から見ると、まるでこう言っているかのようだ。「このわたしの意見を変えられるような話し合いがあったら、お目にかかりたいものだわね！」	“I have no objection to discuss it, Sept. I trust, my dear, I am always open to discussion.” There was a vibration in the old lady’s cap, as though she internally added , “And I should like to see the discussion that would change my mind!”
Crisparkle	said	「それは結構です」息子がなだめるような口調で、「話し合いには素直に応じるのが一番です」	“Very good, Ma,” said her conciliatory son. “There is nothing like being open to discussion.”
Crisparkle, Mrs.	returned	「そうだろうとも」老婦人の相槌には、見るからに素直に応じそうにない様子が感じられる。	“I hope not, my dear,” returned the old lady, evidently shut to it.
Crisparkle	-	「さて、ネヴィル君がですね、先日のあの不幸な出来事の時に愚かな真似をしたのは、相手から挑発されたからなのですよ」	“Well! Mr. Neville, on that unfortunate occasion, commits himself under provocation.”
Crisparkle, Mrs.	adds	「それから、温めたワインを飲んだからだよ」と老婦人は言い添えた。	“And under mulled wine,” adds the old lady.
Crisparkle	-	「ワインのことは認めてもよろしい。その点では、二人ともほぼおあいこだったと、ぼくは思っていますがね」	“I must admit the wine. Though I believe the two young men were much alike in that regard.”
Crisparkle, Mrs.	said	「わたしはそうは思わないよ！」	“I don’t!” said the old lady.
Crisparkle	-	「どうしてですか」	“Why not, Ma?”
Crisparkle, Mrs.	said	「わたしがそうは思っていないからよ」老婦人が言った。「でも、わたしはまだ素直に話し合いに応ずるつもりだけどね」	“Because I don’t,” said the old lady. “Still I am quite open to discussion.”
Crisparkle	-	「でも、かあさんがそんな態度をとるのでは、これ以上話し合いの続けようがないじゃありませんか」	“But, my dear Ma, I cannot see how we are to discuss, if you take that line.”
Crisparkle, Mrs.	said	「それを責めるのなら、ネヴィルさんをお責めよ。わたしが悪いんじゃないから」老婦人は厳粛な口調で言った。	“Blame Mr. Neville for it, Sept, and not me,” said the old lady, with stately severity.
Crisparkle	-	「これは驚いた！ どうしてネヴィル君を責めるのですか」	“My dear Ma! Why Mr. Neville?”

Crisparkle, Mrs.	said	クリスパークル夫人はまた最初に逆戻りして、「彼は酔っぱらって帰宅し、この家に大きな不名誉を与え、家の者に大きな無礼をはたらいたからさ」	“Because,” said Mrs. Crisparkle, retiring on first principles, “he came home intoxicated, and did great discredit to this house, and showed great disrespect to this family.”
Crisparkle	-	「その点は否定できません。だから彼はその晩も、いまに至るまで、それを大いに悪いと思っているのですよ」	“That is not to be denied, Ma. He was then, and he is now, very sorry for it.”
Crisparkle, Mrs.	said	「もしその翌日の礼拝の後、ジャスパーさんがわたしに、恐ろしくありませんでしたか、不安になりませんでしたかと、思いやり深くお尋ね下さらなかったら、わたしはあのみっともない行為を一生聞かずに終ってしまったかもしれない」	“But for Mr. Jasper’s well-bred consideration in coming up to me next day, after service, in the Nave itself, with his gown still on, and expressing his hope that I had not been greatly alarmed or had my rest violently broken, I believe I might never have heard of that disgraceful transaction,” said the old lady.
Crisparkle	-	「正直に言いますとね、かあさんの耳に入れなくておいたかもしれません。ジャスパーと話し合って、もみ消してしまった方がいいのじゃないかと思っていた矢先、彼がかあさんに話してしまっていた。だから、もう時すでに遅しかったのですよ」	“To be candid, Ma, I think I should have kept it from you if I could, though I had not decidedly made up my mind. I was following Jasper out to confer with him on the subject, and to consider the expediency of his and my jointly hushing the thing up on all accounts, when I found him speaking to you. Then it was too late.”
Crisparkle, Mrs.	-	「時すでに遅しですって、あきれた。その時ジャスパーさんは、前の晩の出来事で、まだ顔色が死人みたいだったよ」	“Too late, indeed, Sept. He was still as pale as gentlemanly ashes at what had taken place in his rooms overnight.”
Crisparkle	-	「もしぼくがかあさんの耳に入れなくておいたとしても、それはかあさんを心配させまいと、それからあの青年のためによかれと、またぼくの良心に従って義務を正しく果そうと、そういう気持からだったことは、信じて下さるでしょうね」	“If I had kept it from you, Ma, you may be sure it would have been for your peace and quiet, and for the good of the young men, and in my best discharge of my duty according to my lights.”
Crisparkle, Mrs.	-	老婦人はすぐ部屋を横切って息子にキスをしながら言った。「もちろんだとも、セプト。わたしは信じていますよ」	The old lady immediately walked across the room and kissed him, saying, “Of course, my dear Sept, I am sure of that.”

Crisparkle	said	「ところが、いまや町じゅうの噂になってしまい」クリスパークル氏は耳をかきながら言った。「ぼくの手には負えなくなってしまいました」	“However, it became the town-talk,” said Mr. Crisparkle, rubbing his ear, as his mother resumed her seat and her knitting, “and passed out of my power.”
Crisparkle, Mrs.	returned	「だからわたしはネヴィルさんが悪い人だとその時も言ったし、今でも言っているのですよ。」ここで彼女の帽子が、また相当揺れた。	“And I said then, Sept,” returned the old lady, “that I thought ill of Mr. Neville. And I say now that I think ill of Mr. Neville. And I said then, and I say now, that I hope Mr. Neville may come to good, but I don’t believe he will.” Here the cap vibrated again considerably.
Crisparkle	-	「かあさんがそんなにおっしゃるのを聞くと、残念でなりません」	“I am sorry to hear you say so, Ma—”
Crisparkle, Mrs.	interposed	「わたしだってこんなことを言うのは残念だけど」老婦人は口をはさんだ。「でも、仕方ないわ」	“I am sorry to say so, my dear,” interposed the old lady, knitting on firmly, “but I can’t help it.”
Crisparkle	pursued	「と言いますのはね、ネヴィル君が非常に勉強家で熱心で、どんどん上達して、それに、ぼくに対して愛着を持ってくれていることは、否定できないからですよ」	“— For,” pursued the Minor Canon, “it is undeniable that Mr. Neville is exceedingly industrious and attentive, and that he improves apace, and that he has— I hope I may say— an attachment to me.”
Crisparkle, Mrs.	said	「その最後の点は、彼の美点とは言えないでしょう」老婦人は素早く口をはさんだ。「彼がそう言うのなら、ますますいやな人だと思うわ。それは思い上がりというものだから」	“There is no merit in the last article, my dear,” said the old lady, quickly, “and if he says there is, I think the worse of him for the boast.”
Crisparkle	-	「でも、かあさん、彼はそんなこと一度だって言ったことはありませんよ」	“But, my dear Ma, he never said there was.”
Crisparkle, Mrs.	returned	「おそらくそうだろうね。でも、そんなことは大きな問題じゃないよ」	“Perhaps not,” returned the old lady; “still, I don’t see that it greatly signifies.”
-	-	クリスパークル氏がかわいらしい古い陶器[Crisparkle, Mrs.]を眺めている時の、やさしい顔つきに、いらいらした様子は見られなかったが、顔をつき合わせての議論の相手としては具合が悪かろう、との微苦笑めいた表情が浮かんではいた。	There was no impatience in the pleasant look with which Mr. Crisparkle contemplated the pretty old piece of china as it knitted; but there was, certainly, a humorous sense of its not being a piece of china to argue with very closely.

Crisparkle, Mrs.	-	「それにね、もし妹がいなかったらどうなっているか、考えてごらんよ。妹が彼にどんな感化を及ぼしたか、おまえだって知っているだろう。おまえはそんなに褒めるけど、どこまで妹のお蔭をこうむっているか公平に考えてごらん。」	“Besides, Sept. Ask yourself what he would be without his sister. You know what an influence she has over him; you know what a capacity she has; you know that whatever he reads with you, he reads with her. Give her her fair share of your praise, and how much do you leave for him?”
---------------------	---	--	---

このケースの他、この章には現在時制による語りが3か所ある。そのひとつは、上で述べた会話シーンの直前に、「女性の一般的特性」として語られる以下の箇所であり、*authorial comment* と考えられる。

It has been often enough remarked that women have a curious power of divining the characters of men, which would seem to be innate and instinctive; [...]. But it has not been quite so often remarked that this power ([...]) is for the most part absolutely incapable of self-revision; and that when it has delivered an adverse opinion which by all human lights is subsequently proved to have failed, it is undistinguishable from prejudice, [...]. Nay, the very possibility of contradiction or disproof, however remote, communicates to this feminine judgment from the first, in nine cases out of ten, the weakness attendant on the testimony of an interested witness; [...].

これまでしばしば言われてきたことであるが、女性は男性の性格を見抜く奇妙な能力を持っており、それは天性の本能的な力のように思えるのだ。[...] しかし、これはあまりしばしば言われなかったことであるが、この能力 ([...]) は、ほとんど絶対に自己反省ができないのだ。だから、後になってすべての人間の理性に照らしてみても過ちだったことが証明されるような異論を立てた時などは、その能力は偏見と区別がつかなくなって来る [...]。いや、それどころか、ほんの僅かでも反対ないし反証らしい口ぶりでも洩らそうものなら、十中八九までこの女性の判事殿は、相手こそ偏見を持った証人であると最初からきめつけ、その証言の弱点をつく [...] ¹²⁹。

¹²⁹ ED から引用した箇所の訳は、Dickens (1870 小池訳 2014) による (以下、同じ)。

他の2つのケースは、上で述べた会話シーンにつづく、Crisparkle が近ごろ近くで過ごすことになった Neville や Helena との生活、愛情に満ちた母とのこれまでの生活などを振り返る過去時制語りの中にある。そのひとつは以下の文中の聖書の故事をひいた箇所、Casparis (1975) が、non-narrative な現在時制用法としたもののひとつ、Descriptive Present in Similes と考えられる。

Into this herbaceous penitentiary, situated on an upper staircase-landing— [...]— would the Reverend Septimus submissively be led, like the highly-popular lamb who has so long and unresistingly been led to the slaughter, [...]

二階の階段のつつきに [...], この薬草のざんげ苦行室に向って、セプティマス師は、長い間おとなしく屠畜場へ引かれて行くと誰でも知っているあの仔羊のように、黙々として引かれて行ったものであるが、 [...]

他のひとつは Cloisterham を流れる川の立地を説明する以下の文である。これは同様な現在時制用法のひとつ、Descriptive Present as Background と考えられ、クロイスタラムの河が、過去から現在に至るも変わることなく海の近くに立地していることを含意している。

The river at Cloisterham is sufficiently near the sea to throw up oftentimes a quantity of sea-weed.

クロイスタラムのそばの河は海に近かったから、時々海草がたくさん上って来ることがあった。

5.4.4 ED の第 12 章における過去時制へのシフト

ED の第 12 章は全体として現在時制で語られているが、語りの時が他の発話と同じであるにもかかわらず、一部の発話が過去時制で伝達されている。それは Cloisterham の路上で Dean, Jasper, Tope の 3 人が話しているところへ Sapsea¹³⁰が加わるシーンの会話である。会話を途中から加わった Sapsea は、自分に振られた話の意味がつかめず戸惑うが、やっと状

¹³⁰ Cloisterham に住む競売人、保守的でもったいぶった自惚れ屋、のちに町長になる (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

況を理解すると、Dean に「その件はダードルズ¹³¹によく気をつけさせます」と言う。

“I will take it upon myself, sir,” [observed](#) Sapsea, loftily, “to answer for Mr. Jasper’s neck. I will tell Durdles to be careful of it. He will mind what I say. [...]”

ここで語り手は、町長として権威者であることを自認する Sapsea の Dean への発話を、過去時制で語っている。以下はこのシーンの一連のテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
Dean	(quoth) ¹³²	「ジャスパーさん、あなたはわが大聖堂について本をお書きになるおつもりですか」首席司祭さまがおっしゃる。	“You are evidently going to write a book about us, Mr. Jasper,” quoth the Dean; “to write a book about us. Well! We are very ancient, and we ought to make a good book. We are not so richly endowed in possessions as in age; but perhaps you will put that in your book, among other things, and call attention to our wrongs.”
-	-	トープ氏はいかにも役目柄、深い関心を示している様子。	Mr. Tope, as in duty bound, is greatly entertained by this.
Jasper	replies	「作家とかに変身するつもりは全然ありません。サブシーさんに触発されてのことです」と、ジャスパーが答える。	“I really have no intention at all, sir,” replies Jasper, “of turning author or archaeologist. It is but a whim of mine. And even for my whim, Mr. Sapsea here is more accountable than I am.”
Dean	says	首席司祭さまはサブシーを見て、人の好きそうにうなずいてから言う。「それはどういうことですか、町長さん」	“How so, Mr. Mayor?” says the Dean, with a nod of good-natured recognition of his Fetch. “How is that, Mr. Mayor?”

¹³¹ Durdles: Cloisterham の町の石工。墓石などを造っていて大聖堂の内外のことに通じている。酒好きで愛想が悪い人物とされる (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

¹³² OED2 に、現在形の [quethe](#) は 1450 年までの、また過去形の [quoth](#) は 1884 年までの用例がある。Dickens の時代には、現在形は使われていなかったと思われる。

Sapsea	remarks	「首席司祭さまが何のことでわたしにお言葉を賜りましたのかわかりませんが」と、サブシー氏は事情がわからず、あたりを見回す。	“I am not aware,” Mr. Sapsea remarks , looking about him for information, “to what the Very Reverend the Dean does me the honor of referring.” And then falls to studying his original in minute points of detail.
Tope	hints	「ダードルズですよ」トープ氏がヒントを与える。	“Durdles,” Mr. Tope hints .
Dean	echoes	「さよう！ダードルズじゃ！」首席司祭さまがおうむ返しに言う。	“Ay!” the Dean echoes ; “Durdles, Durdles!”
Jasper	explains	「最初にわたしがその男に好奇心を持ちはじめたのは、実はサブシーさんのお蔭で、あの男を見直すことができたわけでございます。」と、ジャスパーが説明する。	“The truth is, sir,” explains Jasper, “that my curiosity in the man was first really stimulated by Mr. Sapsea. Mr. Sapsea’s knowledge of mankind, and power of drawing out whatever is recluse or odd around him, first led to my bestowing a second thought upon the man: though of course I had met him constantly about. You would not be surprised by this, Mr. Dean, if you had seen Mr. Sapsea deal with him in his own parlor, as I did.”
Sapsea	cries	「わかりました。わたしは偶然ダードルズとジャスパーさんをお引き合わせしました。わたしのみるところ、ダードルズはなかなかの変り者ですな」と、得意満面でサブシー氏が叫ぶ。	“Oh!” cries Sapsea, picking up the ball thrown to him with ineffable complacency and pomposity; “yes, yes. The Very Reverend the Dean refers to that? Yes. I happened to bring Durdles and Mr. Jasper together. I regard Durdles as a Character.”
Jasper	says	「サブシーさん、あなたの巧みな手さばきで、その変り者の内側を見せて下さるわけですから、ジャスパーが言う。	“A character, Mr. Sapsea, that with a few skillful touches you turn inside out,” says Jasper.
Sapsea	returns	「いや、まさか、そりゃわたしは彼に少しは感化を与えることもできるかもしれませんがね。わたしは世間を知っておりますからな」と、サブシー氏が答える。	“Nay, not quite that,” returns the lumbering auctioneer. “I may have a little influence over him, perhaps; and a little insight into his character, perhaps. The Very Reverend the Dean will please to beat in mind that I have seen the world.” Here Mr. Sapsea gets a little behind the Dean, to inspect his coat-buttons.

Dean	says	「それでは町長さん、あなたのダードルズに関する洞察と知識を善用して、わが大聖堂の尊敬すべき聖歌隊長の首の骨を折らぬよう、よく彼に言いきかせてやって下さい。」と、首席司祭さま。	“Well!” says the Dean, looking about him to see what has become of his copyist: “I hope, Mr. Mayor, you will use your study and knowledge of Durdles to the good purpose of exhorting him not to break our worthy and respected Choir-Master’s neck; we cannot afford it; his head and voice are much too valuable to us.”
-	-	トープ氏は腹を抱えて笑い、それがおさまるや恭しげにつぶやく。このような方からこのようなお世辞をいただけるなら、首の骨が折れるくらいは栄誉なことですな。	Mr. Tope is again highly entertained, and, having fallen into respectful convulsions of laughter, subsides into a deferential murmur, importing that surely any gentleman would deem it a pleasure and an honor to have his neck broken, in return for such a compliment from such a source.
Sapsea	observed	「ジャスパーさんの首の骨は保証致します。ダードルズによく気をつけるように申します。このわたしの言いつけなら、よく聞きますから」と、サブシーが偉そうに言う。	“I will take it upon myself, sir,” observed Sapsea, loftily, “to answer for Mr. Jasper’s neck. I will tell Durdles to be careful of it. He will mind what I say.
Sapsea	inquires	「でも、どうしてあなたの首が危いのですか」と、お偉方目線で辺りを見回しながらたずねる。	How is it at present endangered?” he inquires , looking about him with magnificent patronage.
Jasper	returns	「わたしがダードルズと一緒に、月夜の晩に墓地や、地下納骨堂や、塔や、廢墟やらを歩き回りたと言ったからですよ。美しい風景を愛する人間として、やって見る価値があると、あなたが提案なさったでしょう」と、ジャスパーが答える。	“Only by my making a moonlight expedition with Durdles among the tombs, vaults, towers, and ruins,” returns Jasper. “You remember suggesting when you brought us together that, as a lover of the picturesque, it might be worth my while?”
Sapsea	replies	「いかにもわたしは憶えております！」と、競売人[Sapsea]が答える。もったいぶった馬鹿者というものは、本当に自分が憶えていると思ひ込むものだ。	“I remember!” replies the auctioneer. And the solemn idiot really believes that he does remember.

Jasper	pursues	「あなたの提案に従って、あの男[Durdles]と一緒に昼間何度か歩き回りました。今晚二人でこっそり夜の探険をしようというわけです」と、ジャスパーが続ける。	“Profiting by your hint,” pursues Jasper, “I have had some day-rambles with the extraordinary old fellow, and we are to make a moonlight hole-and-corner exploration to-night.”
Dean	says	「おや、彼がやって来ましたよ」首席司祭が言う。	“And here he is,” says the Dean.

5.4.5 ED の第 19 章における過去時制へのシフト

ED の第 19 章は全体として現在時制で語られている。ところが一部のシーンの発話が、語りの時が他の発話と同じであるにもかかわらず、過去時制で伝達されている。それは Jasper と Rosa が Nun’s house の庭で会話するシーンである。休暇シーズンになって Miss Twinkleton¹³³たちが不在の Nun’s house に、突然 Jasper が訪ねてきて、Rosa に音楽レッスンの再開を迫るが、Rosa はレッスンはもうしないと答える。問題のケースは、それに Jasper が返す以下の発話である。

“Then, to be told that you discontinued your study with me was to be politely told that you abandoned it altogether?” he **suggested**.

「では、あなたがわたしの授業を中断したとおっしゃったのは、完全にやめたということの丁寧な言い方だったのですね」

この発話の前も後も、SpV は一貫して現在時制である。この発話を過去時制で伝達することで、Rosa の音楽教師としてこの場の権威者である Jasper が、Rosa の意思の事実関係を確認していることがうかがえる。また、音楽レッスンについての会話はこれで終わり、以降の会話では Jasper が Rosa に愛を迫っている。この過去時制で伝達される Jasper の発話は、音楽レッスンについての会話を終結し、次の話題へ移るサインにもなっていると考えられる。以下はこのシーンの一連のテキストである。

¹³³ 「尼僧院」の建物を占める女子寄宿学院の校長である (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
-	-	彼が彼女の不意をつこうとしていたなら、これほど打ってつけの折もなかったろう。恐らく、そうしようとしていたのだろう。ヘレナ・ランドレスは去り、ティッシャー夫人もトゥインクルトン嬢も不在だったから。	If he had chosen his time for finding her at a disadvantage, he could have done no better. Perhaps he has chosen it. Helena Landless is gone, Mrs. Tisher is absent on leave. Miss Twinkleton (in her amateur state of existence) has contributed herself and a veal-pie to a picnic.
Rosa	cries	「ねえ、どうして、どうして、わたしがいるなんて言つたのよ！」ローザは途方にくれて叫ぶ。	“O, why, why, why did you say I was at home!” cries Rosa, helplessly.
-	-	女中の答えによると、ジャスパーは彼女がいることは知っていて、会いたいと伝えてほしい、と言っただけだった。	The maid replies that Mr. Jasper never asked the question. That he said he knew she was at home, and begged she might be told that he asked to see her.
Rosa	thinks	「どうしたらいいかしら。どうしたらいいかしら」ローザは両手をしっかり組み合わせて考える。	“What shall I do? What shall I do?” thinks Rosa, clasping her hands.
-	-	自暴自棄のような気分で、彼女は庭でジャスパーさんにお会いします、と言う。彼と一緒に部屋に閉じこめられるなんて、考えただけで身ぶるいがする。庭ならたくさんの窓から見下ろされているし、戸外なら悲鳴をあげて、逃げ出すこともできる、といった途方もない考えが頭をよぎる。	Possessed by a kind of desperation, she adds in the next breath that she will come to Mr. Jasper in the garden. She shudders at the thought of being shut up with him in the house; but many of its windows command the garden, and she can be seen as well as heard there, and can shriek in the free air and run away. Such is the wild idea that flutters through her mind.

-	-	あの恐ろしい夜以来、ジャスパーには町長の前で尋問された時しか会っていない。彼女は散歩用の帽子を手に庭に出る。彼が日時計によりかかっている姿を見た瞬間、彼からの強迫感にまたとりつかれてしまう。今からでも逆戻りしたいと思うのだが、抵抗できないまま、日時計の脇の庭のベンチに座ってうつむく。怖くて彼を見上げることもできない。	She has never seen him since the fatal night, except when she was questioned before the Mayor, and then he was present in gloomy watchfulness, as representing his lost nephew and burning to avenge him. She hangs her garden-hat on her arm, and goes out. The moment she sees him from the porch, leaning on the sun-dial, the old horrible feeling of being compelled by him, asserts its hold upon her. She feels that she would even then go back, but that he draws her feet toward him. She cannot resist, and sits down, with her head bent, on the garden-seat beside the sun-dial. She cannot look up at him for abhorrence, but she has perceived that he is dressed in deep mourning. So is she. It was not so at first; but the lost has long been given up, and mourned for, as dead.
-	-	彼はまず彼女の手を握ろうとする。彼女はその気配を察して、手を引っ込める。彼女の目は芝生しか見ていないのだが、彼の目がじっと自分に注がれていることは、わかっている。	He would begin by touching her hand. She feels the intention, and draws her hand back. His eyes are then fixed upon her, she knows , though her own see nothing but the grass.
Jasper	begins	「わたしはしばらく前から」彼が口を開く。「あなたのそばでの任務に呼び戻されるのを待っていたのです」	“I have been waiting,” he begins , “for some time, to be summoned back to my duty near you.”
Rosa	answers	彼がじっと見つめている自分の唇で、ためらいの返事をしようとするが、言葉にならない。やっと答える。「任務、ですって！」	After several times forming her lips, which she knows he is closely watching, into the shape of some other hesitating reply, and then into none, she answers , “Duty, sir?”
Jasper	-	「あなたに教える任務、あなたの忠実な音楽教師としての任務です」	“The duty of teaching you, serving you as your faithful music-master.”
Rosa	-	「あの勉強はやめました」	“I have left off that study.”

Jasper	-	「やめたのではなくて、中断したのでしょう。あなたの後見人から、わたしたち皆が痛切に感じたショックのために、勉強を中断したと伺いました。いつ再開しますか」	“Not left off, I think. Discontinued. I was told by your guardian that you discontinued it under the shock that we have all felt so acutely. When will you resume?”
Rosa	-	「もうしません」	“Never, sir.”
Jasper	-	「しません、ですって？もしあなたがわたしの甥を愛していたのなら、そんな言葉は言えなかつたはずですよ」	“Never? You could have done no more if you had loved my dear boy.”
Rosa	cries	「わたしは彼を愛していましたわ！」ローザが一瞬怒りにかられて叫ぶ。	“I did love him!” cries Rosa with a flash of anger.
Jasper	-	「しかし、十分に正しい愛し方ではなかった。もっともわたしの甥も、不幸にして自意識や自己満足が強すぎたために、当然愛すべきであったような、し方では愛せなかったのですがね」	“Yes; but not quite – not quite in the right way, shall I say! Not in the intended and expected way. Much as my dear boy was, unhappily, too self-conscious and self-satisfied (I’ll draw no parallel between him and you in that respect) to love as he should have loved, or as any one in his place would have loved; must have loved!”
-	-	彼女は相変わらず同じ姿勢で座ったままだが、さらに身をちぢめる。	She sits in the same still attitude, but shrinking a little more.
Jasper	suggested	「では、あなたがわたしの授業を中断したとおっしゃったのは、完全にやめたということの丁寧な言い方だったのですね」	“Then, to be told that you discontinued your study with me was to be politely told that you abandoned it altogether?” he suggested .
Rosa	says	「そうです」ローザは急に勇気を出して言う。「でも、丁寧な言い方をなさったのはわたしの後見人で、わたしではありませんわ。わたしはやめる決心ですと申し上げました。この決心は変えないつもりでした」	“Yes,” says Rosa, with sudden spirit. “The politeness was my guardian’s, not mine. I told him that I was resolved to leave off, and that I was determined to stand by my resolution.”
Jasper	-	「いまでもそのつもりですか」	“And you still are?”
Rosa	-	「はい、そうです。ですから、そのことでこれ以上お尋ねにならないで下さい。少なくともわたしはこれ以上お答え致しません。そのくらいのことにはわたしだって出来ます」	“I still am, sir. And I beg not to be questioned any more about it. At all events, I will not answer any more; I have that in my power.”

5.4.6 続編の第 21 章における過去時制へのシフト

続編の第 21 章¹³⁴は全体として現在時制で語られている。この章には会話のシーンが 2 つあり、その一つは、礼拝が終わったあと大聖堂に 1 人残ってオルガンを弾きながら思い出に浸る Jasper と、そこに不意に現れた Puffer¹³⁵との会話のシーン、他の一つは、その Puffer が大聖堂から去った後、Jasper と Deputy¹³⁶が大聖堂の前で交わす会話のシーンである。前者の発話の SpV は全て現在時制だが、後者の一部の発話に、語りの時に変わりがないにもかかわらず、過去時制で伝達されている箇所が 3 か所ある。

第一のケース：Jasper は、いつもの “Widdy widdy wen! . . .” の掛け声とともに現れた Deputy を騒がないよう叱責するうち、Deputy を使って Puffer の動静をさぐろうと思いつき、以下のように仕事をもちかける。

“I don’t want to hurt you, blockhead,” [said](#) Jasper, as a sudden thought came to him. Then taking some silver from his pocket, he [continued](#): “I want you to do me a service and I’ll reward you.”

ある考えが Jasper に浮かび、「ばかもの、おまえを痛めつける気はない」と言った。それから、ポケットから硬貨をとりだし、「おまえにやってもらいたいことがある。報酬つきだ。」と続けた。¹³⁷

第二のケース：そして Jasper は仕事の内容を説明し、Deputy からその仕事を請けるとの返答を得ると、以下のように言う。

“Very good,” [said](#) Jasper.

「よし、わかった」、と Jasper が言った。

¹³⁴ James の完全版では、ED の章区分が原典と違っていて、最終章の章番号が 23 でなく 20 となっている。従って続編の最初の章は第 21 章で始まる。

¹³⁵ Jasper が通うアヘン窟の老婆。続編では、かつて Jasper に騙されて失意のうちに死んだ自分の娘の仇を討とうとする人物でもある。

¹³⁶ Cloisterham の町の木賃宿の雑用で小遣い稼ぎする身寄りのない少年。石工の Durdles や Jasper に石を投げてからかう。

¹³⁷ 続編テキストの日本語訳は筆者による（以下、同じ）。

第一のケースで、この2人の中で権威者である Jasper の、過去時制で伝達される発話は、Deputy との会話の話題の転換（それまでの口をついて出るがままの言い合いから、仕事の持ち掛けへの変化）をうかがわせ、第二のケースで同様に過去時制にシフトして伝達される Jasper の発話もまた、第一のケースに続く現在時制で伝達されるやりとりを経て Deputy が仕事を請けることに合意したことをうけ、具体的な仕事内容の説明へと話題が転換することをうかがわせるものと考えられる。

ところで、この章を締めくくる最後の一節は、以下のように Deputy の様子を過去時制で語っているが、ED のように現在時制の章として時制の斉一性を保つなら、会話部分に引き続き現在時制で語らせることもできたと考えられる¹³⁸。

The boy gave one long, shrill whistle; then throwing the stone, which he had continued to hold in his hand, as a precautionary measure, at an imaginary Durdles in the shape of a post on the opposite way, ran briskly off in the direction of the Travellers' Twopenny. Deputy は一声叫び声をあげると、用心のために手に持っていた石を、Durdle に見立てた、道の反対側にある柱に向かって投げ、2 ペンス館へと元気よく走り去った。

以下はこのシーンの一連のテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要 ¹³⁹	テキスト
Jasper	asks	「騒いで邪魔するとは、どういう了見だ」と訊ね、Jasper は Deputy に近づく。	“What do you mean by disturbing me with your noise, boy?” asks Jasper, and moves nearer to where the boy stands .
Deputy	-	「邪魔してなんかいないよ。それから俺にさわんな、さもないとこの石をあんたの頭に投げるぞ。Jasper」と少し後ずさりしながら言う。	“I wan’t a-disturbin’ on yer,” is the answer, retreating a few steps, “and don’t yer go a touchin’ me, or I’ll sling this ’ere flint at yer ’ed; yer bust my braces once, Jarsper, but yer won’t do it agin.”

¹³⁸ その場合、語り手がこの中で Deputy の心中を洞察していることから、Casparis (1975) が current report でなく HP に区分する一節になると考えられる。

¹³⁹ 続編について、「発話などの概要」の日本語訳は筆者による（以下、同じ）。

Jasper	said	ある考えが Jasper に浮かび、「ばかもの、おまえを痛めつける気はない」と言った。	“I don’t want to hurt you, blockhead,” said Jasper, as a sudden thought came to him.
Jasper	continued	それから、ポケットから硬貨をとりだし、「おまえにやってもらいたいことがある。報酬つきだ。」と続けた。	Then taking some silver from his pocket, he continued : “I want you to do me a service and I’ll reward you.”
Deputy	enquires -	疑いの目で Jasper を見据えながら、「どういう仕事だ？」と訊ねる。	“What is it?” enquires the Deputy, still eyeing the other doubtfully.
Jasper	-	「こっちへ来たら教えよう」	“Come closer to me and I’ll tell you,” is the answer.
Deputy	enquires -	「だますんじゃないだろうな」と疑わし気に訊ねる。	“Yer ain’t a-foolin’ on me?” enquires the boy, suspiciously.
Jasper	-	「お前をだます訳がないだろう」	“Why should I deceive you?” is the reply.
Deputy	returns	「いってみな。騙したらやっつけるぞ」	“Say yer ’opes as yer’ll be busted if yer fool me,” returns the Deputy.
Jasper	rejoins	「やっつけられるのもいいものだ」とは Jasper のユーモアでの応答。	“Well,” rejoins Jasper, good-humouredly, “I hope I may be busted.”
Deputy	returns	「わかったよ」と Jasper に近づき、「何をしてほしいんだ」	“All right, Jarsper,” returns the boy, and comes over to where the other stands . “Now what do yer want a feller to do?”
Jasper	-	「まず、少し前に大聖堂から出て行った人物を見かけたかどうかを知りたい、それから、その人物をまた見かけたら教えてほしい」	“First, I want to know if you saw the person who passed out from the Cathedral a few moments since, and if you would know her again?”
Deputy	-	「見なかったと言ったら、ウソになるな。また見かけたと言うときには、本当のことをいうよ」	“If I said as I didn’t see her, I’d lie,” is the answer; “and if I said as I’d know her agin, I’d tell the truth.”
Jasper	said	「よし、わかった」、と Jasper が言った。	“Very good,” said Jasper.
Jasper	continues	「彼女のあとをつけてくれ。そして、どこへ行くか、ロンドンへ戻るかどうか教えてくれ。この仕事をちゃんとこなせば1シリングやるぞ。俺をだますようなんでするな。」と続ける。	“Now I want you to follow her, and tell me where she goes, and find out if she returns to London; do this faithfully and you shall have a shilling for the service, — and don’t attempt to deceive me,” he continues , “or I’ll flog the life out of you.”
Deputy	returns	「誰もだましたりしないよ、Jasper」と Deputy、「俺はやると言ったらやるんだ。」	“Jarsper, I don’t fool no one,” returns the Deputy; “when I says I’ll do anythin’ I allers does it.

Deputy	adds	「ところでお金はどこへもらいに行けばいい？」	But where shall I come for the shillin'?" adds the boy.
Jasper	-	「わたしの部屋に1時間以内に来い。ちゃんと仕事をしたと分かったら、文句のないようにしてやろう」	"Come to my lodgings in an hour – that will give you time – and if I am convinced that you have been faithful, you will have no cause to complain."
-	(gave, ran)	Deputy は一声叫び声をあげると、用心のために手に持っていた石を、Durdleに見立てた、道の反対側にある柱に向かって投げ、2ペンス館へと元気よく走り去った。	The boy gave one long, shrill whistle; then throwing the stone, which he had continued to hold in his hand, as a precautionary measure, at an imaginary Durdles in the shape of a post on the opposite way, ran briskly off in the direction of the Travellers' Twopenny.

5.4.7 続編の第22章における過去時制へのシフト

続編の第22章は全体として現在時制で語られているが、発話の伝達や語りに過去時制が用いられている箇所が数か所みられる。それは章前半の、Grewgious¹⁴⁰の事務所でGrewgiousとDatchery¹⁴¹が会話を交わすシーンである。なお章後半の、路上で交わされるDatcheryとJasperの会話シーンは一貫して現在時制語りである。

第一のケース：Grewgiousが事務所で、あれこれもの思いに耽っている様子が現在時制で語られ、つづけてそこにDatcheryが初めて訪ねて来たときの状況が、過去時制にシフトして語られている。

One morning, a few days after the scenes narrated in the preceding chapter, Mr. Grewgious, having just returned from his customary morning call on Rosa, **is** seated at his desk apparently in deep thought, occasionally casting a glance at Bazzard, who **is** seated near him at another desk, engaged in writing, and so intent upon his work that he **does** not raise his eyes therefrom. Several times **does** Mr. Grewgious seem on the point of addressing his busy companion, and then thinking better of it, **falls** to meditating again.

¹⁴⁰ Rosaの後見人、老年の独身者。ロンドンで法律顧問、地代受取代行などの仕事に携わる (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

¹⁴¹ Cloisterhamに現れた白髪頭の老紳士 (ibid.)。続編ではPufferの息子とされる人物である。

It was during one of these meditations that a stranger had entered unannounced, and stood midway between the door and Mr. Grewgious ere he was observed by the latter; and he might have remained in that position a much longer time, had he not, in quite a loud voice, enquired if there was “Any one at home?”

前章の場面の数日後のある朝、毎朝の習慣で Rosa に会いに行き丁度戻ってきた Grougious は、仕事をしている Bazzard の横の自席にすわり、傍目でわかるくらい深くもの思いに耽りながら、隣で書き物をしている Bazzard に時折目を向けるが、仕事に集中している Bazzard はそれに気づかない。Grewgious は何度も彼に話しかけようとするが、考え直して再び黙考に入る。

そのようにしているとき、突然見知らぬ人が入ってきて、ドアと Grewgious の間に立った。その人物がかなりの大声で「誰かいませんか」と尋ねなかったら、Grewgious に気づかれず、そのままずっとそうしていただろう。

It was で始まる後半のパラグラフの時は前半から継続していると考えられ、その場の説明を同じ現在時制で語ることも可能と思われるが¹⁴²、それを過去時制にシフトすることで、冒頭の Grewgious がもの思いに耽るシーンから、本章の話題の中心である、Edwin の失踪をめぐって交わされる Datchery と Grewgious の会話のシーンへと切り替わるサインになると考えられる。なおこのパラグラフに続き、Grewgious たちが突然の来訪者に驚き、それに Datchery が応じる様が、同様に過去時制で語られている。

第二のケース：訪問の趣旨について Datchery が Grougious と交わす会話が現在時制で語られ、それに以下の一節がつづく。

For causes best known to himself, Mr. Grewgious did not immediately reply to his questioner; most probably for the reason that he had settled upon a theory which was in no wise complimentary to a certain person he could name. Another reason was, that this Mr. Datchery might only be, after all, acting in the interest of the person he had suspected, and possibly this visit might have been arranged for the express purpose of leading him (Mr. Grewgious) to make some statement in which he should compromise

¹⁴² その場合、前半と異なり後半には語り手が人物の心中を洞察する文言が含まれているので、Casparis (1975) の区分では *current report* でなく *HP* の表現になると考えられる。

himself.

自分にはよく分かっている理由で、Grewgiousはその質問に即答しなかった。先ずは、彼 [Grewgious] が、好意的とはとても言えない思いを、件の人物 [Jasper] に対して抱いてきたこと。またこの Datchery という人物が、実はただ Grewgious が疑いを抱いてきた人物 [Jasper] のために動いていて、この訪問は、Grewgious に自身の信用を落とすことになるようなことを言わせようとの明確な目的で仕組まれたものかも、と考えたからである。

ここでは、それまでの会話の中で Grewgious が、突然の来訪者である Datchery に警戒的に接してきた理由が過去時制で語られている。

第三のケース：つづく会話で Grewgious は Edwin の失踪についての見方を問われるも、初対面の Datchery への警戒感をぬぐえず断定的な意見を控える。Datchery は Grewgious の信頼を得るべく、あらためて自らの真摯な思いを述べるとともに、「Edwin は殺されたのか、それとも自発的に去ったのか」と、Grewgious に迫る。ここまでは現在時制での語りだが、つづく以下の Grewgious と Datchery の発話は、いずれも過去時制で語られている。

The earnestness with which Mr. Datchery prefaced his last question seemed to inspire Mr. Grewgious with more confidence than he had before entertained, and his reply indicated as much: “As I before remarked, I have held no settled opinion concerning the affair, for I have had no better opportunity of arriving at facts than anyone else; nor so good an opportunity as some others have had; for instance, his relative, say—Mr. Jasper; [...].”

Mr. Grewgious’ reference to John Jasper was put in his most Angular manner, and Mr. Grewgious’ eyes had a most Angular expression, as he turned them upon his listener. If his object in introducing that individual’s name was to turn the subject of their conversation upon the Music-master, it proved successful, for Datchery immediately said: “And what do you think of Mr. Jasper? I understand he took the loss of his nephew very much to heart, and has sworn to ferret out, unaided, his assassin.”

真摯なことばで始まった Datchery の質問は、それまでより大きな信頼感を Grewgious に抱かせたようで、彼はつぎのように答えた。「先ほど申し上げたよう

に、私はその件について確たる考えは持っていません。というのは、事実を明らかにするのに、他の誰よりも良い機会が私にあったわけではなかったし、ある部類の人々—例えば彼の近親者、そう Jasper とか—にはあったであろう機会もまた、私にはなかったから。[...]」

Jasper の名が Grewgious らしい堅苦しい口調で言及され、彼が聞き手に向き直ったときの目の表情はとても固かった。もし彼の目的が、その人物の名前を持ち出し、会話の話題を聖歌隊長 [Jasper] に向けることだったなら、それは成功していた。Datchery は即座に言った、「Jasper についてどうお考えか？彼は甥を失って心を痛み、暗殺者を自分ひとりでも探し出すと誓っているようだが。」

この引用文の前半のパラグラフでは、直前の Datchery の発話を振り返り、それによって Grewgious に生じた心情の変化が過去時制 (seemed) で語られる。つづく Grewgious の返答を示す動詞 (indicated) は、本章の主体的な時制である現在時制に戻るのが自然と思われるが、先行部分とともに同一文を構成しているため、時制を一致させ過去時制にしていると考えられる。後半のパラグラフでも、Grewgious による直前の発話のなされ方と、その発話が醸し出す効果が、過去時制で仮定法過去を交えて語られた後、つづく Datchery の発話を伝達する SpV も、前半のパラグラフと同様な理由で過去時制 (said) にしていると考えられる。つまりこの SpV の時制のシフトは、時制の一致という統語的な要因によるものであって、何らかの文体的意味を含むものではないと考えられる。

第四のケース：つづく会話でも、Grewgious は依然として Datchery への警戒感を払拭できておらず、Jasper に言及することを避けるが、Datchery はさらに踏み込んで、「Edwin の死で Jasper に何らかの利益があり得るのか、あるとしたら、それは何か？」と迫り、これらの会話が現在時制の SpV で語られる。そして、このやりとりにおける Datchery の表情や Grewgious の受け止めが、前のケースと同様に過去時制で以下のように語られる。

The earnest tone and eager look that accompanied the latter portion of the speaker's remark, were not lost upon Grewgious, who gazed steadily at him as he closed the sentence. Who could this man be, he thought, that seemed so deeply interested in one who was neither kith nor kin to him?

その話し手 [Datchery] の、話の後の部分の口調や表情の真剣さが Grewgious に伝

わり、話が終わるや Grewgious は彼をじっと見つめた。この人物は、知己でも親類でもない人に、とても深い関心を持っているようだが一体何者なんだ、と彼は考えた。

以上述べたように、本章における時制シフトの多くは、一連の会話の途中で、それまでの会話を振り返り、場の状況や人物の心情を描写したりする語り、過去時制にシフトして挿入されるケースである。以下はこのシーンのテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
-	-	ある朝、Bazzard ¹⁴³ が仕事をしている横で、毎朝の習慣で Rosa に会いに行き丁度戻ってきた Grougious が、自席にすわり、深くもの思いに耽りながら、隣で書き物をしている Bazzard に時折目を向けるが、仕事に集中している Bazzard はそれに気づかない。Grewgious は何度も彼に話しかけようとするが、考え直して再び黙考に入る。	One morning, a few days after the scenes narrated in the preceding chapter, Mr. Grewgious, having just returned from his customary morning call on Rosa, is seated at his desk apparently in deep thought, occasionally casting a glance at Bazzard, who is seated near him at another desk, engaged in writing, and so intent upon his work that he does not raise his eyes therefrom. Several times does Mr. Grewgious seem on the point of addressing his busy companion, and then thinking better of it, falls to meditating again.
-	-	そのようにしているとき、突然見知らぬ人が入ってきたが Grewgious は気づかない。その人物が大声で「誰かいませんか」と尋ねなかったら、そのままずっと立っていただろう。	It was during one of these meditations that a stranger had entered unannounced, and stood midway between the door and Mr. Grewgious ere he was observed by the latter; and he might have remained in that position a much longer time, had he not, in quite a loud voice, enquired if there was “Any one at home?”

¹⁴³ Grewgious の書記である (Dickens, 1870 小池訳 2014)。

-	-	その人物は、Grewgious たちの驚く様子に笑みを浮かべ、ノックをしても応答がないので、勝手に入ってしまった、と説明した。	For such an exceedingly Angular Man, Mr. Grewgious gave a sudden start, while Bazzard dropped his pen and stared at the new-comer very much as he would have done had he beheld his employer standing on his head. The surprise which his presence had created, caused the new-comer to smile; remarking that he was sorry to cause them annoyance, but that he had knocked at the door some little time, and, no one answering the summons, he had made bold to enter.
Grewgious	replies	「かまいませんよ。気づかなかった我々が悪いのです」と、Grewgious はその人物に近づきながら返答する。	“And you did perfectly right, sir,” replies Grewgious, approaching the visitor, “perfectly right, sir. The apology should come from us. Should not the apology come from us, Bazzard?”
-	-	Bazzard は仕事に戻る。	Being thus appealed to, Mr. Bazzard, who has hardly recovered himself, is heard to say: “I follow you, sir,” and then falls to following the work before him, which had been so suddenly interrupted.
-	-	来訪者は「プライベートな類の仕事で伺った。Grewgious さんと二人きりで話がしたい」、と切り出す。	The visitor proves to be no less a personage than Mr. Datchery, who places his hand upon the back of the chair proffered him by Grewgious, and informs that gentleman that he has called on business of a private nature, and could they be alone for a short time?
Grewgious	returns	Grewgious は快諾し、奥まった部屋へ案内するも、驚きの表情を浮かべる。	“Certainly,” pleasantly returns Grewgious, but manifesting no little surprise upon his countenance, as he lead the way to an inner apartment.
Datchery	-	Datchery は部屋に入ると、Grewgious の許可を得て用心深く鍵を閉め、だしぬけに自己紹介する、「私は Datchery といたします。Cloisterham から来ました。」	On entering the room, Datchery begs permission to bolt the door, which, being granted, he proceeds to do, remarking as he does it that he is glad it is a bolt, for keyholes have done a good deal of mischief in their day. Both gentlemen are seated now, and Datchery abruptly introduces himself: “Mr. Grewgious, my name is Datchery, and I am from Cloisterham.”

-	-	Cloisterham と聞いた Grewgious は、Edwin の失踪に関連した情報が得られるかも、と期待しうなずく。	On hearing Cloisterham mentioned, Mr. Grewgious' mind instantly reverts to the mysterious occurrence of Christmas time and he thinks it possible the visitor is about to impart some information that is to throw light upon it. He bows his head as an intimation that he should be glad to hear more.
Datchery	continues	「自分が何者かはさておき、あなたと、あなたが保護している人に関係する問題の解決をお手伝いしたくて伺った。私がお尋ねするであろうことを、単なる好奇心から、とっていたきたくはない。」と、Datchery。	“It don't matter,” continues Datchery, “at this time, that I should say more about myself. Whatever else I have to say is of a matter that directly concerns you, and one you have under your charge; I am actuated solely by a desire to benefit those who need assistance in their troubles. I think you will understand my position, and will not attribute such questions as I may ask to mere idle curiosity. Do you go along with me, sir?”
Grewgious	says	Grewgious : 「Edwin Drood が失踪した件のことかと思うが、よろこんで何でもお話ししましょう」	Says Mr. Grewgious: “So far as I can with propriety answer your questions, I will. You will allow me to observe, however, that this interview is a little—well, shall I say abrupt? I think you will agree with me. However, presuming that you refer to the disappearance of Edwin Drood, I shall be glad to assist you in any way that I can, or with any facts that I possess.”
Datchery	rejoins	「その件です。私の動機をご理解いただけたようで、スムーズにお話をすすめられそうです」と、Datchery。	“You are correct in your surmises, sir,” rejoins Datchery, “and now that you have inferred what are my motives, we shall get along very comfortably, no doubt.”
Datchery	-	Datchery : 「あの青年は自分の意志で失踪したのか、誰かが自らの利益のため、力づくでそうさせたのか、についてお考えを聞かせてほしい」	A pause, and then Datchery:— “Will you please tell me, Mr. Grewgious, if you have ever settled upon any theory which would account for the sudden taking off of that young man; that is, do you believe, from any knowledge of the circumstances which surrounded him, that his absence is voluntary, or do you believe that there was any person who could have had an interest in putting him out of the way by violence?”

-	(did, was)	Grewgiousはその質問に即答しなかった。それは、彼が、好意的とはとても言えない思いを、件の人物 [Jasper] に対して抱いてきたこと。また Datchery という人物が、実はその人物 [Jasper] のために動いていて、Grewgious に自身の信用を落とすことになるようなことを言わせるために訪問してきたのかも、と考えたからである。	For causes best known to himself, Mr. Grewgious did not immediately reply to his questioner; most probably for the reason that he had settled upon a theory which was in no wise complimentary to a certain person he could name. Another reason was , that this Mr. Datchery might only be, after all, acting in the interest of the person he had suspected, and possibly this visit might have been arranged for the express purpose of leading him (Mr. Grewgious) to make some statement in which he should compromise himself.
Grewgious	-	「その件について色々考えてはいるが、判断出来かねている。自分は特に頭の固い人間なので、妥当でない見方をしているかもしれない。」と Grewgious 氏はやっと返答。	Mr. Datchery, looking anxiously at Mr. Grewgious, meanwhile, awaiting his reply, finally hears it: “My dear sir; it would not be doing justice to myself, were I to say that I have settled upon any thing definite in the matter. In fact, I have held so many theories in regard to it, that I have not been able to settle on any one of them. But when I consider, or when others consider, what an exceedingly Angular Man I am by nature, I am not surprised at the unsatisfactory result of my theories, nor do I suppose any one else will wonder thereat.”
-	-	この言葉をためらいつつ伝えながら、Grewgious は、これで自分の信用を損ねたかも、と感じる。	The speaker, delivering these words with great hesitation, twists about in his chair in a nervous manner, seeming to feel that, notwithstanding his caution, he has possibly compromised himself in what he has said.

Datchery	replies	<p>Datchery は Grewgious が自分に疑念を抱いているのを感じ戸惑うが、真剣な口調で愛想よく返事をする。「はっきりとお答えいただけないのは残念です。私の唯一の目的は、あなたの保護下にある人たちの利益に役立つことです。この件についてのあなたのご見解は、この謎を解くのに大いに役立ちます。私を信じていただけませんか。そして、Edwin は殺されたのか、それとも自発的に去ったのか、あなたのお考えをお聞かせ下さいませんか。」</p>	<p>Mr. Datchery notices the doubt with which the other regards him, and is a little annoyed thereat, but keeps it to himself, and pleasantly replies, though in earnest tones: “I regret that you cannot feel sufficient confidence in me to warrant a definite reply to my question. I assure you, sir, that my sole object is to subserve the interests of those whose welfare you seek, and I emphatically repeat that your opinion in this matter will aid materially in solving this mystery. Now, will you kindly favor me with your belief and say if you think Edwin Drood has been murdered, or that he has voluntarily taken himself away?”</p>
Grewgious	-	<p>Datchery の真摯なことばは、より大きな信頼感を Grewgious に抱かせ、彼は「事実を明らかにする機会に恵まれた人物、例えば近親者である Jasper 氏が、自分よりも、この事件の解決に適した人物では？」と返した。</p>	<p>The earnestness with which Mr. Datchery prefaced his last question seemed to inspire Mr. Grewgious with more confidence than he had before entertained, and his reply indicated as much: “As I before remarked, I have held no settled opinion concerning the affair, for I have had no better opportunity of arriving at facts than anyone else; nor so good an opportunity as some others have had; for instance, his relative, say – Mr. Jasper; and, if it would not be improper for a person of my Peculiar Habits to venture such a remark, I should say, with all due respect to that Musical Personage, that he would be the proper person, as his kinsman, to set the wheels of investigation in motion, and so grind out the facts.”</p>

Datchery	said	Grewgious は彼らしい堅苦しい言い方で Jasper の名前に言及したが、会話の話題を彼に向けることがその目的だったなら、それは成功していた。Datchery が即座に言った、「Jasper 氏についてどうお考えか？甥を失った彼は心を痛め、暗殺者を自分ひとりでも探し出すと誓っているようだが。」	Mr. Grewgious' reference to John Jasper was put in his most Angular manner, and Mr. Grewgious' eyes had a most Angular expression, as he turned them upon his listener. If his object in introducing that individual's name was to turn the subject of their conversation upon the Music-master, it proved successful, for Datchery immediately said : "And what do you think of Mr. Jasper? I understand he took the loss of his nephew very much to heart, and has sworn to ferret out, unaided, his assassin."
Grewgious	-	「その点について述べるのは控えたい。考えがあることは否定しないが、自分にとどめておきたい」	"My dear sir, pardon me if I do not choose to give my opinion in that direction. I do not deny, mind you, that I have an opinion, but I prefer to keep it."
Datchery	returns	「あなたのお答えが私が追求しようとする方向性を大きく決めるので、警戒せずはっきりしたお答えを頂きたい。自分はこの謎を全力で解明するつもりだ。Edwin の死で Jasper に何らかの利益があり得るのか、あるとしたら、それは何か？」と Datchery が返答。	"As you please, sir," returns Datchery, "but allow me to ask you one thing more, and I hope you will feel at liberty to give me a definite reply, for on your answer will depend very much the course I intend to pursue; and, let me add, that I am determined to do all in my power to unravel this mystery. Would John Jasper have any interest in the death of Edwin Drood, and, if so, what?"
-	-	Grougious は、Datchery の口調・表情に真剣さを感じ、じっと見つめた。	The earnest tone and eager look that accompanied the latter portion of the speaker's remark, were not lost upon Grewgious, who gazed steadily at him as he closed the sentence.
-	-	この人物は、知己でも親類でもない人に、とても深い関心を持っているようだが、一体何者なんだ、と彼は考えた。	Who could this man be, he thought , that seemed so deeply interested in one who was neither kith nor kin to him?

Grewgious	replies	Grougious は真剣な口調で答える、「Edwin は誰かから不当な目にあつたのだと信じている。あえて言うが、Edwin の死で Jasper に何らかの利益があると信じている。それが何かはわからないが」	“Well, I will be candid with you,” replies Mr. Grewgious, and speaking very earnestly now. “I do believe that Edwin Drood has been foully dealt with — by whom I do not know. Perhaps it is a bold remark to hazard to a stranger, but I will venture it, notwithstanding; I do believe — believe, mind you — that John Jasper did have an interest in the death of his nephew; though what that interest was I am not prepared to say.”
Datchery	-	「信用してくれてありがとう。自分もそう思う。最後にもうひとつ聞くが、Rosa 嬢は Drood 青年がいなくなって悲しんだか？それまで彼に親密な感情を抱いていたと思うか？」	“Thank you for your confidence, sir, and let me assure you it is not misplaced. Once more, and I am done. Has Miss Bud mourned the loss of young Drood? Do you think she ever had any affection for him?”
Grewgious	-	Grewgious はその質問に啞然とし、目的は何かと戸惑うが、「失踪の直前まで彼女自身の人生のごく近くに位置づけられていた青年の失踪を悲しむのは当然である。彼女はずっと彼のことを悼んでいる。疑念を抱くようなことは何もないと思う。」と答える。	If Mr. Grewgious was staggered at the former questions of his visitor, he was double-staggered at the last. What possible object could the man have in asking that? He recovers himself in a moment, but makes answer in a somewhat lofty tone: “Miss Bud, being a young lady of tender sympathies, would very naturally, under the circumstances, grieve for the loss of a young man, whose life had been so closely identified with her own up to the time of his taking off. She does mourn for him constantly. There is nothing strange in that, I should suppose.”
Datchery	returns	「2人が恋愛関係にあると聞く一方で、全く違って、親密さはなかったとも聞いており、その真偽にいささか興味があつたのです」と、相手は返答。	“Far from it, sir,” returns the other, “but having heard something of the romance connected with the two, I felt some curiosity to learn the truth of certain statements that I have heard, which declared that no affection existed between them.

Datchery	continues	Datchery は礼を言って席を立つ。「あなたから聞いたことを参考に、更にいろいろな事実関係を調べます。ごきげんよう。遠からずお目にかかれると信じています。」	And now, Mr. Grewgious,” continues Datchery, rising from his chair, “permit me to thank you for the courtesy you have shown me, as well as for your confidence. From what I have gathered from you, I can lay my plans for finding out more in another quarter. Good-morning; we shall meet again at no distant day, be sure.”
-	-	2人は部屋を出、GrougiousはBazzardにDatchery氏を見送らせる。	Returning to where they had left Bazzard, Mr. Grewgious instructs that gentleman to show the visitor out, and Bazzard, rising to do so, at the same time making answer, “I follow you, sir,” causes Mr. Datchery to look round and utter in a curt tone, that if he (Bazzard) follows him beyond the door, it is more than likely that the person who cooks his dinner will not need to get a plate for him to-day. Which saying, being overheard by Grewgious, causes him to smile at Datchery’s mistake, while Bazzard stands with his hand still on the door, undecided whether he ought to apologize to the irate Datchery or otherwise.

5.4.8 続編の第 24 章における現在時制へのシフト

続編の第 24 章は全体として過去時制で語られているが、現在時制にシフトした語りや現在時制の SpV で伝達される発話が随所に見られる。以下、現在時制の用法として特徴的な各ケースについて述べる。

ケース 1：本章の冒頭で、Cloisterham の人々の間で Edwin の謎の失踪が話題になっていること、また、Edwin の亡霊を大聖堂の近くで見たと Durdles が言っていることが過去時制で語られる。そして亡霊が現れる場所について authorial comment が以下のように挿入され、つづいて、その Durdles の話の内容¹⁴⁴が過去時制で語られる。以下はこのシーンのテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
-	-	亡霊が殺された場所に現れるのを好むということは奇妙なことであって、災難が降りかかった場所を避けて、できるだけ遠いところに現れると考えるのが自然な考えである。	And here let us observe that it is a singular fact, and one which none will dispute, that the ghosts of murdered people should prefer to exhibit themselves on the spot where their murder occurred, it being only natural to suppose that they would keep as far away from it as possible, after what befell them there. Perhaps some of the learned scientists of the present century will explain this fact, but it is to be hoped they will arrive at a more satisfactory conclusion than usually attends their investigations upon phenomenal subjects.

ケース 2：Neville への関心と Helena への想いが Crisparkle から消えることはなく、彼はこの兄妹の住む Staple Inn を訪ねて、やさしいことばをかけ励ます。Crisparkle の母は、息子が Staple Inn を頻繁に訪ねていることが気になっている。これらの状況が過去時制で語られ、そこに Crisparkle とその母がお茶を飲みつつ歓談する以下のシーンがつづく。

¹⁴⁴ 内容の引用は省略した。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
Crisparkle, Mrs.	said	Crisparkle の母は、「ねえ、おまえ、なぜそんなに頻繁にロンドンに行くのかね。その訳を教えておくれ。」と息子に話かけた。	“Sept, my dear boy,” said she, one day, as they were seated at a cosy tea, “I wish you would tell me what it is that calls you to London so often. Not that I doubt you have some excellent reason, for I feel sure you have; and hence my curiosity is excited to learn the cause.”
Crisparkle	continues	「時がきたら、お話しますよ。でも私は Bluebeard ¹⁴⁵ 夫人の運命に、この数週間興味津々だけと、わからないまま、それでよしとしていますよ。」と楽し気に答える。	“All in good time, Ma, dear, all in good time; be patient,” he continues , pleasantly, “and don’t forget the Mrs. Bluebeard’s fate. I have also had my curiosity excited for a few weeks past, but so far have been satisfied to leave it ungratified.”
Crisparkle, Mrs.	-	「それじゃ、もしそれが納得できるものなら、話して頂戴。あなたに手本を示せるようにね。」	“Then if it’s anything that I can say that will gratify it, my dear boy, tell me, so that I may <u>set you an example</u> ¹⁴⁶ .”
Crisparkle	continues	その答えに二人とも大笑いし、しばらくして Crisparkle が言う。「お母さんに本当に知ってほしいと思っていることがあるけど、お母さんの手におえるものとは思えないんだ。Datchery という白髪の老紳士は何者で、これとって刺激のなさそうな場所—Tope の下宿のことなんだけど—の、何に興味があるのか不思議に思っているんだ。」	Both laugh heartily at this rejoinder of the old lady, and after a moment the Minor Canon continues : “I am perfectly willing you should know what it is, Ma, but I don’t think you can help me. I have been wondering for some time who is the white-headed old gentleman calling himself Datchery, and what he can find in this dull and sleepy place to attract him here,—Mrs. Tope’s lodger, I mean.”
Crisparkle, Mrs.	asked	「その人とは、まだ挨拶してないのかい」	“Haven’t you made his acquaintance yet, Sept?” asked his mother.

¹⁴⁵ 妻を次々に殺す金持ちの男と、それから逃れようとする妻のフランスの昔話である。

<https://en.wikipedia.org/wiki/Bluebeard>

¹⁴⁶ Crisparkle に真面目に返答するよう促す会話に聖書のことばを引いている。“For I have set you an example, that you also should do as I have done to you”. (NT. John 13:15)、(新約聖書のヨハネによる福音書第 13 章のことば)。「わたしがあなたがたにたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。」<http://bible.salterrae.net/kougo/html/john.html>

Crisparkle	-	「してるような、してないような。ほぼ毎日通りすがりに会ってはいるが、それだけのことで、彼のことはまるで知らないんだ。でも夕方に Tope のところへ立寄って、その風変りな人物を訪ねようと思っている。」	“Yes – and no; I have met him, of course, and nearly every day, but, beyond a passing recognition, I know nothing about him. I believe, however, that I will go over to Tope’s this evening and call on this eccentric personage.”
------------	---	--	--

このシーンでは、かねてより気になっている息子の行動の理由を聞き出そうとする Crisparkle の母の発話は過去時制で、Helena への想いや、Edwin 失踪に絡んだ疑念に触れず、母親の質問を受け流したい Crisparkle の発話は現在時制で伝達されている。

ケース 3 : Crisparkle は母親との歓談のあと、Datchery を訪ねるべくトープの下宿へ向かう。その際、同じ下宿に住む Jasper の部屋の窓に、異様な動作をしている Jasper の姿を目にする。訝りながらしばらく様子を窺っているところへ Datchery が現れ、ふたりは目にしたその光景について語り合う。突然叫び声が Jasper の部屋の方向から聞こえたので、二人は急ぎ駆けつける。トープ夫妻も駆けつけてくる。Datchery がドアを強く何度もノックすると、Jasper が死人のような顔色で戸口に現れ 4 人を迎え入れる。叫び声について Datchery が Jasper に問うも、何も聞かなかったとのこと。以上の状況が過去時制で語られ、つづく「Edwin 殺しの犯人につながる証拠を見つけた」との Jasper の発話が、以下のように現在時制で示される。この発話は本章の山場ともいえるべきシーンの口火をきるものであり、それを時制をシフトして示すことで、読者の興味を喚起し、新たな話題の展開を予感させていると考えられる。

“Do not mention it, sir,” **is** the Choir Leader’s reply. “I do not mind being aroused, [...] By the way, do you know, dear sir, that I have got some evidence – just a little speck – which leads me to believe that I am at last on track of his murderer?”

聖歌隊長 [Jasper] が答える、「起こされたことは何とも思っていない、[...] ところで彼を殺した者に迫るような証拠 – といってもささやかなものですが – をついに私が手にしたことはご存じですか？」

ケース 4 : 「それによって謎が解け心が落ち着くことを望む」との Crisparkle の返答に Jasper が言葉を返そうとしたとき、Datchery が二人の会話に割り込んで、彼がロンドンで

旧い知人に偶然会い、今どこに住んでいるか訊かれたことを持ち出す。ここまでは過去時制で語られるが、その問いに彼が「Cloisterham」と答える一節は、以下のように現在時制にシフトして語られ、また彼の発話は現在時制にシフトした SpV で伝達されている。

All the time Datchery keeps his eyes on Jasper's face, and never takes them away till he ceases speaking. "As I was saying," he continues, "he desired to know where he should call if he wanted to find me at home, and I mentioned the place – Cloisterham."

じっと Jasper の顔を凝視しつつ、Datchery は話を続ける、「会いたいときどこへ訪ねればいいのか、と訊かれたので、Cloisterham だ、と言ったんだ。」

ケース 5：そしてつづけて Datchery がその知人から聞いた、Edwin が生きているという話の詳細を語り、それに Jasper が「それは真っ赤なウソだ」と狂乱して叫ぶ一節が過去時制で語られたのち、Jasper が息を失って床に倒れ込む様子が、以下のように現在時制で語られている。

[...] and then the Jasper [sic] arms drop listlessly at his side, his limbs tremble, his head sinks upon his breast, and he falls to the floor a mass of lifelessness.

[...] それから両腕を力なくおろし、ひざを震わし、頭を胸の上に沈め、息を失って床に倒れ込む。

ケース 6：驚愕した Crisparkle たちの様子と、今までに Jasper がこのような発作に陥ったことがあったかと、トープ夫人に訊ねる箇所が過去時制に戻って語られた後、トープ夫人の答えが以下のように現在時制にシフトして語られている。

[...] the worthy dame affirms that she has known of his being taken so before at divers times, and always when he has been conversing about his nephew; and she further declares it to be her fixed opinion that it is grief for his nephew that has led to the present scene, [...] How much more she would have said is not known, for at this point Datchery cut her short by sending her for some brandy. When she returns with it she finds Jasper in a sitting position, and apologizing to the two gentlemen for his violent

excitement and consequent result.

彼女は数回あったことを認め、それはいつも彼が甥について話しているときで、こんな状態になるのは、甥がいなくなった悲しみからのものだろう、 [...] と断言する。もっと話すことがあったかもしれないが、ここで Datchery が割り込んで、夫人にブランディを持ってこさせる。彼女が戻ったときには、Jasper は起き上がっていて、Crisparkle と Datchery に、自分が興奮したことと、驚かせたことを詫げる。

ケース 7: そして Jasper がトープ夫人からブランディを受け取って飲み、「もうご安心ください」と告げる様子が現在時制語りでつづく。

Taking the brandy from Mrs. Tope and pouring out a glassful, he swallows it and declares that now he feels better and they need entertain no fears for him.

ケース 4~7 はいずれも current report で表現されている。語り手は出来事の生起した順序に従い、また、それに思いを巡らすことなく淡々と語っており、繰り返された状況の場に読者が臨んでいるかのような効果を生んでいる。以下はケース 3 以降のシーンの一連のテキストである。

発話者	SpV	発話などの概要	テキスト
Jasper	-	<p>聖歌隊長[Jasper]が答える、「起こされたことを何とも思っていないし、気遣ってくれたことを感謝しています。私が同じように甥[Edwin]を気遣っていたら、彼がいなくなって日々嘆くこともなかったろうに。</p> <p>ところで<u>彼を殺した者に迫ったと思えるような、ちょっとした証拠をついに私が得た</u>ことはご存じですか？」</p>	<p>“Do not mention it, sir,” is the Choir Leader’s reply. “I do not mind being aroused, and I am grateful that you should be so thoughtful of my welfare. Had I been as thoughtful of my poor boy’s welfare, I should not now daily have his loss to mourn. I have thought of him more to-day, it seems to me, than ever. By the way, <u>do you know, dear sir, that I have got some evidence — just a little speck — which leads me to believe that I am at last on track of his murderer?</u>”</p>

Crisparkle	answered	「あなたの持っている証拠が何であれ、彼の失踪の謎解きに有用なものだと心から信じています。たとえそれで彼の死が確からしいと分かることになっても、平穏な気持ちにさせてくれるだろうから。」と、Crisparkle が答えた。	Dim recollections of what she had heard concerning Edwin Drood's appearance, in ghostly form arrayed, sprang to the mind of Mrs. Tope, as Jasper mentioned his nephew; and sundry glances towards the windows and remote corners of the room were the consequence of such recollections; there being nothing to see, however, the good lady recovered from her alarm as the Minor Canon <u>answered</u> : "I sincerely trust that any evidence you have will prove successful in solving the mystery of his disappearance, for it seems to me it would be a relief, even were you to learn for a certainty that he was dead."
Datchery	interposed	Jasper が何か言おうとしたとき、Datchery が口をはさんだ。「ところで、昨日ロンドンで長い間会っていなかった古い知人に偶然会った。今どこにいるかと聞かれ、」	"By-the-way," <u>interposed</u> Datchery, as Jasper was about to make some remark, "I was in London yesterday, and fell in with an old acquaintance whom I had not seen for some time, and he asked me where I was located now; — funny that I <u>didn't</u> think to tell you this before, Mr Jasper, — I meant to."
Datchery	continues	じっと Jasper の顔を凝視しつつ、Datchery は話を続ける、「会いたいときどこへ訪ねればいいのか、と訊かれたので、Cloisterham だ、と言ったんだ。」	All the time Datchery keeps his eyes on Jasper's face, and never takes them away till he ceases speaking. "As I was saying," he <u>continues</u> , "he desired to know where he should call if he wanted to find me at home, and I mentioned the place — Cloisterham."
Datchery	-	そうしたら彼が、「本当か。では若者が謎の失踪を遂げ、かなり経ってからまた現れた、という話を聞いたか？」と、言ったので、私が「たしかにいなくなったが、便りがあったとは聞いていない」と言ったら、彼が「本当だ、彼は生きていて元気だ」と言ったんだ。	"“Indeed,” <u>said</u> he. ‘Well, then, you have heard of that young man who so mysteriously disappeared, and who, after being gone so long, turned up again.’ ‘I did hear,’ <u>said</u> I, ‘that he had gone, but not that he had been heard from.’ ‘It’s a fact,’ <u>said</u> he; ‘he’s alive and well.’”

Jasper	cried	<p>Jasper が椅子からすつくと立ちあがり、こぶしを固く握り、怒り狂わんばかりの表情で Datchery をねめつけ、「それは真っ赤なウソだ。どうしてその馬鹿者が知っているのか、知り得たのか。何を見たというのか」と叫んだ。<u>それから両腕を力なくおろし、ひざを震わし、頭を胸の上に沈め、生気を失って床に倒れ込む。</u></p>	<p>“It’s a lie a d--d lie!” cried Jasper, springing from his chair, and glaring at Datchery with clenched hands and a face that was almost livid. “How did he know—the fool! How did he dare! What did he see!” and then the Jasper arms drop listlessly at his side, his limbs tremble, his head sinks upon his breast, and he falls to the floor a mass of lifelessness.</p>
-	-	<p>とても興奮し、混乱状態となるも、しばらくして Crisparkle と Datchery がやっと我にかえり、意識を失って足元に横たわる Jasper をベッドに運んだ。トープ夫妻は呆然として手をこまねいていた。</p>	<p>The excitement at this moment was very great, and naturally led to confusion on the part of all, so that it was some moments before any assistance was rendered the unconscious man who lay helpless at their feet. The Minor Canon and Datchery were the first to recover themselves, and they raised Jasper and placed him upon the bed, the Verger and his wife nearly dead with fear, looking on without offering any assistance.</p>
-	-	<p>Crisparkle がトープ夫人に Jasper がこのような発作に陥ったことがあったか、と訊ねたところ、数回あったことを認め、それはいつも彼が甥について話しているときで、こんな状態になるのは、甥がいなくなった悲しみからのものだろう、云々と断言する。もつと話すことがあったかもしれないが、ここで Datchery が割り込んで、夫人にブランディを持ってこさせる。彼女が戻ったときには、Jasper は起き上がっていて、Crisparkle と Datchery に、自分が興奮したことと、驚かせたことを詫げる。</p>	<p>The question being asked of Mrs. Tope by the Minor Canon if her lodger was subject to attacks of this kind, the worthy dame affirms that she has known of his being taken so before at divers times, and always when he has been conversing about his nephew; and she further declares it to be her fixed opinion that it is grief for his nephew that has led to the present scene, and that it is shameful so kind and good a gentleman should suffer as he does. How much more she would have said is not known, for at this point Datchery cut her short by sending her for some brandy. When she returns with it she finds Jasper in a sitting position, and apologizing to the two gentlemen for his violent excitement and consequent result.</p>

-	-	Jasper はトープ夫人からブランディを受け取り、グラス一杯につき、飲み干し、もうよくなったので、安心していただいて結構、と言う。	Taking the brandy from Mrs. Tope and pouring out a glassful, he swallows it and declares that now he feels better and they need entertain no fears for him.
---	---	--	---

5.5 評価結果のまとめ

現在時制による語りの中で、発話を一時的に過去時制にシフトした SpV で伝達することで、発話人物の権威の暗示、話題・場の転換などの効果を生んでいると考えられるケースが ED に 5 か所、続編に 2 か所見られた。他方、過去時制に一時的にシフトした語りは ED に 2 か所、続編に 6 か所見られ、その用法はそれまでの会話を振り返り、状況／心情を描写するものが殆どであった。過去時制の語りの中で現在時制にシフトして発話を伝達することで、発話の衝動性／軽さを印象づける用法は両作品に見られた。現在時制語りの authorial comment は両作品に見られたが、原典に見られた引証の citative Present、直喩の Descriptive Present in Similes、情景描写の Descriptive Present as Background は続編には見られなかった。時制シフトのケース別の様態と要因の概要を以下に示す。

(1) ED の現在時制語りの章における過去時制へのシフト

第 2, 8, 12, 19 の 4 つの章で、i) その発話者に付随、または、発話者が自認する権威を暗示し (第 2, 8, 12, 19 章)、ii) それまでの会話による到達点を、確かなものとして確認し (第 2, 19 章)、そして iii) それまでの会話を締めくくり、他の話題／場に移るサイン (第 2, 8, 19 章) とする文体的効果が得られている。また過去時制にシフトした語りによる場の描写を挿入することで、先行する SpV のシフトによる話題の区切り感を、より確かなものとしている (第 2 章)。

(2) ED の過去時制語りの章における現在時制へのシフト

第 10 章の 1 つのケースにおいて、それまでつづいた過去時制の SpV が印象づける落ち着いた会話の雰囲気があるが現在時制にシフトした SpV で崩れ、衝動的な発話が、成り行きで発せられたかの状況をうかがわせている。語りにおける現在時制へのシフトは、3 つのケースで、それぞれ authorial comment、Descriptive Present in Similes、Descriptive Present as Background として語られている。これらは先行研究の中で「普遍の真実」や「永続性」

の表現として確認されているものである。なお総じて、ED では各章の SpV が、主体となる時制から他の時制にシフトすることはまれであり、章の中で時制の斉一性が保たれている。

(3) 続編の現在時制語りの章における過去時制へのシフト

SpV のシフトは第 21 章の 2 つのケースに見られ、権威を背景にそれまでの会話を締めくくって、別の話題に移るサインとなっている。語りにおける過去時制へのシフトは、第 22 章の 4 つのケースに見られるが、そのうち話題の区切りを感じさせるケースは 1 ケースで、他はそれまでの会話を振り返り、状況／心情を描写するものである。

(4) 続編の過去時制語りの章における現在時制へのシフト

第 24 章には、authorial comment が見られる他、現在時制で語られたり、現在時制にシフトした SpV で発話が伝達されることで、読者の興味が喚起され、新たな展開を予感させている。また current report による表現が臨場感を与えている。なお一連の発話の中で、固い思念に基づく発話には過去時制の SpV を用い、軽いその場をやり過ごす発話には、現在時制のそれを用いて伝達しているケースが見られる。

6. 結論

本論では、ED と続編の文体が、どのように類似しているか、あるいは相違しているかを明らかにするため、i) 語彙頻度（第 2 章）、ii) 発話動詞の用法（第 3 章）、iii) 発話動詞の語意別の嗜好および人物造型（第 4 章）、iv) 語りの時制（第 5 章）、の 4 つの観点で分析した。それぞれの観点における分析手法とその結果、および結論は以下のとおりである。

6.1 語彙頻度

語彙頻度の観点では、作家／作品を高い確度で区分する手法を確立し、その手法を用いて ED と続編における語彙嗜好の異同性を分析した。

(1) 高い区分性が得られる手法

作品に生起する語彙頻度のクラスター分析によって、複数の小説テキストを高い確度で同じ作家／作品に区分する手法を確立するため、19 世紀の 3 作家、Thomas Hardy, George Eliot および William Thackeray から各 2 作品を選んで評価用コーパスとし、各種処理条件を組み合わせた多数のケースで得られる区分性を定量評価した。その結果、高い区分性が得られ、かつ分析が容易な手法を、「平方根で圧縮した上位 500 語の頻度データを用い、距離定義にはユークリッド、連結法にはワード法を適用する手法」とした。

(2) ED と続編における語彙嗜好の異同性

その手法を適用して両作品に生起する語彙頻度を分析したところ、クラスター分析で得られた樹形図では、コーパスの作品セクションが作品ごとにサブクラスターを形成しており、両作品の語彙嗜好は相違していると考えられる。また、MDS プロットで続編の作品セクションは、ED のそれよりはるかに狭い範囲にプロットされており、続編における語彙使用は、ED のそれより平板であると考えられる。

次に、両作品間の差異を他の Dickens 作品／他作家の作品との間におけるそれと相对比较するため、両作品に、Dickens の他作品および Thackeray と Eliot の作品を加えたコーパスを用いて同様に分析した。その結果、続編は Dickens の作品と共にサブクラスターを形成していた。これは続編の語彙嗜好が Thackeray や Eliot より Dickens のそれに類

似していることを示唆している。

6.2 発話動詞の用法

発話動詞（以下、SpV）の生起数、時制、発話部との位置関係などの観点で、両作品における SpV の用法の異同性を分析するため、ED と続編に生起する SpV の用例データベースを構築して分析した結果、次のような差異がみられた。i) ED には過去時制の SpV が、続編には現在時制の SpV が多い。ii) 発話部と SpV の位置関係では、ED には SpV が発話部に「後置」されるケースが多く、続編には「前置」されるケースが多い。iii) SpV を含む伝達部が発話部を「中断」するケースの比率は両作品で略同等であったが、ED では、伝達部に *body language* による描写や状況説明が含まれるケースが 59% を占め、*suspended quotation* の用法がより活用されていた。なお続編では逆に、伝達部が主部と SpV のみのケースが過半の 53% を占めていた。

「中断」のケースでは、続編において *catchword suspension (CS)* が非 CS より多く用いられていた。「中断」のうち伝達部が主部と SpV のみの、つまり単に発話を「中断」するだけのケースは両作品で略同数であったが、CS は続編に多く ED の 6 倍であった。またこのケースの *catchword* の多くが呼びかけや詠嘆的な語句であり、実際に 2 度発話されたものと推定した。他方、伝達部に *body language* による描写や状況説明が含まれるケースにおける CS の比率は、続編の方が ED より数ポイント高かった。また *catchword* は、「中断」するだけのケースと異なり、両作品の概ね 2/3 の箇所について、1 度発話された語句が CS の形をとって繰り返されたものと推定した。なお両作品ともこの二つのケースの CS に、発話人物の権威を操作する用法は見られず、いずれも Dickens 風語りのリズムの一部としての用法と考えられる。

次に、両作品に生起する 73 の SpV の頻度データを、6.1 節 (1) の手法で分析したところ、クラスター分析による樹形図で、両作品のセクションが作品ごとにサブクラスターを形成しており、SpV の嗜好もまた両作品で相違していると考えられる。また、ED におけるタイプ語数は続編のその約 1.7 倍であり、より豊かであった。

6.3 発話動詞の語意別の嗜好および人物造型

SpVを語意によって区分し、語意別に両作品における嗜好の差異を分析するとともに、SpVの選択と人物造型との関係について考察するため、本論で構築したSpVのデータベースをもとに各SpVの生起数を作品別／人物別に抽出し、各SpVに付加した語意の属性とともにデータベースを再構築した。このデータベースを用いて語意別／人物別にSpVの生起数を分析したところ、多くの語意について両作品で嗜好の差異が認められた。例えば、i) 「続ける」の語意に、続編ではcontinueが圧倒的に多く用いられ約80%を占めていたが、EDでは6%を占めるに過ぎず、他方、EDで最も多く32%を占めるpursueは、続編では3%を占めるに過ぎなかった。ii) 「叫ぶ」の語意に、EDでは殆どの人物にcryが多用されていたが、続編では人物の社会的地位・年齢によってexclaimとcryが使い分けられていた。iii) 「さえぎる」の語意には、EDでは間接的な語意のinterposeが、続編では直接的な語意のinterruptが、それぞれ圧倒的に多く用いられていた。なお、「尋ねる」の語意には両作品ともaskが、次いでinquireが多用され嗜好は類似していた。

人物造型との関連では、EDにおいてGrewgiousとJasperは、いずれも冷静な人物として描かれているが、続編でEdwin失踪への嫌疑がJasperに向い、追求する側のGrewgiousと、される側のJasperの緊張が高まっていく中で、両者の発話にejaculateが多用されていた。また、続編で追い詰められたJasperは、つぶやい(murmur/mutter)たり、ささやい(whisper)たりすることが多くなり、他方、続編でJasperから逃れる生活の中で精神的に成長した人物として描かれているRosaは、EDのように口をとがらせ(pout)たり、感情的・衝動的に話し(burst, shriek)たり、会話をさえぎる(interrupt, interpose)ことがなくなっていた。これらは両作品における人物造型の相違の一部となっていると考えられる

6.4 語りの時制

EDと続編の各章における語りの時制を、本論で構築したSpVのデータベースを用いて分析した。その結果次のような差異がみられた。i) EDでは現在時制が主体な章と過去時制が主体な章の数は略同数であった。また各章における時制の斉一性は高く、主体的な時制と異なる時制のSpVは、例外的と言えるほど少数であった。ii) 続編では現在時制が主体の章が大半であった。また各章における時制の斉一性が低く、平均で約1/4のSpVの時制が主体的な時制と異なっていた。

次に、主体的な時制と異なる時制が用いられている箇所を抽出し、先行研究で確認した時制の文体に関する知見をもとにその様態を考察した。その結果、i) 現在時制が主体な章で、発話を過去時制に一時的にシフトしたSpVで伝達することで、発話人物の権威の暗示、話題・場の転換などの効果を生んでいると考えられるケースは、EDに多く見られた。ii) 過去時制の語りの中で、発話を現在時制にシフトしたSpVで伝達することで、発話の衝動性／軽さを印象づけていると考えられるケースは両作品に見られた。iii) 語りにおいて現在時制の用法とされる *authorial comment* は両作品に見られたが、引証の *citative Present*、情景描写や直喩の *Descriptive Present* は続編には見られず、続編でこれらの用法はEDほど用いられていなかった。

6.5 結語

以上のように語彙頻度、発話動詞の用法、発話動詞の語意別の嗜好および人物造型、語りの時制、の4つの観点から両作品を分析した結果、多くの点で相違点が見られることが示された。したがって、EDとその続編の文体は明確に異なる、と結論づけることができるであろう。

謝辞

2015年に中部大学大学院国際人間学研究科言語文化専攻（博士前期課程）に入学し、主指導教員であった、本研究科の大門正幸教授から、Dickensの*ED*とT. P. Jamesが著したその続編の話をお聞きしたことを出発点とし、後期課程に進んだ後もこの両作品を中心に、主にコーパス言語学の手法による文体比較の分野で研究をすすめてきました。本論はその成果を学位論文としてまとめたものです。この興味深い研究テーマをご教示下さり、以来長きにわたり熱心にご指導下さった大門正幸教授、またこの間、副指導教員として文学、言語学などの専門分野について丁寧にご指導下さった、同研究科の西村智教授および柳朋宏教授に深くお礼申し上げます。学業にとどまらず、これまでの研究生活で得られたものは、とても貴重であり、今後の人生への一里塚とならんことを願っています。最後に、定年退職後研究に励む姿を、静かに見守ってくれた妻富子、そして子供たちに感謝します。

参照文献

- 秋光淳生 (2016). データの分析と知識発見 放送大学教育振興会
- Arabie, P., Carroll, J. D. & DeSarbo, W. S. (1987). *Three-way scaling and clustering*. Sage Publications. (アラビ, P. キャロル, J. D. デサルボ, W. S. 岡太彬訓・今泉忠 (訳) (1990). 3元データの分析 共立出版)
- Baroni, M. (2008). Distributions in text. In Lüdeling, A. & Kytö, M. (Eds.), *Corpus linguistics: An international handbook*, 803–822. Walter de Gruyter.
- Beckwith, S. & Reed, J. (2002). Impounding the future: Some uses of the present tense in Dickens and Collins. *Dickens Studies Annual*, 32, 299–318.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Pearson Education.
- Biber, D. & Reppen, R. (Eds.) (2015). *The Cambridge handbook of English corpus linguistics*. Cambridge University Press.
- Burrows, J. (1987). *Computation into criticism: A study of Jane Austen's novels and an experiment in method*. Clarendon Press.
- Burrows, J. (2002). 'Delta': A measure of stylistic difference and a guide to likely authorship. *Literary and Linguistic Computing*, 17(3), 267–287.
- B., W. H. (1874). Review. *Part second of the mystery of Edwin Drood*. *The Southern Magazine*, 14, 219–23.
- Carlisle, J. (1971). *Dombey and son: The reader and the present tense*, *Journal of Narrative Technique*, 1, 146–158.
- Carlyle, T. (1837). *French revolution*. Chapman & Hall. (published 1915)
- Casparis, C. P. (1975). *Tense without time: The present tense in narration*. Francke Verlag.
- Craig, H. (1999a). Contrast and change in the idiolects of Ben Jonson characters. *Computers and the Humanities*, 33, 221–240.
- Craig, H. (1999b). Jonsonian chronology and the styles of *a tale of a tub*. In Butler, M. (Ed.), *Re-presenting Ben Jonson: Text, history, performance*, 210–232. St. Martin's Press.
- Dickens, C. (1837). *Oliver Twist*. The project Gutenberg eBook. (Posting date: October 10, 2008, eBook #730. Release date: November, 1996)

- Dickens, C. (1852a). *Bleak house*. Oxford University Press. (published 1952)
- Dickens, C. (1852b). *Bleak house*. W. W. Norton. (published 1977)
- Dickens, C. (1854). *Hard times*. The project Gutenberg eBook. (Release date: March 17, 2013, eBook #786. First posted on January 20, 1997.) (Transcribed from the 1905 Chapman and Hall edition.)
- Dickens, C. (1870a). *The mystery of Edwin Drood*. Oxford University Press. (published 1956)
- Dickens, C. (1870b). *The mystery of Edwin Drood*. Clarendon. (published 1972)
- Dickens, C. (1870). *The mystery of Edwin Drood*. (ディケンズ, C. 田辺洋子 (訳) (2010). エドウィン・ドゥルードの謎 溪白社
- Dickens, C. (1870). *The mystery of Edwin Drood*. (ディケンズ, C. 小池滋 (訳) (2014). エドウィン・ドゥルードの謎 白水ブックス
- Dickens, C. [& James, T. P.] (1873). *Part second of the mystery of Edwin Drood. By the spirit-pen of Charles Dickens, through a medium. Embracing, also that part of the work which was published prior to the termination of the author's earth-life*. T. P. James.
- Doyle, A. C. (1927). The alleged posthumous writings of great authors. *The Bookman*, 66, 342–349. <https://www.unz.org/Pub/Bookman-1927dec-00342>
- Gadd, G. F. (1905). The history of a mystery: A review of the solutions to 'Edwin Drood' (Chs. 3 & 4). *The Dickensian*, 1, 270–273.
- Genette, G. (1985). *Narrative discourse: An essay in method*. (Lewin, J. E. Trans.). Cornell University Press. (Original work published 1972)
- 後藤克己 (2019). Dickens の *The mystery of Edwin Drood* と T. P. James によるその続編の文体的評価—多変量解析を用いて 英語コーパス研究 26, 1–20.
- Hill, R. N. (1961). *Contrary country: A chronicle of Vermont*. Stephen Greene Press.
- Hoover, D. L. (1999). *Language and style in 'The inheritors.'* University Press of America.
- Hoover, D. L. (2003a). Frequent collocations and authorial style. *Literary and Linguistic Computing*, 18(3), 261–286.
- Hoover, D. L. (2003b). Multivariate analysis and the study of style variation. *Literary and Linguistic Computing*, 18(4), 341–360.
- Hoover, D. L. (2004). Testing Burrows's 'Delta.' *Literary and Linguistic Computing*, 19(4), 453–475.

- Hoover, D. L. (2007). Corpus stylistics, stylometry, and the styles of Henry James. *Style* 41(2), 174–255.
- 伊藤雅光 (2009). 計量言語学入門 大修館書店
- 金明哲 (2007). Rによるデータサイエンス 森北出版
- 金明哲 (2009). テキストデータの統計科学入門 岩波書店
- 木村美紀 (2016). 英語コーパス学会第42回大会資料—Alice Bradley Sheldon 作品群の通時的著者内変化と作品の年代推定 英語コーパス研究 24, 146–147.
- Lambert, M. (1981). *Dickens and the suspended quotation*. Yale University Press.
- Leech, G. (1983). *Principles of pragmatics*. Longman.
- Long, T. H. (Ed.). (1979). *Longman dictionary of English idioms*. Longman.
- Lüdeling, A. & Kytö, M. (Eds.). (2008). *Corpus linguistics: An international handbook*. Walter de Gruyter.
- Mahlberg, M. & Smith, C. (2012). Dickens, the suspended quotation and the corpus. *Language and Literature*, 21(1), 51–65.
- Mahlberg, M. (2013). *Corpus stylistics and Dickens's fiction*. Routledge.
- Mahlberg, M. (2015). Literary style and literary texts. In Biber, D. & Reppen, R. (Eds.), *The Cambridge handbook of English corpus linguistics*, 346–361. Cambridge University Press.
- Manning, C. D. & Schütze, H. (1999). *Foundations of statistical natural language processing*. MIT Press. (マニング, C. D. & シュッツ, H. 加藤恒昭・菊井玄一郎・林良彦・森辰則 (訳) (2017). 統計的自然言語処理の基礎 共立出版)
- Manning, C. D., Raghavan, P. & Schütze, H. (2008). *Introduction to information retrieval*. Cambridge University Press. (マニング, C. D. ラガヴァン, P. シュッツ, H. 岩野和生・黒川利明・濱田誠司・村上明子 (訳) (2012). 情報検索の基礎 共立出版)
- Melville, H. (1851). *Moby-Dick*. Constable. (published 1922)
- Moisl, H. (2008). Exploratory multivariate analysis. In Lüdeling, A. & Kytö, M. (Eds.), *Corpus linguistics: An international handbook*, 874–899. Walter de Gruyter.
- 村上征勝 (1994). 真贋の科学—計量文献学入門 (行動計量学シリーズ6) 朝倉書店
- 村上征勝 (2004). シェークスピアは誰ですか?—計量文献学の世界 (文春新書 406) 文芸春秋

- Oakes, M. P. (2008). Corpus linguistics and stylometry. In Lüdeling, A. & Kytö, M. (Eds.), *Corpus linguistics: An international handbook*, 1070–1090. Walter de Gruyter.
- Quirk, R. (1961). Some observations on the language of Dickens. *A Review of English Literature*, 2(3), 19–28.
- Schlicke, P. (Ed.). (2000). *The Oxford reader's companion to Dickens*. Oxford University Press.
- Scott, M. (2013). *WordSmith Tools. version 6*. Oxford University Press.
- Segundo, P. R. S. (2016). A corpus-stylistic approach to Dickens' use of speech verbs: Beyond mere reporting. *Language and Literature*, 25(2), 113–129.
- 田畑智司 (2016). 共著作品における Dickens の文体 堀正広 (編) コーパスと英語文体 (pp. 53–71). ひつじ書房
- Walters, J. C. (1913). *The complete mystery of Edwin Drood: History, continuations, and solutions*. Dana ESTES & Company.
- Wolkomir, R. (1973). Charles Dickens' great mystery. *Psychic*, 4, 16–17.

Appendix

A2.1.2 (1) Zスコアの算出式

$$z_{ij} = \frac{x_{ij} - MEAN_i}{SD_i}$$

ここで

- z_{ij} : ランク i の語のセクション j における Zスコア値
- x_{ij} : ランク i の語のセクション j における変換前の値
- $MEAN_i$: ランク i の語の全セクションにおける平均値
- SD_i : ランク i の語の全セクションにおける標準偏差

A2.1.2 (2) 距離定義

名称	定義式	特 徴
ユークリッド	$d(x, x') = \sqrt{\sum_{j=1}^d (x_j - x'_j)^2}$	ピタゴラスの定理で求められるような直線距離であり、要素数 n に対応した直交 n 次元空間における二点間の距離に相当する。この距離は全ての要素の差を2乗和の平方根で集約したものであり、要素差を2乗和しているため、要素差に大差がある場合、要素差の小さいデータが評価されにくい。
マンハッタン	$d(x, x') = \sum_{j=1}^d x_j - x'_j $	碁盤の目のようなマンハッタン街区を徒歩や車で移動する距離のイメージであり、各次元の要素差の絶対値の総和で定義される距離である。ユークリッドは全ての要素差を2乗和の平方根で集約したもののだが、マンハッタンは差の単なる総和であり、一つの要素でも差が大きければ、それがそのまま全体の距離に反映される。
キャンベラ	$d(x, x') = \sum_{j=1}^d \frac{ x_j - x'_j }{ x_j + x'_j }$	要素値が小さいほど、その差に重みが付加されたマンハッタン距離である。定義式から、分子（要素差）が同じなら分母（要素値の和）が小さい要素ほど要素差に重みが付加され違いが敏感に現れる。
Irad (情報半径)	$d(x, x') = \sum_{j=1}^d \left(x_j \log \frac{2x_j}{x_j + x'_j} + x'_j \log \frac{2x'_j}{x_j + x'_j} \right)$	意味的類似性を確率分布の類似性で定義したものであり、 x_j と x'_j に対応する二つの確率変数を、これらの平均分布で記述した場合に失われる情報量。

凡例

- x, x' : 距離を求めるべきセクション対
- $d(x, x')$: x, x' 間の距離
- x_j : セクション x における j 番目の語の頻度数
- x'_j : セクション x' における j 番目の語の頻度数
- d : 分析語数

A2.1.2 (3) 連結方式

(1) 単連結法 (最近隣法, single)

2つのクラスターを選び、そのそれぞれから、1つずつセクションを選んでそのセクション間の距離を求め、得られた最も小さいセクション間の距離を、その2クラスターの距離とする。クラスターの組み合わせの中で、その距離が最も小さくなるクラスター同士を更にグループ化し、以降全クラスターがひとつになるまで繰り返す。

(2) 完全連結法 (最遠隣法, complete)

単連結法と同様に選んだクラスター対におけるセクション間の距離を求めるが、単連結

法とは逆に最も大きいセクション間の距離を、その2クラスターの距離とする。クラスターの組み合わせの中で、その距離が最も小さくなるクラスター同士を更にグループ化し、以降全クラスターがひとつになるまで繰り返す。

(3) 群平均法(average)

2つのクラスターのそれぞれから、1つずつセクションを選んでそのセクション間の距離を求め、それらの距離の平均値をその2つのクラスターの距離とする。クラスターの組み合わせの中で、その距離が最も小さくなるクラスター同士を更にグループ化し、以降全クラスターがひとつになるまで繰り返す。

(4) ウォード法(ward.D2)

クラスター内の分散が小さく、かつクラスター間の分散が大きくなるように、順次クラスターを結合する。

A2.1.3 (1) F値のモデルケースにおける試算例

モデルケースにおける試算例 (F1)

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

適合率(precision)

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.33	1.00	0.50	0.50
作品 2	0.33	0	0.50	0.33
作品 3	0.33	0	0	0.17
適合率	0.33	1.00	0.50	0.50
同上、加重	0.09	0.18	0.14	0.14

再現率(recall)

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.17	0.33	0.25	0.25
作品 2	0.29	0	0.43	0.29
作品 3	0.67	0	0	0.33
再現率	0.67	0.33	0.43	0.33
同上、加重	0.18	0.06	0.12	0.09

F1 値

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
作品 1	0.22	0.50	0.33	0.33

作品 2	0.31	0	0.46	0.31
作品 3	0.44	0	0	0.22
F1 値	0.44	0.50	0.46	0.33
同上、加重	0.12	0.09	0.13	0.09

A2.1.3 (2) 純度のモデルケースにおける試算例
 モデルケースにおける試算例（純度）

グルーピング例

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4	作品計
作品 1	2	4	3	3	12
作品 2	2	0	3	2	7
作品 3	2	0	0	1	3
cluster 計	6	4	6	6	22

純度

作品	cluster 1	cluster 2	cluster 3	cluster 4
純度	0.09	0.18	0.14	0.14

A2.1.4 (1) 14 の上位ランク語別のサブクロス集計表を切り出す VBA マクロ
 (エクセルによる上位 1,200 語のクロス集計表のフォーマット)

注：クロス集計表の始点は B3 のセルで固定。A 列および 1, 2 行のデータは、参考データであり分析対象ではない。

	A	B	C	D	E	F	BH	BI
1	頻度の計→		1	1	1	1	1	1
2		相対頻度						
3	Rank		H1A	H1B	H1C	H1D	T2M	T2N
4	1	the	0.101314	0.105006	0.095463	0.104138	0.068273	0.08494
5	2	and	0.043558	0.042872	0.044023	0.047069	0.059904	0.062873
6	3	be	0.047395	0.052015	0.052403	0.047241	0.051224	0.0494
7	4	of	0.04941	0.050062	0.04672	0.045603	0.041073	0.050019
8	5	to	0.036458	0.0316	0.034679	0.034914	0.043242	0.042431
9	6	a	0.047683	0.045802	0.039303	0.039138	0.027356	0.028417
10	7	in	0.026288	0.027339	0.027839	0.0275	0.026193	0.029888
11	8	have	0.019764	0.018285	0.020422	0.018276	0.025651	0.023229
12	9	that	0.013144	0.011983	0.013583	0.011552	0.017281	0.012931
13	10	with	0.011609	0.01509	0.015124	0.01069	0.013097	0.014789
14	11	as	0.012376	0.012871	0.012427	0.012155	0.015732	0.012002
15	12	say	0.008539	0.017042	0.016183	0.019483	0.00775	0.00844
16	13	at	0.009498	0.009764	0.010404	0.008966	0.010772	0.012079
17	14	for	0.008539	0.008077	0.007321	0.00819	0.013639	0.010221
1199	1196	lace	9.59E-05	8.88E-05	0	8.62E-05	7.75E-05	0
1200	1197	patient	0	0	0	0	0	0
1201	1198	lodge	0.000288	8.88E-05	0	0.000172	0	0
1202	1199	countess	0	0	0	0	0.000542	0.000155
1203	1200	native	9.59E-05	0	0	8.62E-05	0	0.000232

以下のマクロを実行すると、上記フォーマットによる 1,200 語のクロス集計表のエクセルブックと同じディレクトリに、「25 語」～「1200 語」のファイル名で、14 の上位ランク語別のファイルが CSV 形式で生成される。

Sub addsheet_59_14()

- ・ Ver. 17, 59 セクションー14 語彙ランクケース
- ・ 処理する語彙数のケース数 m を指定
- ・ セクション数により語彙表の最終セクション列記号をメンテ要
- ・ セル内の語彙頻度データに位取りのコンマが入っていないこと。

```

Dim MyPath As String
Dim FilePath As String
Dim FName As String
Dim Range_to As String
Dim Range_to_col As String
Dim Rank_case As String
Dim Rank As Integer
Dim i As Integer
Dim j As Integer
Dim k As Integer
Dim m As Integer

```

・カレントディレクトリを「マイドキュメント」から変更する。

MyPath = ActiveWorkbook.Path ‘作業エクセルのパス情報を取得して画面出力

```

MsgBox MyPath
ChDir MyPath          ‘カレントディレクトリを作業エクセルのパスに変更
FName = ActiveWorkbook.Name  ‘本ブック名を取得

```

‘各ケース用のシートを生成

```

m = case_nr()          ‘処理すべきケース数の指定; 25~1,200 の場合 14
If (Str(m) = "") Then
    MsgBox “EOP”
    Exit Sub
End If

```

```

Sheets.Add after:=Worksheets(1), Count:=m  ‘例 14 : 25~1,200 語までの 14 ケース分
Worksheets(“sheet1”).Name = “25”
Worksheets(“sheet2”).Name = “50”

```

```

Rank = 100
i = 0
k = m - 2          ‘100 語以上の処理すべき語彙ランクのケース数
(12 : 1,200 語までの 14 ケースの場合)

```

```

Do Until i = k
    Worksheets(“sheet” & Format(i + 3, “####0")).Name = Format(Rank, “###0”)
    i = i + 1
    Rank = Rank + 100
Loop

```

‘セクション数で決まる初期データ

```

Range_to_col = “B3:BI”
‘語彙表のセクション数により、”to”の列記号をメンテする(BI:59sections, BL:62sections,
BS:69sections, CC:79sections)
‘メイン

```

```

Rank = 25          ‘上位 25 語
    Call Range_paste(Range_to_col, Rank, MyPath, FName)
Rank = 50
    Call Range_paste(Range_to_col, Rank, MyPath, FName)
Rank = 100
i = 0
k = m - 2          ‘100 語以上の処理すべき語彙ランクのケース数
Do Until i = k

```

```

    Call Range_paste(Range_to_col, Rank, MyPath, FName)
    i = i + 1
    Rank = Rank + 100
Loop
MsgBox “Normal End”

```

End Sub

```

Sub Range_paste(Range_to_col As String, Rank As Integer, MyPath As String, FName As String)
    Range_to = Range_to_col & Format(Rank + 3, “####0”) ‘例 B3:BS28
    Rank_case = Format(Rank, “####0”) ‘例 “25”
    ‘MsgBox Range_to
    FilePath = MyPath & “¥” & Rank_case & “語.csv” ‘上位 xx 語の CSV ファイルのフルパ

```

ス

```
'MsgBox FilePath
Sheets(1).Select          '語彙表を最初（左端）のシートとすること
Range(Range_to).Select   '69sections での例：B3:BS28 for 25words
    Selection.Copy
Sheets(Rank_case).Select
Range("a1").Select
ActiveSheet.Paste        '各ケースのシートの A1 へとコピーされる

Application.CutCopyMode = False
Sheets(Rank_case).Copy
ActiveWorkbook.SaveAs Filename:=FilePath, FileFormat:=xlCSV, CreateBackup:=False
'上位 xx 語の CSV ファイルの生成・セーブ完了

'上位 xx 語の CSV ファイルを閉じる
Application.DisplayAlerts = False '警告メッセージの表示を抑止
Windows(Rank_case & "語.csv").Close '上位 xx 語の CSV ファイルをクローズ

'各ケースの作業用シートを削除する
Windows(FName).Activate
Sheets(Rank_case).Select
ActiveSheet.Delete      'ケース対応のシートを削除
Application.DisplayAlerts = True '警告メッセージの表示を Enable

'MsgBox Rank_case & "語 END"
End Sub
Function case_nr() As Integer          '処理する語彙数のケース数を得る
    Dim Res As String
    Res = InputBox("Enter case_nr to be processed")
    case_nr = Val(Res)
End Function
```

A2.1.4 (2) 各サブクロス集計表を入力データとした多変量分析を、全 14 ケースについて自動処理する R のスクリプト
以下のスクリプトをファイル化（例：filename.R）して source（“filename.R”）のコマンドで起動する。

```
# HET6 作品、上位 1,200 語までの 14 語彙ケースの分析スクリプト
# H1-6, H2-7, E1-16, E2-3, T1-14, T2-13 計 59 セクション
# plot color H: red, E: green, T: blue
# 距離定義 = euclidean
# クラスタ結合方法 = "ward.D2"
# クラスタに cut=6 による枠を付す
# 語彙ケース数、作家・作品のセクション数、語彙表での列順により関連スクリプトの修正要
# スクリプト名：ファイル名.R → het59_euc-wardD2S.R
# 実行前に、14 ケースの各ランク表（「25 語.CSV」など）を、エクセルの VBA マクロで作業ディレクトリに展開しておく。
# sub routine
case_proc <- function(R_Path, case, section){
```

```

df <- read.csv(paste(case, "語.csv", sep=""), header=T, row.names=1)
df.r <- t(df); dist.result <- dist(df.r, method = "euclidean")

d.cmd <- cmdscale(dist.result) # k=2, eig=F のデフォルトで処理
# 各ケースのサブディレクトリへ移る
case_dir <- paste("/上位",case, "語", sep="") #例: "上位 25 語"
WD <- paste(R_Path, case_dir, sep="") #ケースごとのフルパス
dir.create(WD) # 「上位 xx 語」のフォルダを作成
setwd(WD) # そこへ移る

#セクションの距離マトリクスを CSV 出力
distance <- as.matrix(dist.result)
write.csv(distance, "distance.txt")

#各種処理データの CSV 出力
write.csv(d.cmd, "mds_pts.txt") # データの MDS 座標値
dhat <- dist(d.cmd) # cmdscale による座標から距離に戻す
corsq <- cor(dist.result, dhat)^2 # 元の距離行列との相関
write.csv(corsq, "mds_corsq.txt")
# Hardy 赤、Eliot 緑、Thackeray 青 計 59 ; 3 作家 6 作品
df.lab<-c(colnames(df))
# df.col need modification par the number of texts
df.col<-c(rep("red",6),rep("red",7), rep("green",16) , rep("green",3) , rep("blue",14),
rep("blue",13))
sublabel<-paste("(CD: ", round(corsq,2), ",") , sep="")
#MDSplot の描画
jpeg("MDS500-500.jpg", width = 500, height = 500)
par(cex=1.2) # cex=2 では大きすぎ
# plot 文の前に par 文を置くと、スケール、ラベル、人物名の全てに効く
plot(d.cmd[,1:2], type="n", asp=1, sub=sublabel, xlab="Dimension 1", ylab="Dimension 2")
text(d.cmd[,1:2], df.lab, col=df.col, adj=c(0,0))
dev.off()

#階層型クラスター分析 (ウォード法)
hc <- hclust(dist.result, method = "ward.D2")

#コーフェン行列の CSV 出力
cophen.matrix <- as.matrix(cophenetic(hc))
write.csv(cophen.matrix, "cl-cophen.txt")

#樹形図 (その 1) の描画
jpeg("Dendro1200-400work.jpg", width = 1200, height = 400)
plot(hc, hang = -1, xlab = "", sub = "")
rect.hclust(hc, k = 6, border = 2:7) # 6 作品
# plot(hc, hang = -1, xlab = "", sub = "", cex.sub = 2.2)
dev.off()

#樹形図 (その 2) の描画
jpeg("Dendro1200-400author.jpg", width = 1200, height = 400)
plot(hc, hang = -1, xlab = "", sub = "")

```

```

rect.hclust(hc, k = 3, border = 2:4)      # 3 作家
dev.off()

#各種処理データの CSV 出力
write.csv(hc$order, "cl-order.txt")
write.csv(hc$labels, "cl-labels.txt")
write.csv(hc$height, "cl-height.txt")
write.csv(hc$merge, "cl-merge.txt")

write.csv(cutree(hc, k=3), "cl-cut3.txt")
write.csv(cutree(hc, k=6), "cl-cut6.txt")
# 分析ケースの working dir.に戻す
setwd(R_Path)
}

# main routine
case_def <- c(25,50,100,200,300,400,500,600,700,800,900,1000,1100,1200)
section <- 59          # HET6 作品のセクション数の計
j <- 14                # 上位 1,200 語までの計 14 の rank ケース
for(i in 1:j){
  case_proc(R_Path, case_def[i], section)      # ケース毎の処理をコール
  print(paste("上位", case_def[i], "語 END", sep=""))
  i <- i+1
}

```

このスクリプトを実行すると、「上位 25 語」～「上位 1200 語」のフォルダに、それぞれの上位ランク語によるクラスター分析と MDS の処理結果が出力される。

A2.1.4 (3) cutree 関数で得られたデータを読み込んで、各上位ランク別のエクセルワークシートに展開する VBA マクロ (6 区分の例)

```

Sub EVA_cut6()          ‘処理語数に対応したシートにコピー
  Dim SourceHolder As String
  Dim DestSheet As String
  Dim MyPath As String
  ‘カレントディレクトリを「マイドキュメント」から変更する。
  MyPath = ActiveWorkbook.Path      ‘cutree6 のパス情報を取得
  ‘MsgBox MyPath
  ChDir MyPath                      ‘カレントディレクトリを変更
  MsgBox CurDir
  ‘ 処理パラメータをセット
  ‘ 上位 25 語
  SourceHolder = “上位 25 語”
  DestSheet = “25cut6”
  Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
  ‘ 上位 50 語
  SourceHolder = “上位 50 語”
  DestSheet = “50cut6”
  Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
  ‘ 上位 100 語

```

```

SourceHolder = “上位 100 語”
DestSheet = “100cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 200 語
SourceHolder = “上位 200 語”
DestSheet = “200cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 300 語
SourceHolder = “上位 300 語”
DestSheet = “300cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 400 語
SourceHolder = “上位 400 語”
DestSheet = “400cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 500 語
SourceHolder = “上位 500 語”
DestSheet = “500cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 600 語
SourceHolder = “上位 600 語”
DestSheet = “600cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 700 語
SourceHolder = “上位 700 語”
DestSheet = “700cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 800 語
SourceHolder = “上位 800 語”
DestSheet = “800cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 900 語
SourceHolder = “上位 900 語”
DestSheet = “900cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 1000 語
SourceHolder = “上位 1000 語”
DestSheet = “1000cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 1100 語
SourceHolder = “上位 1100 語”
DestSheet = “1100cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 上位 1,200 語
SourceHolder = “上位 1200 語”
DestSheet = “1200cut6”
Call cut6data(SourceHolder, DestSheet)
‘ 分析ホルダー情報の出力
Worksheets(“Gini まとめ”).Activate
ActiveSheet.Range(“H1”).Select
ActiveCell.Value = ActiveWorkbook.FullName ‘Path+Filename

```

```
MsgBox "Normal End"  
End Sub
```

```
Sub cut6data(SourceHolder As String, DestSheet As String)  
    Dim SourceFull As String  
    ‘ 処理ルーチン  
    SourceFull = SourceHolder & "¥cl-cut6.txt"  
    ‘MsgBox SourceFull  
    ‘ 指定フォルダにあるテキストファイル cl-cut6.txt を読み込み cl-cut6.txt のエクセルブ  
    クを生成し展開  
    Workbooks.OpenText Filename:=SourceFull, _  
    DataType:=xlDelimited, Comma:=True, StartRow:=2 ‘ 2行目以降をコピー  
    ‘ 生成・展開された cl-cut6 シートを cutree6 のブックの先頭にコピーする。  
    Sheets("cl-cut6").Select  
    Sheets("cl-cut6").Copy Before:=Workbooks("cutree6.xls").Sheets(1)  
    ‘ コピーしたシートにて、データのあるセル範囲を選択し、DestSheet の A3 の位置にコピ  
    ー  
    Worksheets(1).Cells(1, 1).CurrentRegion.Select  
    Selection.Copy Destination:=Worksheets(DestSheet).Range("A3")  
    ‘別ホルダーでも同名ファイルは重複して開けないため閉じておく  
    Workbooks("cl-cut6.txt").Close  
    ‘ブック cutree6 の作業用シート cl-cut6 を削除する  
    Sheets("cl-cut6").Select  
    Application.DisplayAlerts = False ‘警告メッセージの表示を抑止  
    ActiveSheet.Delete  
    Application.DisplayAlerts = True ‘警告メッセージの表示を Enable  
    ‘終了メッセージ  
    ‘MsgBox SourceHolder & "Normal End"  
End Sub
```

A2.2 評価要素の組み合わせごとにフォルダを分けて分析するために用いたツールの例
(1) フォルダのパス情報を R と連携するためセーブ
作業フォルダに置いたエクセルで以下のマクロを実行すると、カレントディレクトリに
"MyPath.prn"のファイル名でその作業パス情報がセーブされる。

```
Sub MyPath_R 連携 DELL() ‘ Excel の作業パスをセーブ  
    ‘ カレントディレクトリ名が異なる PC の場合修正要  
    ‘ 実行時、当エクセル以外は起動していないこと。  
  
    Dim MyPath As String  
    Dim MyPath2 As String  
    Dim MyPath3 As String  
    Dim Quot As String  
    Dim OriginalPath As String  
    Dim work As String  
  
    ‘Excel の起動時のカレント Dir.、作業パス Dir.を確認  
    ‘ DELL5810 カレント Dir.は、C:/Users/user/Documents  
    MsgBox "カレント Dir.は " & CurDir  
    If (Right(CurDir, 9) = "Documents") Then
```

```

    MyPath = ActiveWorkbook.Path      ‘作業パスの Dir.を取得
    MsgBox “作業 Dir.は ” & MyPath
‘ R での書式に置き換え (¥を/に)
    MyPath2 = Application.WorksheetFunction.Substitute(MyPath, “¥”, “/”)
    Quot = “””””
    MyPath3 = Quot & MyPath2 & Quot   ‘2重引用符で括る

‘ R 連携パスの文字列を書き込み
    Worksheets(1).Activate
        ActiveSheet.Range(“A1”).Select      ‘シート左上の始端セルに書き込み
        ActiveCell.Value = MyPath3
‘ txt ファイルの生成・セーブ (MyPath.prn のファイル名でカレント Dir.にセーブ)
    Application.CutCopyMode = False
    Sheets(1).Copy
    ActiveWorkbook.SaveAs Filename:=“MyPath”, FileFormat:=xlTextPrinter,
CreateBackup:=False
‘ 当該 txt ファイルを閉じる
    Application.DisplayAlerts = False      ‘警告メッセージの表示を抑止
    Windows(“MyPath.prn”).Close          ‘prn ファイルをクローズ
    Application.DisplayAlerts = True      ‘警告メッセージの表示を Enable

Else
    MsgBox “カレント Dir.は ~¥Documents でない。 Close all Excel and resume.”
End If
End Sub

```

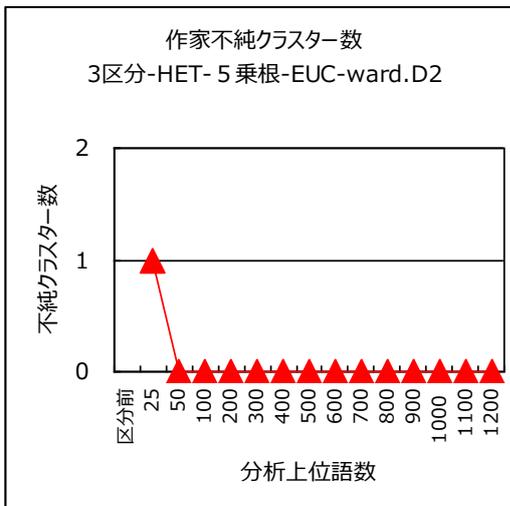
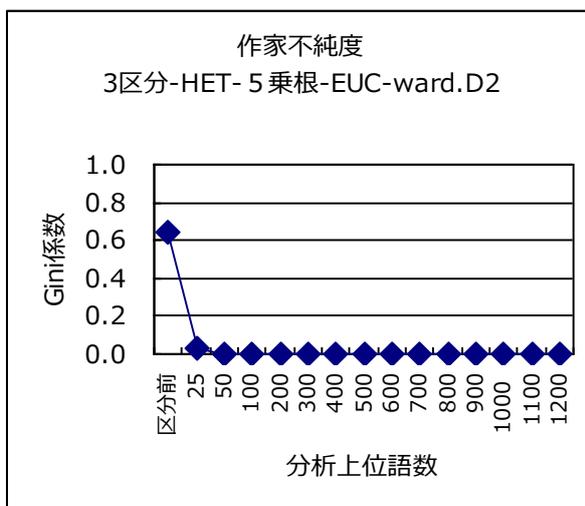
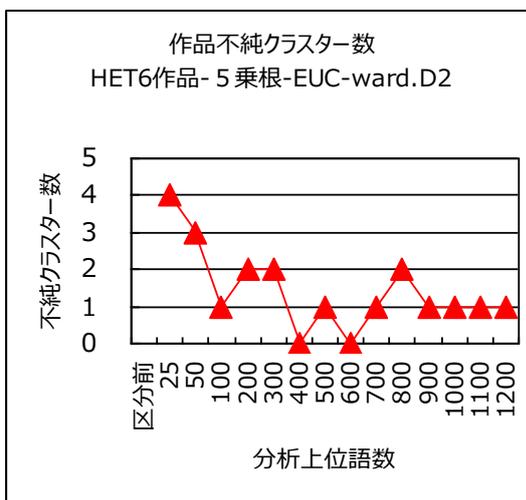
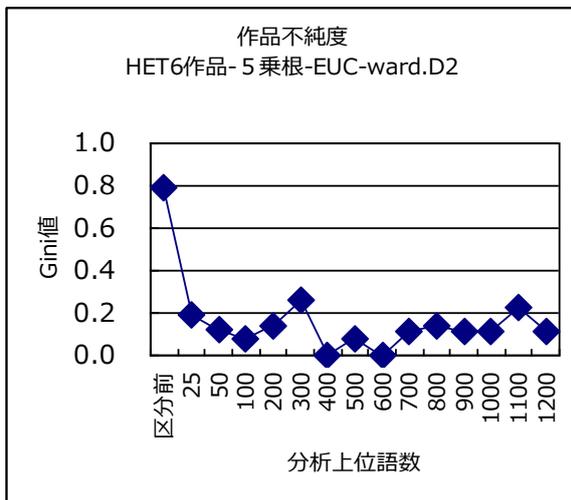
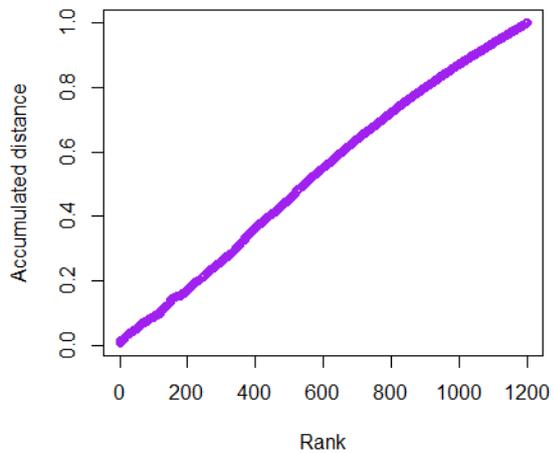
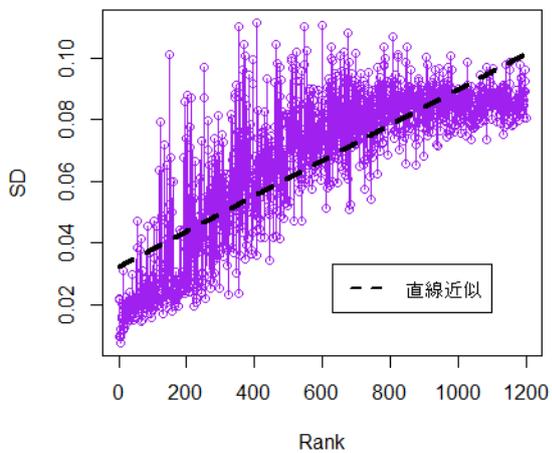
(2) セーブした Excel の作業パスを R の `working dir.`として設定するスクリプト以下のスクリプトをファイル化して `source (“file-name.R”)` のコマンドで起動する。

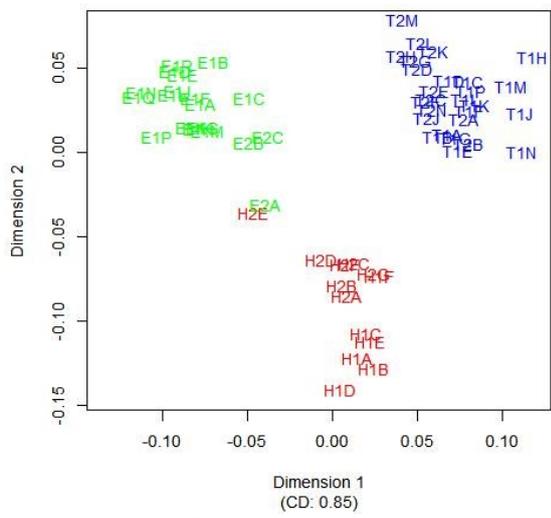
```

.libPaths(“/Program Files/R/win-library/3.6”) # パス名は環境に依存
# 処理後 R の初期パスに戻すのに備え、初期パス名を変数「old」にセーブ
old <- getwd()
MyPath <- read.table(“MyPath.prn”)          # セーブした Excel の作業パス
R_Path <- as.character(MyPath[1,1])
setwd(R_Path)
# これで R の作業パスがエクセルの作業パスに変更された。

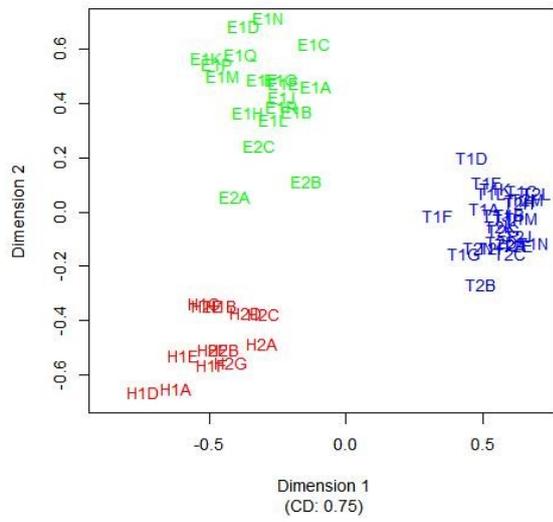
```

A2.2.1 (1) 5乗根圧縮データによる区分性



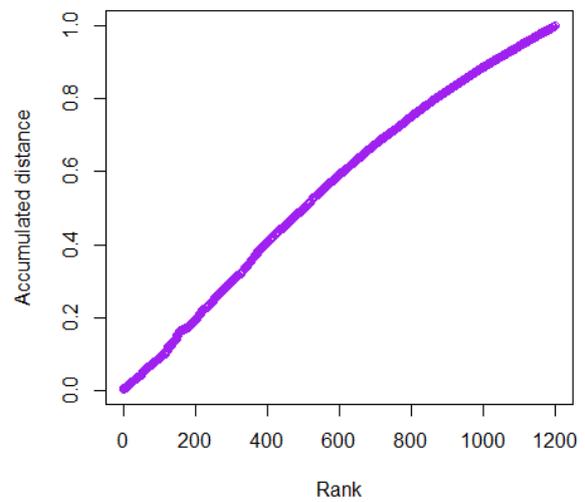
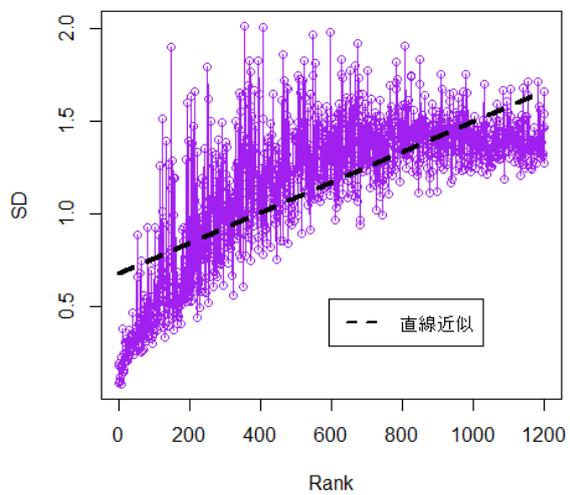


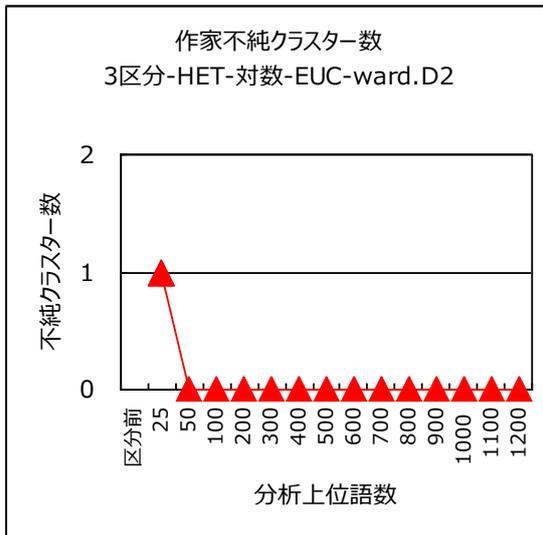
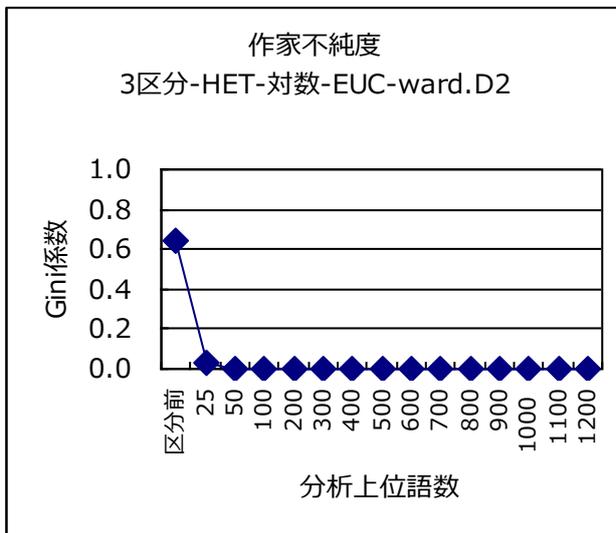
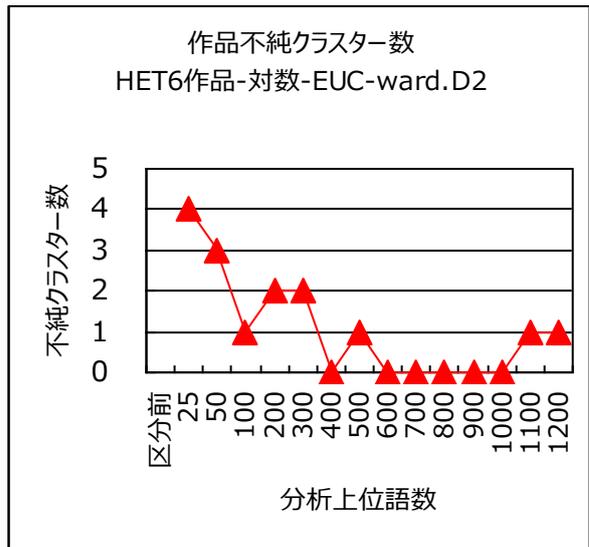
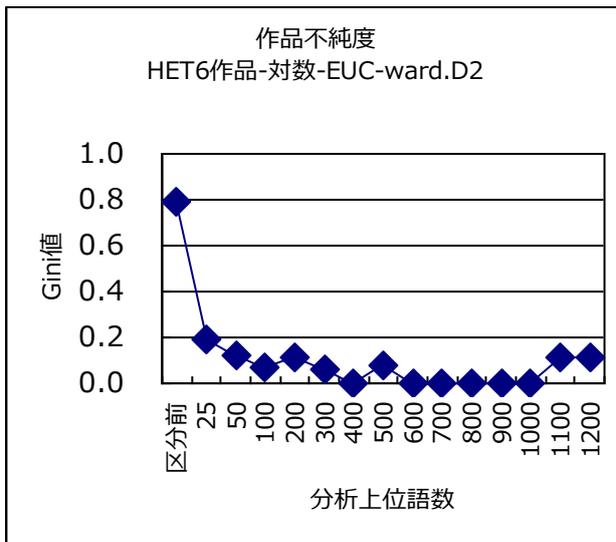
(5 乗根、50 語)

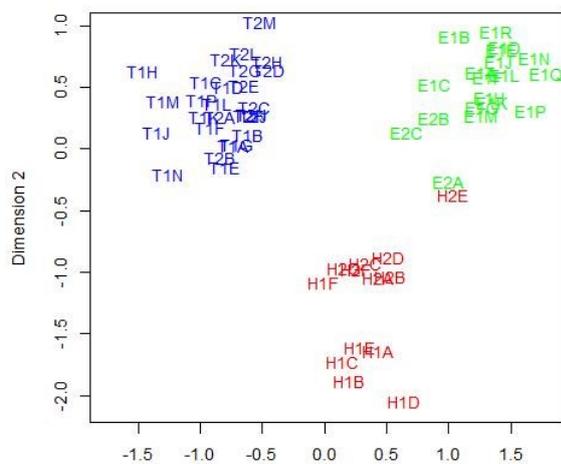


(5 乗根、500 語)

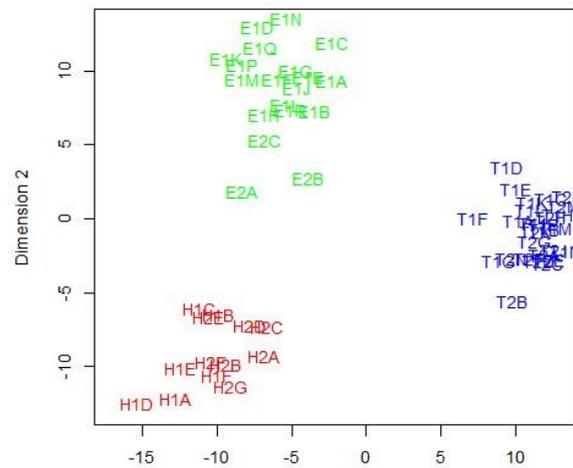
A2.2.1 (2) 対数圧縮データによる区分性







Dimension 1
(CD: 0.81)
(対数、50 語)



Dimension 1
(CD: 0.83)
(対数、500 語)

A4.1.3 (1) ED と続編を各 2 分割した 4 セクションにおける SpV の異同性を分析する R のスクリプト

```
# mds-4sec-bar5.R      -20221217mod.
# ED と続編を各 2 分割した 4 セクション、枠 cut2 のスクリプト
#MDS の軸ラベル: Dimension1, 2
#MDS の確度評価として距離行列との相関係数を出力；そのため cmdscale で eig, k の指定を省略
# 樹形図のセクションに対応した bar-plot を出力 202206
# bar-plot の色を白黒印刷向けに変更 202212
# 分析したクロス頻度表を CSV 形式で出力：wordlist
# source("Start.R") で作業パスの設定を済ませること。
# Excel で処理データ範囲指定 copy 後、以下のスクリプトを実行

#working dir. CSL-out
print(R_Path) #R_Path は Start.R でセットされる

df <- read.table("clipboard")
df.r <- t(df)
dist.result <- dist(df.r, method = "euclidean")
write.csv(df, "wordlist.txt")

#セクションの距離マトリクスを CSV 出力
distance <- as.matrix(dist.result)
write.csv(distance, "distance.txt")

#階層型クラスター分析（ワード法）
hc <- hclust(dist.result, method = "ward.D2")
```

```

#コーフェン行列の CSV 出力
cophen.matrix <- as.matrix(cophenetic(hc))
write.csv(cophen.matrix, "cl-cophen.txt")

#各種処理データの CSV 出力
write.csv(hc$order, "cl-order.txt")
write.csv(hc$labels, "cl-labels.txt")
write.csv(hc$height, "cl-height.txt")
write.csv(hc$merge, "cl-merge.txt")
write.csv(cutree(hc, k=2), "cl-cut2.txt")

##樹形図をプロットエリアの上部に描画
jpeg("Dendro620-600.jpg", width = 620, height = 600)
split.screen(figs = c(2, 1))
screen(1)
#par(mar = c(2, 4, 2, 2))
plot(hc, hang = -1, xlab = "", sub = "", cex.sub = 2.2)
rect.hclust(hc, k = 2, border = 2:3) # Cut2 枠を描画

##プロットエリアの下部を 4 つに分割して barplot 描画
split.screen(figs = c(1, 4), screen = 2) # screen 番号 : 3-4-5-6
#プロット位置はセクション順と対応させる。
term <- as.matrix(df)

# bar-plot
for(i in 1:4){
  if(hc$order[i] > 2){
    bar.col = "red"
  }
  else bar.col = "yellow"
  screen(2+i)
  par(mar = c(4, 5, 1, 1)) # bottom-left-top-right
  term1 <- sort(term[, hc$order[i]], decreasing = FALSE) # 樹形図 i 番目のセクションを指
  定
  barplot(tail(term1, 10), las = 2, horiz = TRUE, col = bar.col)
  term_put <- sort(term[, hc$order[i]], decreasing = TRUE)
  file.name <- paste(hc$labels[hc$order[i]], ".csv", sep="")
  write.csv(term_put, file.name)
  i <- i+1
}
close.screen(all = TRUE) # exit split-screen mode
dev.off()

# MDSplot の描画
d.cmd <- cmdscale(dist.result) # k=2, eig=F のデフォルトで処理
write.csv(d.cmd, "mds_pts.txt") # データの MDS 座標

#あてはまり度 (決定係数)
dhat <- dist(d.cmd) # cmdscale による座標から距離に戻す
corsq <- cor(dist.result, dhat)^2 # 元の距離行列との相関値の 2 乗
write.csv(corsq, "mds_corsq.txt")

```

```

# D0,D1 : 青、P0,P1 : 赤 計 4
df.lab<-c(colnames(df))
df.col<-c(rep("blue",2), rep("red",2))          # セクション構成によりメンテ要
sublabel<-paste("(CD: ", round(corsq,2), ")", sep="")
#screen(2)
jpeg("MDS500-500.jpg", width = 500, height = 500)
par(cex=1.2)    # cex=2 では大きすぎ
# plot 文の前に par 文を置くと、スケール、ラベル、人物名の全てに効く
plot(d.cmd[,1:2], type="n", asp=1, sub=sublabel, xlab="Dimension 1", ylab="Dimension 2")
text(d.cmd[,1:2], df.lab, col=df.col, adj=c(0,0))
dev.off()

```